
デジモンアドベンチャー03 ~Holy war~

木蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー03 〜Holy a war〜

【Nコード】

N5497V

【作者名】

木蓮

【あらすじ】

ベリアルヴァンデモンやアーマゲモンの事件から数ヶ月。人々にデジモンの存在が認知され始め、パートナーデジモンを持つ人が増えてきていた。迷いデジモンなどの出現はいまだあるが、現実世界にもデジタルワールドにも平和が訪れていた。

小学6年生になった二代目の選ばれし子供・大輔、タケル、ヒカリのクラスに転校生・法月奏がやってくる。そしてデジタルワールドでは英慶悟、東雲天音、朝比奈薫、朝比奈鳴、由良凜華ら5人の新しい選ばれし子供とそのパートナーデジモンたちと出逢う。そん

な彼らに迫る不穏な影。デジタルワールドに『黒い歯車』が飛び交う。倒したはずの“奴”が復活したのか！？さらにタケルは謎の青年・レイとそのパートナー・レオルモンと出逢う。

総勢18人の選ばれし子供たちとデジモンが仲間の為に、世界の為に、壮絶な闘いを繰り広げる…！

第零話 月明かりの下で

暗闇に血を啜^すった月が不気味な赤黒い光を放つ。闇は濃く、深く、広がっていく……。……。

【第零話 月明かりの下で】

深い深い森の中。木の葉が風に舞い、崩れた階段に落ちる。長い年月をかけて朽ちた遺跡に幾つかの生物の気配を感じられる。それらに敵意は無く、静かな寝息すら聞こえてくる。遺跡の外壁に背を預け、青年は森を照らす月に目を向けた。闇色の髪にはらはらと木の葉が掠^{かす}る。傍^{かたわ}らには小さな黄金の獅子が寄り添うように丸くなっている。

「……魔の好む紅月^{しんげつ}だな」

そつと隣の金毛を撫^なでながら月を睨^{にら}み付けた。

紅い月の光がカーテンの隙間から漏れる。部屋に気味の悪い紅が満ちる。

「うん、ヒカリちゃん……」

「むにゃ……もう食べれないよ。ダイシユケ」

不気味な月にも気付かずに枕にしがみついた少年とヨダレを垂らしている小さい幼竜は幸せそうに眠っていた。

夜景を紅く染める月を見つめる少女と白猫。不安な気持ちを隠すようにベランダの手摺りを強く握った。

「嫌な月ね、ヒカリ」

「うん……」

扉を叩く音と最愛の兄の呼び声に窓を閉め、月に背を向けて部屋を出た。

紅月に照らされた中、庭先でバットを振る音が響く。少年は額に汗を滲^{にじ}ませながら一心不乱にバットを振っていた。

「……………98……………99……………100……………つと」

額の汗を吹き払う。疲れた筋肉を解^{ほぐ}すように腕を伸ばす。横目に見える紅い輝きに、少年は忌々（いまいま）しそくに目を細めた。

カーテンの裏に紅月を隠して少女はベッドに寝そべっていた。背中では鳥の雛に似た動物がピョンピョンと跳ねている。

「はあゝ、極楽極楽♪」

「ま、まだでちゆか……。京しゃん？」

少女は気持ち良さそうに眠りに落ちる。

「邪魔や邪魔や、退きい！」

少女は付き纏^{まと}う幼児達を避けながら食事の準備をしていた。傍^{かたわ}らで喧嘩を始める弟妹を叱咤^{しった}しながら、テーブルの上を片付ける。ふと窓の外へ目がいく。紅い月が怪しい光を放っていた。少女は強い瞳で夜空を睨み付けた。

薄暗い部屋に紅い光が差し込む。少年は書き終えたノートを閉じると窓の外に目を向けた。薄気味悪い夜空が広がっている。

「……賢ちゃん？」

「何でもないよ。……もう寝よう」

二段ベッドの上からミノ虫^{がいかい さえき}が心配そうに顔を覗かす。少年はカーテンを引き、外界^{がいがい}を遮った。

いまだ消えない街明かりに混ざり、紅い光の筋が降り注ぐ。少年は勉強を終え、教室があるビルから出た。それと同時にポケットの携帯電話が鳴り出す。

「もしもし……うん……今終わったよ」

一言三言言葉を交わして通話を切る。深々と息を吐くと帰路に着く。照らし出す紅月を一見し、面倒臭そうに目を逸らした。

「……………めえーんっ!!」

紅月が見る中、少年は師に竹刀を叩きつけていく。それらを弾き返されるのを見て、薄黄のぬいぐるみは声を張り上げる。

「伊織いゝ！ 頑張りやあ!!」

ピョンピョンと跳ねて応援をくれるパートナーに一瞬、笑みを零すが、すぐに引き締めて再び師に向かっていった。

少年はベランダに足を出し、紅い光を見つめた。魅入^{みい}るように見上げていると、背後から足音が近付く。

「……お兄ちゃん」

「……ん、サンキュ」

少年は少女が持ってきた麦茶に口を付ける。少女も少年の傍^{かたわ}らに座り、夜空を見つめる。吹き抜ける風にガラスの水滴が浚^{さら}われた。

点滅する街灯に足を止める。見上げた先には紅い月が輝きを放っている。

「……タケリユ〜？」

「……ん……」

少年は抱える小動物に帰路を急かされるが足取りが重い。帰っても迎えるのは真っ暗な家だ。先程の兄の言葉に甘えて泊まれば良かったかな、と後悔する。

「……………帰ろっか」

明日からの学校に備え、止まっていた足を進めた。腕の小動物は仕切りに話かけてくる。暗くなっていた気持ち少しだけ軽くなつた気がしていた。

歩道橋の上から見上げる背高い団地。8年前に壊れなかったのが不思議なものだ。

「やはりこのゲートは……………」

「…………仕方がない。別の手を考えよう」

漆黒の髪がなびく。隣で飛ぶ小悪魔は残念だとばかりにため息を吐いた。そんな様子を尻目に少年は暗闇へと消えた。

紅月の下、それぞれの想いが交差し、紡^{つむ}がれる――……。。

第零話 月明かりの下で（後書き）

唐突にハマッたデジアド02のその後の話です。

自分なりの解釈と考察で話を書いているので、「それ、おかしくない？」と思うところがあるかもしれませんが、ご了承ください。

第一話 新たな選ばれし子供 新たな物語り

ベリアルヴァンデモンとの死闘から数ヶ月。パートナーデジモンを持つ人が増え、さらにはアーマゲモンの出現でデジモンの存在が徐々に認められてきた。だが、いまだデジモンに対して畏怖いふを抱く人々も多く、人間とデジモンが共存できる世界にはまだまだ時間が掛かるだろう。選ばれし子供たちとそのパートナーデジモンはデジモンの存在を認めてもらえるよう働きかけていた。子供たちは忙しくも、充実した日々を送っていた。

平和を取り戻した現実世界とデジタルワールドに再び歪みゆがみが生じるまでは……。

【第一話 新たな選ばれし子供^{ナカマ} 新たな物語^{ストーリー}】

2003年4月上旬。東京都港区台場。

ぽかぽかとした春の陽射しに眠気が誘われる。腕の中では大きな耳をたたんでパタモンが夢現ゆめうつを漂っていた。そんなパートナーの姿を見て、思わず笑みが零れる。パタモンが起きないように少年——高石タケルはゆっくりと歩みを進めた。

「おはよ、タケルくん」

「あ、ヒカリちゃん。おはよう」

振り向くと明るいい笑顔を向ける少女――八神ヒカリがパートナーのテイルモンを抱えていた。その後ろから走って来る少年――本宮大輔の姿を見付ける。ヒカリも気が付いたようで足を止めた。大輔は全力疾走してきたようで、息を切らせている。肩には目を回したチビモンがしがみ付いていた。

「おはよう、大輔くん」

「おはよ！ ヒカリちゃん！！」

「おはよう。朝から元気だね、大輔くん」

タケルが声を掛けると大輔はあからさまに嫌そうな顔をした。どうやらヒカリしか見えていなかったらしい。タケルは苦笑いしか出ない。そんな様子を見てキョトンとしているヒカリ。

3人は止めていた足を進めた。話は自然とデジモンや仲間の話になっていく。

「そういえば、同じマンションの子がデジモン連れてたよ」

「本当？ 最近、ますます増えてきたわね」

「そうだなあ。近所の公園でもデジモンと遊んでるの良く見るぜ」

「クラスの子もパートナーができたって言ってたよ。それに光子郎さんから世界中にもパートナーデジモンが現れてるって聞いたわ」

「その内、本当に全世界の人にパートナーができる日が来るかもしれないね」

そう言っている側で幼年期デジモンを連れた少年たちが駆けて行く。その後ろ姿を見て、3人は顔を見合わせて笑った。

他愛もない話を続けながら学校に着いた。真新しいランドセルを背負った少年少女が親の手に引き、これから始まる新しい生活に胸躍らせていた。そんな子供たちの中にもデジモンを抱えている子が何人も居て、タケルは自然に笑みが零れる。はしゃぎ回る子供たちを見ていたタケルは腕の中でパタモンがピクリと動く。

「おはよ、パタモン。目覚めた？」

タケルが目を向けるとパタモンはまだボーっとしているようで、少し虚ろな瞳をしている。その様子にいつもの明朗さはなく、長年共にいるタケルにも異様に見えた。

「……………モン……………」

「パタモン……………」

「ふえ？ ……なあに、タケリユ？」

そう言って向かうパタモンの瞳からは虚ろな陰りは消え、いつもの陽気な笑顔があるだけだ。

（寝惚けてただけ？ でも……………）

「タケリユ？ 大輔たち行っちゃうよあ？」

「う、うん……」

校舎の前で大輔とヒカリが待っている。タケルは慌てて走り出した。パタモンは定位置でもあるタケルの帽子の上に移動する。そして、タケルに気付かれないように辺りを見渡した。僅かに感じる風の淀みに目を細めた。

進級した3人は6年生のクラスへ入った。5年からの持ち上がり
の為、クラス替えはない。デジモンたちはコンピュータ室へ行った
ので今はいない。タケルは席について、先程のパタモンの様子を思
い出していた。

（確かに何か呟いてたんだけどなあ）

『……………モン……………』

それはたぶんデジモンの名前だろう。だが、前半は聞き取れなかつた為、なんと言ったのかは分からない。考え込んでいると担任の藤山が入ってきた。タケルもそれに気が付いてはいたが話を聞く気になれず、ボーっとしていた。すると再び教室の扉が開いた。目を向けると一人の少年が入ってきた。

「転入生の法月 奏くん^{かなで}だ」

「法月奏です。小学校生活は1年しかありませんが、よろしく願います」

どうやら転校生の紹介をしていたらしい。まったく聞いていなかったタケルは意表を突かれたように転校生に目を向けた。暗闇のような漆黒の髪に、燃えるような紅玉の瞳^{ルビ}。穏やかな雰囲気とは裏腹に張り付いたような微笑はひどく冷めたものに見えた。

「じゃあ、席は本宮の後ろな」

一番後ろだった大輔の後ろにひとつ席が空いている。奏は大輔の後ろの席に座った。すかさず大輔は後ろを振り向いた。大輔の人懐^{ひとなつ}っこさが良く分かる行動だ。

「オレ、本宮大輔。よろしくな」

「うん。よろしくね」

「6年で転校って珍しくねえ？ やっぱ親の都合とか？」

大輔が聞くと奏は困ったように眉を顰^{ひそ}めた。その瞳には悲しげな色が見え隠れしている。

「まあ……似たようなもの、かな」

「ふーん……」

曖昧に答えた奏を訝^{いぶか}しげに見る大輔。その様子に奏はますます困った顔をする。

「こら、本宮。静かにしろ」

「へい」

藤山に注意を受け、大輔は奏と向き合うのを止めて前に向き直った。そして長い長いホームルームに嫌々耳を傾けた。

入学式と始業式を終え、本日の学校は終業する。タケルはランドセルを持って教室を出た。ヒカリはクラスの友人と休み中のお土産を交換し合っている。大輔はサッカー部のミーティングへ行っている。タケルが所属しているバスケット部はお昼休みにミーティングをしている為、放課後はない。部活自体も今日はなかった。タケルは仕方なく一人でコンピュータ室へ向かうことにした。その途中、見知った少年を前方に見付ける。タケルは足を速めた。

「伊織くん！」

「あ、タケルさん。こんにちは」

2つ下の少年——火田伊織は相変わらず礼儀正しくお辞儀をしてくる。パートナーのウパモンの姿はなく、おそらくパタモンたちと一緒にいるのだろう。タケルは伊織に並んでコンピュータ室へ向かう。

「大輔さんとヒカリさんは？」

「大輔くんはサッカー部のミーティング。ヒカリちゃんはクラスの友達と喋ってるよ」

それから2人は雑談をしながらコンピュータ室へ向かうと、中から賑やかな声が聞こえてきた。その声に2人は顔を見合わせる。二人がコンピュータ室に入ると2人の男女が待っていた。

「あ！ 来た来た、遅いわよ」

「久しぶり。タケルくん、伊織くん」

「京さん、一乗寺さん！」

お台場中学校の緑の制服を着て叱咤^{しった}する少女——井上京と、鼠色の学ランを着て京を宥^{なだ}める少年——一乗寺賢だ。そのパートナーのポロモンとミノモンは他のデジモンたちとおやつを食べている。アイマートの袋から出していることから、京が持ってきてくれたようだ。だが、伊織は怪訝^{けげん}そうな顔をしている。

「お二人共、学校はどうしたんですか？」

「中学は午前中で終わりだったの。それで暇^{ひま}だったから賢くんに連絡したら午前終わりだって言うから皆で久々にデジタルワールドでも行こうかって話になって……」

「ついでに皆を驚^{みん}かそうって京さんが言い出したんです」

「それでここで待ってたんだね？」

「そういうこと！！……で、大輔とヒカリちゃんは？」

辺りを見渡す京にタケルが口を開こうとすると、バタバタと足音が聞こえてきた。扉が開くと大輔とヒカリが入ってくる。すると2人共キョトンとしていた。ヒカリは驚きながらも嬉しそうな笑顔を見せる。一方、大輔は対照的に面倒臭そうな顔をする。

「京さん、一乗寺君！ お久しぶりです」

「何してんだよ、卒業生っつ」

「遊びに来たのよ、悪いっつ！？」

「はいはい、折角集まったんだから久しぶりにデジタルワールドにでも行こうよ」

軽くいがみ合う大輔と京。いつもの軽ノリなので皆も特に気にしない。タケルが宥めてデジタルワールドへ促した。これ以上やつてもキリがないのも分かっているので2人はいがみ合いを止め、D-3を取り出した。デジモンたちもそれぞれのパートナーに寄り添う。京がいつもの掛け声を叫ぶ。

「デジタルゲートオープン！ 選ばれし子供たち出動！！」

パソコンから光が放たれ、子供たちは光に包まれる。光が弱まり、消えると子供たちの姿はなかった。残されたのは起動したままのパソコンだけだった。

辺り一面に花が咲いている草原に不釣り合いなテレビが置いてある。そのテレビのディスプレイが光りを放ち、その光りが納まると6人の子供とデジモンが立っていた。

「ラッキー　ピクニックには最適の場所じゃない！」

「し、調べておいたわけじゃなかったんですか……？」

笑顔で言う京に呆れたように言うホークモン。ずっとピクニックと騒いでいた京だった為、良い場所でもあるのだろうと思っていたのだが、そうではなかったらしい。

「伊織いゝ、腹減ったぎゃあ」

「え？　さつき食べてたじゃないですか」

先程のおやつを食べていたが、アルマジモンはまだ満腹ではないらしい。だが、おやつを持っているのは京の為、もう少し待ってもらうしかない。伊織は騒ぐアルマジモンの声を耳を塞いで無視した。

「賢ちゃん、賢ちゃん！　皆で出掛けの楽しいね」

「そうだね」

6人の内、唯一田町に住む賢は気軽に皆と遊びには出掛けられな

い。だから京の誘いは非常に嬉しかった。それはワームモンも同じようにウキウキした様子ではしゃいでいる。

「気持ち良い風……。ねえ、テイルモン」

「そうね」

最近、伸ばし始めた髪を靡^{なび}かせてヒカリはテイルモンに語りかける。そんなヒカリの姿を見てテイルモンも微笑む。ヒカリは愛用のデジカムを取り出し、デジモンたちの写真を撮り始める。

「いづくぞおー！！ ブイモン！！」

「来い！ 大輔！！」

大輔とブイモンは早速サッカーボールを取り出し、サッカーを始めている。大輔の蹴^けるボールを追ってブイモンが追いかける。大輔はボールを賢にパスし、参加を促す。それを見て賢とワームモンもサッカーに混ざる。それから伊織や京も混ざり、人間対デジモンで試合を始めていた。その様子をヒカリがカメラに収める。

「タケルはやんないのお？」

「うん……」

タケルは遠巻きに眺めている。パタモンは頭にクエッションマークを浮かべていた。タケルは頭の上にいるパタモンを腕の中に収める。キョトンとしているパタモンに言い難そうに口を開いた。

「ねえ、パタモン。今朝さ……」

「……………タケル……………くん……………？」

そう背後で遮ったのはあまり聞き慣れない声だった。大輔たち5人はタケルの目前でいまだサッカーを繰り広げている。思わず構えて振り返ったタケルは木の陰から近付く少年が居た。黒髪に蒼い瞳は真面目な雰囲気醸し出している。少し神経質そうな少年にタケルは見覚えがあった。

「天音くん?!」

「やっぱりそうだ! 久しぶり、元気だった?」

タケルは驚きと嬉しさのあまり大声を出していた。それに気が付いた大輔たちは何事かと、サッカーを中断して寄ってきた。

「タケル? どうしたんだ」

「ごめん、驚かせて。幼馴染みが居たもんだから」

「幼馴染み……………ですか?」

「うん。東雲しのめ天音くん。あまね 同い年で、前に住んでいた所で仲良くしてたんだ」

「はじめまして、東雲天音です。よろしくね」

少年——東雲天音が名乗ると同時に「あゝまゝねえゝっ!」と言う声が聞こえてきた。声の方向を見るとミツバチのようなデジモンがふらふらと飛びながら近付いてくる。天音を見付けるが周りにい

るタケルたちを見て、その場に止まった。微妙な距離感がある。

「ファンビーマン、大丈夫だよ。彼はボクの友達だから」

ファンビーマンはしばらくその場で飛んでいたが、やがて諦めたように天音の肩に乗った。だが、その瞳は警戒心に満ち溢れていた。少しでも動けば攻撃をしてきそうな雰囲気だ。

「こら、睨むなよ。ごめんね。コイツ警戒心が強くて……」

「うん。その子が天音くんのパートナーデジモン？」

「うん。ファンビーマンっていうんだ。その子はタケルくんの？」

「ボク、パタモン。よろしくねえ」

「よろしく。……そっちは友達？」

天音はタケルに向けた好意的な視線とは違い、探るような目を大輔たちに向ける。ファンビーマンも同様に警戒心剥き出しの顔をしている。大輔は天音たちの態度にムツとするが、タケルは気付いていないようだ。

「うん、友達だよ。えっと……」

「八神ヒカリです。よろしくね。こっちがパートナーのテイルモン」

「よろしく」

「火田伊織と言います。こっちが……」

「アルマジモンだぎゃあ」

「アタシは井ノ上京よ」

「ホークモンと申します。以後お見知りおきを……」

「一乗寺賢です。よろしく」

「ボク、ワームモンです」

「オレ、ブイモン！」

「……本宮大輔だ」

「…………よろしく」

素っ気なく答える天音に大輔はますます不機嫌な顔をした。文句の1つでも言つてやろうかと思つたが、それは遮られた。遠くから数人の足音と「天音くゝん！」と呼ぶ声が聞こえてきた。

「連れがいるの？」

「うん。タケルくんの知つてる奴もいるよ」

そう言っていると林の陰から3人の男女が姿を現した。その中で1人の少女がタケルを見て目を見開いた。

「高石くんやないの！？ 久しぶり！！」

「由良さん？」

話かけてきたのは薄茶のボブの女の子だ。明るい元気な雰囲気少女で大阪弁で話している。傍らには刀を背負ったヒヨコがいる。

「……誰？」

そう言ったのは少し背の高い少年だ。黒髪にうつすら茶色が混ざっている。紺の瞳には純粹な疑問が見える。彼の肩にはイタチのようなまたはネズミのようなデジモンがタケルたちを観察している。

「お友達ですか？」

もう1人は一番小さな少女だ。長い金茶に紺碧の瞳は落ち着いた雰囲気醸し出し、少し冷たい印象を持っている。腕には白とピンクの体毛を持つイヌのようなデジモンを抱えていた。

「ボクの幼馴染みとその友達だって」

「そっか。オレは朝比奈あさひな薰かある。天音の従兄弟いとこだ。ちなみに中1な。んで、コイツはクダモン。よろしくな。……で、こっちが妹の……」

「朝比奈あさひな 鳴めいと言います。小学4年生になります。こちらはパートナーのラブラモンです」

「よろしく」

そう言って長身の少年——朝比奈薰はパートナーと妹を紹介する。クダモンは首を縦に1回下げただけだった。一番小さな少女——朝比奈鳴がパートナーを地面に下ろす。ラブラモンはのんびりとした

口調で挨拶をした。

「で、ウチが由良^{ゆら} 凜華^{りんか}や！ こっちがパートナーのヒヨコモン」

「よろしくでござる」

最初の少女――由良凜華が元気に名乗る。隣のヒヨコモンも奇妙な話し方をする。

大輔たちも一人一人自己紹介をして、挨拶を交わした。4人は以前、タケルが居た三軒茶屋の河田小学校、河田中学校の生徒だ。その中でも天音はタケルの幼馴染みで、凜華はクラスメイトだった。薫と鳴の兄妹は天音の従兄弟^{いとこ}らしい。

「でも驚いたなあ。こんな所で天音くんたちに遇うなんて」

「それはボクもだよ」

そう言いながらもタケルは嬉しそうにしている。天音も同様に笑顔で答えていた。凜華はまじまじとタケルを見ている。

「な、何……？ 由良さん」

「なあ、もしかして高石くんがデジモンと逢ったのって4年前の夏休みやないの？」

「え……、何で分かったの？」

「やっぱり！！ 二学期に会った時、なんか雰囲気違ってたから」

「そう……かな……？」

「そうだよ！　なんか、たくましくなったっていうか…頼り甲斐があるっていうか」

「うんうん。あの時の冒険でタケルくんすごく変わったと思う。格好良かったもん」

タケルが考え込んでいると天音とヒカリも同調する。それを見て大輔は面白くなさそうな顔をしている。

「ホンマホンマ！　……後、由良さん言うの止めへん？　凜華でええよ。ウチもタケルくんって呼んでもええ？　皆も名前みんなで呼んでな！」

「うん。分かった」

「なあ、4年前の夏ってことはお台場霧事件の時か？」

薫は目を輝かせながら聞いてくる。その様子に肩で見ていたクダモンが呆れたようにため息を零していた。

「ボクとヒカリちゃんはそうだよ。一乗寺くんが3年前。大輔くんたちは去年から」

「はわゝ。じゃあネット事件とか、世界中にデジモンが現れた時に活躍したん？」

「おう！　そりゃもう大活躍だったぜ」

「へえ、すごいね」

凜華と天音は感心するような驚きの声を上げる。大輔は自慢げに去年の出来事を話し始めた。京たちも自分たちを活躍を誰かに聞いてもらえるのが嬉しいらしく、意気揚々と話しに加わっていく。そんな様子をタケルは笑顔で見っていた。

「嬉しそうだね、タケリユ」

「うん。……こうやって誰かとの繋がりが増えていくのって嬉しいじゃないか」

「そうだねえ」

離れた所で見っていたタケルは大輔たちに混ざろうと足を向ける。しかしそれを遮るように後ろから肩を叩かれた。振り向くと薫が目を輝かせていた。そんな薫の様子にタケルは首を傾げた。

「なあなあ。君らの中で天使のデジモン連れるのって誰？」

「それならボクのパタモンとヒカリちゃんのテイルモンですよ。パタモンが進化するとエンジェモンに、テイルモンが進化するとエンジェウーモンって天使型のデジモンになりますから」

「マジ！？　じゃあさ、4年前の霧事件の頃に渋谷にいたのってどっち？」

薫はますます食い付き、少し興奮したように詰め寄る。タケルは困惑したように答えた。

「たぶん、それボクたちだと思います。あの頃はまだ三件茶屋に住

んで、お台場から帰る時にたまたま渋谷に寄ったから」

そう言うと薫はますます目を輝かせて、ガッツポーズを取っている。薫の肩に居るクダモンは呆れたような目を向けていた。訳が分からず、タケルはクエッションマークを浮かべている。クダモンは尻尾で薫の頭を思いつきり殴って、無言で説明を促した。

「悪い悪い。実はさ、4年前のあの日、お台場にオレと鳴いたんだよ。オレは鳴をお台場の爺ちゃん家に送ってった帰りでさ、ついでに渋谷をぶらぶらしてたんだ。そしたら渋谷でも騒ぎがあっただろ？　その時に見たんだよ、天使をさ。あの光景は今でも覚えてる。格好良くて、綺麗で……すっげえ、感動したんだ。あの時は一瞬しか見られなかったから、もう一度逢いたかったんだっ……！」

そう語る薫は高潮して興奮を隠し切れないようだった。薫が語る日はタケルも良く覚えていた。エンジEMONと再会した日。そして友達になれそうだったパンプモン、ゴツモンと出逢い……別れた日だ。

「……………格好良かったって、パタモン」

「えへへ、そうかなあ」

一瞬、脳裏に甦った光景を押し戻してパタモンにおどけたように言った。それが不自然になった自覚はあったが、パタモンは気が付かなかったのか、または気付かなかったフリをしてくれたのか、少し大袈裟に照れた素振りを見せる。薫は興奮が冷めないようにでタケルの様子には気が付いていなかった。

「今度、機会があったら進化した姿見せてよ」

「だってさ、パタモン」

「うん、いいよ」

そう言ってタケルたちは顔を見合わせて笑った。終始、呆れ顔だったクダモンも微笑を見せている。

繋がりが繋がりを生む。それが絆になり、力となる。そんな奇跡に近い出来事を幾度も見てきた。それらは永久に残る宝物だ。タケルはそんな事を思いながら話しに花を咲かせる仲間たちを見つめた。

「オレさあ…… 4年前にエンジエモンを見たあと、渋谷であつたと誰に言っても信じてもらえなかったんだ」

薫も楽しげな仲間たちを見ながら呟いた。だが、その横顔はどこか遠くを見ているようにも感じた。

「自分が見たものが嘘じゃないって思いたくて、必死になってお台場霧事件のこと調べたんだ。そこでデジモンのことを知ってさ。……いつか自分のデジモンが現れないかって思ってたときにコイツのデジタマとD-3が現れたんだ。本っ当に嬉しかったなあ」

クダモンの頭を撫でながら薫は愛おしそうに続けた。クダモンも気持ち良さそうにしている。タケルはそんな光景さえ嬉しく思ってしまう。いまだにデジモンに対して畏怖を抱く人は多い。それでもこんなにもデジモンたちを慈しんでくれる人々がいる。長らくデジモンたちと一緒にいたタケルにとってこれほど嬉しいことはない。

「コイツもいつか進化とかするのかなあ……」

薫はD-3を取り出して見つめた。待ち遠しくて仕方がないとい

った風だった。そんな姿が可笑しくってタケルは思わず笑ってしまった。それを見咎めた薫は拗ねたような顔をする。それがまた可笑しくてますます笑いが止まらなかった。

タケルの頭の上で様子を見ていたパタモンが肩まで下りて来た。パタモンはじつと薫の手元を見つめていた。

「どうしたの、パタモン？」

「タケリユ、あれ見て」

そう言われ、タケルは薫のD-3に目を向ける。自分たちが持っている同じ形だ。だが、少し違和感があった。それが何なのかすぐに分かった。

「……………色が……………違う……………？」

ベリアルヴァンデモンとの戦いの後、パートナーデジモンを持つ人が増えた。それと同時にD-3を持つ人も増えていた。タケルが知る限るでは、自分たち6人と同じ色のD-3しか見たことがない。だが、薫のD-3は違う。大輔の青にも近いが、賢の黒にも近い。それでもって全く違う色だ。それは…青みがかった紫。

「どうかしたか？」

「あ、いえ！……………あの……………」

急に黙り込んだタケルを訝しそうに見る薫。タケルは少し考え込んでから言い辛そうに口を開いた。

「ち、ちなみに……………なんですけど、天音くんたちのD-3の色って

分かりますか？」

「ああ、分かるけど。確か、天音は濃い蒼っていうか……紺に近かったかなあ。凜華は黄緑で、鳴は白だったぜ」

「そう……なんだ……」

みんな色が違う。タケルは嫌な胸騒ぎを覚えた。薫たちはパートナーデジモンを持つ人々とは違うのではないか。デジタルワールドを危機から救う『新しい選ばれし子供』ではないか、と。そもそもオリジナルの6個以外にデジタルゲートを開く機能は見つかっていないはずだった。

（いや……考えすぎかな？　ボクが見たことないだけで、色の違うD・3もあるのかも。ゲートことだって、たまたまってこともあるし）

タケルは首を振り、嫌な考えを振り捨てた。パタモンが心配そうに見ている。そつと頭を撫で、大丈夫だと伝えた。ムリヤリだと分かっている、悪い予感的中させたくないかった。

「大丈夫か？　……なんか顔色悪いぞ」

「大丈夫です。すみません、変なこと聞いて」

作り笑いで誤魔化すタケルに薫は眉を顰める。だが、タケルは薫が何か言う前に大輔たちに混ざってしまった。薫は納得していないような顔をしているが、無言のまま鳴の隣まで寄って行った。

大輔はインペリアルドラモンで世界を回った時の話をしていた。大輔の自慢話を京が揚げ足を取ったり、伊織が訂正しながら話をし

ている。天音たちもすっかり打ち解けたようで、冗談を言ってから
かっている。

「ほへへ、なんや途方もない話しばつかやなあ」

「そうだね」

「だろだろ！？　今の平和な世界があるのはオレたちのおかげなん
だぜ！」

「「大袈裟よ（です）。大輔（さん）」」

京と伊織に突っ込まれて大輔は形無しだった。そんな様子にみんな
がどつと笑い出す。落ち込む大輔を賢と凜華が慰めていた。

「……………和んでいる所、申し訳ないのですが」

そう言つて会話を遮つたのは今まで黙っていた鳴だった。隣の薫
は首を傾げる。

「なんだ、鳴」

「何か忘れていませんか？」

「何か？」

そう言つて薫たちは考え込むが、何も思いつかないようだ。それ
を見ていたクダモンが嘆息を漏らす。

「……………慶悟」

「「「あ……………」」」

天音たち3人はしまったと顔を見合わせる。気まずそうに苦笑いをする。

「……………忘れてた」

「……………だな」

「ホンマ。あのポケどこ行ったんやろ」

3人が口々に言うのを聞いて、彼らのパートナーたちは苦笑いしている。タケルたちはキョトンとした顔で天音たちを見ていた。その様子にデジモンたちが顔を向けてきた。

「リュウダモンと言うデジモンを連れた少年を見なかっただろうか？ 薫と同じ年の少年なんだが」

「リュウダモン？」

「鎧を被った成長期の獣型デジモンだよ。慶悟って子のパートナーなの」

「一緒にい、来てただんだけどおゝはぐれちゃってえゝ」

「探してる最中なのでござる！」

タケルはそれらを聞いて大輔たちに視線を向けるが、みんな首を横に振っている。

「ごめん。僕らも来たばかりで見掛けてないんだ」

「そっか。……たく、どこ行っただか」

呆れたように言う薫にクダモンが「忘れてたくせに……」と毒吐いた。

「まあまあ。アタシたちも探すの手伝うわよ。ね、みんな」

「ほんま〜？ おおきにな、京さん」

そう言って、分かれて探そうと相談していると、ファンビーマンが冷たい声色で言い放った。

「探しに行く必要なさそうだよ、天音」

「え？」

「……あれ」

ファンビーマンが示す方を見ると、小さい影が2つ走ってくるのが見えた。遠目からでも分かるガタイの良さは見るからにスポーツマンといった感じの少年だ。茶色の短髪は今時の洒落っ子だった。隣には黄色い身体の鎧を被ったデジモンが一緒にいる。

「あれが英^{はなづか}慶^{けい}悟とパートナーのリユウダモン。元気だけが取り得な2人だよ」

少年——英慶悟とリユウダモンは見るからに焦ったようだった。

そんな様子の2人をファンビーモンとパタモン、ホークモンは空から眺めた。2人の後ろで盛大な砂埃が起こっている。

「あれは……追われているようですね」

「だね。ティラノモンの群れだよ」

「何やらかしたんだか」

ホークモンとパタモンがのんびりした口調で言う横でファンビーモンが毒吐いている。慶悟はようやく天音たちに気が付いたようですべて全力で向かってくる。それを見たファンビーモンが嫌そうな顔をした。

「うえ……こっち来るよ」

「ティラノモンっておとなしい性格じゃなかったかしら？」

「ええ。賢いし、滅多なことでは襲ったりしないはずだけど」

「慶悟のことだ。何か怒らせるようなことしたんじゃない？」

心配するヒカリとテイルモンだが、天音は冷たい視線を向けている。慶悟は余程やんちゃな性格らしい。凜華たちもあまり心配していないようだ。だが、ホークモンとパタモンは苦い顔をしている。

「いえ、そんな感じではありません」

「うん。なんか操られてる感じがするよ」

「なんだって!?!」

そんな事を言っている内にティラノモンの1体が立ち止まり、口を大きく開いたのが見えた。

「ファイアーブレス!」

「どわぁっ!!」

放たれた深紅の炎は慶悟の足元を掠める。その衝撃で足を取られた慶悟は派手にすっ転んだ。

「慶悟!?!」

凜華の悲鳴にも近い叫びが聞こえた。慶悟を庇うようにリュウダモンが立ち塞がる。ティラノモンが2人の目の前まで迫っていた。

「まずいつ、パタモン」

「うん!!」

「いくぜ、バイモン!!」

「おう!!」

「頼んだよ、ワームモン」

「任せて、賢ちゃん」

「ホークモン!!」

「了解です」

「お願いします、アルマジモン」

「任せろだぎゃー！」

「テイルモンも」

「ええ！」

5人のD-3が輝きを見せる。ヒカリはDターミナルからデジメンタルを取り出した。

「パタモン進化——エンジェモン」

「ブイモン進化——エクスブイモン」

「ワームモン進化——ステイングモン」

「ホークモン進化——アキラモン」

「アルマジモン進化——アンキロモン」

「テイルモン アーマー進化——微笑みの光り——ネフェルティモン」

6体のデジモンはティラノモンの群れに向かっていった。1体のティラノモンが慶悟を踏み潰そうとしている。

「うわあああっ!!」

「ホーリーロード!」

慶悟が踏み潰される寸前、エンジEMONがティラノモンをなぎ倒した。エクスブイモンたちも慶悟からティラノモンを引き離す。天音たちは慌てて慶悟に掛け寄る。タケルたちもそれに続いた。

「慶悟、大丈夫か!？」

「お、おお……なんとか」

「リュウダモンは？ 怪我とかしとらん？」

「おう！ 大丈夫だ」

それを聞いて安心したように座り込む凜華。だが、薫は厳しい顔つきで2人を立たせた。

「安心するのはまだ早いぞ」

「そうだね。まだ、こんな状況だから気を抜かないで」

「コイツらは？」

「後で紹介するよ」

慶悟が不審そうにタケルたちを見るが、天音の有無を言わせぬ雰囲気押し黙った。そして繰り広げられる戦いを目の当たりにした。

「エクスレイザー!!」

「スパイキングフィニッシュ!!」

「グライドホーン!!」

「ロゼッタストーン!!」

「テイルハンマー!!」

「ヘブンズナックル!!」

それぞれの攻撃が決まるも、ティラノモンたちは立ち上がり、向かってくる。大輔は思わず舌打ちをした。

「くっそっ、どうなってるんだよ!？」

「あのデジモンたちは、どう見ても正気の沙汰じゃありません」

「だけど! イービルリングやイービルスパイラルも見当たらないっ!!」

「そもそもあれってダークタワーがないと機能しないんじゃないかな?」

「まさか、また闇の力が……」

みんなが口々に不安を漏らす声をタケルは人事のように聞いている。決して正気ではないティラノモンたちの瞳。イービルリングではない。だが、確実に何者かに操られている。その時、脳裏に浮か

んだのは1つだった。

「……………みんな、力を貸して」

「な、なんだよ、急に」

「ティラノモンたちを正気に戻せるかもしれない」

「ホンマ！？」

「何か策があるんですか？」

「……………ボクの予想が当たってれば、だけどね」

タケルが苦々しく言うのは自信がないからか、それとも別の理由からか。大輔たちには分からなかったが、今は賭けるしかなかった。

「タケルくんの予想が当たっているのを願うしかないね」

「……………ボクは当たってほしくないけど……………」

そう呟くタケルの言葉は誰の耳にも届かなかった。ただ、決意を込めてティラノモンたちを向き合う。

「エンジェモン！ みんな！！……………ティラノモンを一箇所に集めてくれ！！」

「何をするんだ？」

そう問う賢にタケルはD-3を取り出した。

「これを使っんだ」

「D - 3?」

「そう。ティラノモンたちに向かってこれを掲げるんだ。デジヴァイスが持つ聖なる力には闇の力を討ち払う力があるから」

「そううまくいくのか?」

不審を露わにして言う慶悟にタケルは首を振る。

「分からない。……でも試してみる価値はあると思う」

「つべこべ言っても始まらねって。原因が分からないんだ。試すだけ試してみようぜ」

そう言って薫は天音たちを見やる。彼らも同意見のようで、D - 3を取り出した。

「戦いには参加できないけど、これくらいならボクたちにもできるしね」

「そうやね。元は慶悟のアホが持ってきてしもたことやし」

「ご協力させてください」

「ってことだ。いいな、慶悟」

「……ちっ、分かったよ」

舌打ちをしながらもD-3を取り出す慶悟。その手に持つD-3はオレンジ色をしていた。他の3人も薫が言った通り、オリジナルの6色とは違う色をしていた。タケルはそれを確認すると大輔たちに目を向ける。みんなすでにD-3を手にしており、準備は整っていた。

「頼むぞ、みんな!!」

「エクスレイザー!!」

「スパイキングフィニッシュ!!」

「ブラストレーザー!!」

「カースオブクイーン!!」

「テイルハンマー!!」

「ヘブンズナックル!!」

総攻撃を仕掛けたエクスブイモンたちに追いやられ、ティラノモンたちは一箇所に集まった。それを見計らったように子供たちはティラノモンを取り囲む。そしてD-3を掲げた。青の、オレンジの、黒の、紺の、赤の、黄緑の、黄色の、青紫の、緑の、白の、ピンクの光りがそれぞれに放たれる。その光りにティラノモンたちが苦しみ始めたかと思うと、次々と黒い物体が身体から解き放たれた。

「……………なんだ……………あれ……………」

「歯車？」

「エンジエモン！」

歯車がティラノモンから出て行くと、D-3の光りも消えた。宙に浮かぶ歯車を大輔たちは呆然と見ていた。タケルだけはしっかりと意志でパートナー呼びかける。エンジエモンはそれに答えるように歯車を追って宙に飛び立った。

「ヘブンズナックル！！」

金色の光りが拳から放たれ、歯車は粉々になってきえた。それを見送るとタケルはゆっくりとティラノモンに近付いた。

「た、タケルくん！？ 危ないよ！！」

「大丈夫だよ。……もう、大丈夫」

不安そうに見つめる天音だが、タケルは平然と近付いていく。ティラノモンはむくりと起き上がった。その瞳は先程の凶暴な目つきではなく、穏やかな優しい瞳をしていた。

「大丈夫？ ごめんね、痛い思いさせて」

そう言ってタケルはティラノモンの顔を撫でる。ティラノモンはタケルを一瞥すると。一声発し、仲間を連れ たって去っていった。エクスバイモンたちはそれぞれのパートナーの元に戻り、成長期に退化した。ティラノモンの群れを見送ってから、慶悟は大きなため息を吐いて座り込む。

「はあ、助かったぜ。一時はどうなるかと思った」

「それはこっちの台詞だって」

「ホンマやよ！ タケルくんたちにまで迷惑かけてしもたやない」

「つーか、誰？ コイツら」

「天音の幼馴染みとその友達。つーか、睨む前に礼のひとつでも言ったらどうだ？ 助けてもらったんだぞ」

薫が慶悟に諭すも彼はそっぽを向いて無視している。それを見た凜華が慶悟の首根っこを捕まえて大輔たちの前に転がした。

「痛つてえな！！ 何すんだ！？」

「助けてもろて礼の1つも言えへんの？！ 男やつたら潔くしい！！」

凜華の鬼の形相で慶悟に詰め寄る。慶悟は完全にビビっており、素直に頭を下げた。

「た、助かったよ。……ありがとな」

そんな様子に呆気に取られた大輔たちは苦笑いするしかない。それから大輔たちも名乗った。慶悟も天音たち同様に三軒茶屋し住み、薫と同じ河田中学校に通っているらしい。

「そもそも、どうしてティラノモンに襲われるようになったんだ？」

薫が呆れたように聞くと、慶悟は声を詰まらせた。その様子を見て、天音はため息を吐く。

「やっぱり何かやらかしたんじゃないの？」

「ち、違いしっ！　ただ、その……」

慶悟によると、冒険気分で森の中を進んでいたら天音たちとはぐれてしまったらしい。4人を探しながら森の深くまで行ったら川辺に集まっていたティラノモンを見つけた。初めて見るデジモンに、好奇心で近寄った。だが、すでにティラノモンたちの様子はおかしかったらしい。目が合った途端、咆哮と共に襲ってきたというのだ。

「じゃあ、その前から黒い歯車が……」

「黒い歯車？　さっきティラノモンから出てきたあれか？」

「タケルさんはあれがなんなのかご存知なんですか？」

「それは……」

首を傾げる薫と伊織にタケルは口を噤んだ。その様子に大輔は苛立ちを募らせた。

「なんだよ！　知ってることがあるなら言えよな！？」

「ちょっと、大輔！　そんな言い方っ」

「だってそうだろ！？」

「……………あの黒い歯車は……昔、倒した敵が使っていたものだよ」

食って掛かる大輔を咎める京。2人の言い合いを止めるようにタケルはそれだけ搾り出した。

「昔？ ヴァンデモンが現れる前か？」

「うん、そうだよ。黒い歯車はデジモンを凶暴化させるんだ」

テイルモンの問いにはパタモンが答えたが、それ以上は何も言わなかった。パタモンは考え込んでいるタケルを気遣わしげに見ている。みんながタケルを見ているが、当人はそれにも気付かずにいる。

「と、とりあえず、太一さんたちにも伝えた方が良いんじゃないかしら。ねえ、ヒカリちゃん！」

「そうですね、前に戦ったことがある相手ならお兄ちゃんたちも知ってるわよね。でしょ、タケルくん？」

「……………ああ……………うん……………」

沈黙に絶えられなくなった京とヒカリだったが、曖昧な返事だけでタケルはすぐに黙ってしまった。困ったように顔を見合わせる2人を尻目に、タケルは天音たちに目を向けた。

「ねえ、今度の日曜日、時間ある？」

「え？」

唐突な質問に天音たちは顔を見合わせる。

「もう一度集まって話したいんだ。現実世界だと集まるのも大変だろうから、デジタルワールドでも良いんだけど……。後、大輔くんたちもお願いしたいんだけど」

「しょうがねえなあ」

「勿論よ。みんなともまた逢いたいし！」

「そうですね。アタシも大丈夫よ」

「ボクも大丈夫です」

「ボクも構わないよ」

タケルの真剣な面持ちに大輔たちは素直に従った。大輔たちの了解を得たタケルは天音たちにも目を向ける。

「ボクは大丈夫だよ」

「ウチも構へんで」

「オレたちも特には……なあ？」

「はい」

「オレは……」

「慶悟の特に用事ないから、みんなで行くよ。またここで良い？」

「おい！ 何勝手に決めてんだよっ！！」

「行くよね？」

スマイルキラーで釘を刺す天音を見て、慶悟はリュウダモンに抱きついて震えていた。タケルはそんな姿を見て苦笑している。先程と違い、いつもと変わらないタケルに仲間たちは胸を撫で下ろした。

「ごめんね。よろしくお願いします」

「構わないよ。さっきの……黒い歯車だっけ？あれも気になるし」

「せやね。乗りかかった舟やし」

「……招いたのは慶悟くんです」

「招いてねえ！！」

「とりあえず！……もう暗くなるからいったん帰ろうよ」

「そうですね。あんまり遅くなるとお母さんが心配します」

「お前、そればっかだな」

解散を決めた子供たちはそれぞれに帰路に着くことにした。天音たち5人は隣のエリアから来たらしく、いったん戻らなければならぬらしい。大輔たち6人はそのまま天音たちと別れを告げ、現実世界へ戻っていった。

慶悟たちは大輔たちを見送ってから、隣のエリアまで歩いていた。その道中、薫は少し興奮したように口を開いた。

「思わぬ形でエンジエモンの姿が見れたなあ。やっぱ、格好良かったあ！」

「うるさいぞ、薫」

「クダモン！　っ！　そう言うなよ。4年越しの悲願なんだぜ？　感動するって！！」

「でも……確かにみんな格好良かったなあ。ね、ファンビーモン」

「うんうん　すごかった！」

「そうか？　あんなの大したことねえよ！　なあ、リュウダモン？」

「……ちょっと格好良かったかも」

「おいっ」

「慶悟ってホンマ意地っ張りやな」

「全くでっせえ」

「……ラブラモンたちも……進化するんでしょうか？」

「うん！　すると思うよ。鳴たちが必要としてくれたらあ！」

「ふん。リュウダモンたちも進化するのか……」

夕陽が沈んでいくのを眺めながら、慶悟たちはまだ見ぬパートナーの進化の姿を思い浮かべていた。

太陽は沈み、暗黒の時が訪れる。闇の中、黒い翼を広げた悪魔が不気味な笑い声を響かせた……。――。

第二話 敵か味方か ピコデビモン登場

デジタルワールドで出逢った5人の新しい選ばれし子供たち。そして突如として現れた黒い菌車。平穏を取り戻した世界を暗雲が覆う。戦いの時が急速に迫ってくる――……。

【第二話 敵か味方か ピコデビモン登場】

大輔たちが慶悟、天音、凜華、薫、鳴の新しい選ばれし子供である5人と出逢った翌日。大輔、タケル、ヒカリ、伊織の4人は学校が終わるとすぐに下校していた。向かった先はお台場中学校。その校門前で賢と合流し、校内に入った。辿り着いたパソコン室の扉を叩くと、間があってから声が聞こえてきた。

「……デジデジ」

「モンモン」

合言葉を唱えると、鍵が開き、緑の制服を着た青年――泉光子郎が出迎えてくれた。室内に入ると歴代の選ばれし子供が勢揃いしている。光子郎は扉を閉め、鍵も掛ける。それを見て、茶髪の青年が

口を開く。

「全員揃ったな」

そう言った青年——八神太一はいつに無く神妙な面持ちで言った。
隣で金髪の青年が光子郎に目を向ける。

「……ミミちゃんには？」

ここに來れない少女——太刀川ミミを心配して青年——石田ヤマ
トは問い掛けた。

「ミミちゃんには一通りの説明はしておいたわ。何かあったり、決
まったことがあった時はすぐに知らせてほしいって」

答えた少女——武之内空は光子郎に目を配らせる。光子郎は頷き、
同意を示す。

「……とりあえず、昨日のことをもう少し詳しく話してくれないか
い？」

最年長の青年——城戸丈は大輔たち6人を見渡した。大輔たちは
頷き、昨日の出来事を話し始めた。デジタルワールドで出逢った慶
悟たち5人のこと。凶暴化し、襲ってきたティラノモンのこと。そ
して、そのティラノモンたちから出てきた黒い歯車のことを。

太一たちは一通り話を聞いた後もしばらく黙っていた。その表
情は誰もが苦渋に満ちていた。

「……黒い歯車、か……」

苦々しく呟く太一にヒカリは顔を顰めた。

「その黒い歯車ってなんなの？ タケルくんから昔の敵が使ってたって聞いたけど……アタシ、そんな話し聞いたことないわよ？」

「まあ、話したことなかったからな……」

そう言うと口を噤んでしまう太一。ヤマトたちも口を重くし、誰も何も言わない。そんな先輩たちの姿に大輔たちは少なからず苛立ちを覚えた。

「……黒い歯車はボクたちがデジタルワールドに行った最初の敵……デビモンが使っていたものだよ」

重苦しい空気の中、口を開いたのはタケルだった。

「タケル……」

「昨日パタモンも言ってたけど、黒い歯車がデジモンの身体に刺さったり、体内に入ったりするとそのデジモンは凶暴化してしまうんだ。元に戻すには黒い歯車を取り除き、破壊するしかない」

タケルはヤマトの心配するような、咎めるような呼び声を無視してそう続けた。それを太一たち、そして伊織は気遣うように見ている。

「……デビモン……」

賢が何か引っかけたように顔を顰める。それを見た大輔は首を傾げた。

「どうかしたか？」

「う、うん……どこかで聞いたことあるような気がして……」

「あるに決まってんじゃん」

「パタモンっ」

呟くパタモンをタケルが咎めた。だが、しっかりと聞こえていた賢はタケルたちを見ている。その視線を感じたタケルは諦めたように口を開いた。

「デビモンの闇の力は……大輔君たちも目の当たりにしたことあるはずだよ」

「どうということ？」

「……キメラモンですね」

先程からパソコンに向き合いながら話に耳を傾けていた光子郎が跡を引き継いだ。その言葉に賢が少し怯んだのが分かったが、何も言わずに続けた。

「キメラモンにはデビモンをデータが使われていました。確か、キメラモンが持つ闇の力もデビモンのデータから使われたもののはずです」

「キメラモン……アイツの……」

大輔たちが思い出すのは街やデジモンをなぎ倒してった凶悪な合成魔獣だった。それに少なからず震えが起こった。

「あんなデジモンが……」

「まあ、黒い歯車が現れたからってデジモンに直結するのは早計な気はしますが」

「確かに。デビモンが倒された後もデジモンを凶暴化させる能力は残ってたし」

「だけど、以前のが残っていたとは考え難いわ」

子供たちがそれぞれに考えを巡らす、答えは見つからない。見えない敵に不安ばかりが募る。

「押し問答しててもしかたないな。黒い歯車のことはゴマモンたちも調べてくれてるんだ。今は任せよう」

「そうですね。ボクたちが優先すべきは、新しいD-3を持っているという子たちですが……」

「色が違うD-3か」

これもこれで、難しい問題だった。少しずつパートナーデジモンを持つ人々が増えてきたが、その全てが大輔たち6人と同じ色のD-3であり、またゲートを開く機能はなかった。だが、慶悟たちは極普通にデジタルワールドと現実世界を行き来し、みんなが違う色のD-3を所持しているのだ。

「……新しい選ばれし子供と考えるのが一番だよな」

「じゃあ、オレたちは用無しってことっすか!？」

「いや、誰もそこまで言っただけでいい」

熱血漢コンビのくだらないやりとりを横目に光子郎はキーボードを打ちながら渋い顔をした。

「どうかしましたか？ 泉先輩」

「……ゲンナイさんと連絡が取れません」

「なんだと？」

パソコンにはメール送信がエラーになって映し出されている。

「いつからだ？」

「どうでしょう。最近はまだメールを出していませんでした……。アーマゲモンの件の後に一度だけメールを送ったくらいです。パートナーデジモンが増えてからゲンナイさんもお忙しそうにしていたので」

「……ガブモンたちに様子見に行ってもらったか」

「そうでしょう」

光子郎とヤマトがガブモンたちに連絡するのを京は不安げに見ていた。その様子を遠巻きに見ていたタケルたちの横で丈はそっと呟

いた。

「だけど、新しい子たちがタケルくんの知り合いってというのは不幸中の幸いだね」

「そうですね。全く知らない子よりは話もし易いだろうしね」

空も同意してタケルの顔を覗き込む。

「天音くん……だっけ？ その子たちとまた会うの？」

「はい。今度の日曜日に」

「日曜か……」

空は渋い顔をして呟いた。隣で丈も同様な顔をしていた。

「ちょうど、テニスの試合あるのよねえ」

「ボクもテスト前で塾に行かないと……」

「じゃあ、オレが行くぜ」

「ああ。オレも」

悩む空と丈に太一とヤマトが言う。だが、それを聞いてヒカリとタケルが顔色を変えた。

「「お兄ちゃん（兄さん）はダメ！」」

「何でだよ!?」

兄コンビはそれぞれの妹弟に詰め寄られた。

「お兄ちゃん、この前の三者面談の時にこのままじゃ進学は難しいって言われてたじゃない！テストもうすぐなんですよ？勉強しなきゃ」

「い、いや……ヒカリ。今は緊急事態……」

「お兄ちゃんにとっては死活問題よ。絶対にダメ」

太一がヒカリから説教を受けている隣で渋い顔をしたヤマトもタケルから説得を受けていた。

「兄さん、次の休みはライブの準備だと言っていたじゃない」

「だがなあ」

「ライブ……最後なんでしょう？バンドのメンバーに迷惑かけちゃダメだよ」

中学3年になったヤマトは受験の為、バンドからの脱退を決めていた。その話を聞いていたタケルは中学校3年間の思い出であるバンド活動に心残りをしてほしくなかった。

「では、ボクが一緒に行きますよ。特に急ぎ用ありませんし。彼らが持っているD-3が大輔くんたちが持っているのと同じか気になりますしね」

そう言いながら光子郎はパソコンの電源を落とした。その言葉を聴き、太一とヤマトも渋々納得した。

「しょうがねえ……今日はとりあえず帰るか。みんなも時間がある時はデジタルワールドに行くようにはしようぜ」

太一たち前任者たちは中学高校と忙しい学校生活を送っている為、あまりデジタルワールドに顔を出せない。無理はできないが、デジタルワールドのことは気になるので、太一の言葉に賛成した。

外も暗くなり始め、今日は解散することになった。タケルはみんなに続き、パソコン室から出ようとするがヤマトに呼び止められる。

「……タケル」

「うん？ 何？」

「あー……その……今日、家で飯食っていかねえか？」

頭を掻きながら言葉を選ぶように言うヤマトにタケルは目を細めた。

「ごめん。今日、母さん帰り早いんだ。ご飯準備しておかないと」

「そうか……ならいいんだが………あんま、無理すんなよ」

「……うん」

そう笑って言うタケルにヤマトは何も言えなくなる。タケルが帰っていく後ろ姿を見て、ヤマトは深く息を吐いた。

「……………無理してますね」

「光子郎にもそう見えるか？」

「ええ。……まあ、仕方ないとは思いますが」

「……………光子郎……………日曜日は頼むな」

ヤマトの声が切実で光子郎は頷くしかなかった。

日曜日。

大輔たちは光子郎宅に集まり、デジタルワールドへ向かった。先日と同じエリアに行くと言った慶悟たちはすでに到着していた。

「あ、来た来た！　おーい！！」

凜華が腕を振って待っていた。大きな樹の下に入って陽射しを凌いでいる。

「おはよう、みんな。……………そちらの方は？」

「泉光子郎さん。僕らと同じ4年前の選ばれし子供の一人だよ」

「はじめまして。泉光子郎と言います。よろしく」

光子郎は一人一人握手をし、天音たちも名乗りながら応える。一通り挨拶を済ませると、子供たちは大樹の下に身を寄せ、腰を下ろした。

「まずはみなさんに話しておかなければならないことがあります」

慶悟たちは光子郎からこれまでの冒険について聞かされた。黒い歯車のこと、デビモンのことは勿論、4年前から去年までの概要を簡単に。そして自分たちが新しい選ばれし子供かもしれないということ。

「選ばれし子供はデジタルワールドが危機に瀕した時にデジタルワールドの意思で決められます。ボクたちがそうであったように君たちにもこの世界を守る使命が与えられたんです」

「……なんか、途方もない話だなあ」

慶悟たちは光子郎の話を黙って聞いていたが、いまいち実感が湧かないようだった。今回は今までのように目に見えた敵がまだ現れていないし、生命の危機に迫られているわけでもない。実感がないのは仕方がないだろう。

「勿論、ボクたちも一緒に戦うつもりだよ。だけど、きっとキミたちの力も必要なんだ」

「ええ。ですが、無理強いはできません。危険が伴うのも事実です。それを承知で、キミたちの力を貸して欲しいんです」

タケルと光子郎の真剣な声色に慶悟たちは黙り込んでいた。それ

それに思うところもあるようだった。

「……………戦うってことは……………誰かを傷付けるって……………ことですか？」

「……………そういうことになりますね。勿論、自分たちや……………パートナーたちが傷付くこともあります」

不安げに聞く鳴に光子郎ははっきりと答えた。曖昧に答えてはいけない質問だったからだ。それを聞いて鳴はますます不安げな顔をしている。

「……………逆に……………オレたちが戦わないことによって傷付き、奪われる生命があるってことだよな」

自分に言い聞かせるように薫は言った。その言葉に慶悟たちはさらに渋い顔をする。

あまりに唐突な話で、難しい問題である。そして悠長に構えてもいられない。慶悟は終始、眉間に皺を寄せて話を聞いていた。天音は樹の幹に背を預け、下を向く。凜華は樹に登り、枝に座った状態で脚を揺らしていた。鳴はラブラモンを膝に乗せ、頭を撫でながら目を合わせようとしない。薫はまっすぐと光子郎たちを見て、話に耳を傾ける。

「今すぐ答えを決めて欲しいわけではありません。難しい問題です。じっくり……………とは言えませんが、考える時間はあります。キミたちには後悔しないように答えを決めてください」

光子郎の言葉に誰も返事はしなかった。光子郎は困ったようにタケルたちの目を向ける。タケルは首を静かに横に振り、大輔は肩を

竦めた。他の子供たちも困ったように顔を見合わせる。

「光子郎はーんっ!!」

「おーい！ タケルー!!」

嫌な沈黙を破ったのは遠くから駆けてくる2匹のデジモンだった。
赤い天道虫——テントモンと毛皮を被った爬虫類——ガブモンだ。

「テントモン！ どうしました？」

「大変でっせ!!」

「ゲンナイの家が……っ」

慌てた様子の2人に子供たちは不安を募らせた。

テントモンたちからゲンナイ宅の現状を聞いた大輔たちは急いで現場に向かった。進化ができない慶悟たち5人と飛行能力を持たない伊織はそれぞれ、伊織はエクスブイモンに、慶悟と天音はカブテリモン、凜華はアクイラモン、鳴はネフェルティモン、薫はペガサモンに乘せて貰っていた。数エリア離れた場所にあるゲンナイ宅が見えてくると、子供たちは息を呑んだ。

「これはっ！？」

空から見るわらぶき屋根は黒く焼け焦げ、見るも無残になっていた。端々から細い煙が立ち上っている。

「オレたちが着いた時にはもうこんな状態だったんだ」

ステイングモンにらせてもらっていたガブモンは悔しそうに言う。
襲われたばかりのようで、もう少し早ければという思いが高まる。

「ゲンナイさんは？」

「分かりまへん。無事かどうかも」

カブテリモンも苦虫を噛んだように言う。

「……とりあえず、降りてみようぜ」

「そうですね。ここでこうしていても仕方ありませんし」

大輔の提案に現在の最年長である光子郎が了承する。デジモンたちは次々に地面へと降り立った。

降りた先には焦げ臭い匂いが漂っていた。子供たちはみんな顔を歪めながら辺りを見渡す。壁は崩れ、庭は荒らされ、いまだ消えない火種が残っている。見慣れない悲惨さに慶悟たちは言葉を無くし、呆然と立ち尽くした。

「人の気配はありませんね。ゲンナイさんはどこに……」

「無事でいてくれるといいんですが……」

「大丈夫だって、ヒカリちゃん！ゲンナイさんなら絶対無事だ！！」

ヒカリが心配そうに呟くと大輔が大袈裟なくらいに励ました。それを聞いてヒカリはそっと微笑む。

「……そうよね。アタシたちが弱気になっちゃダメね。……ありがとう、大輔くん」

「おう！／＼／」

現状に似合わず、緩んだ笑みを見せる大輔に京と伊織、光子郎は呆れ顔になる。タケルと賢は顔を見合わせ、苦笑している。天音と薫、鳴は何かを理解したように納得している。慶悟と凜華は訳が分からず、クエッションマークを浮かべていた。

そんな様子を見ていたペガスモンは掠めた殺気に反射的に動いていた。

「……………サンダーオブキング！！」

「シューティングスター！」

巻き上がる砂埃の中、這うように向かって来ていた雷は崩れた廃材の下敷きになっていた。流れ星に因って地面に広がった廃材は電気を運び、強力な静電気を放っている。一瞬の出来事に立ち竦む慶悟たちを庇うように大輔たちは攻撃が放たれた方へ構えた。その表情は先程と打って変わって真剣そのものだ。

砂煙が切り裂かれ、黄金のライオンが姿を現した。その瞳は敵意に満ち、今にも襲い掛かってきそうな勢いだ。

「ここを襲ったのはデメエか!？」

「見たことないデジモンですね」

「あれはライアモンだ」

意気込む大輔を尻目に伊織は冷静に呟く。その疑問にガブモンが答えた。

「レオモンの同属で珍しいデジモンだよ。寧猛で好戦的な性格だから気を付けて！」

ガブモンの言葉を聞いて身を引き締めるデジモンたちだったが、ライアモンは睨み付けるだけで一向に動こうとしない。その時、ふとライアモンは視線を逸らした。

「……！」

その視線の先に目を向けると、荒々しい咆哮と共に廃屋の壁が吹き飛んだ。デジモンたちはパートナーたちを守るように飛び交う破片を身体で遮る。砂埃の中に巨大な影の群れが現れる。

「な、なんだ!？」

「あれは……モノクロモンだっ!！」

煙が晴れて姿を現したのは鎧竜デジモンだった。その瞳は狂気に満ち、正気の沙汰ではない。そしてその身体には黒い物体が突き刺さっていた。

「あれはっ」

「黒い歯車!?!」

闇色の歯車で凶暴化したモノクロモンたちは我を忘れたように暴れ、廃屋が破壊されていく。それを見ていた成熟期たちは飛び出していった。アルマジモンもアンキロモンに進化し、参戦していく。

「みなさん、黒い歯車を狙ってください! うまくいけば破壊できます」

「……で、言われても……数がつ」

十数体はいるであろうモノクロモンの群れは手加減などなしで攻撃してくる。一方、エクスブイモンたちはなるべくモノクロモンを傷付けないように、刺さっている黒い歯車だけを狙っていた。圧倒的に不利な状況だ。

「メガブラスター!!」

「ニードルレイン!!」

「ナイルジュエリー!」

「ブラストレーザー!!」

「スパイキングフィニッシュ!」

「テイルハンマー!」

「エクスレイザー!!」

黒い歯車を狙って攻撃を繰り返すが破壊までには至らない。ライアモンが1体のモノクロモンの背後に回っていた。

「クリティカルストライク!」

確実に黒い歯車を狙い、牙で裂いた。正気を取り戻したモノクロモンは異常な仲間の様子にそそくさと逃げ出した。ライアモンは1体ずつ、素早く確実に黒い歯車を破壊していく。だが、数は一向に減らなかった。

モノクロモンは口を開き、火炎の弾を生み出す。

「ヴォルケーノストライク」

「うわあっ!!」

「く……っ」

モノクロモンの火炎弾を喰らい、エクスブイモンたちは傷付いていく。それを見て慶悟は拳を強く握った。

「くそっ、俺たちは何もできないのかよっ」

「オレたちも進化できれば……」

リュウダモンたちも悔しそうに歯を食いしばった。ファンビーモンたちも同じように悔しそうな顔をしている。

「戦えば……こんな風に傷付くんだ」

天音は複雑そうに呟いた。

「だけど、戦わないと無意味に傷付く人やデジモンが出る」

薫ははっきりと述べる。

「……操られたデジモンも傷付き、苦しんでいます」

鳴は目の前で繰り広げられる戦いを受け入れるように言う。

「そないなデジモンが増えていくかもしれへん」

凜華は苦しむモノクロモンを見て苦々しく呟いた。

「……確かに、戦うことは辛いわ。自分も傷付くし、誰かを傷付ける」

ヒカリはそう悟らせるように告げる。

「道を誤まり、大切なものを失うこともある」

賢は昔の自分を思い出し、そつと呟いた。

「だけど、得たものも沢山あるのよ!」

京は笑顔でそう言った。

「生命の大切さ、絆の強さ、仲間との繋がり……。それがボクたちの力になる」

タケルは駆け巡る想いを押し留めて静かに呟く。

「辛いこと、悲しいこと、怒りが込み上げてくることもあります」

伊織はしっかりと見据える。

「ですが、それを乗り越えた時、本当の意味で成長したと思えるんです」

光子郎は戦うデジモンたちを見て、そう述べた。

「デジモンと出逢えて本っ当に良かったー！ってそう思えるんだ！」

大輔は一人一人の顔を見ながら叫んだ。

慶悟たちは先代たちの言葉を噛み締める。そして目を配らせ、頷き合った。

「……リュウダモン」

「ファンビーマン！」

「クダモン」

「ラブラモン……」

「ヒョコモン……」

呼ばれたデジモンたちは小さい身体でモノクロモンたちの前に立

ちはだかる。

「倒せなくても隙を作るくらいならできるだろ?」

「ボクたちにも戦わせてください」

「覚悟はとつくに決まってるだよ」

「……足手まといにはなりません」

「みんなはあの歯車どうにかしよってな!」

それを合図にリュウダモンたちは飛び出していく。

「居合刃いあいじん!!」

「ギアステインガー!!」

「絶光衝ぜつこうしゅう!!」

「レトリバーク!!」

「からたけわり!!」

リュウダモンたちの攻撃はモノクロモンの硬い鎧を傷付けることはなかった。だが、怯ませることに成功した。エクスブイモンたちはその隙を見逃さなかった。

「エクスレイザー!!」

「スパイキングフィニッシュー!!」

「グライドホーン!!」

「カースオブクイーン!!」

「メガトンプレス!!」

「シルバーブレイス!!」

「メガブラスター!!」

「サンダーオブキング!!」

エクスブイモンたちの攻撃は今度は黒い歯車を破壊した。黒い歯車から解放されたモノクロモンたちは穏やかにその場から去って行った。

「や、やったあー!」

慶悟たちは駆け寄ってくるパートナーたちを抱きかかえた。それぞれにパートナーを褒め称えている慶悟たちには大輔たちは笑顔を見せた。ライアモンはその姿を離れた所で眺めていた。その時、子供たちの背後で草むらがざわめき立つ。飛び出してきた小さな影はタケルの足元にぶつかり転がった。

「えっ、わっ、何?」

「……!」

驚いたタケルが目線を向けると剣道に使う面のようなものを被ったデジモンが尻餅をつき、固まっている。面をしている為、表情は分からないが、驚いているのか、あるいは怯えているんだろ。タケルは怖がらせないように屈み、目線を合わせた。

「ごめんね？ 大丈夫だった？」

面のデジモンはおずおずと身を縮め、僅かに頷いた。タケルは「恥ずかしがり屋なのかな？」と思い、小さく笑う。すると突然、面のデジモンが顔を上げた。それと同時にタケルはデジモンを抱えて、横に飛び退いていた。

「タケルっ！？」

ペガスモンの焦った声とけたたましい声が響く。先程タケルと面のデジモンがいた所では額から2本の角を生やしたデジモンが興奮したように唸っている。

「と、トリケラモンっ」

トリケラモンはタケルたちを見据えると、そのまま突っ込んでくる。ほとんど距離がなく、逃げられない。タケルは抱えていたデジモンを庇うように身を寄せた。それを見たペガスモンが駆け寄るも早く、動いた影があった。

「トライホーンアタックっ！！」

「クリティカルストライク！」

硬質な角がタケルたちを貫く寸前、ライアモンはトリケラモンの

鼻先の角を牙で取り押さえた。その隙を突いて、ペガスモンとアンキロモンがトリケラモンの脇腹に体当たりをして跳ね飛ばす。

「タケル……っ 大丈夫!？」

「う、うん」

トリケラモンから離されたタケルは胸を撫で下ろした。仲間たちが次々と駆け寄り、声を掛ける。タケルはそれに答えながら、ライアモンに目を向けた。ライアモンもタケルを見ていたようで目が合った。

「……ありがとう」

その声を掛けるが、ライアモンはそっぽを向き、倒れているトリケラモンの方を見据えた。タケルは腕に抱えていたデジモンを地面に降ろし、怪我がないか見る。

「大丈夫だった？ ここは危ないから離れてて」

面のデジモンは頷き、森の中へ消えてった。そんなことをしている内にトリケラモンは立ち上がって向かって来る体勢を整えている。

「まずいですね…… トリケラモンは完全体です。カプテリモンたちも先程の戦いでだいぶ消耗してますし」

「それに黒い歯車が見当たりません」

「体内に取り込まれたのかも」

「じゃあ、この間みたいにデジヴァイスで？」

「いえ。あれほど興奮していると近付くのは危険だと思いますよ。デジモンにある程度ダメージを与えても出てきますので、そうした方が得策でしょう。カプテリモン！ 疲れているでしょうが、お願いしますっ」

「任せておくんなはれっ！！」

そう言っただけでデジモンたちは飛び出していく。トリケラモンも巨体を突っ込ませてきた。

「トライホーンアタック！！」

鋭い3本に角を突き出し、迫ってくるトリケラモンにエクスブイモンとアンキロモン、カプテリモンは取り押さえるように掴みかかった。他のデジモンたちは背後に回り、攻撃を加える。

「シルバーブレイス！！」

「ロゼッタストーン！！」

「ブラストレーザー！！」

「スパイキングフィニッシュ！！」

咆哮と共に倒れるトリケラモンから黒い歯車が出てくる。それらは宙に飛び上がり、散らばろうとしていた。

「いけない！ 歯車を壊さないっ」

カブテリモンが飛び上がった時、空高く跳び上がったライアモンがタテガミから電撃を放つ。

「サンダーオブキングー！」

雷は黒い齒車を捉え、粉々に砕けた。ライアモンはそのまま離れた場所に着地し、子供たちを見下ろした。何か言いたそうな雰囲気だったが、振り返りそのまま去っていった。

「……なんだったんだ、アイツ」

大輔は納得しきれないような口ぶりだった。ゲンナイ宅を襲ったのはおそらくモノクロモンとトリケラモンだろう。では、ライアモンは何故この場所にいたのか。それは誰にも分からなかった。エクスブイモンたちはさすがに疲れたのか、成長期に戻っていた。ブイモンは大輔にへばり付き、「腹減ったー！」と騒いでいる。

「ゲンナイさんの行方は分かりませんが、一度戻った方がいいかもしれませんね。テントモンたちは引き続き黒い齒車の出所とゲンナイさんの搜索をお願いします」

「了解や」

「アグモンたちのも伝えておくよ」

そう言うとテントモンとガブモンは早速、去っていった。それを見送ると光子郎は起き出したトリケラモンに目を向けた。先程とは違い穏やかな瞳だったが、草陰を見て、小さく唸っている。

「……………まさかつ」

光子郎が草むらを見たのとその草むらが大きくざわめきを立てたのは同時だった。飛び出してきた黒い歯車に冒せれたトリケラモンは待ち構えていたトリケラモンにぶつかり、押し倒した。そしてそのまま子供たちの方に向かってきた。

「もう1体いたのかよ!？」

「間に合わない……………」

相次いだ戦いにデジモンたちの消耗は激しく、進化できるデジモンはいなかった。「やられる!」誰もがそう思った時だった。

「ピコダーツ!」

数本の注射器がトリケラモンに向かって飛んでいった。トリケラモンは足を止め、その注射器を撥ね飛ばした。その隙に仲間のトリケラモンが凶暴化したトリケラモンにぶつかっていった。その時、偶然にもトリケラモンの角が黒い歯車を貫いた。トリケラモンは正気を取り戻し、仲間と共に森へと消えていった。

「……………大丈夫だった?」

トリケラモンが去った後、姿を見せた少年に大輔、タケル、ヒカリは目を見開いた。

「法月くん!？」

漆黒の髪を揺らして、紅い瞳を向ける少年は確かに先日、大輔た

ちのクラスに転校してきた法月奏だった。傍らには小悪魔型のデジモンピコデビモンが飛んでいた。

「今のはキミが……？」

「うん。何か危なそうだったから……。余計なお世話だったかな？」

「そんなことないわ。ありがとう！」

「ううん。無事なら良かった」

訝しそうにしているタケルと素直に感謝を表すヒカリ。奏は照れたように笑いながら、言った。

「知り合い？」

「クラスの転校生で、名前は……えっと……」

「法月奏です。こっちはパートナーのピコデビモン」

「よろしくっ」

大輔たちも自己紹介を済ませる。光子郎は奏に声を掛けた。

「申し訳ないんですが、デジヴァイスを見せてくれませんか？」

「……いいですよ」

そう言って取り出したD-3に大輔たちは息の呑んだ。それは紫色のD-3だった。しかし、薫が持つものと少し色が違う。薫が夜

の水面のような青紫なら、奏はワインレッド…赤紫だ。

「じゃあ、コイツも……」

「新しい選ばれし子供のようですね」

もう1人の新しい子供の登場にみんな興奮冷めやらぬようだった。そんな様子に奏は困ったような顔をしながら光子郎たちの説明を受けている。慶悟たちも新しい仲間が嬉しいらしく、喜んで説明に加わっていた。

その後姿をパタモンは離れた所で見ていた。それに気が付いたタケルは訝しそうに近付く。

「どうしたの、パタモン？」

「……うん。何でもないよ！」

笑顔で言うもパタモンは近付こうとしない。そんな様子にますます怪訝に思う。

「行かないの？」

「……うん……嫌なの……アイツ……」

パタモンはそう言ってピコデビモンを見ている。だが、それ以上は何も聞いても答えてはくれなかった。困ったようにタケルは奏に目を向けた。その視線に気が付いたように、一瞬だけ目が合ったような気がした。

「……っ」

その瞳は冷たく自分を捉えていた。タケルはそんな錯覚に陥った。不安な気持ちを隠すようにタケルは空を見上げた。雲は形を急速に変えながら流れていた。

強い風が吹く、山の頂で青年は目を瞑り、物思いに耽っていた。その背後からバタバタと足音が聞こえてくる。ゆっくりと目を開けると面を被ったデジモンが背中に飛び付いてきた。そのデジモンの頭を撫でながら、後ろに立つ若いライオンのようなデジモンに目を向ける。

「……………おかえり。どうだった？」

ライオンは首を振って応える。青年は「そうか……………」と呟き、再び空を見上げた。風を嫌うように空を睨みつけた。

第二話 敵か味方か ピコデビモン登場（後書き）

《予想の設定？》

大輔やヒカリたちはデビモンの話は聞いていませんでした。

太一たちがタケルを気にして、本人がいる前では避けていたと思います。

デビモンの名前を聞いただけでも顔色変えそうですしね、タケルくん。

『お台場メモリアル』での昔の話もパートナーとの出逢いと進化した時のことを簡単に話して、後は大陸に渡った先からの話を重点的に語っていたのではないかなあ、と。私の勝手な考察ですが。

第三話 友の為に！ ギンリュウモン正義の鉄鎚

ゲンナイが襲われて姿を消した。慶悟たちは戦う決意を固めるが、不意を突かれ危機に陥る。そこに現れたのは転校生の奏だった。奏もまた新しい選ばれし子供だったのだ。喜ぶ大輔たちだったが、タケルは違和感を覚えるのだった。

そして、別の場所でも動き出す者があつた……。

【第三話 友の為に！ ギンリュウモン正義の鉄鎚】

奏が新しい選ばれし子供だと分かり、学校でも一緒にいることが増えていた。

授業を終えた大輔たち6年生組みの4人はコンピュータ室で伊織が来るのを待っていた。伊織は掃除当番の為、少し遅れると連絡が入っていた。真面目な伊織のことなので細かいところまでやっているのだろう。もう少し時間がかかりそうだ。

大輔はサッカーボールをチビモンに投げ、チビモンはそのボールをヘッドで返している。ヒカリはテイルモンとファッション雑誌を読んでいた。タケルはノートを出して何かを書いている。それをパタモンがニコニコしながら見ていた。奏は静かに本を読んで、ピコデビモンの幼年期であるパグモンは側で居眠りしていた。ウパモン

もタケルの側で眠っている。そこにバタバタと駆けてくる音が聞こえた。扉のほうに目を向けると、ガラリと開き、伊織が息を切らせて入ってきた。

「す、すみませんっ」

「わざわざ走って来なくても良かったのに」

走って来たらしい伊織は苦しそうに息を吐いている。タケルはノートを仕舞いながら声を掛けた。だが、伊織は言い辛そうに言い淀んでしまった。それを見て、大輔は眉を顰めた。

「なんだよ」

「は、はい……実は先程お母さんから連絡があつたんです。それで今日、急に親戚の方が来ることになったらしくて……その……」

「帰ってこいって言われたんだ？」

「はい。メールを見たのが掃除が終わってからだったもので……。すみません、お待たせしたうえに行けなくなつたなんて……」

「はあ。しょうがねえなあ。じゃ、オレたちだけで行くか」

伊織は何度も頭を下げている。気にしないように告げると、もう一度頭を下げてから帰路に着いた。大輔たちはD-3を取り出し、パソコンの前に掲げた。

「デジタルゲートオープン！ 選ばれし子供たち出動っ……！」

卒業した京に代わり、今は大輔がゲートを開く役割を果たしている。大輔の口上で開いたゲートを潜っていった。

ゲートを潜った先で待っていたのは鬱蒼なジャングルと3人の少年だった。その1人が大輔たちに気づき、片眉を顰めた。

「なんだ。そっちも出席率悪いな」

薫は嫌味っぽく言い放った。それを聞いて大輔は肩を竦めた。

「伊織は家の用事、京はテストで、賢は委員会が長引きそうなんだと。……で、そっちは？」

「……………凜華はスーパーの特売だ」

「は？」

「家の事情だと思ってくれ」

「鳴ちゃんは？」

「野暮用」

それを聞いてみんながそれぞれにため息を吐く。

「……なんか、危機感湧かないよね」

天音の言葉に賛同せざるおえなかった。太ーたちもテストなどでほとんど来ていない。他の子供たちも部活や家の事情などでデジタルワールドに來れない日があった。おまけに一日中デジタルワールドを見回っても黒い齒車に冒されたデジモンに遇うのは稀だ。根源も分からず、今日も今日で長閑なものだった。

「大陸だと広いからなあ。ファイル島みたいに島だったらまだ探しようもあるんだけど……」

タケルが愚痴ったのを聞いて天音は興味津々な顔をする。

「ファイル島ってタケルくんたちが初めてデジモンと出逢った場所だよね？」

「うん。パタモンたちには故郷みたいな島だよ」

「うんっ！　そこでずっつとタケルが来るの待ってたんでよ」

そう言っつてパタモンはタケルの首元に纏わりつく。タケルも顔を寄せて頭を撫でる。そんな姿を見て薫は小さく笑った。

「ホント仲良いのな、お前ら」

「勿論。ね、パタモン」

「ねえ」

皮肉のつもりで言ったらしい薫はタケルの返答に苦笑した。それを見て大輔とヒカリも苦笑していた。奏だけはいまいち伝わらなかったようでキョトンとしていた。

「タケルはパタモンに甘いよ。もう少し自立させたらどうだ？」

「……言えてる」

「えゝっ、やだあゝ!!」

ティルモンとブイモンの言葉にパタモンが猛抗議をしている。今度はタケルが顔を引きつらせていた。

慶悟はそんな姿を後ろで見ていた。眉間に皺を寄せ、面白くなさそうな顔をしていた。リュウダモンはそんなパートナーの様子に首を傾げる。

「混ざらないのか？」

「……………気に入らない」

「……………なにが？」

そう言っただけで黙った慶悟の視線はタケルに注がれていた。隣では天音と薫が楽しそうに話している。リュウダモンはそれを見て納得したような顔をした。そして意地悪そうに笑った。

「分かった。…………天音と薫が仲良さそうにしてんのが気に食わないんだ？ 友達取られたようで悔しいのは分かるけど、お前の方が年上なんだからもう少し甘受性を身に着けるよ。大人気な…………——」

「勝手なこと言ってるじゃねえ!!」

慶悟に一喝されたリュウダモンは怖気づいて縮こまってしまった。慶悟の怒鳴り声で前を歩いていた天音と薫も振り返る。

「何やってんだ？」

「何でもねえ!!」

「何怒ってるの？」

怪訝そうな顔をする2人を無視し、慶悟はさっさと進んでいく。リュウダモンも慌てて後を追いかける。

「待つて下さい。あんまり離れると危な……」

「うるせえな!!」

タケルが声を掛けるとますます苛立ったように声を荒げた。タケルも思わずしり込みしてしまった。それを見て薫は顔色を変える。

「おい、慶悟!! 今の言い方はないだろ!? タケルはお前のこと心配して……」

「それがウゼエって言ってんだよ! オレらより経験あるからって調子に乗りやがって!!」

「てめえ……っ」

「ち、ちよつと待てって!」

「そうよ！　喧嘩なんかしてる場合じゃあ……」

大輔とヒカリが止めに入るが、薫は怒りが収まらないようだった。慶悟はその様子を横目で見ると唇を噛み締めた。そしてそのまま走り去ってしまった。リュウダモンも後を追う。

「け、慶悟さん！？」

「ほつとけ、あんな奴っ」

慶悟を追うかどうか右往左往している奏に薫は冷たく言い放つ。大輔とヒカリも困ったように顔を見合わせたが、天音は2人の喧嘩は見慣れているようで呆れ顔になっている。

「……なんか、ボク嫌われてるみたいだね？」

「気にすんなよ。今のはあのバカが悪い。役に立たないのが悔しくて当たってるだけだろ。ホントにガキなんだから……」

ぶつぶつと文句を言っている薫を見て、奏は天音の腕を突っついた。

「薫さんって、実は短気？」

「実は、じゃなくてメチャクチャね。慶悟より喧嘩っ早いと思うよ？」

「温厚そうに見えるのにね」

「去年までは裏で河小のドンって呼ばれてたくらいだから……」

「え、マジ？」

大輔たちがそんなところ話をしているとは知らず、タケルは慶悟が去っていった方を見ていた。

「……やっぱり、追いかけましょう」

「ほつとけよ。今行つたつて、火に油だろ？」

「だけど、デジモンに襲われない確証はありません。慶悟さんが一人の時、黒い歯車に操られたデジモンが襲ってきたら危険です」

「ワタシも賛成だ。何かがあつてからでは遅いんだ。それに薫だつて言い過ぎたと思っているのだろう？」

そう諭すクダモンに薫は言葉を無くす。タケルの真摯な瞳とクダモンの責めるような視線に舌打ちをした。

「……分かつたよ……」

「んじゃ、行くか」

大輔は待つてましたと言わんばかりに駆け出した。タケルたちも急ぎ足で後を追う。薫はクダモンに促され、渋々追った。

慶悟は河辺に立ち、石を投げ付ける。石は河面で3回跳ねて沈んでいった。それを見て舌打ちをする。リュウダモンはそんな後姿に声を掛けた。

「なあ、慶悟。もう戻ろうぜ？」

「戻りたいなら勝手に戻ればいいだろ」

「あのなあ……」

それができたら苦労はしないのだ。慶悟は新しい石を探している。まだ戻るつもりはないらしい。リュウダモンはワザとらしく深々とため息を吐いた。それを聞いて慶悟は苦々しい顔を向ける。

「……なんだよ」

「いや、何がそんなに気に食わないのかと思ってさ。オレはタケルって良い奴だと思っぜ？ 明るいいし、真面目だけど気さくで。感じも良い奴じゃん。オレたちデジモンにも優しくしてくれるし」

「……………分かってる」

そう呟く慶悟の顔がひどく辛そうに歪んだように見えた。リュウダモンはその姿に不安が込み上げる。今までに見たことのない横顔だった。慶悟の足元まで近付きその顔を見上げる。慶悟はゆっくりしゃがみ、リュウダモンに顔を寄せる。そんなことをされたことがなかったリュウダモンはどうすればよいのか分からず、されるがま

まだった。

「……………リュウダモン……………オレな……………いき込んではいたけど、本当はすつげえ戦いたくないんだ」

それはリュウダモンにとって衝撃的な告白だった。ずっと戦えないことで悔やんでいるのだと思っていた。……………自分がそうであるように。

「……………それは……………どうしてだ？」

「オレはもう友達が傷付いて苦しむところなんてみたくない。もし、お前や薫たちがいなくなったら……………そう考えると怖いんだっ」

リュウダモンは悟った。自分と逢う前に慶悟は深い傷を負っている。それが何かは分からないが、その傷が戦いたくないと叫んでいるのだ。リュウダモンは慶悟に顔を寄せる。

「慶悟がイヤだって言うならオレは戦わないよ？……………だけど、前に薫が言ったこと覚えてるか？」

「……………戦わないことで傷付く奴もいる」

「そうだ。薫たちは戦うことを選んだ。タケルたちもだ。なら、オレたちが戦う戦わないに係わらず、オレたちの知らないところで傷付くことになるかもしれないんだぞ？」

「……………それは」

「オレはそんなのイヤだぜ。……………だけどオレが戦うことで慶悟が傷

付くっていうなら、それはもつとイヤだ。だから、待つよ。慶悟が戦っても大丈夫だって言うまで」

慶悟もリュウダモンもそれっきり黙ってしまった。辺りに河のせせらぎだけが響く。慶悟は顔を埋めたままだった為、どんな表情をしているのか分らない。それでも触れた身体から伝わる熱はとても温かかった。

いつまでもそうしていたい気分だったが、背筋を奔る悪寒にリュウダモンは身を引き締める。

「慶悟！ 何かいる……っ」

「何っ！？」

そう言った瞬間に慶悟はリュウダモンに引つ張られ、河岸のギリギリに立たされた。先程まで立っていた場所は抉れたように窪みできていた。慌てて辺りを見渡すが、気配はあっても姿が見えない。

「くそ……っ、どこだ！」

見えない敵にリュウダモンは焦りを見せる。リュウダモンの技は相手の懷に飛び込むからこそ威力をみせるものばかりだ。見えない敵は圧倒的に不利だった。

「リュウダモン！ お前の自慢の尻尾で水面を思いっきり叩け。いいか、思いっきりだぞ」

「お、おお！」

リュウダモンは慶悟の言われた通り、空高く跳び上がり、落下の

勢いで水面を叩きつけた。勢い良く水しぶきが起こり、辺りに雫が落ちていく。森の中に目を凝らしていた慶悟は一点を指差す。

「その樹だ！」

「居合刃^{いあいじん}!!」

すぐさま言われたところに駆け付け、リュウダモンは口を開き、鉄の刃と放った。その刃は樹の幹へ突き刺さり、その樹は苦しみだして慶悟たちの前に飛び出した。

「あれは……ウッドモンか!？」

「今の水しぶきで微妙に動いたからな。すぐに分かったぜ！」

ソフトボールをやっている慶悟は動体視力には自信があった。だが、リュウダモンは疑問を感じていた。

（最初の攻撃もコイツか？　なんか違う気もするが……）

咆哮を上げるウッドモンに我に返ったリュウダモン。ウッドモンの背中には黒い歯車が刺さっている。慶悟の方を見ると渋い顔をしていた。

「どうするんだ？　慶悟」

「どうするって言われてもなあ」

戦いたくはない。だけど、ここにいるのは自分たちだけだ。そう思った時、聞き慣れた声が聞こえた。

「ナツクルファイア!!」

背後から迫る炎の球がウッドモンの歯車を破壊する。次に現れた竜人デジモンに一瞬身構えるが、聞き覚えのある声がした。

「大丈夫か？」

「お前……ブイモンか？」

「ああ。今はアーマー進化してフレイドラモンだけだな」

そんなことを言っていると「慶悟ー!!」と叫びに近い声が聞こえてきた。大輔や薫が慶悟の姿を確認すると、慌てて駆け寄ってきた。

「大丈夫か!？」 さつきすごい音が聞こえたけど……。怪我は!？」

「あ、ああ……大丈夫だ」

「そか……あー、良かった」

「あんまり心配掛けないでよね」

薫が心底、天音は嫌味っぽくはあるが安心したように頬を緩ませる。慶悟はさっきの今だった為、少し気まずそうな顔をしていた。リュウダモンに助けを求めるように目を配るも、ニコニコと笑顔を返されただけだった。項垂れていると、タケルと目が合った。タケルは困ったように笑顔を見せている。

「……大丈夫でしたか？」

「……………ああ」

それ以上の会話が續かず、慶悟は顔を背けた。タケルはパタモンと顔を見合わせ困った顔をしている。大輔はフレイドラモンに近付き、無事を確認している。ヒカリと奏が倒れたウッドモンを介抱をしていた。倒れたウッドモンを起こそうと悪戦苦闘しているのを見かねて、天音と薫が側に寄る。タケルも手伝いに行こうとすると慶悟に呼び止められた。それぞれのパートナーが心配そうに顔を見合わせる。

「どうかしましたか？」

「……………さつきは」

慶悟が口を開こうとした瞬間、森の中から深紅の光線が放たれた。

「うわぁっ！！」「く……………っ」「きゃぁっ！！」

轟音を響かせ、河が噴きを上げた。大輔の吹き飛ばされそうな身体をフレイドラモンが支えている。砂煙が巻き起こり、視界を奪う。

「みんな、無事か！？」

一人離れていた大輔は仲間の無事を願うように叫んだ。視界が徐々に取り戻され、決めた大地が見えた。大輔は焦ったように辺りを見渡した。

「おい……………っ」

「……んなに、切羽詰んなくても大丈夫だって」

そう暢気な声が聞こえた。晴れた先に見えた薫たちの姿に大輔は思わず、嘔き出した。そこにはウッドモンに絡まっている4人の姿があった。ウッドモンを起こすのを手伝っていたヒカリと奏はウッドモンの腕に抱きかかえられ、近くまで来ていた薫と天音は吹き飛ばされた衝撃でウッドモンの側まで来た。ウッドモンは腕を伸ばし、薫と天音を引っ掛けていた。デジモンたちもパートナーにしがみ付き、辛うじて飛ばされていなかった。

「大丈夫か？」

「なんとか……」

「……ボクは大丈夫じゃない」

ウッドモンは2人を地面に降ろす。薫はほっとしたように息を吐き、天音はまだ目を回している。奏はウッドモンに礼を言っている。その時、ヒカリが辺りを見渡し顔色を変えた。

「……タケルさんと慶悟さんは？」

そう言われ、大輔たちは辺りを探すが見当たらない。

「どこにいったんだ？」

「……さっき、水が弾く音がしたけど、まさか……」

奏は不安そうな顔で河を見つめる。河の流れは穏やかだが、幅広

く、深さもあるように見えた。

「ヒカリ、D - 3でタケルたちの居場所が分からないか？」

「ま、待つて今っ……」

ヒカリは慌ててD - 3を取り出した。だが、写し出された画面は『ERROR』の文字だった。

「どうしてっ」

「……ちくしょうっ！！ 何でだよ！？」

「落ち着けよ、2人とも。とりあえず河を下ってみよう。この速さなら落ちてたとしてもそんなには流されていないだろう」

薫の提案に大輔とヒカリも小さく頷く。攻撃をしてきた相手も分からず、仲間の安否も知れず、子供たちは不安ばかりが募るのだった。

真っ暗な闇の中、誰かを呼ぶ声が聞こえる。劈くような耳鳴りにその声が聞き取れない。

「……っ ……………っ ……………っ！！」

徐々に耳鳴りが収まり、声だけが鮮明になっていく。

「……い」……………ん！……………け……………さ……………っ」

滲んだ視界に光りが差し込む。金色の光りが見える。

「……ゆう……………？」

「慶悟さんっ！！」

慶悟の意識と視界がはつきりと開けた。そこには心配そうに覗いているタケルとリュウダモンの顔があった。慶悟の目が開いたのを見て、2人はほっとした顔をした。

「……ここは……………？」

「攻撃を受けて河に流されたんですよ。おまけに……………」

そう言っただけでタケルは自分の後ろに目を向けた。慶悟も視線の先を見たいと言いたことが分かった。轟々と鳴り響く音と激しく打ちつける水に慶悟は思わず苦笑した。

「……ここから落ちて、よく助かったな……………オレら」

「同感です」

滝つぼから見上げる河は激しく音を立てている。ここから叩きつけられてほぼ無傷というのは奇跡に近いだろう。

「……そついや、パタモンは？」

「辺りを見に行ってもらってます。まだ、敵がどこにいるか分からないからすぐに戻ってくるようには言ってるんですけど……」

そんなことを言っていると可愛い羽音が聞こえてきた。タケルの姿を見つけると、頭の上に乗った。

「おかえり。……どうだった？」

「大輔たちの姿は見当たらないよ。河も少し上ってみたけど、なんかいっぱい枝分かれしててどこから来たのか分かんない」

「マジかよ……どうする？ 慶悟」

「オレに聞くな」

そう言っ立とうとする慶悟にタケルは手を伸ばす。だが、慶悟はその手を取らずに立ち上がった。水分を吸った洋服は重たく、身体に纏わり付き気持ちが悪いが、それはタケルも同じようなので文句は言ってられない。

「とりあえず、移動するか？」

「そうですね。敵がどこにいるかも分かりませんし、じっとしていても仕方がないですから。大輔くんたちも探さない」と

「みんな無事だといいが……」

慶悟が先導して森の中に入っていく。その後ろを着いていくタケ

ルの足が一瞬止まったが、慶悟は気が付かなかった。

大輔は河原に腰を下ろし、手元にある石を落ち着きなく河に投げた。ヒカリはずっと渋い顔をしながらD-3をいじっている。天音と奏はじつと空を見ていた。薫は樹の幹に背中を預け、他の子供たちの行動を眺めていた。クダモンはその樹の上から注意深く辺りを警戒している。

その時、上空から虫の羽ばたきの音が聞こえてきた。

「ファンビーモン！」

天音はパートナーの姿を見つけるとほっとしたように片手を振った。ファンビーモンは天音の肩に止まり、一息ついた。

「どうだった？」

「ダメだよ。ここから先はどこも枝分かれになってる。どの河に流されたのか……」

それを聞いてみんな落胆を色を隠せなかった。大輔は二又に分かれた河を見て、ため息を零した。河を下った先にあつたのは2つに分かれた河だった。さらにその先も細かく分かれ、タケルと慶悟がどこに流されたのか分からなくなってしまった。

「……河って普通は大きい河に集まるもんなんだけどな……」

「ここはデジタルワールドだよ。僕らの常識で考えちゃダメだって」

薫が愚痴ると天音がすぐに反論した。子供たちがため息を吐いているとエクスブイモンとネフェルティモンも戻ってくる。そのすぐ後にピコデビモンも戻ったが、目ぼしい手がかりはなかった。

「まさか、2人とも川底に沈んでるなんてこと……」

「縁起でもないこと言うんじゃないか！！」

奏が涙目になりながら呟くと薫は我慢ならないように怒鳴った。それに縮こまってしまった奏を見て、薫はバツの悪そうな顔をする。

「う、ごめんなさい……」

「……いや、こっちこそ悪い」

お互いに気まずい雰囲気になってしまい、黙ってしまった。

「嫌な考えや苛立ちを覚えるのは分かるが、ワタシたちが諦めたらそこで終わりだ」

「そうだよ。パタモンたちはオレらより経験あるし、慶悟だって頼りになる奴だろ？ 大丈夫だって」

進化を解いたテイルモンとブイモンが励ますように言った。その言葉に薫と奏は小さく笑った。

「そうだな」

「……ブイモン、この河沿いに滝はなかったか？」

話に区切りがついたところでクダモンが話を振る。

「いや、オレは見なかったな」

「それならオレ見たぞ？」

そう言ってピコデビモンが先程まで見に行っていた方角を指す。
クダモンは薫の肩からみんなの顔を見渡す。

「滝の近くは流れが速い。もしかするとその力に引つ張られた可能性が高い」

「滝……」

クダモンの言葉に薫は息を呑んだ。奏はピコデビモンに顔を向けた。

「ピコデビモン、案内して」

「任せろっ」

ピコデビモンが空に飛び上がり、先導する。2人の無事を祈りながら大輔たちは後を追った。

慶悟とタケルは黙って森の中を歩いていった。それにリュウダモンは息苦しさを感じていた。慶悟はどうもタケルに苦手意識があるようにで全く振り返ることなくどんどん先に進んでいく。あまりに速く進んでいくのでタケルが付いて来れているのか心配になり、振り返った。その先で見たものにリュウダモンは顔色を変える。

「慶悟っ」

「……なんだよ」

リュウダモンは慶悟の言葉に返すことなく、来た道を戻っている。その先には樹の幹に手を付いて、蹲っているタケルの姿があった。慶悟も慌ててタケルに駆け寄った。

「大丈夫か？」

「……つつ、すみ、ません……」

見るとタケルは右の足首を押さえていた。顔には冷や汗を掻いている。慶悟はタケルの手を退かすと眉間に皺を寄せた。タケルの右足首は鬱血し、腫れ上がっていた。リュウダモンは思わず、苦渋の表情を見せた。

「うわぁ、痛そう」

「だ、大丈夫……」

「……なわけないだろ！　なんでこんなになるまで言わなかったんだ！？」

そう怒鳴りながら慶悟は頭のバンダナを外す。タケルの靴を脱がせ、足首をバンダナで固定していく。タケルはバツの悪そうな顔をしている。それを見て、慶悟も苦虫を嚙んだような顔をする。

「……言わせなかったのはオレか」

さつさと一人で進み、タケルの状態を把握することもしなかった。おまけに勝手に苛立って、話かけれる雰囲気ではなかっただろう。慶悟は自嘲的な笑みを見せる。その姿にタケルは何も言えなくなる。

「……これで痛みは抑えられると思うけど……どうだ？」

「あ、はい。さつきよりは。すみません……ありがとうございます」

タケルは礼を言って立ち上がろうとするが、慶悟にそれを制される。慶悟は座り直したタケルの隣に腰を下ろした。パタモンはタケルの膝に移って心配そうに顔を覗いている。リュウダモンも慶悟とタケルの間に入って心配そうにしていた。

「………悪かったな……いろいろと」

そっぽを向いていた慶悟は不意に呟いた。タケルは驚いて思わず慶悟を凝視した。そして、ふと頬を緩ます。

「ボクは嫌われてるんだと思ってました」

「……………苦手ではある」

「嫌われてないんだったらいいです。まだ、出逢って一月あまりですから、信頼されないのは仕方がないと思ってます。慶悟さんや天音くん、薫さん、鳴ちゃんに凜華ちゃん……あと法月くんも。まだ知らないことの方が多い。だから少しずつでも知りたいし、ボクのことも知ってほしい。理解し合えないのに仲間だなんて言えませんか。だから、嫌われてないなら知ってもらう機会はまだあります」

タケルはそれだけ言うと後は黙っていた。慶悟も特に何も言わない。だけど、さっきまでの刺々しい雰囲気ではなくなったことにパートナーたちはほっとした。しばらく黙っていた慶悟はすっと立ち上がり、タケルに目を向ける。

「そろそろ行くか」

「そうですね」

タケルは目の前に出された手を取って立ち上がった。その時、漆黒の矢が降り注いだ。

「何だ!？」

「パタモンっ!!」

「うんっ」

タケルのD-3が眩い輝きを放った。

「パタモン進化——エンジェモン」

エンジェモンはタケルたち抱え上げ、矢の雨から脱する。タケルたちを庇うように構えるエンジェモンは目を配らせ、拳に力を集中させる。

「ヘブンズナックル!!」

エンジェモンの聖なる拳が森に潜む闇を捉えた。だが、それはいとも簡単に弾き飛ばされた。

「……エクスプロージョンアイ」

「く……っ」

闇の中から放たれた光線はエンジェモンの身体を掠めた。だが、掠めただけでもエンジェモンにはかなりのダメージを受けていた。それを見て闇が可笑しそうに嗤う。そして闇が動いた。それは少しずつ形を成し、完全な姿になる。

「なんだよ……あいや……」

その姿に慶悟は思わず息を呑んだ。灰白色の身体に赤い翼を生やす。巨大な眼が一つこちらを見ている。その両手にも小さな眼があり、慶悟たちの姿を捉えていた。

「見たことないデジモン……エンジェモン知ってる？」

「……たぶんデスモンだ。ワタシも詳しくは知らないが、確か魔王型の究極体デジモンのはず」

「究極体……」

エンジエモンの言葉に身構える慶悟。タケルは半歩前に出て、デスモンを睨みつけた。

「さっき川辺でボクらを襲ったのはお前だな。……お前が今回の黒幕か？」

「ほう、気が付いていたのか。意外と聡い小童だな」

身体を這いずり回るような声に慶悟は背筋を凍らせた。黒い歯車に操られた生気の感じられない瞳もぞつとするが、デスモンの狂気で冷徹な眼は今まで見たことがなかった。

「目的はなんだ!？」

「貴様ごときが知ることではない」

「……なぜ黒い歯車を使えるんだ？」

「あれはもともと我が作ったものだからだ。使えるのは当然だろう?」

「……なるほど。じゃあ、4年前にそれをデビモンに使わせたのはお前なのか？」

異常な雰囲気の中でも平然としているタケルを見て、慶悟は自分だけ別次元にいるような気分になった。デスモンはタケルの言葉に僅かながら眼を細めた。

「……知らない」

「……………そう」

タケルはエンジェモンに目を配らせ、頷く。

「ヘブンズナックル!!」

エンジェモンの拳から聖なる光りが放たれる。その隙にタケルは慶悟の腕を引いて駆け出す。リュウダモンも慌てて追い掛ける。

「お、おい……っ」

「相手は究極体……ボクたちだけでは敵わない」

「え、エンジェモンは……?」

「時間稼ぎをしてもらってる。適当にあしらってから逃げるように言っている」

タケルは足が痛むのか、もしくはエンジェモンが心配しているのか、苦痛に満ちた顔で足を引きずっている。慶悟はタケルの手を離し、前を走り出した。リュウダモンは後ろを守るように付いて来る。徐々に辺りが拓けてくる。その時、太陽の光りが翳った。

「デスアロー!!」

「ぐわあっ!!」

「……………！ …… エンジェモン！？」

空から墜ちてきたエンジェモンは傷付き、ボロボロだった。タケルたちはエンジェモンに駆け寄る。

「すまない…………… タケル……………っ」

エンジェモンは力尽き、パタモンへと退化した。タケルはボロボロになったパタモンを抱きかかえ、腕に力を込めた。その時、エンジェモンを追ってきたデスモンが舞い降りる。

「…………… 貴様ら…………… ふざけた真似をしょって」

デスモンは無傷な身体でタケルたちに詰寄る。両腕を向け、その眼が大きく見開いた。

「デス…………… っっ？！」

放たれるはずの矢はいつまで経っても現れなかった。デスモンは突然苦しみ出した。タケルと慶悟は突然のことに呆然としていた。

「く…………… っ、やはりまだっ」

デスモンは宙に飛び上がり、タケルたちを見下ろした。

「貴様らの相手はコイツらだ！ ジュレイモン！！ ウッドモン！！」

そう叫ぶとデスモンは姿を消した。続いてジャングルの中から1

体のジュレイモンと数対のウッドモンが姿を現した。どのデジモンも黒い齒車によって操られている。

「どうしたっていうんだ？」

「分かりません。とりあえずの危機は去ったようですが……」

「この状況も十分危機だって!!」

リュウダモンの怒鳴り声にパタモンが力なくタケルの腕から飛び降りた。

「……タケリユ、アーマー進化させて」

「なっ!? そんな身体で何言ってるんだ!!」

「だけど、このままほっとくわけにはいかないよ。お願い、タケリユ!」

慶悟の制止を無視してパタモンは戦う体勢を整えていた。タケルはパタモンとジュレイモンたちを見比べて、D-3を握り締める。その瞳は迷ったように揺れていた。その姿を見て慶悟は奥歯を噛み締めた。

誰だって戦いたいわけではないのだ。大切な人たちに傷付いてほしくないのだ。大事な人を失いたくないのだ。だけど……だからこそ、戦わなければならない時があるんだ。

「タケリユ!!」

「……っ」

D・3を強く握り締めるタケルの腕を慶悟は抑えた。そしてリュウダモンはパタモンを掴んで後ろに放り投げた。タケルは慌ててパタモンを腕に収め、目の前にいる慶悟とリュウダモンを見た。

「……早速、覚悟決めなきゃなんねえみてえだな？ 慶悟」

「うるせえよ。こんな小さい奴が生命張って頑張ってるのにオレらが逃げるなんて格好悪い真似できるわけねえだろ」

「……いいんだな？」

「ああ。オレの仲間だ。これ以上、傷付けさせない！！」

そう叫ぶ慶悟の想いにD・3が輝きを放つ。その光りに包まれたリュウダモンは新しい姿を現す。

「リュウダモン進化——ギンリュウモン！！」

全身を和風の鎧で包まれた獣竜デジモンが姿を現す。慶悟はその姿を呆然と見つめた。

「……ギン……リュウモン？」

「進化したんだ！」

ギンリュウモンは慶悟を見つめている。慶悟は唇を引き締める。

「ちよっくら片付けて来るから、ここで待ってるよ」

慶悟はタケルにそう言い残すと、ギンリュウモンに跨った。それを確かめたギンリュウモンはジュレイモンに向き合った。

ジュレイモンは一番後ろに構え、ウツドモンたちが襲ってくる。ギンリュウモンは宙に飛び上がり、ウツドモンたちに向かっていく。ウツドモンたちは腕を振り上げて襲ってくる。

「ブランチドレイン!!」

「はじつは棒陣破!!」

ウツドモンの振り上げられた腕を受け流し、ギンリュウモンは反撃を加える。確実に黒い歯車を狙い、破壊していく。ウツドモンはあつという間に正気に戻っていく。そして残るはジュレイモンだけとなった。ジュレイモンは身体から霧もようなものを出している。

「慶悟さんっ、気をつけて! ジュレイモンの霧には幻覚を見せる能力を持っていますっ!!」

「分かった!! …… ギンリュウモン! 一気に決めるぞっ」

「おう!」

ギンリュウモンは一気にジュレイモンとの距離を縮める。

「チェリーボム!!」

「はあっ!」

飛んでくる木の実を鎧を纏った尾で払い除ける。そして、背後に回ったギンリュウモンは黒い歯車に向かって口を開いた。

「徹甲刃^{てっこうじん}つー!!」

口から放たれた鉄の槍に黒い齒車は碎け散った。

夕暮れのジャングルの中、大輔たちは慶悟たちを探していた。その途中、先頭のような跡が所々に見られた。

「タケルー!! 慶悟ー!!」

「ホント……どこに行っちゃったんだよ」

子供たちには疲労の色が見える。誰もが最悪の事態が頭に過っていた。

「お、いたいた! おーい!!」

突如、慶悟の声が響き渡る。驚いて辺りを見渡すが、姿が見えない。

「慶悟? どこだ!!」

「上だ上ー!!」

そう言われて空を見上げると、見たことのない鎧を纏った獣竜デジモンが浮いていた。テイルモンたちは思わず身構えるが、その背中から慶悟が顔を覗かせた。

「慶悟!？」

「ボクもいますよ」

慶悟の後ろからタケルも顔を出す。パタモンはタケルの頭の上で手を振っている。ギンリュウモンは大輔たちの前にゆっくり降りた。

「サンキュー、ギンリュウモン」

「け、慶悟……コイツは？」

「ギンリュウモンだ。リュウダモンが進化したんだ」

慶悟は地面に飛び降り、そう告げる。大輔たちが驚いていると、慶悟はタケルが降りるに手を貸している。

「……何か、仲良くなってないか？」

薫が怪訝そうに聞いた。その言葉に慶悟とタケルは顔を見合わせた。

「……まあな」

「あはは、そうですね」

慶悟はタケルの背中を叩いて、笑いあっていた。退化したリュウ

ダモンの上にパタモンがダイブして遊んでいる。そんな2人の様子に大輔たちは首を傾げていた。

深い深い闇の中。荒んだ屋敷の扉が開く。デスモンは閉じていた眼をギョロリと開いた。

「……………来たか」

「お待ちせ致しました」

数体のデジモンがデスモンの前に跪く。デスモンはそれらの姿を見て嗤い出す。

「もうすぐ……………もう……………すぐ……………」

深い深い闇の中。不気味な嗤いが響き渡る。

第四話 幸福を求めて シーサモンの想い

慶悟とタケルは仲間とはぐれた先で魔王デジモン・デスモンの襲撃に遭う。辛うじてデスモンを退いた2人だったが、黒い歯車に操られたデジモンに追い詰められる。傷付きながらも戦おうとするタケルたちを見て、慶悟は戦う覚悟を決める。その想いがリュウダモンをギンリュウモンに進化させるのだった。

【第四話 幸福を求めて シーサモンの想い】

大輔たちと奏は太一、光子郎と共にデジタルワールドの訪れていた。新しい選ばれし子供と会うため、そして新たな敵・デスモンの出現に合わせ、都合の付くメンバーで話し合いをするのが目的だった。待ち合わせの場所に着くと慶悟たち5人と賢、そしてアグモン、テントモンがすでに集まっていた。太一たちの到着を待ちかねていたようにアグモンが駆け寄ってくる。

「太一っ」

「よう、アグモン！ 久しぶり！！」

久しぶりの再会が嬉しいのか、太一の胸に飛び込むアゲモン。じやれ合っている2人を見ながら慶悟たちは近付いてくる。

「……あの人は？」

「アタシのお兄ちゃん。同じ選ばれし子供の1人なの」

「八神太一だ。よろしくな」

ヒカリが太一の腕を引っ張って慶悟たちの前に連れてくる。慶悟たちも名乗り、一通り自己紹介を済ませた。その後、太一は薫を借りて眺めている。光子郎は天音の許可を得て、パソコンにD-3を繋げている。

「ふうん、確かにヒカリたちのD-3と色は違うな」

「……そうですね。これといった違いも見当たりませんし、大輔くんたちと同じものといって良いでしょう」

太一は薫にD-3を返しながら光子郎の話に耳を傾けた。

「それは、世界中に増えているボクたちと同じ色のD-3とは違うってことですか？」

「いえ、今のところ大輔くんや京くんのご兄弟が持っているD-3との違いは明確にはなっていません。なぜ、大輔くんたちや慶悟くんたちのD-3はゲートが開けるのか。なぜ、ボクたちや他のD-3にはゲートが開けないのか……。そもそも、この世界とボクたちの世界はどのようにして行き来できているのか。……分からないことだらけです」

そう語る光子郎の瞳はいつも以上に輝いており、活き活きしているようだった。その様子を慶悟や奏たちはポカンとした顔で眺めている。太一や大輔らはやや苦笑いになっていた。

「……始まったな、光子郎の病気」

「さすが知識の紋章の持ち主。探究心が尽きないですね。ボクも見習わなくては……っ」

「はいはい！ アタシもお手伝いしますよ、泉先輩」

そんな光子郎の姿に刺激されてか、同じく知識の紋章を受け継いだ伊織とパソコンが得意な京も手伝いを始めている。太一は夢中になると周りが見えなくなる3人を放っておいて、他の子供たちを集めた。

「とりあえず、デジヴァイスのことは光子郎たちに任せておいて……。まずは、デスモンの話しだな」

太一はタケルに目を向け、無言で話を促す。タケルはその視線に頷き、他の子供たちを見渡した。

「どうやら、黒い歯車を使って騒ぎを起こしているのはデスモンのようです。目的は分からなかったけど、黒い歯車を作ったのは自分だと、言っていました」

「作っただと？」

「はい。……そうするとデスモンはだいぶ昔からデジタルワールド

に存在していることになると思うんです」

「……………なんで？」

タケルの言葉に首を傾げる大輔。他の子供たちも訝しそうにしている中、太一だけは納得した顔をしている。

「ファイル島の内部には黒い歯車が使われている部分があるんよ」

「歯車の力で島を動かしたこともあつたしねえ」

アグモンとパタモンが加えた言葉に太一は頷く。

「そうになると、ファイル島が作られた時……或いはそれよりも大昔なのかもしれないな」

「はい。……それからデスモンは4年前に黒い歯車が使われていたことを知らなかったように思えるんです」

「どうしてそう思うの？」

ヒカリが問うとタケルは困ったような顔をした。

「根拠はないけど……4年前のことを聞いたとき特に反応を示さなかったんだよね」

「それだけじゃあ分かんねえじゃねか」

「だから、根拠はなんだってば。ただ、そんな気がただけ」

突っ掛かった言い方をする大輔にタケルはますます困った顔をしていた。そんな様子を見て太一は目で牽制し、2人は口を噤んだ。

「どちらにせよ、黒い歯車が好意的な目的で作られたとは考え難い。そうなる、昔倒されたデスモンでデータが時間を掛けて再生したか……もしくは封印されていたかだな」

「そうですね。後者で考えた方が妥当な気はします。ボクたちに攻撃しようとした時、急に苦しみだして去っていったので。もしかしたらまだ完全ではないのかも……」

太一とタケルのやりとりを聞いて大輔はムツとしていた。言いたいことは理解できるが、2人だけで話しを進められるのが気に食わなかった。その時、ふと慶悟が思い出したようにタケルに目を向けた。

「……そういやあ、あん時なんで分かったんだ？ アイツが黒幕って」

「え？ 別に分かってたわけじゃないですよ」

「は……？」

「だから、ハツタリです」

笑顔で言うタケルにその場が凍った。聞き耳を立てていた光子郎たちですら動きを止めた。

「ほら、究極体が使えばしりさせられてるとは考え難いじゃないですか？ だからそうかなあって」

「究極体を相手に鎌かける神経が信じられない」

「……情報が少ないですからね。どんな手を使っても情報が欲しかっただけです」

空笑いをしていた薫は声を失う。肩の上ではクダモンも同様に顔を引きつらせていた。

「……………穏やかな顔してすごい事を言うのだな、キミは」

そう言われたタケルはただ満面の笑みをみせるだけだった。それがかえって怖かった。

「ま、まあ……おかげで分かったこともあったんだから良いじゃないか」

「そうですよね」

「ねえ」

太一は「お前ら、少し黙ってる」とタケルとパタモンに釘を刺す。タケルはキョトンとした顔をしているが、素直に黙った。自分で空気を凍らせたのに気付いていないようだ。パタモンはそんな様子を面白がっている。

「とにかく、これからどうするかが問題だよなあ」

「そんなのデスモンをブツ飛ばすしかないじゃないっすか!!」

「相手は究極体だぞ。どうやって」

「そりゃ、インペリアルドラモンで……」

大輔の言葉に太一はわざとらしくため息を吐く。

「ジョグレス進化はテイルモンのホーリーリングの力を使ってしていたのよ？」

「今はホーリーリングを持っているのはワタシだ。ジョグレス進化はできない」

「もう一度ホーリーリングを使うにしても、それをおこなっていたゲンナイさんが行方不明なんだ。ボクたちではもう一度ジョグレス進化は起こせない」

ヒカリと賢の言葉に大輔はぐうの音も出ない。

「オレたちも紋章がないから究極体どころか、完全体にもなれないしな」

「そうですね。チンロンモンのデジコアの力に頼るわけにもいきませんし。なにより、どこにいるかも分かりませんから難しいでしょうね」

考え込む太一にタケルが付け足す。圧倒的な人数はいるが、現状での1つ1つの戦力が小さ過ぎた。太一は横目で光子郎がパソコンを閉じるのを見た。光子郎は天音にD・3を返している。

「……どう思う、光子郎？」

「そうですね……」

話しは聞いていたらしい光子郎は片手でパソコンを横抱きにし、もう片方の手を顎に当てて考え込む。みんな選ばれし子供の参謀である光子郎の意見を待つ。

「……………タケルくんという通りデスモンが完全復活をしていないなら、今のうちに叩いておくのが得策でしょう。ですが、そうなる
とデスモンがボクたちの前に現れるかは微妙でしょうね。……まず
最優先におこなうことは黒い歯車の破壊とゲンナイさんの搜索です。
黒い歯車は放っておくと面倒ですし、後々危険になってきます。ま
してやデジモンたちを苦しめたままにはしておけませんから。……
ゲンナイさんの搜索も同時におこなってもらった方が助かります。
ジヨグレス進化のこともありますし、デスモンが以前に現れていた
ことがあるなら何かしらの情報を持っているとは思いますが。デ
スモンに関することはボクなりに調べるつもりですが、あまり期待
しないで下さい。……どうでしょう、太一さん」

「そうだな、今すぐデスモンをどうにかできる感じじゃねえし……
とりあえずオレたちは黒い歯車を見つけたら破壊しつつ、ゲンナイ
さんを探すしかねえな。アグモンたちは引き続きゲンナイさんの搜
索を頼むよ。黒い歯車を見つけた時は無理せずにオレたちに連絡を
くれ」

「うん。任せてよ、太一」

アグモンとテントモンが頷くのを見て光子郎は太一に目を向けた。

「とりあえず今日は解散しましょう。もう暗くなってきましたし」

傾いてきた陽を見送りながら、太一は頷いた。

「そうだな。オレたちもなるべくはデジタルワールドに来るように
はするけど……」

「無理しなくてもいいですよ。太一さんたちは受験とかで忙しいで
しょうし」

「そうよ、お兄ちゃん。ちゃんと勉強してね」

「わ、分かってるよ……」

タケルとヒカリに言われ、苦笑いする太一。それを見て、子供た
ちは声を上げて笑った。

「……」

仲間たちが笑い合っ中、1人の少女が暗い顔を俯かせた。その後
姿に目を細める青年の姿があった。

デジタルワールドから戻った慶悟たちは下校時間ギリギリで校舎
を出た。その帰り道、天音は先程のタケルたちの話を思い出してた
め息を吐いた。

「……なんだか、途方のない話になってきたよね」

「そうだな」

「だけど、あのデスモンってデジモンがヤバイのは確かだぜ」

実感の湧かないような天音と薫に慶悟は言った。デスモンと対峙した時に感じた深い闇が突き刺さるような狂気と恐怖だ。

「そうそう！ 眼がイッちゃってたもんな、アイツ」

慶悟の肩に捕まってプカプカと浮いていたリュウダモンの幼年期——キョキョモンが身体を伸ばしなから言う。

「究極体を相手に勝てるのかなあ」

鳴の腕の中でラブラモンの幼年期——シャオモンが不安そうに呟く。

「今はデスモンをどうにかすることを考えるよりも、黒い歯車をどうにかするかを考えるべきだ」

薫の肩ではクダモンの幼年期——キャロモンが諭していた。

「そのためにも対等に戦えるだけの力を付けないとだね」

天音の頭の上でファンビーモンの幼年期——プロロモンが面倒臭そうに言う。

「拙者たちも早く進化できるようになりたいでござる」

凜華の腕でヒョコモンの幼年期——チツチモンが意気込んだ。それに同調するように凜華が頷く。

「そうやね。いつまでもタケルくんたちに頼りっぱなしちゅうわけにもいかんからな」

「……」

「どうした、鳴？」

先程から難しい顔で黙っている鳴を薫は覗き込んだ。鳴は薫の顔を見るとますます眉間に皺を寄せた。

「……………別に」

鳴の無機質な物言いに薫は訝しそうな顔をした。

「……………やっぱり、戦うの嫌か」

「そんなんじゃないっ」

「あ、鳴」

声を掛ける天音を無視して鳴は商店街の方へ走り去っていく。薫は頭を掻きながらため息を吐いた。

「……………なんだかなあ」

「どうしたん、鳴ちゃん」

首を傾げる凜華を横目に薫は言いよどむ。

「まあ、いろいろあるんだよ。……じゃ、オレらこっちだから」

「ああ、また明日な」

「またなあゝ！」

薫は余計なことを突っ込まれる前に慶悟たちと別れ、鳴の後を追った。後ろで幾つかのため息が聞こえたが、聞こえなかったフリを通した。

鳴とはあまり引き離されずに済んだ。だが、いつになく速足な妹に薫は思わずその腕を取った。

「待てよ、鳴」

「……」

ムツとしたまま黙っている鳴にデジモンたちは顔を見合わせる。急に様子の変わった鳴に困惑しているようだった。

「なんか怒ってないか？」

「怒ってない」

そう言う鳴の声色は明らかに怒気を宿している。誰が聞いても怒っているとは思えない。

「そうか？」

「しつこい」

「……………最近、なんか冷たくねえ？」

「……………」

薫はここ半年ほどで思っていたことを口にする。言葉に棘があったり、突然薫のことを避けたりと以前はなかったことが最近は良くあった。薫にはその原因が分からなかった。

「なあ、鳴」

「……………お兄ちゃんのそういうところ……………鬱陶しい」

「……………」

鳴を掴む薫の手に力がなくなる。鳴はその隙に薫の手を抜け出す。一瞬、薫に目を向けるもそのまま走り去ってしまった。薫は呆然とその場に立ち尽くしていた。その姿をキャロモンが心配そうに見ていた。

上がった息を整えるように鳴はゆっくり歩いていた。薫は追いかけて来ない。鳴は奥歯を噛み締めた。シャオモンはそんな鳴の姿に眉を下げる。

「……………鳴いゝ、どうしたのお？」

「なんでもないよ」

「でもお」

「……」

「……鳴い……」

何の言ってくれないパートナーにシャオモンは悲しくなってしまった。そんなパートナーにも気が付かず、鳴は片手を強く握り締めた。

翌日。

大輔、伊織、タケル、ヒカリ、奏の5人は火山近くの荒野に来ていた。ゲートを通るとすぐに慶悟と凜華の姿があった。

「おーい！ お前ら、いつも早い……な？」

大輔は2人の先に薫の姿を見つけて首を傾げた。後ろの4人も同様の反応をしていた。凜華はそんな大輔たちの姿に思わず苦笑する。慶悟は説明をするのが面倒なのか、一切突っ込まない。

「よお、大輔。今日は5人か？」

「え、ええ。京さんと一乗寺くんは野暮用ですって」

「デート？」

凜華がいない2人をからかうようにいうとデジモンたちが食いついてきた。

「あれは絶対そうだぜ！！」

「ねえ！ 何か雰囲気違ったもん」

「デート、デート」

「こら、茶化すんじゃないわよ」

からかうブイモンたちをテイルモンが黙らせる。騒ぎが落ち着いたのを見計らってタケルは凜華に目を向ける。

「そっちは？ 天音ちゃんと鳴ちゃんは来てないの？」

「うっん、来とるよ。ただ……」

そう言つて凜華は薫に横目を向ける。他の子供たちも薫を見る。薫は離れたところにある岩に腰を掛け、足元にある小石を掴んで投げ、掴んでは投げを繰り返している。その後姿は哀愁漂っている。時折、思い出したようにため息を零し、何かブツブツ呟いている。それをクダモンが聞いて、答えているようだ。

「……どうしたんですか、薫さん」

「何か、鳴と喧嘩したみたいだぜ」

「それです〜つつとあの調子なんよ。鳴ちゃんもどつか行ってもうて、天音くんが後追つとる。なんか、D-3の追跡機能使えへんやて」

慶悟と凜華は呆れたように言う。朝からこの調子だったようで2人は少し疲れ顔だった。ヒカリは凜華の最後の言葉に引つかかっていた。

「そうなの？ この間も使えなかったけど……どうして……」

「ねえねえ、薰もシスコン？」

「……パタモン、そういう言葉どこで覚えてくるの？」

パタモンがシリアスな雰囲気をぶち壊す。タケルは呆れ顔になっているが、突っ込み所を間違えている。

「正真正銘のシスコンや」

「筋金入りのな」

「そ、そうなんだ」

マジ顔で答える凜華と慶悟に他の子供たちは顔を引きつらせていた。奏が1つ咳払いをして、話しの軌道修正をする。

「喧嘩の原因は？」

「それがさあ、鳴が薰のこと、鬱陶しいって言ったらしいぜ」

「それはショックね。シスコンなら尚更」

身近にシスコンがいるテイルモンには実感があるようで、妙に説得力があった。

「あの、鳴さんと天音さんだけでは危険なのでは？」

「そうね、探しに行きましょう」

進化が出来ない2人が万が一デジモンに襲われたらひとたりもないだろう。そんなことになったら大変だ。タケルは薫に目を向けるが、動く気はないようだ。

「薫さんは……」

「ほっとけば」

「1人にするわけにはいけませんよ」

薫のクダモンもまだ進化できないのだ。一人にしていくなけにはいけない。だが、慶悟はあからさまに嫌そうな顔をした。

「じゃあタケルが残れよ。オレは嫌だぞ……鬱陶しい」

「…………鬱陶しい…………」

慶悟の言葉に反応した薫はさらに落ち込んでしまった。それを見たクダモンが遠くから睨んでいる。凜華は慶悟の頭を思いつきり引っ叩く。

「アホ慶悟。追い討ちかけてどないすんねん！」

「うつ……わ、悪い」

さすがにマズいと思ったのか、慶悟は困ったように薫に目を向けた。大輔はチャンスと言わんばかりに慶悟に笑顔を見せる。

「責任取って慶悟も残れよな。行こうぜ、ヒカリちゃん！」

「うん。よろしくね、2人とも」

そう言って大輔を先頭にタケルと慶悟以外は鳴と天音を探しにいった。

「ず、ずりいぞ！ お前ら！！」

大輔たちの去っていく後姿に怒鳴りつける慶悟。その様子と薫を交互に見てタケルは深々とため息を吐いた。

慶悟の怒鳴り声が聞こえなくなると大輔は呆れたようにため息を漏らした。

「助かったな。慶悟じゃねえけど、確かにあれは鬱陶しい」

「そんな風に言っではいけませんよ、大輔さん」

窘める伊織だが、凜華は大輔の言葉に大きく頷いた。

「いや、大輔くんの言う通りや。あれは鬱陶しい」

「朝からあんな感じでござったからな」

「それは鬱陶しいかも」

奏もおずおずと頷いている。

「もう、みんなして……」

「ヒカリだって太一があんなだったら鬱陶しく思っんじゃないか？」

「それは……思わなくはないかもしれないけど」

太一を思い出して思わず頷いてしまうヒカリ。それを見て伊織は呆れ顔になっている。

「ヒカリさん……」

「う、ごめんね」

「ともかく、天音さんたちを探しましょう」

「そうだね。みんなで探すと効率悪いし、分かれて探す？」

奏の提案に大輔は輝いた笑顔を見せる。

「そうだな！　じゃ、ヒカリちゃん一緒に……」

「伊織くん、凜華ちゃん。一緒に行きましょう」

「はい」

「そうやね」

「えゝ！！　なんでゝ！？」

期待した大輔はヒカリの言葉に撃沈した。それを無視するようにヒカリは伊織と凜華を連れて来た道と反対の方向を指差す。

「じゃあアタシたちこっち探して見るから大輔くんたちはそっちの方お願いね」

「ヒカリちゃん！」

「……なんか、ごめんね？」

3人が去っていくのを見て涙目になる大輔。それを見て奏は必要のない罪悪感を覚えるのだった。

一人で先に行くヒカリを追って凜華は隣に歩み寄った。

「良かったん？ 大輔くん」

「平気よ。大輔くんたち強いもの」

「そういう意味じゃあないだぎゃ」

2人だけで大丈夫なのか、と言う意味で捉えたらしく、凜華の期待した答えは返ってこなかった。アルマジモンも気になっていたようで、残念そうに言っている。凜華は諦めず、食い下がる。

「なあなあ、ヒカリちゃんは大輔くんとタケルくんどっちに気があるん？」

「止めよう、そういう話」

満面の笑みで言うヒカリに凜華は言葉を嚥んだ。だが、テイルモンが続けるように口を開いた。

「でもワタシも気になるな。大輔はあからさまだし、タケルも……」

「テイルモン？」

「わ、分かってるわよ。少し気になったただけだって」

笑顔で牽制するヒカリに些か恐怖を覚えた。テイルモンも慌てて黙る。そんな様子を見て伊織は口元を緩める。

「……女性はその話好きですね」

「だって気になるやん」

「それは分かりますが、今は天音さんと鳴さんを探すのが最優先です」

「せ、せやね」

もつともなことを言う伊織にぐうの音も出ない凜華は今度こそ完全に黙った。

慶悟は薫が座っている岩に親友と背中合わせになるように座っている。隣の岩ではタケルとデジモンたちが座っていた。

「……いつまでそうしているつもりなんだ？」

「ん……」

聞いているのか、聞いていないのか分からないような返事をする薫に慶悟は我慢の限界だった。

「ホント、鬱陶しいんだけど」

「慶悟さんっ」

イラついた口調で言い捨てる慶悟を窘めるタケル。薫は何の反応も示さず、ただ黙っている。

「いや、慶悟のいう通りだ。いつまでそうしているつもりだ？ そんなんだから鳴に愛想尽かされるんだ」

「クダモン！」

パートナーに対して容赦ない物言いに思わずタケルは大声を上げた。それでも厳しい視線を向けるクダモンにタケルは困惑する。慶悟に助けを求めるが、何も言わず黙ってことの成り行きを眺めている。しばらく口を噤んでいた薫だが急に喉を鳴らした。その笑いが自嘲的で嫌な感じだった。

「……………ホント……………その通りだな」

「薫？」

今まで黙っていた薫が急に喋りだした。

「未練がましくて、女々しいったらありやあしねえ。…………誰だって嫌になるよな」

そう言う薫の姿は自虐的で痛々しく思った。タケルはそんな薫の姿を見ていられなかった。

「そんなことないですよ」

「そうだぜ。鳴だって…………」

「鳴は……オレのこと許してないさ」

慶悟の言葉を遮るように言い捨てる薫の言葉に首を傾げる。何を言っているのか分からない。

「許す……？」

どついう意味なのか、分からずに聞き返すも薫は嘲笑するだけで何も言おうとしない。クダモンはそんな薫の目の前に座り、顔を見上げた。

「……………お前たち兄妹の間に何があったのかは知らない。言いたくないなら聞くつもりもない。鳴が……お前をどう思っているかもワタシには分からない。だが、少なくともお前は鳴を大切に思っている。それだけは分かっているつもりだ。それだけではダメなのか？ 誰が何を思うが、お前の心や想いが変わるのか？」

クダモンの言葉に薫は目を見開く。動かなかった心が揺れる。

「オレの……心……？」

「そうだ。お前が鳴を想う気持ちはたとえ鳴でも否定できない。鬱陶しがられても構わないじゃないか。それだけ鳴を想っている証拠だ」

「そうですよ。ボクも兄さんいますけど、やっぱり少し過保護な時があつて……。確かに少し鬱陶しく思う時あるんですよね。だけど、同じくらい感謝もしてるんです。ボクのことを心配して、構ってくれて……想ってくれてるの分かるから」

「オレも……兄貴いるけど過保護って感じじゃないからなあ。……
けど、やっぱり昔は構ってくれるの嬉しかったし。兄弟なんて鬱陶
しく思うぐらいがちょうど良いんじゃないかねえの？」

薫はずっと俯いていた顔を上げる。クダモンのまっすぐな瞳がゆ
っくり頷く。薫がゆっくり後ろを向くとタケルと慶悟と目があった。
タケルは優しく微笑み、慶悟は照れ臭そうに目線を逸らす。

「大丈夫です。鳴ちゃんも分かってますよ、薫さんの想い」

「……………そうだと……………いいな」

自信なさげに言う薫の頭の上にパタモンが飛び乗る。

「大～丈夫～夫！ 鳴は良い子だもん。ちゃんと分かってるよ」

「そうそう！ 薫は深く考えすぎだって。もっと気楽に考えようぜ」

パタモンとリュウダモンが薫を取り囲むように言う。小さいデジ
モンたちにも気を遣わせていたようだ、後悔を覚える。クダモン
に目を向けると、ゆっくり頷いた。

「そう、だな。……………悪い」

「いいさ。さて、オレらも鳴たちを追うか」

「ああ。……………慶悟、タケル……………ありがとな」

立ち上がった薫は小さく笑って言う。それを見てタケルと慶悟は

顔を見合わせた。

「……いいえ」

「ボクたちには？」

「そうだな。パタモンもリュウダモンもサンキュ」

「えへへ」

パタモンが薫の頭で甘えている。薫はパタモンとリュウダモンを撫でてやると満足したパタモンはタケルの元に戻っていった。パタモンがいなくなったのを見計らってクダモンが薫の肩によじ登る。

「クダモンもありがとう」

「……いや」

顔を見合わせた2人は静かに微笑んだ。

「はあ。ヒカリちゃん」

ヒカリと別れてから大輔は何度目かになるため息を漏らす。それをブイモンが呆れたように見ている。

「大輔……鬱陶しい」

「なんだと！？　ブイモン」

「だつてっつ」

ブイモンを羽交い絞めにする大輔を奏はじつと見ていた。

「……大輔くんはヒカリちゃんのことが好きなの？」

「えっ！？　ま、まあ……な／＼／」

急に、真顔で聞く奏に照れながらも頷く大輔。奏は納得したように笑った。

「そっか。ヒカリちゃん可愛いもんね」

「だろ？　性格もいいし、言うことなしだもんなあ」

「そうだよな。大輔くんみたいに正義感の強い熱血漢にはヒカリちゃんみたいなしっかり者でブレーキになってくれる人が良いと思うよ」

「そ、そうか？」

先程まで落ち込んでいたのはどこかに吹っ飛んだらしい大輔は嬉々と聞いてくる。

「うん。お似合いだと思う」

「そ、そうだよなあ！！ オレもそう思ってたんだよ。ただ、ヒカリちゃんがあんな感じだからさ」

「きつと照れてるだけだよ。頑張つて、応援するから」

「奏くっ、お前ホント良い奴だなあ！！」

大輔は「お似合い」という言葉が余程嬉しかったのか、ハイテンションになっている。奏の背中を叩きながら、笑っているパートナーを見て、ブイモンはピコデビモンと小声で話している。

「……奏つて持ち上げ上手？」

「天然なだけだよ」

デジモンたちは呆れたようにため息を零しながら気味の悪い笑い方をするパートナーを眺めた。

火山が目の前にそびえ立ち、辺りの気温が急激に高くなっている。少し動いただけでも汗が噴出してくる。活火山か休火山か分らないが、これ以上は危険だ。今、デジモンに襲われたら太刀打ちは出来ないだろう。天音は前を歩く従姉妹の姿を目に映し、ため息を吐いた。頭の良い鳴が今の状況が分かっているはずがないのだが、

どうも意地を張っているようだ。

「待つてよ、鳴。あんまり遠くに行くと危ないって」

最初に比べると幾分ゆっくりにはなっているが、それでも鳴は歩みを止めようとはしない。鳴の後ろを付いて来ていたラブラモンは鳴の前に出て、その先を塞いだ。

「鳴いゝ？」

渋々といった感じで足を止めた鳴。心配そうに見ているラブラモンだが、鳴は何も言わない。腰に両腕を当てその様子を見ていた天音が目を細めてため息を吐いた。

「……薫は……鳴には甘いからね」

鳴ははつとして天音の方を振り返った。呆れたような目線とぶつかる。それに耐えかねて鳴は視線を逸らした。

「やっぱり、それが原因か」

「……すみません」

「別に謝ることじゃないよ」

「……はい」

「……ね、具体的に何があったのか聞かせてほしいな？」

何のなく鳴の想いを感じ取った天音だが、その想いに至った経緯

が分からない。だが、鳴は口を強く引き締め、噤んでしまう。

「……ふう、弱ったなあ」

困ったように呟く天音。そのやり取りを心配そうに見ていたラブラモンが急に両耳を上げた。足音が届いてくる。

「……鳴いゝ、天音えゝ。誰か来るよぉ？」

「ファンビーモン、見てきてもらっても良い？」

「任せて！」

もしも敵だったら、逃げなくてはならない。緊張した面持ちで空高く飛び上がったファンビーモンを見る。だが、ファンビーモンの安心したよな声が届いた。

「んゝと、凜華たちだ」

「……！」

「薰は？」

ピクリと反応を示した鳴を見て、天音はファンビーモンに聞いた。

「いない。凜華と……ヒカリと伊織だよ」

「……そう」

薰がないことが分かって鳴はほっとしたような、残念そうな顔

をしている。ファンビーモンが天音の元に戻つてくると同時に凜華たちの小さい影が見えてきた。

「あ、いたいた。天音くん！ 鳴ちゃん！！」

「探したでえ。こんなところまで来とつたんか」

「大輔さんとタケルさんに連絡入れておきますね」

「お願いね、伊織くん」

2人を見つけて安心した様子のヒカリと凜華。伊織はDターミナルを取り出し大輔とタケルにメールを打ち始める。凜華は鳴の側まで来た目線を合わせるようにしゃがんだ。

「みんな心配しとつたで。戻ろうや？」

だが、鳴は半歩下がりがり俯きながら首を振る。その姿に天音はため息を漏らす。

「ずっとこの調子」

困ったように顔を見合わせる天音と凜華。その様子を見ていたヒカリは凜華の隣で屈んだ。

「ねえ、鳴ちゃん。どうして薫さんに鬱陶しいなんて言っちゃったの？」

「別に……鬱陶しかったから……」

「嘘。本当はそんなこと思ってない」

「……！ どうしてそんなこと言えるんですか？」

顔を上げた鳴はヒカリと視線が合った。その瞳は少し寂しそうで、とても優しかった。

「だって、後悔してるって顔よ」

ヒカリの言葉に鳴ははっとした顔になった。ヒカリは鳴の手を握って言葉を続けた。

「イライラして、思わず言っちゃって……薫さんを傷付けてしまった。だけど素直に謝れなくって、そんな自分にますますイライラについて。そんな自分が嫌になっちゃってる。違う？」

「……うん」

小さく頷く鳴にヒカリは目を細めた。それと同時に兄の顔が脳裏に浮かぶ。

「やっぱり。アタシも経験あるなあ。お兄ちゃんとはつまらないことで喧嘩しちゃって、でも素直に謝れなくって。結局、悪くもないのにお兄ちゃんの方が謝ってくるから、ますますイライラしちゃうの」

「……うん。お兄ちゃんが悪いわけじゃないんです、いつだって。それなのに傷付くにはいつもお兄ちゃんで……それが嫌なのに……」

振り絞るような声は震えていた。鳴が言っているのは昨日今日の

ことではないように思う。ヒカリにはこの兄妹は自分たちには理解できない過去があるように思えた。

「……戦うの嫌か」

「!？」

不意に天音が言葉を紡ぐ。その言葉に鳴は目を見開いた。

「そう言われたのが嫌だったの？」

「……………そう……です」

「昨日の帰りに言っとなことやね？　でもそないなことではどないして…………」

その会話は確かに昨日の帰り道にあったものだ。だが、それは妹を想う兄の言葉では当然なように思う。分らずに首を傾げている凜華を尻目に鳴はヒカリの顔をまっすぐ見た。

「ヒカリさんたちは好きで戦っているんですか？　凜華ちゃんたちはデジモンを傷付けることに一寸の迷いもないんですか？」

「そんなことはありません。戦わなくて済むなら戦いたくないですし、傷付けることだってしたくない」

伊織は苦々しく言う。誰だって戦い傷つけ合うことなど望んでいない。

「そうですね？　戦うのは嫌に決まっています。でも、戦わないと

もつと傷付くデジモンが増える……それはもつと嫌です。でも、きつとそれを言うとお兄ちゃんは無理に戦わなくて良いって言うに決まっています。その分、自分が無茶する……お兄ちゃんはそういう人なんです。そんなの絶対に嫌っ!!」

「鳴ちゃん……」

瞳に涙を溜めて、訴える鳴。震える手でヒカリの手を強く握り締めた。

「だけど、嘔吐けなくて……でも、お兄ちゃんに見抜かれそうで……それが怖くて、つい……」

「鬱陶しい、と」

「あんなこと言うつもりなかったんです。だけど気付いた時にはもう口から出ちゃって……その時にお兄ちゃんの顔見たら居た堪れなくなつて、逃げちゃったんです」

弱弱しく言う鳴にテイルモンは背中をさする。

「それで謝るタイミングを逃したのか」

「……はい。あの時のお兄ちゃんの顔……見たことなかった。お兄ちゃんってポーカーフェイスなところあるから、思つても顔に出さないのに。それだけ、酷いこと言っちゃったんだって……」

今にも零れ落ちそうな涙を堪え、鳴は兄の顔を思い出していた。呆然と自分を見ていた瞳に悲しみや怒りよりも深く暗いものを感じた。それが鳴の頭から離れなかった。ラブラモンは首を傾げて話を

聞いていた。

「ん……そう思うならあゝ、謝れば良いんじゃないのぉ？」

「それが出来たら苦労しないの！！」

兄を傷付けた自分が許せない。合わせる顔がない。素直になれない。そんな想いが心に重く押し掛かる。

「どうしてえ？ 自分があゝ悪いとおもったらあ、ごめんなさい
つてえゝ言っんじゃないのぉ？ そうすればあ、薫も許してくれる
よぉ！！」

「そんなのっ」

「だってえ、薫は鳴のことお大ゝ好きだもん！ 鳴もお薫のこと大
ゝ好きでしょう？ だからあ、絶対対、大ゝ丈夫！ ねえ？」

のんびりとした口調で言われると鳴は強く言い返せなかった。そんなパートナーに鳴は思わず笑ってしまった。不思議と心が軽くなつていくのが分かった。

「…………ふふ、敵わないな。ラブラモンの言う通りね」

「あゝ！ 鳴い、やっと笑ってくれたあ！！ ラブラモン嬉しいゝ」

「ありがとう、ラブラモン。……みなさんもお迷惑をおかけしまし
て、すみませんでした」

鳴が深々と頭を下げるとヒカリがそつと顔を上げさせた。

「気にしないで。それより早く薫さんのところに帰りましょう?。」

「……はい!。」

笑顔で返事をする鳴に天音はほっとした。目でヒカリに礼を言う
とヒカリも微笑を返す。凜華と伊織も安心したようであつた道を引き
返し始めた。その時、岩の陰から動くもの影があつた

「ハイパーヒート!!。」

「きゃっ!! な、なに?。」

「あそこや!。」

辛うじて避けた先を見ると岩がドロドロに溶けていた。凜華が攻
撃の来た方向を見ると岩陰からデジモンが出てきた。

「ありや、サイクロモンだぎや。」

「見て、背中に黒い歯車が刺さっている。」

アルマジモンとテイルモンが臨戦態勢を整える。ヒカリは鳴と凜
華の前に出た。

「鳴ちゃんと凜華ちゃんは下がってて。……テイルモン!。」

「任せて。」

「アルマジモンもお願いします。」

「合点承知だぎゃ！」

2人のD-3が輝きを放つ。

「テイルモン アーマー進化——微笑の光り——ネフェル
ティモン」

「アルマジモン進化——アンキロモン」

進化したネフェルティモンとアンキロモンがサイクルモンに向か
っていく。

「ロゼッタストーン！！」

「テイルハンマー！」

ネフェルティモンとアンキロモンの攻撃はギリギリのところでは避
けられる。次の攻撃に転じようとするネフェルティモンだが、視線
の先にサイクロモンの姿が見当たらない。

「くっ……コイツ意外に早いっ」

サイクロモンはアンキロモンの背後に回り込み、攻撃の態勢に入
った。

「ハイパーヒート！」

「うわぁっ！！ あ、熱いだぎゃー！！」

「アンキロモン！」

反応の遅れたアンキロモンにサイクロモンの必殺技が直撃する。
続いてサイクロモンはネフェルティモンに向かって飛び上がる。

「ハイパ……」

「エックスレイザー！」

ネフェルティモンに向かっていたサイクロモンがX型の光線で叩き落された。エクスブイモンの後ろから大輔と奏が走ってくる。

「おーい！ 無事か？」

「大輔くん！ ありがとう助かったわ」

「い、いやぁ……それほども／＼」

ヒカリが礼を言うと大輔は過剰に照れている。その様子に奏は少し呆れているが、辺りを見渡して顔色を変える。

「薫さんたちはまだ来てないの？」

「そうなんよ」

「へ、これくらいエクスブイモンだけで十分だ！ 頼むぜ」

「任せろ！ エクスレイザー！！」

「ハイパーヒート！！」

エクスブイモンとサイクロモンの攻撃がぶつかり合う。その衝撃で爆煙が舞い、辺りを撒き散らす。爆煙が晴れるとサイクロモンが倒れていた。背中の黒い歯車はなくなっている。

「よっしゃ！ やったぜ、エクスブイモン」

喜ぶ大輔を尻目に鳴は倒れるサイクロモンの先を見た。

「まだです！」

「え……ぐわあっ!!」

「エクスブイモン!？」

突然、地面に叩きつけられたエクスブイモン。驚いていると今度はネフェルティモンの目の前に影が現れた。

「お前は!？ うわあ!!」

「ネフェルティモン!!」

「うわあーっ!!」

「アンキロモン!!」

ネフェルティモンとアンキロモンが地面に伏す。そして宙には1つの影が浮いていた。

「あそこ！」

「なんや？」

「あれは……スカルサタモン。完全体だ!!」

髑髏に歯車が刺さった堕天使は翼を広げ、杖の先を子供たちに向けた。

「ネイルボーン!!」

宝玉から放たれた光りがまっすぐに鳴を捉えた。

「鳴ちゃん!? 危ない!!」

「鳴い!!」

「……………っっ」

名を叫ばれても迫り来る絶望の光りに鳴は身動きが出来なかった。死を覚悟して目を瞑る。だが、その身体が急に飛び退いた。

「っ痛……………大丈夫か、鳴？」

鳴は声に驚いて目を開けると、薫に身体を抱きかかえられていた。

「お、兄……………ちゃん」

「鳴いっっ」

ラブラモンが急いで鳴に駆け寄ってくる。

「てっこうじん
徹甲刃！」

「ヘブンズナックル！！」

再び杖を構えたスカルサタモンにギンリュウモンとエンジェモンが攻撃を放つ。2人は子供たちからスカルサタモンを引き離す。

「薰さん、鳴ちゃん！ 大丈夫？」

「慶悟！ タケルくん！！」

「悪い、遅くなった」

続いてタケルと慶悟が走ってくる。薰は上半身を起こし、鳴の顔を覗いた。

「鳴、怪我不いか？」

「う、うん」

「そっか、良かった……」

「……………！」

身体を引き寄せていた薰の声が震えていた。鳴は兄の胸の中で想いが溢れ出す。それを感じたのか、薰は鳴を抱く腕に力を込めた。

「ホント、心臓止まるかと思った」

「お兄ちゃん……ごめん……な、さい……ご、めん……な……っ」

鳴は薫の言葉に、心に、涙が止まらなくなった。薫は優しく鳴の頭を撫でる。

「あー、無事なら良いんだって。だから泣くなよ」

「ち、がう……昨日、は……」

「良いよ。確かにオレも鬱陶しかったし。嫌になるのも仕方が……」

「違う！……違、うの……ワタシは、ただ……お兄ちゃんに無茶して欲しくなくって……戦うのは嫌だけど……お兄ちゃんやみんなが傷付くのは……もっと嫌で……だから……だから……」

泣きじゃくりながらも自分の想いを訴える鳴に薫は目を細めた。

「……なんだよ、オレが戦うなどでも言うと思ったのか？」

「え……？」

兄の言葉に鳴は目を見開いた。薫は呆れたように小さく微笑んだ。

「何年お前の兄貴やってると思ってんだ？ お前の思ってることなんてお見通しだって。……そりゃ、オレとしては大事な妹が戦いの場に出るなんて、本当は嫌だよ。だけど、それで納得するお前じゃないことも分かってる。だからさ、無理しないで辛いときは辛いつて言って欲しい。泣きたいときは側にいてやる。オレだけじゃなくて、みんないるんだ。……だから、一緒に戦おう」

「あ……」

薫は分かっていたのだ。戦いで傷付くデジモンを増やしたくないと、気負っていた自分の心情に。知らずに独りで突っ走ろうとしていた自分を諫めようとしていただけだった。それを勘違いし、勝手にイラついていた。鳴は急に恥ずかしくなってしまった。

「独りじゃないんだ。オレもいる。天音や慶悟たちもいる。タケルや大輔たちもだ。勿論、ラブラモンも。だからお前が気負うことないんだよ」

優しく言う薫の言葉で鳴の心に光りが射す。独りではない。みんながいる。

「……うん。そうだね……一緒に戦う。みんなでこの世界を、ワタシたちの世界を守る！」

鳴の想いにD-3が輝きを放つ。

「なんだ？」

「これは……進化の光り……」

驚いている薫から離れ、鳴は自分のD-3を手を取った。それと同時にラブラモンが前に飛び出す。

「ラブラモン!!」

眩い光りがラブラモンが包み込む。

「ラブラモン進化——シーサモン」

現れた太陽の聖獣は兄妹を守るように前に出た。純白の身体に金のタテガミが輝いている。

「ラブラモンが……進化した？」

「シーサモン……？ ……お願い、シーサモン！ あのデジモンを解放してあげて」

「分かった。……鳴を悲しませるのは許さない」

シーサモンは離れたところで戦いを繰り広げる仲間の元へ走り出す。

完全体を相手に苦戦を強いられたパートナーデジモンたちは立っているのも限界だった。そんなデジモンたちにもスカルサタモンは容赦なく襲い掛かった。

「ネイルボーン——！」

宝玉の光りはエクスブイモン目掛けて放たれる。傷付いた身体に反応が遅れたエクスブイモンの目の前に迫った。

「せっかんど石敢当——！」

エクスブイモンの前に飛び出したシーサモンは自分の周りにファイアーウォールを作り出す。スカルサタモンの攻撃はシーサモンによって掻き消された。

「……すまない」

「一気に決めます」

シーサモンはそう言うときスカルサタモンへと向かっていった。その後をギンリュウモンが追う。

「了解。……轍^{てしうじん}甲刃！」

「エクスレイザー！！」

「メガトンプレス！！」

「ヘブンズナックル！！」

「カースオブクイーン！！」

「ティード・イヤ！！」

無数の太陽の矢を先頭に、デジモンたちの攻撃がスカルサタモンを襲う。その1つが黒い歯車を砕いた。

「やったあ！！」

スカルサタモンは正気を取り戻したのか、すぐに立ち去っていった。

「シーサモン！」

「鳴」

鳴はシーサモンの元へ走り、その首に抱きついた。

「シーサモン、ありがとう」

「それはこっちの台詞だよ。鳴の思いが進化させてくれたの。ありがとう、鳴」

寄り添いあう鳴とシーサモンを見て、天音は嘆息を漏らす。

「……まさか、鳴に先を越されるとはね」

「そうだねえ」

ファンビーモンも少し悔しそうにしていた。凜華はピョコモンを抱き上げる。

「うちらも負けておられんな」

「頑張るでござる!」

パタパタと翼を羽ばたかせるヒョコモン。その横で薫は鳴を見て目を細めた。

「……良かったな、薫」

「ああ」

クダモンが言々と薫は静かに頷いた。嬉しそうな、幸せそうな妹の姿を目に焼き付けた。

暗闇の中、ボロボロになった歯車が暗い洋館に入っていく。

「……戻ってきたか」

デスモンは両手を歯車にかざす。歯車が粉々に砕け、その眼に消えていく。

「……まだ……足りない、か……」

大きく見開いた眼の先に漆黒の闇が広がっていた。

第四話 幸福を求めて シーサモンの想い（後書き）

《予想の設定？》

ジョグレス進化に関してはテイルモンのホーリーリングがないと進化できないということにしてあります。

（映画でホーリーリングなくても進化してましたけど、この話では無視していきます）

黒い歯車は古代に作られたモノで、デスモンが生み出したモノになります。

第五話 決意の進化 高速射砲ワスプモン

デスモンの出現により戦う決意を寄り一層固める子供たち。その中で慣れない戦いに焦燥感を覚える鳴はつまらないことで兄・薫と喧嘩をしてしまう。仲直りも出来ないままデジタルワールドを訪れた鳴は黒い齒車に操られたデジモンに遭遇する。間一髪のところを薫に助けられた鳴は兄の心情を知る。独りで気負っていた鳴が仲間大切さに気付いた時、D-3が進化に光りを放ち、ラブラモンはシーサモンへと進化したのだった。

【第五話 決意の進化 高速射砲ワスプモン】

薄暗い空を見上げた。街の光りに照らされて、星の輝きは隠されている。天音は1つため息を吐いて視線を下にずらした。ビルの一室から明かりが漏れている。しばらく見上げていたが、不意に踵を返した。来た道を歩いていると持っていた鞆がもそもとプロロモンが顔を出した。

「天音、塾は？」

「うん……今日はいいや。それより、ちょっと寄り道しない？」

「天音が良いなら行くー！」

鞆からプロロモンを出して、腕に抱える。天音はそのまま街を抜けた。向かった先は小さな公園。小さすぎて昼間でも人がほとんど居ない公園だ。夕暮れになると人の姿は全くなかった。それを良いことにプロロモンは公園中を飛び回っている。

「ブランコー」

プロロモンはブランコに座って必死に揺らそうとしている。だが、小さな身体には重かつたらしく、なかなか動かない。不貞腐れているパートナーを見て、天音は思わず笑ってしまった。天音はプロロモンを持ち上げて、ブランコに座る。膝にプロロモンを乗せ、地面を蹴った。小さな揺れが徐々に大きな揺れに変わっていった。

「わあい！ 天音すごーい！！」

天音の膝にしがみ付きながらもプロロモンは大喜びしている。その様子に天音も嬉しそうに笑っていた。

それから2人は滑り台やシーソーで遊んだ。さすがに疲れた天音はベンチ座って休んでいた。プロロモンは目の前の砂場に山を作っている。砂まみれになっているパートナーを見て、「今日の風呂は大変そうだなあ」などと思っていた。楽しそうにしているプロロモンを見て、おもわず顔が綻ぶ。天音は鞆からノートとシャープペンを取り出した。ノートの裏から数枚めくり、シャープペンを走らせた。

河田小学校。職員室。

廊下から教師の姿を見届けた天音は扉を叩き、間を置いて扉を開けた。

「失礼します。渡瀬先生はいらっしゃいますか？」

「おー、東雲か。またパソコンか？」

職員室の真ん中の机に座る目的の人物である中年の男——渡瀬が天音を見つけ、手招きをする。それに従い職員室の真ん中まで歩み寄る天音は咄嗟に作り笑いを見せた。

「はい」

「今日は何を調べるんだ？」

「そうですね……近年における未成年による犯罪の増加とその傾向。犯罪を起こす未成年者の生活環境と犯罪心理の関連性。また、未成年の加害者の保護の必要性和その問題点ですね」

「なかなか難しいこと調べてるんだな。さすが東雲弁護士の子なんだ。やっぱり、将来はお父さんみたいな国際弁護士か？」

その言葉に天音は笑顔を凍らせた。渡瀬に気付かれないように満面の笑みを作る。

「そうですね、父のような人の為になれる立派な弁護士になりたい

です。だから今の内から社会の勉強はしておきたくて……」

「そうかそうか！ 良い心掛けだ。ほら、パソコン室の鍵だ。終わったらここに返してくれな」

「はい。ありがとうございます」

天音は鍵を受け取り、職員室から出た。出ると同時に深々とため息と吐いた。自分の言葉にご機嫌な教師の顔を思い出し、表情を無くす。

「……父のように、か………反吐が出る」

天音は職員室に入ろうとしていた女性教師に眩きを悟られないように笑顔で挨拶を返した。

パソコン室の前まで行くと海老色の制服を着た青年が廊下の壁に寄り掛かって外を眺めていた。横抱きになっている鞆がもぞもぞと動いている。

「……ばれるよ、キョキョモン」

「お、天音遅せえぞ」

慶悟は声を掛けられて天音の存在に気が付いたようだ。その顔に少し焦りが見えて、天音は窓の外に目を向けた。そして納得したように声を漏らす。校庭ではソフト部が練習試合をしていた。その中でバットを構える凜華の姿を見つける。慶悟が元ソフト部の先輩として試合を観ていたのか、それとも別の目的かは定かではないが。

「……今日は凜華来れないんだな」

残念そうに言う慶悟は再び校庭に目を向けている。その瞳に愛おしさが宿っているように思うのは天音の思い違いではないだろう。

「……………仲良いね」

「はっ！？　べ、別にそんなんじゃ…………っ」

「深い意味じゃないよ」

「……………っ／＼／」

あからさまに動揺する慶悟を尻目に天音はパソコン室の扉を開けていた。慶悟は墓穴を掘ったことに気が付いて落ち込んでいる。そんな慶悟を無視して、天音はパソコン室に入って窓の鍵を開けた。

「プロロモン、ごめんね、遅くなって」

「ううん。大丈夫だよ」

ベランダで待っていたプロロモンを抱きかかえる。天音はパソコンを起動させようと振り向いた。廊下ではまだ慶悟がいじけている。

「慶悟、いつまでそんなとこ居るの？ 早く入って鍵閉めて」

容赦なく言い放つ天音に慶悟は渋々と動いた。鍵を閉めるとバツクからキョキョモンが飛び出す。

「ぶはあゝ！ 苦しかった」

「悪いい、キョキョモン。忘れてた」

真顔で言う慶悟の頭をキョキョモンはポコポコと叩いた。痛くはないが鬱陶しい。それを見ていた天音がさらに鬱陶しそうな顔をしている。

「いつまでじゃれ合ってたんの？ 行くよ」

「へ？ 薫と鳴は？」

小学校まで一緒に来ていた薫はいつの間にかいなくなっていた。先にパソコン室に來ていると思ったのだが、姿はない。尋ねた天音は一瞬、渋い顔をしたがすぐに顔を背けた。

「……………家庭の事情」

天音はそれだけ言うと1台のパソコンに手を掛ける。慶悟は眉間に皺を寄せたが、それ以上何も聞かなかった。慣れた手付きで天音はパソコンを操作している。画面にデジタルゲートが表れる。

「じゃあ、行……………」

天音の言葉を遮るように無機質な機械音が鳴り響く。鞆の中から

ケータイを取り出した天音はディスプレイを見て、固まった。ディスプレイに映し出される『父』の字を睨み付ける。天音はしばらくケータイを握り締めていたが、おもむろに電源を切った。そして鞆にケータイをしまった。代わりにD-3を取り出す。

「……いいのか？」

「構わないよ」

怖い表情の天音を心配する慶悟だが、頑なな様子に何も言わなかった。慶悟もD-3を取り出し、パソコンの前に立つ。横目で天音を見るが、いつになく厳しい表情をしている。

「行くよ」

「……おう」

2人はパソコンの画面にD-3を掲げる。閉じていたゲートが開き、パソコンから光りが放たれる。2人と2匹はデジタルワールドへ旅立った。

天音と慶悟が訪れたのは廃ビルが立ち並ぶ街だった。辺りを見渡すとタケルの姿を見つける。傍には奏以外の子供たちが揃っている。

「今日は2人なの？」

歩み寄った2人にタケルが首を傾げた。

「朝比奈兄妹は家の用事。凜華は部活だよ」

話しながらも足を進める子供たち。慶悟は奏の姿がないことに眉を顰めた。

「奏は？」

「どうしても外せない用事があるんだって」

「珍しいね。奏くん結構来てたのに」

「仕方がないよ」

「まあね。ボクも塾とかで来れない時あるし」

それぞれの生活があり、常にデジタルワールドへ来ることができない。最近は全員が揃うことも珍しい。

「けどよ、あんまりのんびりも……どわあっ!」

「大輔くん!? 大丈夫？」

前にいた大輔は話を聞く為に後ろ向きで歩いていた。その足に何かがぶつかり、バランスを崩して尻餅をついた。

「痛ってえな!! なんだよ!？」

痛みを堪えて振り向いた大輔の目に真っ黒なデジモンが映った。

「ボタモンだぎゃ」

飛び出してきたボタモンは辛うじて大輔に潰されずに済んだようだ。大輔の声に驚いたのか、怯えているのか震えていた。その姿にヒカりはしゃがんで怖がらせないように声を掛ける。

「驚かせてごめんなさい。大丈夫だから怖がらないで、ね？」

ヒカリの言葉が通じたのか、ボタモンが近付いてきた。ヒカりはそつと抱き上げる。人懐っこく顔を寄せるボタモンにヒカりは顔を綻ばした。

「……可愛い」

「幼年期のデジモンが1人にいるなんて珍しいんじゃない？」

「1人じゃないみたいだよ」

賢が遠くの方で動く影を見て言う。崩れた建物の影から無数の顔がヒョコヒョコと現れる。ボタモンの他にもプニモンやユラモンなど違う種類の幼年期デジモンも混ざっている。警戒しているのか、近寄ってこなかったがヒカリの抱いているボタモンが幼年期デジモンたちに近付き、何か伝えているようだ。しばらくしてボタモンが戻ってきた。その後ろに他の幼年期デジモンたちも付いて来た。

「遊んで〜、遊んで〜！」

「遊ぼう、遊ぼう」

幼年期デジモンたちはピョンピョン跳ねながら子供たちにねだり始める。取り囲まれた子供たちは困ったように顔を見合わせた。

「どうする？」

「遊んでる暇なんて……」

「あら、たまには良いじゃない」

「そうだよな、ヒカリちゃん!!」

態度を一変させる大輔にみんなが呆れた目線を向ける。唯一、ヒカリだけは気付いていないのか、無視しているのか、ボタモンたちを構っていた。

「それじゃ、ボール膨らますわよ」

京はバックからしぼんだビーチボールを取り出して膨らませている。そのボールを投げると幼年期デジモンたちはいつせいに駆け出す。大輔とブイモンもボールを追いかける。慶悟とリュウダモンも入り、京とホークモンも混ざり出す。ヒカリはカメラを出しながら、幼年期デジモンたちに声を掛けていた。

「……良いのかなあ」

「なにが？」

天音が愚痴を零すとファンビーマンが首を傾げた。そう聞きなが

らも騒ぎ声が立つたびに振り向き、混ざりたそうにつずつずと落ちて着かない。

「……………行っておいでよ、ファンビーマン」

「えー？ いや……………その……………うん！ 行ってくるー！」

我慢ならなくなったのか、最初は悩んでいたがファンビーマンも混ざりに行った。その後ろ姿を見て、天音はため息を漏らした。

「……………で、なにが良いのかな、なの？」

「……………いくら何でものんき過ぎじゃ……………」

「そうでもないよ」

「え？」

そう言うタケルは賢、伊織と目を合わせた。賢、伊織はそれぞれパートナーを連れ、街の中に消えていった。

「ボクたちはこの辺り見てくるよ。デスモンや黒い歯車に操られたデジモンが居たら危ないから」

「あ……………」

それを聞いてようやく天音は理解した。万が一、デスモンや黒い歯車に操られたデジモンが現れたら力のない幼年期デジモンたちはやられてしまうだろう。それならばあのデジモンたちの側にいて、安全を確保した方が確実だ。

「天音くんはここにいて。テイルモン、何かあったら連絡よろしくね」

「分かった」

そう言うのとタケルもパタモンを連れて歩いていった。天音は返事が出来ず、呆然と見送っていた。

「なんか……すごいなあ」

素直に驚嘆する天音にテイルモンは呆れたようなため息をする。

「何人が理解してるかは知らないけどね」

「あはは……それは……」

確実に慶悟は理解していない。ヒカリはおそらく分かっているだろう。大輔と京は微妙だ。

「……天音もサッカー混ざってこれば？」

「エンリョしとく」

天音は腰を下ろし、木の根に背を預けた。テイルモンも隣でサッカーをする子供たちを見ていた。いつの間にか、ヒカリも参加し、2チームに分かれて試合が始まっていた。天音は鞆からノートを取り出す。シャープペンを走らせる天音の様子にテイルモンは首を傾げた。

「何してるんだ？」

「絵、描いてるの。見る？」

そう言うとき天音は鞆から使い込んだノートを取り出した。テイルモンはそれを受け取り、ページをめくる。

「わあ！　すごい」

テイルモンは絵を見て驚いた。小学生が描いたとは思えないほどの出来栄だ。その全て鉛筆画で、風景や人物画などさまざまな絵が描かれている。風景画は夕暮れの街だったり、誰もいない公園だったりどこか寂しい絵が多い。人物画は逆に笑顔の女の子や活き活きしている野球少年など動きのある、見る人が思わず微笑んでしまうような絵が多かった。しばらくページをめくっていくと、ファンビーモンやリュウダモンたちデジモンや慶悟たちの絵もある。さらにめくっていくとテイルモンたちの絵も描いてあった。

「ワタシたちの前で絵なんて描いたことあったか？」

「ううん。見て覚えて描いたんだよ。記憶力は悪い方ではないから。まあ、見て描いた方が楽だね」

「ふん」

天音は答えながらも視線を外さずに絵を描き続けている。その目は真剣そのもので、集中していることが分かる。テイルモンは邪魔をしないように口を噤んだ。子供たちのはしゃいぐ声だけが辺りに響いていた。

天音はノートを叩いて消しカスを落とす。ふと見るともう陽が落ちてきていた。大輔たちは少し前からドッチボールを始めている。テイルモンは飽きたのか、毛繕いをしていた。

「……まだやってたんだね」

「あ、おかえり」

声を掛けてきたタケルは少し目を見開いていた。1時間半ほどは経っているが大輔たちはまだまだ元気な様子だ。天音も呆れたように肩をくすめた。

「まったくね。そっちはどうだった？」

「うん、特に……」

「異常ナシ！！　だよね？」

タケルの頭の上でパタモンが勢い良く前に出る。そのせいでずれた帽子を直しながらタケルは頷く。

「ちょっと気になる話は聞いたけど、今のところは異常はないよ。話はまた後でにして……ここを少し行ったところに集落みたいなのところもあって、あの子たちもそこから来たみたい。暗くなる前に送

ってあげないと……。伊織くんたちは？」

「まだ戻ってきてないよ」

「そっか。……連絡入れておこうかな」

「そうだね。じゃあボクは慶悟たちに声掛けてくるね」

天音は腰を上げ、いまだドッチボールを続ける大輔たちに近付いた。タケルはDターミナルを取り出し、メールを打ち始めている。

「おい！ そろそろ帰るよー！」

「へ？ ……ぶはっ！！」

「あ、ごめーん」

天音の声に振り向いた大輔の横顔に、京が投げたボールが直撃する。その衝撃で倒れ込む大輔。心配したブイモンやヒカリが駆け寄った。

「大丈夫？ 大輔くん」

「だ、大丈夫……」

「ぜんぜん大丈夫そうじゃないぞ、大輔」

幼年期デジモンたちも心配そうに眺めている。天音はその様子を冷やかに見ていた。

「何やってんの」

「お前が急に話し掛けてくるからだろ!!」

「自分の反射神経の悪さを人のせいにしないでくれる？」

「なんだとっ!!」

面倒臭そうにしている天音の態度が気に食わぬ、大輔は食って掛かる。天音は軽くあしらうが、それが余計に大輔を怒らせたようだ。

「やめなさいよ、2人とも」

「そうよ。喧嘩なんか良くないわ」

京とヒカリが止めに入ったので、それ以上の言い争いにはならなかったが、気まずい空気が流れる。そこにメールを終えたタケルが近付いてきた。先程のやりとりは聞こえていなかったようで、みんなの微妙な空気に首を傾げる。

「どうしたの？」

「何でもないよ。……それより、賢くんたちは？」

「……2人ともまっすぐ集落の方に来るって」

不貞腐れている大輔と機嫌の悪い天音を見比べて、察したタケルは何も突っ込まず、集落の話をした。ヒカリたちも納得し、みんなで集落まで行くことにした。大輔たちは幼年期デジモンたちを連れ、街を外れ森に入ってしまった。その道中、すっかり懐かれたヒカリは

遊び足りない幼年期デジモンたちに童話を聞かせていた。誰もが聞き覚えのある『桃太郎』である。話の所々に抑揚がつけられ、聞き手を引き込む読み方だ。

「……上手いね」

話が終わると天音はヒカリに声を掛けた。ヒカリは照れ臭そうに笑っている。

「ぜんぜんだよ！ でも、ありがとう」

「ヒカリちゃん、小さい子供とか好きなんだよ。将来は幼稚園の先生になるのが夢なんだって」

「……………夢、か」

そう呟くと天音は手持ち無沙汰だった手を握り締めた。それは震えるほど強く、込み上げるものを押し留めようと必死だった。

「オレは世界一のラーメン屋を開くことだ！！」

「聞いてないし」

大輔の一声に天音は間髪入れずに毒づく。唸る大輔を無視して天音はタケルに目を向けた。

「タケルくんは？ 夢とかあるの？」

「え、ボク？ えっと……」

言いよどむタケルに天音は首を傾げた。タケルは照れ臭そうに首筋を搔いている。

「わ、笑わないでね？」

「？ ……うん」

「あのね、夢っていえるかは微妙なんだけど……伝えたいな、って思ってるんだ。ボクが……ボクたちがデジモンと出逢って冒険してきたことの全てを。……見て、聞いて、感じて、思ったこと。嬉しかったことも、楽しかったことも。悲しかったこと、辛かったこと、苦しかったこと……。ボクがデジモンたちから貰ったものをいろんな人に知ってもらって、感じてほしいんだ」

そう語るタケルは遠くを見ていた。その目は今までに出逢ったデジモンや思い出を映している。

「それは……タケルにしかできないことかもしれないな。4年前から今まで通して参加しているのはタケルだけだから」

「うん。ボクもそう思ってる。だからやりたいんだ。たとえどんなに時間が掛かっても」

「……それって具体的にどうやって？」

ブイモンが興味津々に聞いた。するとタケルが答える前にパタモンが前に出た。

「本書くんだよ！ っていうか、もう書いてるんだよね？」

「ちょ……っ パタモン!!」

慌ててパタモンの口を塞ぐタケルだったが、もう遅かった。真っ赤になっているタケルにヒカリと京が驚いたように目を開いている。

「そうなの？ タケルくん、すごい!!」

「ねえ、今度みせてよ!!」

「だ、ダメ！ まだぜんぜん書けてないし………それに………」

そこまで言っているとタケルは急に黙ってしまった。その顔は少し強張っている。

「タケルくん？」

「あ……っ、ごめん。ちょっと余計なこと思い出しちゃって………うん、まだ書けないところあるから、見せられない、かな」

「………そう」

タケルの瞳に哀しみや切なさが宿っているようにみえた。長く戦ってきたのだ。その中で辛い思いもしてきたことだろう。そう思い、天音は何も聞かなかった。

「みんないろいろ考えてるんだなあ」

「そっという慶悟くんは何かないの？」

「どうせ、ソフトの選手とかそんなんじゃないの」

「いや。学校の先生」

何でもない風に言う慶悟に天音は思わず目を見開いた。

「はあ〜？ 頭良くないとなれねえじゃん」

「……人のことバカみたいに言わないでくれるか。オレ、成績は良い方だ」

大輔がバカにするように言うと慶悟はイラついたように顔を顰めた。リュウダモンは苦笑いしながら見ている。

「慶悟、バカっぽく見えつけけどホントは頭良いんだぜ。この間も学年4位だったけ？」

「3位だ」

「げっ……マジ？」

驚いている大輔に対し得意気な笑みを見せる慶悟。それぞれに自分の夢を語りだす子供たち。その様子を天音は遠巻きに眺めていた。

「天音？ どうしたの」

「……………何でも……………ないよ」

楽しそうに話をしている大輔たちを見て、天音は顔を歪めた。その表情があまりに辛そうでファンビーモンは心配そうに尻尾を下げ

た。

「あ、ここだよ」

楽しく語り合っているうちに集落に辿り着いた。幼年期デジモンたちが集落の方へ駆け出す。先程のビルのような建物はなく、丸太と藁葺きで出来た簡易的な家が建ち並ぶ。幼年期デジモンたちが戻ってきたのが分かったのか、家々からデジモンが姿を現す。

「ガジモンとエレキモンだ」

「パンダモンもいるわ」

ガジモンとエレキモンは幼年期デジモンたちを連れ、家の中に引き入れる。幼年期デジモンたちは口々に「ありがとう」と言っている家の中に入っていた。パンダモンも頭を下げて家の中に入っていた。その様子に天音は眉を顰めた。

「なんか警戒されてる？」

「どうしたんだろう」

子供たちに嫌な予感が浮かぶ。そしてその予感の的中する。大輔たちはパンダモンたちに事情を聞こうと、集落に下りた。すると地面が揺れ、遠くから地響きが轟く。

「な、なんだ!？」

「何か近付いてくる……っ」

子供たちとパートナーデジモンたちは地鳴りがする方向を見た。
森の中から砂埃が舞い、木々がなぎ倒されていく。そして巨大な身体が現れた。

「あれは……マンモンだ！」

鋭利な牙を突き上げ、襲い掛かってくる。避けながら大輔はタケルに食い掛かる。

「おい！ 異常なかつたんじゃないのかよ、タケル……！」

「さっきまではいなかったよ！ ヒカリちゃん……！ ペガスモンとネフェルティモンで動きを止めよう」

「分かったわ。テイルモン……！ デジメンタルアップ！」

「テイルモン アーマー進化——微笑の光り——ネフェルティモン」

「パタモン アーマー進化——天駆ける希望——ペガスモン」

ネフェルティモンとペガスモンはマンモンに向かっていく。2体が交差すると前足から光の鎖が現れる。

「「サンクチュアリーバインド……！」」

光の鎖がマンモンを捕らえた。その隙にブイモンたちも進化する。

「ブイモン進化————エクスブイモン」

「ホークモン進化——アキラモン」

「リュウダモン進化——ギンリュウモン」

エクスブイモンたちはマンモンを取り囲む。マンモンは力任せに光の鎖を引き千切った。興奮するマンモンの後ろ足には黒い歯車が突き刺さっている。

「また黒い歯車かよっ」

「このままじゃパンダモンたちにまで被害が出てしまう。マンモンをここから引き離すわよ」

ネフェルティモンたちはマンモンの気を逸らし、集落から離そうとしている。だが、暴れまわるマンモンはなかなか離れていかない。集落のデジモンたちが心配そうに様子を窺っている。

「……デジモンたちを避難させよう」

「そうだね。このままだと周りを気にしてペガスモンたちも本気で戦えない」

マンモンと集落を見比べながら天音が提案する。タケルも賛同し、他の子供たちも頷いた。子供たちは分かれてデジモンたちに声を掛ける。デジモンたちも理解したようで家から出てきた。

「ボクたちが先導する。みんなはマンモンをどうにかして」

「オレも付いてくぜ。途中で何かあったらマズイしな」

「分かった。気を付けてね、天音くん、慶悟さん」

完全体を相手にデジモンたちは苦戦を強いられている。あまり人数を割けなかった。

「大丈夫、任せて。頼んだよ、ファンビーマン」

天音はデジモンたちを連れ、集落を後にした。魁さきがけをギンリュウモンと慶悟が務め、殿しんがりに天音が付く。ファンビーマンは右往左往しながら辺りを警戒していた。

慶悟は辺りを見渡し、敵がないことを確認しながら先導している。しばらくすると遅れるデジモンが出てきてしまった。天音はそんなデジモンたちに声を掛け、励ます。だが、天音自身も慣れない舗装されていない道に徐々に疲れが出てきた。

「……………やっぱり、ボクもなんかスポーツしようかなあ」

そんなことを呟いているとファンビーマンが心配そうに近付いてきた。

「天音、大丈夫？」

「平気だよ。こんなことで根を上げていらんないしね」

「でもっっ」

「…………ファンビーマン、ボクね……………すごく不謹慎かもしれないけど、今すごく気分が良いんだ」

そう言う天音の表情は苦しそうでも、どこか清々しかった。場違いな様子のパートナーにファンビーマンは首を傾げた。その姿を横目でみた天音は小さく笑った。

「ボクは今、自分で考えて行動してる。それが正しいのかも分からない。だけど、動いてみなきゃ分からないことだってあるんだ。それをキミが……キミたちデジモンが教えてくれたんだ」

「よく……分からない」

理解しきれていないファンビーマンに天音は可笑しそうに笑った。それがますます分からず、ファンビーマンは渋い顔をしている。

「ごめん。……いいんだ、まだ分からなくても。今はただ、キミたちデジモンを助けたい。それだけだから」

天音は勢い良く踏み出し、遅れを取らないように足を速める。前では慶悟が振り返り、様子を窺っている。片手を挙げ、大丈夫だと伝えると慶悟はまた先に進んだ。

「さあ！ もうひと頑ば……」

遅れてきたデジモンたちの背中を押しながら、天音は励ます。しかし、それも背筋を凍らす風に遮られた。

「避けてっ!!」

天音の声にデジモンたちは一斉に散らばった。地面に転げた天音は振り返り息を呑んだ。そこには3体のマンモンが立ち塞がっていた。

「天音、大丈夫か!？」

「ボクは平気。それよりもパンダモンたちを……っ」

言葉を遮るようにマンモンの影が覆う。目の前に迫る鋭利な牙に天音は目を瞑った。

「ギアステインガー!!」

聞き覚えのある声に天音は目を見開いた。顔を上げると迫るマンモンに向かって小さな針を連射するファンビーマンの姿が映る。必死に攻撃を加えるファンビーマンだが、マンモンには効いていない。マンモンは鬱陶しそうにファンビーマンを鼻で払い除けた。その勢いで吹き飛ばされたファンビーマンは樹に身体を打ち付け、地面に伏せた。

「ファンビーマン!？」

駆け寄ろうとする天音の行く手を阻むようにマンモンが立ち塞がる。だが、それはギンリュウモンに阻まれた。

「棒陣破はとじり!」

流れるような動きで攻撃をかわしたギンリュウモンは天音からマンモンを引き離す。天音はその隙にファンビーマンの元に駆けつけた。

「ファンビーマン!　しっかりして!!」

抱き上げるファンビーマンはぐったりとしている。悲鳴にも近い声で呼び続ける天音の声にファンビーマンは瞼を押し上げる。

「あま、ねえ……？ ケガ、ない？」

「うん……うん！ ボクは大丈夫……ごめんね、ボクの為に……」

「そんな顔しないで、天音。ボクは大丈夫だよ？」

今にも泣き出しそうな天音にファンビーマンは笑ってみせる。そんなパートナーの姿に天音はムリヤリ笑顔をみせた。

「うん……ありがとう」

「えへへ、天音がボクたちのこと助けってくれるんでしょ？ だからボクは天音を守るよ」

「ファンビーマン……うん、守るよ。……ボクも、キミを守りたいっ」

天音の強い思いにD-3が光りを放つ。その光りはファンビーマンを包み込む。

「ファンビーマン進化——ワスプモン」

進化したパートナーを天音は呆然と見上げた。ワスプモンは天音を一瞥するとマンモンへと飛び込んでいった。マンモンと対峙していたギンリュウモンは完全体3体を相手に追い込まれていた。マンモンたちが一斉に鼻先をギンリュウモンへと向ける。

「ツンドラ……」

「ターボステインガー」

冷気がギンリウモンを襲う寸前、対峙する4体の間を風が吹き通る。2体のマンモンの黒い歯車がレーザー砲によって破壊される。最後の1体は辛うじて黒い歯車を外していた。ギンリウモンは力を使い果たし退化してしまった。慶悟はリュウダモンを抱きかかえ、ワスプモンを見上げる。

「お前……ファンビーマンか？」

ワスプモンは慶悟とリュウダモンを一瞥すると何も言わず、マンモンに向かっていった。あまりの速さに慶悟はその姿を目で追うのがやっとだった。啞然としている慶悟に天音が駆け寄ってくる。天音も何も言わず、ワスプモンを見守っている。

素早い動きでマンモンを翻弄するワスプモンはレーザー砲で逃げ場を奪う。マンモンは動きを封じられ、攻撃に転じる。鼻先に冷気を集めるのを見て、ワスプモンもエネルギーを溜め始める。

「ツンドラプレス！」

「……ベアバスター……」

冷たい冷気がワスプモンに向かっていく。だが、一瞬の内に背後に回ったワスプモンはエネルギー砲を叩き込んだ。倒れるマンモンから抜け落ちた黒い歯車が粉々に砕け散った。

「やったあ……」

喜んでいる天音と慶悟に遠くで自分たちを呼ぶ声が届いた。

「そっか、ファンビーモンも進化したんだ」

ようやく追い付いたタケルたちは申し訳なさそうに眉を下げた。ペガスモンたちもあちこち傷付き、苦戦をしていたことが分かる。賢と伊織も居り、進化したパートナーたちも傷付いている。

「あの後、他にもマンモンが現れて結構ヤバかったんだぜ。賢たちが来てくれたからなんとかなったけどよぉ」

大輔がそう言うと賢と伊織も申し訳なさそうにしている。

「すみません。ボクたちがもう少し早く駆け付けられると良かったんですが……」

「少し気になる話を聞いたんだ」

伊織と賢は目を配らせ、頷いている。その様子に大輔たちは首を傾げた。

「なんだよ」

「実は、黒い歯車に操られたことがあるっていうデジモンに会った

んだ。そのデジモンは誰かに歯車を抜いてもらったり、破壊してもらったりしたわけじゃないらしい」

「……どういうこと？」

以前から黒い歯車を知っているタケルは険しい顔をしている。

「勝手に抜けた、と言っていたんです。それを見ていた他のデジモンは歯車はどこかに飛び去ったと証言していました」

「飛び去った……？」

「でも、それって良いことなんじゃないの？」

不安を隠しきれないタケルの隣で慶悟が眉を顰めて言った。それに京が反論する。

「そうも言い切れないわよ。何の理由もなしに突然抜けて、突然飛び去るなんて。何かあると考えた方がいいわ、絶対」

「ねえ、タケルくん。黒い歯車にデジモンを操る以外の能力はないの？」

ヒカリの疑問にタケルは考え込む。

「……デジモンを操る。闇の力を増幅させる。後はファイル島にはめ込まれてる歯車で島を分散させたことがあるくらいで、他に覚えはないなあ」

タケルの言葉にパタモンも頷いた。それを聞くと大輔は腕を組ん

だ。

「じゃあ、タケルが知らない能力があるってことか？」

「そう考えた方が良くもね」

不安げな子供たちに幼年期デジモンたちが恐る恐る近付いてきた。子供たちの不安が伝染したのか、幼年期デジモンたちも不安そうに見つめている。

「あ、そういえばこの子たちどうする？」

「ここから少し行ったところに他のデジモンたちが集落を作ってるから、そこまで送ろう」

子供たちは賢が話を聞いた集落までデジモンたちを送ることにした。幼年期デジモンたちはさっきの活躍を見ていたからか、すっかり天音とファンビーモンに懐いてしまった。

「ごめんね。キミたちの家まで壊しちゃって」

「大丈夫！」

「助けてくれて、ありがとう」

デジモンたちを集落まで送った子供たち。集落のデジモンたちは快くパンダモンたちを受け入れてくれた。集落のデジモンと別れ、ゲートの開いているパソコンまで戻った。天音は沈む夕陽を見ながら鞆の中からノートを取り出した。開いたページを見て、頬を緩める。

「天音？ 何してるの、置いてくよお？」

「今行くよ！」

ファンビーモンの呼ぶ声に天音は慌ててノートをしまい、走り出した。鞆の中で満面の笑顔の仲間が大切そうにしまわれていた。

空を飛び回る黒い歯車に向かって飛び出す黄金の身体。放たれた雷に歯車は粉々に砕け散った。地面に飛び降りた黄金の身体はそれでも納まらない嫌な気配に全身の毛を逆立てさせる。

不意に飛び込んできた殺気に黄金の身体は飛び退いた。しかしその身体に鮮血の筋が浮かび上がる。黄金の身体は闇より放たれる殺気に後ずさった。無数の気配に黄金の身体は覚悟を決める。黄金の身体は闇の中に飛び込んでいった。

第六話 遺跡の守護者 聖獣ライアモン

荒れ果てた街にやって来た子供たち。そこで幼年期のデジモンたちを親しくなる。街が黒い歯車に操られたデジモンに襲われ、不安な日々を送るデジモンたちを見て、天音はデジモンたちを守りたいと強く思う。そこに黒い歯車に操られたデジモンが襲い掛かる。デジモンたちを避難させる天音だったが、ファンビーマンが天音を庇いケガを負ってしまう。パートナーを守りたいと願う天音の想いがファンビーマンを進化に導くのだった。

【第六話 遺跡の守護者 聖獣ライアモン】

深い深い森の中。霧が立ち込める遺跡から1つの影が出てくる。それは遺跡の入り口で立ち止まり、天を見上げた。空を飛び交う3つの歯車は散り散りに去っていった。それを見送った影は摩く漆黒の髪を鬱陶しそうに払った。霧に包まれる森を見遣ると、深い藍色の瞳を面倒臭げに細める。影は遺跡から飛び降り、深淵なる森へと駆け出していった。

木々に隠れながら近付いてくる無数の殺気に身構える。頭部の感覚を揺らし、僅かな風の乱れを感じる。

「左！」

ワスプモンの声にデジモンたちは一斉に左に向きを変える。同時に飛び出してきた昆虫型のデジモンたちが襲い掛かってきた。

「シャドウシックル！」

3体のカマキリのような姿のデジモン——スナイモンが両腕の鎌から音速の衝撃波を放つ。

「デッドリースティング！」

2体の蜂のようなデジモン——フライモンは尻尾から毒針を連射する。

「シザーアームズ！！！」

クワガタのような形のデジモン——クワガーマンの巨大な鋏が襲う。

飛び退いたパートナーデジモンたちは衝撃波を払い除け、毒針を打ち落とし、巨大な鋏を押さえつけ、攻撃に転じる。

「エクスレイザー！」

「ヘブンズナックル!!」

「てっぺん徹甲刃!!」

「グライドホーン!」

「メガトンプレス!」

「ティーダ・イヤ!!」

「ターボステインガー!」

「カースオブクイーン!!」

「スパイキングフィニッシュ!!」

必殺技を喰らった昆虫型デジモンの黒い歯車はあるいは抜け落ち、あるいは砕け散った。全てのデジモンが正気に戻ったのを確認し、パートナーたちは身構えを解いた。

「……終わったよな?」

戦いが止んだのを見計らって子供たちは木の陰から顔を出した。パートナーたちも敵がいなかったのを確信し、成長期へと戻る。

「はわあ、なんか格好ええわ」

「うっっ 拙者も進化したいでござるっ」

「そうだね」

「ホント。足手まといにしかなんねえし」

感心している凜華をよそにヒヨコモンは悔しがっている。その言葉に奏とピコデビモンも同調する。その様子を見てクダモンは呆れたようにため息を吐いた。

「焦っても仕方がないだろう」

「ま、悔しいのは分かるけど……成るようにしかないからな」

「ドライだなあ、薫は」

淡々と言う薫に天音は苦笑いする。腕に抱かれたファンビモンは天音と薫を不思議そうに見比べている。

「ですが、ラブラモンたちのだいぶ戦いに慣れてきましたね」

「コンビネーションも良くなってきたよな!」

「ブイモンたちには負けるけど」

怪我することも減ってきてきて鳴は嬉しそうにしている。その様子を見てラブラモンも笑っていた。慶悟はリュウダモンの肩を叩きながら自慢げに言っている。

「そりゃそうさ! あらゆる戦場を潜り抜けてきたからな!」

「いうほど潜り抜けてないぞ?」

誇らしげに言う大輔にブイモンは疑問を抱く。突っ込まれた大輔はブイモンの首を絞めた。それを賢とワームモンで止めに入った。

「大輔、その辺で止めておけよ」

「ブイモン、大丈夫？」

カクカクと頷くブイモンに京とヒカリは笑った。

「何やってんのよ、大輔」

「全く、子供ね」

「あら、大輔くんらしいじゃない」

ヒカリの言葉に照れる大輔。バカにされているのに気付いていないらしく、テイルモンとホークモンは顔を見合わせて苦笑する。そんな様子を遠巻きに見つめていたタケルは小さくため息を零した。傍で大輔たちを見ていた伊織は首を傾げる。

「タケルさん、どうかしましたか？」

「腹でも減ったぎゃ？」

「うっん、大丈夫。なんでもないよ」

心配そうに見上げる伊織とアルマジモンにタケルは笑顔で誤魔化す。伊織は納得していないような表情だったが、結局何も聞かなかった。1度聞いてダメなら、何を聞いても誤魔化されると分かっ

いた。問い詰めるようなことはせず、伊織も大輔たちに混じる。タケルは申し訳なく思いながらも、何も問わない伊織に感謝した。タケルは片方の掌を見つめ、力強く握り締める。力を込めるタケルの姿をパタモンは黙って見守っていた。

森の中を一回りする頃には陽が傾いてきていた。この辺りには黒い歯車に操られたデジモンはいないようだ。

「今日は終わりにしよか」

東の空が紫暗になってきたのを見て賢が提案する。他の子供たちも天を仰ぎ、同意する。

「……明日はどうする？」

タケルが聞くと一同に渋い顔をした。

「あー、オレ無理。明日はソフトの練習試合あるんだ。1日捉まってると思う。最近サボりがちで先輩から睨まれてんだよなあ」

慶悟が肩の力を抜きながら告げる。今日は金曜日。明日は土曜日で学校は休みだ。入り組んで探し難いエリアに行くには最適な日なのだが。

「ごめん！　ボクも明日は塾の模試があつて無理そう」

「あうゝ、ウチもあかん。弟らと約束あんねん」

「オレらもちよつと……」

「……すみません」

「………用事があるなら仕方がないよ」

申し訳なさそうに言う天音たちにタケルは小さく笑った。頭を下げる慶悟らの様子に大輔は言い難そうに口を開いた。

「悪い、オレと賢も無理だ。明日は賢のところでサッカーの練習試合あるんだ」

「……ごめん」

「そうなの？」

大輔と賢が告げると他の4人もおずおずと手を上げる。

「あのゝ、アタシもちよつと無理かも。お姉ちゃんが風邪引いちゃつてお店手伝わなきゃなのよ」

「すみません。明日はお爺様のご友人が剣道を教えて下さることになつてて……」

「アタシも明日は家族で出掛けることになつてるの」

「ボクもちよつと用事あるんだけど……」

それを聞いたタケルは呆然としていた。逆に慶悟たちは少し安心したように息を吐いた。

「なんだよ、タケル以外みんなダメなんじゃん」

「そうみたいです」

「じゃあ、明日はお休みつてことでいいんじゃない？」

「たまには身体を休ませることも必要だから、ね！ タケルくん」

どう聞いても言い訳をしているようにしか思えない発言の数々にタケルは思わず深々とため息を吐いた。そのため息に他の子供たちとデジモンは身を竦める。パタモンもタケルの頭の上で様子を窺っている。

「……………別に構わないけどね」

それだけ言うとタケルはさっさと行ってしまった。あまり賛成していないのが分かる。その後ろ姿を見て子供たちは顔を見合わせ、肩をすくめた。

土曜日。

タケルは部屋に籠り、パソコンと向かい合っていた。パタモンは足元で積み木で家を作っている。タケルは画面に綴られている文字を目で追ってキーボードを打つ。しかし打っては消し、打っては消しを繰り返し、しまいには半分近くまで消してしまった。タケルは投げやりに背もたれに身体を預けた。

天井に目を向けて、目を瞑る。瞼の裏に映るのは忌々しい記憶。それを蔽い^{おお}尽くすように闇が広がる。その闇が徐々に大きくなっていく。

「……タケル！」

耳の元で出された大きな声にタケルは目を見開いた。首を横に向けるとパタモンが心配そうに見つめていた。

「大丈夫？ タケリュ」

「……うん」

画面に目を戻すとすでに暗くなっていた。パタモンは画面とタケルの顔を見比べている。

「……………やっぱり、書けないの？」

主語が抜けているが、何を言いたいのかは分かっている。タケルは小さく笑ってパタモンの頭を撫でた。肩に乗っかってきたパタモンは甘えるように顔を摺り寄せてくる。

「今はまだ、ね」

今はまだ気持ち先走って、言葉が出てこない。もう少し時間が経って心に余裕ができたら、きつと書ける日が来るだろう。その為にもやらなければならない事がある。タケルはパタモンから手を離し、マウスに触れた。先程まで書いていたデータを保存し、画面から消す。そしてキーボードを打ち、違う画面が現れる。

「タケリユ？」

「少し行かない？ デジタルワールド」

画面に現れたデジタルゲートにパタモンは目を見開いた。

「1人で？ 危ないよ！」

「少しだけ、ね？」

最初は渋っていたパタモンだったが、結局タケルの笑顔の前に押し負けてしまった。

「まあ、ちよつとだけだからね！」

「ありがと、パタモン」

タケルはDターミナルとD-3を手を取った。Dターミナルを仕舞って、D-3をパソコンに掲げる。D-3に反応してゲートが開く。部屋中に光りが溢れ、タケルとパタモンは姿を消した。

霧に溢れる森に黄金の風が駆け抜ける。不意に足を止めると、来た道を振り返った。突然、現れた気配に思わず身構える。

「……っっ」

踏み出した足から力が抜け、支えられなくなった身体が崩れ落ちる。打ち付けた地面に紅いシミが広がった。立ち上がるのもやつとな身体で来た道を下り始めた。ふらつく身体は今にも倒れてしまいそうだった。しかし瞳に宿る闘争心は燃えたぎっている。黄金の身体は傷を忘れるように獣道を駆け戻った。

ペガスモンは真っ白な霧に覆われる森を睨んだ。そして背に乗っているパートナーの頑固さに、気付かれぬようため息を吐いた。

「……タケル、やっぱり帰らない？」

「うん……もう少しだけ」

何度目のやり取りだろう。このエリアに着いてもう2時間が経過した。適当に設定したらしいが、ペガスモンはこのエリアに来てから嫌な気配に苛まれていた。

来た時から掛かっていた霧は時間が経つにつれてその濃さを増していく。そして森に潜む生物の気配は異様に殺気立ち、それでいて静まり返っている。危険です、と言わんばかりのこの森に入りたがるパートナーの心情がペガスモンには理解でなかった。歩いて行こうとするタケルを必死で説得し、空から見て回っている。だが、空から見えるのは白い霧と所々から伸びる背高い樹の枝だけだ。それでもタケルはここから離れようとしなかった。

「……………ペガスモン、あそこ」

「え？」

ずっと黙って辺りを見渡していたタケルが突然声を掛けた。一瞬、反応の遅れたペガスモンはタケルが指差す方向に目を向ける。その先には霧の薄くなっている場所があった。うつすらと見える陰は泉のようだ。

「……………行くの？」

「勿論！」

あからさまに嫌そうな顔をしたペガスモンだが、タケルの有無を言わさぬ物言いに従わざるおえなかった。

ゆつくりと降下するペガスモンは泉の畔へ足を着いた。辺りに生き物の気配は感じられない。うつすらと霧掛かる泉は波1つなく、穏やかだ。それが余計に不気味に思えた。

タケルがペガスモンの背から飛び降りる。泉は不気味であるが、特に異変があるようには見えない。だが、嫌なプレッシャーを感じた。

「ねえ、タケルやつぱり……………タケル？」

泉にばかり目を向けていたペガスモンはタケルが傍を離れていることに気が付かなかった。タケルは泉から離れ、森の中に入っていく。慌てて追いかけたペガスモンは、その先にある光景に息を呑んだ。木々はすぐに開け、森の中に巨大な岩が積み上げられていた。その岩山には注連縄しめなわが巻きつけられており、至るところにお札が貼られていた。

「何だ……………これ……………」

異様な光景にペガスモンは思わず顔を顰めた。そして先に来ているはずのパートナーを捜す。その姿はすぐに見付かった。タケルは岩山の前に佇んでいる。岩山を見上げる瞳はどこか虚ろだった。

「……………タケル？」

様子がオカシイ。タケルはペガスモンの声が届いていないように反応を示さない。じつと岩山をみつめていたタケルはゆっくりと右手を上げる。その手の先には岩山がある。あと少しで手が届こうとした、その時だった。

「……………触れるな」

突如として飛び込んだ声にペガスモンはタケルを庇うように距離を詰めた。翼に包まれたタケルは目を見開き、岩山に触れる寸前だった手をゆっくり下ろす。1度ペガスモンを見て、その先にいる声の主に目を向ける。

「それに触れるなっ」

木々の陰から現れた黄金の身体にタケルは息を呑んだ。黄金の腕から伸びる爪は鋭く光り、電気を帯びたタテガミからは火花が散っている。二又の尻尾は静かに揺れ、闘争心に満ちた瞳で睨みつけている。

「キミは、あの時の……」

「ライアモンっ」

黄金の身体を太陽に反射させ、ライアモンは今にも襲いかかろうと構えていた。それを見てペガスモンも立ち向かわんと前に出た。しかしタケルがそれを阻止する。

「ペガスモン待つて！ ライアモン、キミ……ケガしてるんじゃない……」

タケルはライアモンの足元を見て問い掛ける。ライアモンの足元には赤い跡が残っている。それは次第に大きさを増していつている。一目で酷い怪我だと分かる。ペガスモンもそれを見留めたが、構えを解くことはなかった。

「……お前には関係ない。ここから立ち去れ」

「そんなっ ひどいケガしてるのに放っておけないよ！」

そう言つて近付こうとするタケルにライアモンはタテガミに溜まった電気を弾く。

「サンダーオブ……」

ライアモンが必殺技を放とうとしているのを見て、ペガスモンはタケルを庇うように身を寄せる。目を瞑ったタケルだが、いつまで経っても電撃が襲うことはなかった。恐る恐る目を開けると目の前に小さな影が立ち塞がっていた。両手を広げ、タケルたちを庇おうとしている。そのデジモンは剣道着に面を着けた、以前ライアモンと同じくゲンナイ宅に現れたデジモンだった。

「コテモン……っ 何のつもりだ？」

目の前に立ち塞がるコテモンを睨み付けるライアモン。身体を竦ませるコテモンは、それでも退けようとはしなかった。震える膝を押し留め、ライアモンを見上げた。

「たっ、助けて……くれた………悪い人………違っっ」

震える声でそう告げるコテモンにライアモンは面倒臭そうに目を細める。半歩足を出したライアモンの身体から力が抜けた。

「………！ ライアモン！？」

駆け寄ろうとするタケルをペガスモンが制する。咎めるような視線を向けるタケルだが、ペガスモンも動じない。その様子を見てライアモンは馬鹿にしたように鼻で笑った。

「………甘いな。敵に情を掛けるなど、自殺行為だとは思わないのか？」

「キミは敵じゃない」

「何……？」

はつきりと告げるタケルにライアモンは探るような目線を向ける。ペガスモンも目を見開き、パートナーを見ていた。コテモンもタケルを見つめている。

「キミはゲンナイさんの家でトリケラモンの攻撃から助けてくれた。一緒に戦ってくれた。だから敵じゃない」

「オレが助けたのはお前じゃない、コテモンだ。共に戦ったのも利害の一致だ」

「確かにキミが助けたかったのはこの子だったのかもしれない。でも結果としてボクは助けられた。……それに利害の一致ってことは少なくともデスモンの仲間じゃない」

「お前たちの味方でもない」

「敵の敵は味方ってこともあるよ！」

「違っって言うってんだろっ」

終わりの来ない押し問答にペガスモンは立ち位置を失う。コテモンも戸惑ったようにタケルとライアモンを見比べていた。だが、ムキになって言い争っている2人に先程の緊張感と敵意はなくなっていた。

「お前……ホント意地っ張りっていうか、お人好しの考えなしだな！」

「キミも頭の固い分からず屋だね」

「コイツ……………つつ……………うぐつ!!」

「ライアモン!!」

言い争いながらもライアモンの身体は限界に達していた。崩れ落ちた身体は光りに包まれ、小さくなっていく。タケルはペガスモンの制止を振り解いてライアモンに駆け寄った。ペガスモンとコテモンも後を追う。光りから解き放たれたその身体からは立派なタテガミも消え、数回りも小さくなっていた。

「レオルモンだ。成長期に戻ったんだ」

ペガスモンがそう告げるとタケルはレオルモンを抱きかかえた。至るところに傷を作ったレオルモンは気を失っている。浅いが息はしっかりしており、生命に別状はなさそうだ。

「傷の手当しないと……………」

「タケル」

不服そうにパートナーを呼ぶペガスモン。たとえタケルの頼みでも1度は襲い掛かり、そして今は攻撃を加えようとした相手を簡単に信じていいのか悩みどころだ。そんなペガスモンの様子にタケルはただ穏やかに笑っただけだった。何を言っても聞かないであろうパートナーにペガスモンも諦めるしかなかった。

どうしようかと悩んでいると、タケルはコテモンに裾を引っ張られた。見下ろすとコテモンが泉の方を指している。いまいち意味が分からず、首を傾げるとコテモンの小さい声が聞こえてきた。

「……泉………傷に………良い」

「そうなの？ 傷に掛ければ良いの？」

タケルが聞くとコテモンは頷いた。タケルたちは泉まで戻り、畔に腰を下ろした。レオルモンを地面に横たわせ、手で水を掬う。それを丁寧にレオルモンの身体に掛けていく。険しい顔をしていたレオルモンの表情が少し穏やかになる。それを見てタケルもほっとした。

「……近く………薬草、ある………」

そう言いながらコテモンは森の中に駆け出していった。持つてきてくれるらしい。タケルはコテモンを見送ってから、泉に目を向けた。

「………静かだね」

「そうだね」

独り言にペガスモンが答える。言動に呆れながらも傍にいてくれるパートナーにタケルは心の内で感謝した。

その時、茂みの奥が動いた。身構えるタケルとペガスモンだが、何も出て来る気配はない。

「少し見てくるよ。タケル、すぐ戻るからここにいて」

告げるとすぐにペガスモンは森の中に入っていった。取り残されたタケルはおとなしく待つことにする。傍らではレオルモンが静か

な寝息を立てていた。時折、傷が痛むのか身を振り、眉を顰めていた。タケルは泉の水をレオルモンの腕に掛けた。

ふと、森の先に先程の岩山が目に入る。この場所に不釣り合いな岩山は妙に存在感があった。タケルはその岩山から声を聞いたような気がした。はつきりとした声ではない、風のざわめきのような不確かな声だ。タケルはもう1度、岩山へと近付いた。目の前に聳え立つ岩山からは先程の声は聞こえてこない。何かに引き寄せられるように、タケルは岩肌に右手を伸ばした。

「……………聖なる者が触れてはいけない……………希望の子供よ」

声と共に押さえられた右手は寸前のところで止まっていた。ゆっくりと下ろされる右が自分のものではないように感じる。完全に下ろした右手から押さえていた左手が離れる。その左手を追うようにタケルはようやく隣に立つ人物に目を向けた。背の高い、15、6歳の青年と目が合う。その瞳は深い藍色をしており、静かな海を思いつかべる。どこか儚く、愁えているようにも見えた。漆黒の長い襟足が風に揺れている。

「貴方は……………」

突如として現れた青年にタケルはそれしか言葉が出てこなかった。ただ驚き、呆然としているタケルに青年は感情の籠らない目を向ける。

「……………人に名を聞くのなら、まず自分から名乗るんだな」

「え？ あ、えっと……………高石タケル、です」

言われて名を告げるタケルに青年は目を細めた。

「……………天然か」

青年はそれだけ言うた泉の方へ歩いて行く。言われた意味が分からず、困惑するタケルは青年の後を追う。

「あ、あの……………」

「どこの誰かも分からん奴を相手に本当に名乗ってどうする。ましてやパートナーも連れずに……………」

「あ、そっか」

言われてから思い至る。もし青年がデスモンの仲間だったら、かなり危険な状況に陥っているだろう。下手をしたら生命の危険だつてあるのだ。そう思うと背中に冷や汗が滴った。

青年は泉の畔まで来て腰を下ろした。そしてタケルに冷たい視線を送る。

「これ……………お前がやったのか？」

そう言つて立ち上がった青年の腕にはレオルモンが抱えられている。青年の厳しい目線に、その意味を見出す。

「ち、違います！　ボクが見つけたときにはもうひどいケガをして……………」

慌てて否定するタケルを一瞥すると、青年は腕の中に納まるレオルモンに目を向けた。酷い怪我はしているが、命に関わる怪我ではなさそうだ。良く見ると傷口が濡れている。誰かが泉の水を掛けた

のだろう。そう思い、青年はタケルへと視線を戻した。タケルはどうすれば良いのか分からず、困惑したように目を泳がしている。

その時、草むらが激しい音を立て動いた。半歩下がり、身構えた青年は現れたデジモンに眉を顰めた。

「タケル、大丈夫!？」

駆け込んできたのはペガスモンとその背に乗ったコテモンだった。コテモンの腕の中には薬草と思われる葉を大量に抱えている。コテモンはペガスモンの背から飛び降り、青年に駆け寄った。

「レイ……?」

「何してるんだ、コテモン」

レイと呼ばれた青年はコテモンに怪訝そうな目を向けている。コテモンは両手を突き出し、薬草を見せる。

「……レオルモン………傷………手当て………」

おどおど伝えるコテモンの断片的な言葉でもレイは正しく理解した。しゃがんでコテモンから薬草を受け取っている。ペガスモンはタケルに近付き「誰?」と聞くが、タケルも首を横に振っていた。そこにコテモンが近付いてくる。コテモンはタケルの手を掴み、引っ張ってきた。

「一緒に………行こ?」

「行くってどこに?」

「この先だ」

そう言ってレイは森の奥へと指を差した。その片手にはレオルモンを抱え、どこから取り出したのか分からないが、薬草を入れた袋を肩から下げていた。タケルとペガスモンが顔を見合わせているとコテモンはぐいぐいと腕を引く。行くしかなさそうな雰囲気。タケルとペガスモンは諦めて一緒に行くことにした。その時、タケルは後ろの方から再び声を聞いた。振り返ると岩山が目に入ってくる。じっと見つめていると、その視線が闇に覆われた。

「……！」

「あまり見るな。闇に魅入られるぞ」

レイはタケルの目を片手で覆い、そう言い放つ。驚いたタケルは思わずレイを凝視した。

「それって、どういう……？」

「そのままの意味だ」

それだけ告げるとレイはさっさと森の中に入ってしまった。どうやら教えてはくれないらしい。タケルは眉を顰めるが、引つ張つてくるコテモンに負け、レイの後を追った。

深い霧の中に行くタケルは前を歩くレイを見失わないように目を細めた。レイもコテモンも慣れているのか、迷わずに進んでいる。進化を解いたパタモンは置いていかれると困るのでタケルの帽子にしがみ付いている。その目はパートナーの手を引くコテモンに向けていた。

「キミ、コテモンって言うんだね。ボクはタケル。よろしくね」

タケルが声を掛けるとコテモンは大きく2回頷く。どうやら話すのはあまり得意ではないらしい。

「言い忘れてたけど、さっきは助けてくれてありがとう」

「ぼ、ボクも……助けて、くれて………ありがとう………」

コテモンは嬉しそうに繋いでいる手を振る。その姿にタケルも思わず笑顔になる。パタモンは面白くなさそうに頬を膨らませた。

「もお！　いつまで手え繋いでるの〜っ！」

「え？　だって繋いでないと迷うよ、この霧じゃ」

「う〜っ　だつてえ〜！」

「なに拗ねてるの？」

パタモンは肩の上に移動し、タケルに顔をすり寄せる。甘えてくるパートナーにタケルは呆れたような微笑みを見せ、頭を撫でてやる。

「……仲………いいね………」

羨ましそうに言うコテモンにタケルは笑顔を見せた。その様子を見ていたレイは呆れたようにため息を吐く。

「おい、着いたぞ」

そう言われ、森を抜けたタケルは息を呑んだ。開けた森の中心に建物が建っている。それは古い遺跡のようで壁がところどころ剥がれ落ちていた。階段を上った先に入り口があるようで、中の様子は窺えない。

「ここは？」

「オレらの寝床」

レイは素っ気なく答え、階段を上っていく。コテモンに手を引かれ、タケルも階段を上る。その先から3匹のデジモンが駆け寄って来た。

「レイ！ お帰りなさい」

駆け寄ってきたのは小熊のような姿のデジモンで蒼い帽子を反対向きに被り、身体と腕に同じ色のベルトを着けている。

「コテモンも一緒だったんだね」

隣にいるのは紫の身体と大きな尻尾が印象的な小さいドラゴンだ。額には赤い結晶が埋め込まれている。

「レオルモン、どうしたの？ ケガしてる！！」

最後に来たのは黄緑の体をした小猿だった。豹柄の布を身にまとい、大きなパチンコを背負っている。

「ベアモンに、ドルモン……それにコエモンだよ」

パタモンが耳元で教えてくれる。その声にベアモンが視線を向けてきた。

「……そっちは……人間？」

その声に警戒が含まれており、タケルは目線を低くした。

「こんにちは。ボクは高石タケル。こっちはパートナーのパタモン。突然お邪魔しちゃってごめんね」

怖がらせないように優しく言うタケルだが、ベアモンたちは警戒心を解こうとはしない。怯えたように距離を置くベアモンたちの様子にタケルは困った顔をする。するとコテモンがタケルの腕に抱き着いてきた。

「……タケル………良い人………睨んじゃ……ダメ………」

コテモンの様子を見て3匹は顔を見合わせている。レイも意外そうにタケルを見ていた。

「珍しいな、コテモンが他人に懐くなんて。コイツは臆病なうえ警戒心が強いから滅多なことでは人には懐かない」

「そうなんですか？」

首を傾げるタケルにおずおずとドルモンが近付いてきた。だが、まだ一定の距離がある。

「……苛めたりしない？」

「しないよ！ 絶対にしないっ」

突然の言葉にタケルは思わず息を呑んだ。そうはつきりと告げるとドルモンはまだ少し怯えながらも傍までやって来た。タケルはその様子に目を細め、ドルモンに手を伸ばす。ドルモンは一瞬だけ身体を強張らせるも、撫でられた頭に緊張を解いた。

「大丈夫、ね？」

笑顔を向けるタケルにドルモンも僅かに微笑んだ。その様子を見ていたベアモンとコテモンも敵ではないと判断したのか、近くまで寄って来た。レイはため息を1つ零して遺跡の中へと足を向けた。

「いいから、早く中に入れ。レオルモンの手当てもしないと」

「あ、ボクもお手伝いします」

腰を上げたタケルはコテモンたちと共に遺跡の中へ入った。だが、その足はすぐに止まった。思わず開いた口が塞がらなくなる。

「幼年期デジモンがいっぱいだよ」

入った先は大広間のような部屋だった。その中にはパタモンの言う通り、遺跡の中には多種の幼年期デジモンがいた。その数11匹。その中の1匹が目に入り、タケルは息を呑んだ。

「ピピモン……？」

そこには冬のベリアルヴァンデモンとの戦いの際、利用され生命を落とした及川悠紀夫のパートナーと同じ幼年期デジモンが他のデジモンたちと遊んでいた。思わず凝視しているタケルにレイは近付いた。

「知ってるのか？」

「あ、いえ……ボクの知ってるピピモンとは限らないし……」

「アイツはパートナーを失って森を彷徨ってるところを拾ったんだ」

「え……？」

それを聞いてタケルは確信した。あのピピモンは及川悠紀夫のパートナーだ。事件の後、ピピモンは蝶となった及川悠紀夫のいるデジタルワールドに残った。その後はどこに行ったのか、元気でいるのか、誰も分からなかった。子供たちも、特に伊織がひどく心配していたのを覚えている。

「ここにいるデジモンたちは訳ありな奴らばかりだ。パートナーになれなかったデジモンや人間の世界に迷い込んで酷い目に合わされた奴もいる。始まりの街から外れたデジタマから生まれた奴、群れからはぐれた者、元々この森にいたデジモンもいるが、大体ははぐれ者だ」

レイが淡々と言うのを聞いてタケルは胸に引つかかるものがあつた。ドルモンたちが怯えていたのも現実世界で心無い人間に酷い目に合わされたかもしれない。パートナーデジモンを持つ者が増え、デジモンが認められてきていると思っていた。だが、デジモンたちを侮蔑する人も少なくないのだ。そんな人の前にデジモンが、ましてや力のない幼年期デジモンが現れたら……。少し考えれば分かることだった。目の前の平和に満足し、目を瞑ったのは……自分たちだ。

目頭が熱くなるのを感じ、タケルは思わずしゃがみ込んだ。パタモンが心配そうに声を掛ける。だが、タケルは首を振り、聞こうとしない。レイは何も言わず、タケルを見下ろしている。そして目の前で遊びまわるデジモンたちに目を向けた。

「……………今まで存在すら知らなかったんだ。いきなり認めろって方が無理な話だ。それでも認めて欲しいなら、お前たちが動くしかないんじゃないのか？　今から下見て、立ち止まっててどうする。前向いて受け止める。これが現実だ」

そう告げるレイの声はあくまで冷静で淡白としている。それがタケルにとって現実の重みとして押し掛かった。動こうとしないタケルにレイはため息を吐いて、遺跡の奥へと足を進めた。だが、その足はすぐに止まる。レイが振り返ると、タケルが服の裾を掴んでいた。

「……………レオルモンの手当てするんですよね？　……………手伝います」

「……………なら、早く来い」

顔を上げたタケルの瞳が潤んでいたが、確かに前を向いている。

レイは何も見なかったフリをした。重い腰を上げたタケルはレイの後を追って奥へと進む。薄暗い廊下を進んだ先にも部屋のような空間が広がるが、真っ暗で何も見えない。目を細め、辛うじて目の前の青年を捉えられる程度だ。下手に動けないタケルをよそにレイは慣れた足取りで中に入っていく。そしてカチツ、カチツと音が鳴ったかと思うと、一角で明かりが灯った。見るとレイがランプに火を灯している。他にも数個ランプに火が灯るとようやく部屋の全貌が把握できた。

そこは先程の大広間よりも2周りほど小さい広間だった。真正面に部屋を抜ける廊下が続いている。傍らにはワラを敷き詰めだ寢床のような場所がある。すぐ側には古びた毛布も置いてあった。そして反対側には岩を削って作られた大きなテーブルと形の違う3つの椅子が置いてあった。テーブルには古いパソコンやテレビが置いてあり、全てがコードで繋がっている。そしてコードの先端は遺跡の壁に直接繋がっていた。

レイはワラの上にレオルモンを置き、手に持っていた袋をタケルに投げ付けた。反射的に受け止めたタケルはそれが薬草の入っている袋だと気付くのに少し時間が掛かった。

「後よろしく」

「え………？」

それだけ言うとレイは反対側に置いてある椅子に座り、コンピュータを起動させている。

「必要なものあればそいつらに言ってくれ」

振り向きもせず、言うたレイはそれっきり黙ってしまった。後ろでコテモンたちも待っているため、反論せずに手当てに取り掛かる

ことにした。

「これって塗るやつ？」

タケルがレオルモンの前に腰を降ろし、コテモンに尋ねた。コテモンは2回頷き、肯定する。

「じゃあ、ここにすり鉢みたいなものないかな？　あと搗り粉木もあると助かるんだけど。なかったら平らな石でも良いんだ」

「すり鉢はないけど、木の実で作った器ならあるよ。それでも良いなら持つて来るからもってて！」

そう言うドルモンはコエモンを連れ、先程の大広間へと戻っていった。それから水とキレイな布をベアモンとコテモンが準備してくれた。パタモンはレオルモンの身体を拭き、キレイにしている。準備が整ってからタケルはレオルモンの手当てを始める。ケガの手当てに関しては医師を目指す丈から聞きかじったことがあった。あまり手馴れてはいなかったが、コテモンたちの手を借りて何とか手当てを済ませることができた。レオルモンはいまだにくっすり眠っている。

「……終わりましたよ」

一応レイに声を掛けるが「そうか」と素っ気ない声が返ってきただけだった。その様子にタケルはムツとする。

「……そういえば」

「なんだ？」

「名前。まだ聞いてませんよ。ボクは名乗りました」

「コテモンたちが呼ぶの聞いてただろ」

「貴方からは聞いてません」

「今更……」と言うレイだが、タケルも引き下がらない。その様子にレイは深々とため息を吐いた。

「……………レイだ」

面倒臭げに言うレイを見て、タケルは満足そうに微笑んだ。そんな2人を様子を見て、コテモンたちも顔を見合わせ嬉しそうにしている。

「さっきから何やってるんですか？ レオルモンの手当てもしないで」

あからさまな嫌味にレイは思わず振り返り、眉を顰めた。

「お前……案外いい性格してるのな」

「そんなことないですよ」

満面の笑みで言うタケルにレイは顔を引きつらせる。これ以上突っ込まないほうが良いと判断したのか、レイは前の画面に視線を戻した。タケルが側まで寄ってくるのが分かったが、特に見られて困るものでもないのも何も言わなかった。むしろ大いに関係している事柄だ。側でタケルが息を呑むのが分かった。

「レイさん……これって……」

「黒い歯車の情報だ」

レイの見ている画面には黒い歯車の図とモノクロモンの姿が描かれていた。中央のパソコンに図が描かれ、左右のパソコンにはグラフのようなものが映し出されている。

「こっちが歯車が刺さる前のデジモンの波長データ。で、こっちが刺さって抜けた後のデジモンのデータ」

始めに右を指差し、次に左の画面を指差すレイ。共に赤と青の2本の線が波状に続く画面だが、左の線は異常に波打っていた。

「どういうこと？」

首を傾げるパタモンを一瞥し、レイは片手を顎に付いた。

「まだ調査中。詳しくは話せない。だが、黒い歯車ってのはデジモンのデータを乱らせるのかもしれない」

「データが乱れるとどうなるんですか？」

「身体異常、精神異常、突然変異……最悪の場合はデータ崩壊だろ
うな」

「そんな……っ」

データの崩壊。それはデジモンたちにとって死を意味する。

「今のところ異常が表れたデジモンの情報も入ってないし、データの乱れも一時的なものようだが、油断は出来ないな」

そう言いながらレイは違う画面をタケルに見せた。それは右斜め上にあるモノクロで表されたデジタルワールドの略図だった。大半のエリアは白いが、数箇所のエリアが黒く塗る潰されている。

「今のところ黒い歯車を確認されているエリアはある程度決まっている。その中で操られたデジモンが発見されているのはこの辺りだ」

レイがキーボードを打つと、数箇所の黒いエリアが白く変わる。そして黒いエリアは3つの範囲で集中していた。

「これは……」

「もしかするとこの3箇所で黒い歯車を作っているエリアがあるのかもしれない」

「作ってる？」

「あんなのが無限に存在してるわけないだろ」

「そう、ですね」

今まで思い至らなかったと、タケルは奥歯を噛み締めた。レイはそんなタケルの様子に気が付いたが、無視をした。

「レオルモンに調べさせていたんだが……あの様子じゃしばらくは動けそうにないな」

「じゃあ、ボクたちで調べてみます!」

ポツリと言うレイにタケルは勢い良く顔を上げた。レイは見定めるようにタケルを凝視している。そしてパソコンの画面に目を戻した。

「……………お前、メールが出来る端末持ってるか?」

「はい、持ってますけど…………」

「貸せ」

タケルはDターミナルを渡した。受け取ったレイはパソコンからコードを引つ張り出し、Dターミナルに繋げる。無言で操作を続けるレイにタケルは首を傾げる。しばらくしてレイはDターミナルをタケルに返した。

「さっきのエリアのデータを入れておいた。お前のアドレスも貰ったから何か分かったら連絡する。ここのアドレスも入れておいたからここまでも迷わず来れる」

「……………いいんですか?」

「……………今更だ」

そう言つてそっぽを向くレイが可笑しかった。タケルが思わず笑つとレイが睨む。ワザとらしく咳き込んで誤魔化したタケルはDターミナルを仕舞つ。

「……そろそろ帰れ。もうすぐ陽が暮れる。……コテモン、送ってやれ」

コテモンは頷くとタケルの手を取った。タケルは踵を返し、そして立ち止まった。

「レイさん。……貴方は一体何者なんですか？」

内に秘めていた疑問が口から出た。黙っているレイに「まさかっ
たかな？」とタケルは心配になった。だが、レイは不意に鼻で笑っ
た。

「オレは、オレだ」

それ以上は口を噤むレイにタケルは諦めて、遺跡を後にした。

道中は相変わらず霧深いが、コテモンのおかげで迷わずにゲート
まで戻ることができた。

「ありがとう、コテモン」

「……また……来る？」

「勿論！ ね、パタモン」

「うん！ 今度はお土産持ってきてあげる」

「……うんっ」

コテモンは腕を振りながら霧の中に消えていった。タケルはコテモンが消えていった先をじっと見つめていた。

「また来ようね。タケリユ」

「うん！」

タケルとパタモンは顔を見合わせ、笑った。そしてD-3をテレビに傾け、光に消えていった。

辺りが静まり返っている。先程までの珍客にはしゃいでいたデジモンたちは怪我を負った仲間に気を遣い、大広間の方に戻ったよう

だ。椅子に座り、目を瞑っているレイは不意に後ろに声を掛ける。

「……………いつまで狸寝入りしてるつもりだ？」

そう言つと後ろで寝ているはずの身体がピクリと動いた。

「ばれてたか……………」

「……………抵抗すると思った」

「お前こそ、らしくなかったじゃねえか」

お互いに断片的な会話だが、何を言いたいのかは分かる。レイは先程の珍客を思い出し、笑み零した。

「……………本当にな」

レイの自嘲的な声がレオルモンの耳に残った。

第六話 遺跡の守護者 聖獣ライアモン（後書き）

《備考》

？『黒い歯車』には原作にない能力が足してあります。今回出てきた「デジモンのデータを乱す」以外にもあります。

？今後、出るか分からないのでここで。

今回出てきた『泉』はあくまで鎮静効果があるだけで、傷は治りません。なので治療は必須。

第七話 舞え！ 情熱の剣士ブライモン

黒い歯車によるデジモンの凶暴化が後を絶たない。デスモンの居場所も掴めず、タケルは焦りをみせる。タケルはパタモンを連れ、1人デジタルワールドを訪れる。そんな中、タケルは傷付いたライアモンと遭遇する。攻撃を仕掛けようとするライアモンだが、以前助けたコテモンに助けられる。そこに現れた謎の青年・レイ。彼はタケルに黒い歯車の工場を探すよう助言するのだった。

【第七話 舞え！ 情熱の剣士ブライモン】

タケルから黒い歯車の発生地を探そうと提案されたのは休み明けのことだった。いつも通り待ち合わせをして、エリアを見て回ろうという時にタケルから他の子供たちに声が掛かった。

「黒い歯車が作られている場所ねえ……」

「確かに根源から叩かないと悪循環だからね」

納得している子供たちをよそに、薫は胡散臭そうにタケルを見ていた。

「その、黒い歯車が集中しているところってのはどうやって分かったんだ？」

「えっと……この前デジタルワールドで知り合った……デジモンに」

口籠るタケルは内心で焦っていた。あの時の帰り際に言われたレイの言葉が甦る。

『ああ……言い忘れたけどオレのことは他言無用で頼む。いいか、絶対に誰にも言つなよ』

結局、理由を尋ねても無言を突き通されたためタケルも了承して帰ってきたのだ。だが、いざ仲間たちに説明しようとするとなかなか難しいものがある。しどろもどろになっているタケルを見て薫は目を細めた。

「……………それって土日のことか？」

「え、ええ。そうですね」

薫の言葉に棘を感じ、タケルは顔を顰めた。薫が怒っているのは目に見えて明らかだ。困惑するタケルをよそに薫は言葉を続けた。

「一人でか？」

「……パタモンと一緒にです」

「そういう意味じゃなくて。デスモンや黒い歯車の行き交うデジタルワールドにお前らだけで行ったのか、って聞いてんだ」

「……っ」

そこまで言われ、ようやく薫の言いたいことが分かった。タケルは渋い顔になってきている。

「もしデスモンと出くわしたらどうするつもりだったんだ？ 完全体やこの前みたいに集団で黒い歯車に操られたデジモンに遭遇したらお前らだけで何とかなったのか？」

「それは……」

「勝手過ぎる。何焦ってんだ？」

薫の言葉にタケルは何も言えなくなった。薫の言うことは正論だ。少し考えれば分かることだ。パタモンも止めていた。レイも似たようなことを言っていた。焦っているつもりはなかったが、実際は焦っていたのかもしれない。

「……………すみません」

タケルはそれ以外に何も言えなかった。何に焦っているのか、と問われたらきつと黒い歯車のせいだろう。脳裏に甦る記憶にタケルは目を瞑った。

「……………それくらいにしろ、薫。お前はいつも一言多い」

「何がだよ。本当のことだろう」

クダモンが咎めるが薫は聞く耳を持たない。クダモンは深々とた

め息を吐いた。

「誰にだって言いたくないことがあるだろう。ましてやお前たちよりも長く戦いに関わってきたんだ。その分、辛い思いだってしている」

「クダモンの言う通りだよ。薫、言い過ぎ」

タケルを庇うように天音が助け舟を出す。

「確かにタケルくんも少し考えなしだったかもしれない。だけど、ボクたちはもう少し危機感を持った方がいいよ。ボクらは戦いがどんなものか、まだ実感しきれてない。だから何とかなる、なんて考えちゃってる。逆に大輔くんたちは今まで強敵相手に勝ってきたから今度だって大丈夫、何とかなるって思ってるんじゃない？」

天音の指摘にみんな言葉を詰まらせた。全くない、とは言いい切れなかった。

「その……ジヨグレス進化、だっけ？ 今はそれ出来ないんでしょ？ 今のところ成熟期で究極体を相手にしなくちゃならないんだ。そんな余裕はないはずだよ。……………ボクも人のことは言えないけどね」

それっきり天音も黙ってしまい重たい空気が漂う。それぞれに思うことがあった。今までのこと、これからのこと、敵のこと、仲間のこと。

「だぁー！！ 重い！！ 空気が重過ぎる！！ もう過ぎたことゴチャゴチャ言ってたって仕方がねえだろ？ 実際、タケルのおかげ

で次にやるべきことがはつきりしたんだ。これからはオレたちもよつぽどの用事がない時はデジタルワールドに来るようにすればいいし、タケルも今後は一人で勝手なことはしない。いいな？」

「……はい」

慶悟は耐え切れずに言うが、タケルはまだ暗い顔をしていた。慶悟が困って頭を掻いていると、ツンツンと肩を突っつかれた。振り返った先を見て、慶悟は思わず吹き出した。

「ぶつ　ははは！　凜華、お前それはヤバ……っ」

腹を抱えて笑う慶悟に子供たちはキョトンとする。そして振り返った凜華に他の子供たちも笑い出した。

「あっちょんぷりけえ」

凜華は両頬に手を当てて押し潰している。その変顔に子供たちは笑いが止まらなかった。暗い顔をしていたタケルも可笑しそうに笑っている。凜華は手を動かし、顔を変形させる。それがさらに可笑しかった。

「暗い顔ばつかしとつたらアカンよ。笑う門には福来るや」

両手を顔から離れた凜華は得意げに言う。それを聞いたタケルも頷く。

「そうだね。……ありがとう」

笑い過ぎて涙目になっているタケルは素直に礼を言う。他の子供

たちもだいぶ落ち着いてきていたようだ。

「と、とりあえず……今日はこれからどうするか決めようよ」

賢の提案にみんな了承し、これからのことを話し合った。

デジタルワールドから戻った慶悟たちは帰路に着いていた。朝比奈兄妹とは先に別れた。

「じゃ、また明日」

「バイバイ」

天音とプロロモンが腕を振って道を曲がっていく。慶悟と凜華も腕を振り応える。キョキョモンとチツチモンはそれぞれのパートナーの腕の中で居眠りをしていた。天音の姿が見えなくなる前に2人も足を進めた。

「今日はサンキューな」

「構へんよ。ウチもああいう空気苦手やし」

苦笑する凜華の横顔を慶悟はじっと見ていた。それに気が付いた凜華は慶悟を見上げ、首を傾げた。

「どうかしたん？」

「べ、別に……っ　そういやソフトの方だ？　家のこととか、デジタルワールドのこととかあって大変だろう」

あからさまに動揺して話を逸らす慶悟。それを聞いた凜華は歩みを緩める。だが、慶悟は気付かずに言葉を続けた。

「そろそろ試合も近いはずだろ。練習とか大丈夫か？　……………凜華？」

立ち止まる凜華にようやく気が付いた慶悟は振り返り、首を傾げた。凜華は言い難そうに目を泳がしている。

「そのことなんやけど……」

「どうした？」

口を噤む凜華を訝しむ慶悟。凜華は意を決したように顔を上げた。

「ウチ……ソフトボール辞めよう思っとなるや」

「なっ　何だよ！？」

突然の言葉に慶悟は思わず大声を出していた。2人にとってソフトボールは出逢いのきっかけであり、大切な思い出でもある。ソフト部の監督を慶悟の父親がやっていることもあり、慶悟は中学校に進学してからも時折、小学校に顔を出し、凜華たち後輩の面倒を見ていた。凜華も仲間たちと楽しそうにソフトをしている姿を何度

も見ていた。辞める理由が見付からない。

「……お父ちゃん、また大阪に行つとんねん。半年くらい戻つて来れへんって。せやから、弟たちの面倒ウチが見んと」

そう言う凜華の横顔はどこか寂しそうだつた。凜華の父親は単身赴任が多いと本人から聞いていた。母親は重い病に罹っており、凜華が幼い頃から入退院を繰り返しているという。今は入院中だと聞いた覚えがあつた。凜華の家は兄弟が多く、一番上の凜華が弟妹の面倒を見てきたという。

「それに慶悟も言つとつたやん。なるべくデジタルワールドに行くようにしようって。やっぱソフトなんかやっとなるヒマなんてないんだよ！」

「試合だつて近いんだろ？」

慶悟は父親が意気込んでいたのを思い出し、聞いた。だが、凜華は自嘲的な笑みを見せる。

「心配いらんよ！……ウチ、レギュラー落ちしたんや。せやからソフトはもう卒業や」

それを聞き慶悟は意表を突かれた。凜華は苦笑いし、言葉が続ける。

「もともと家のこともあつて、あんま練習できてへんかったから仕方がないんやけど。せやから、ちようどええんかなって……」

「……………何だよ、それ」

冷たい声色が凜華に飛んできた。凜華の瞳に慶悟の悔しそうな表情が映った。

「何でそんな簡単に諦められんだよ。……………約束……………忘れたのかよっつ」

振り絞るような声を残して、慶悟は走り去った。その後ろ姿を見て凜華は顔を伏せ、腕に力を込めた。

「……………凜華？」

力を込められた腕にチツチモンは目を覚ます。見上げたパートナの顔を見て、心配そうに目尻を下げた。

「……………忘れるわけないやん……………アホ慶悟っ」

今にも泣き出しそうな凜華はチツチモンに顔を埋めた。

何かがぶつかる甲高い音が聞こえた。少女はフェンスを両手で掴み、その先を眺めていた。フェンス越しの校庭で男女が混ざってソフボールをしている。楽しそうな声が少女の耳に届いている。その様子を少女は羨ましそうに眺めていた。

再びバットにボールが当たる。音と共に宙に飛んだボールは完全

に軌道を外れて凜華の足元に落ちてきた。拾おうにもフェンスが邪魔して取ることができない。フェンスを越えるには数十メートル先まで回らなければならない。どうしようかと悩んでいると1人の少年が近付いてきた。少年はボールを拾い上げて少女を見上げた。

『……お前、この前も見えてたよな。興味あるの?』

『え……!?!』

突然、声を掛けられて驚いた少女は固まっている。答えられないでいると少年はフェンスをよじ登り、凜華の前に飛び降りた。そして手に持っていたボールを少女に差し出す。少女は躊躇いながらもそのボールを手に取った。手の中にある泥臭くずっしりと重いボールをまじまじと見つめた。

『やってみる?』

『けど、ウチ……やり方とか全然知らん』

『大丈夫、大丈夫! 投げる、打つ、走る、さえできれば何とかなるから。な、やろっぜ! 絶対、楽しいからっ!!!』

それでも悩んでいる少女に痺れを切らした少年は少女の腕を引っ張った。そのままフェンスを回って、グラウンドに出る。

『父ちゃん!! この子と一緒にいいか?』

『ん、構わんぞ』

『慶悟! 無理に引っ張ってくるんじゃない。父さんも注意してよ

ねえ。……ごめんね？』

ゲームを中断したのか、もう終わりだったのか、試合をしていた子供たちが集まっている。その中で背高い少年が少女に目を合わせて言った。少女は首を振り、おずおずと口を開いた。

『うちも……やってみたい……』

『ほら、この子も言ってるんだ。いいよな、父ちゃん！』

『ん、構わん』

『まあ、キミがやりたいって言うならオレたちは大歓迎だけど……キミ、名前は？』

『……凜華。由良凜華や』

『凜華か……オレは英慶悟！ よろしくっ』

そう言って差し出された右手をそっと取った。眩しいくらいの笑顔に心が温かくなった。

「……凜華！」

呼ばれる声に凜華は目を開けた。伏せていた顔を上げると天音の呆れたような目とぶつかった。

「珍しいね、凜華が居眠りなんて。もうホーミルーム終わったよ？」

目を擦りながら「うん……」と生返事をする凜華はいつの間に寝たのかと首を傾げる。周りを見るとクラスメイトがランドセルを持って教室を出て行く姿がある。もう帰宅時間を過ぎたようだ。ポーンとしてゐる凜華に天音は近くの椅子を拝借し、座った。

「何かあった？ 今日、元気ないよ」

「寝不足なんよ。昨日あんま寝れへんかったん……」

昨日、慶悟と喧嘩別れした後、ずっと気にしていた。そのせいで夜もともに眠れなかったのだ。おかげで今日は朝から頭がボーッとしている。

「ボクが聞いているのはそういうことじゃなくて……。慶悟と何かあったでしょ？」

天音の言葉に凜華は言葉をなくす。鋭い天音に冷や汗を流した。

「な、なして……」

「もろバレだから。凜華ってすごく分かり易い」

呆れたように言う天音に凜華はあんぐりしていた。後ろを振り向き、「ウチってそないに分かり易いんやろか……」とぶつぶつ呟いている。仕舞いには頭を抱えている凜華に天音は遠慮がちに声を掛

ける。

「凜華……大丈夫？　いろいろと」

「大丈夫やつ！！　……あらへんかも……」

意気込んですぐに落ち込む凜華。その様子に天音は「重症だな……」と聞こえないように呟いた。凜華は何か思いついたように顔を上げ、勢い良く机に腕を突いた。近付いた顔に天音は後ろに仰け反る。

「天音くん！！」

「な、何……？」

「頼みがあるんやつ」

凜華の必死な形相に天音は首を傾げた。

学校を終え、慶悟と薫は河田小学校のパソコン室に入った。中では天音がパソコンをいじっていた。凜華と鳴の姿はない。

「鳴と凜華は？」

「先に行つたよ」

天音が言つと薫は眉を顰めた。後ろで慶悟はバツの悪そうな表情をしている。

「2人ですか？」

「タケルくんたちも先に行つてゐる。後はボクたちだけ」

納得のいかないような顔をしている薫をよそに天音は慶悟に目を向けた。

「凜華が慶悟と顔見たくないんだって」

天音の言葉に慶悟は顔色を変える。その様子に薫は納得したような表情になる。

「また喧嘩したのかよ。懲りねえなあ」

「ほつとけつ」

強がりながらも凜華の言葉がショックだったのか、慶悟は肩を落としていた。薫にからかわれている慶悟の後ろ姿を見て、天音は心の中で舌を出した。

（正確には「合わせる顔ないから」って言ってたんだけど）

「……………そこまで世話焼きたくないからね」

だいぶ湾曲した言い方をした天音はディスプレイを見ながら呟い

た。凜華の悲しそうな瞳と慶悟の落ち込みように舌打ちをする。

「うるさいよ!」

「す、すみません……っ」

騒いでいる中学生2人に天音が一喝する。機嫌が悪い小学生相手にビビる中学生2人。

「ほら、早く行くよ!」

ゲートを設定した天音はD-3を取り出した。慶悟と薫もD-3を手を取った。3人はデジタルゲートを潜り抜けた。

「うつわぁ……最っ悪」

ゲートを抜けて第一声を発した天音は顔を顰めた。足元に広がる泥地に気持ち悪さを感じる。湿地帯に着いた慶悟たちは先に来ているはずの仲間たちを探しに向かった。天音は靴に纏わりつく泥にブツブツと文句を言っている。

「潔癖か、お前は」

「うるさいなあ。嫌なものは嫌なのっ」

呆れたように言う薫に天音はまだブツブツ言っている。そんな2人の様子を慶悟は後ろから眺めていた。そして深々とため息を吐く。薫と天音は慶悟の様子に顔を見合わせた。

「……重症だね」

「だな、珍しい。喧嘩なんていつものことなのに」

何回目かになるため息を吐く慶悟に2人は肩をすくめた。その時、翼の羽ばたく音が響いてきた。薫と天音は音の方を見上げ、息を呑んだ。それに気付いた慶悟も顔を上げた。

「あれは……アキラモン？」

「けど、様子が……」

力なく飛んでくるアキラモンに慶悟たちは眉を顰めた。アキラモンに乗っていた京が慶悟たちに気が付き、近付いてきた。

「京さん！？ どうしたんですか？」

降り立った京たちに姿に天音は目を瞠った。傷付き、ふらふらと地面に足を着いたアキラモンはパートナーが降りた途端、退化してしまった。力尽き、倒れ込んでいるホークモンを抱き上げる京は慶悟たちに顔を向けた。

「良かったあゝ。3人は無事だったんだ」

「はい。っていうか、今来たばかりで状況がよく分からないんで

「ですけど……。何があったんですか？」

「信じられないのよ！！ 来た途端に黒い齒車に操られたデジモンと遭遇して」

「……待ち伏せされたのか？」

「分かんない。でも、その可能性は高いってみんな言ってる」

「鳴は……？ 他のみんなはどうした？」

姿の見えない妹に薫の顔色が変わる。それを見た京ははっとして焦ったよう目の瞠った。

「それが、大変なの！！ デジモンたちが石にされちゃったのよっ
っ」

「な、なんだって！？」

京の言葉に慶悟たちは目の前が真っ暗になっていた。

約30分前。

デジタルワールドに着いた凜華と鳴は先に来ていた大輔たちと合流した。

「あれ、今日は2人だけなの？」

「いいえ、後から来ます。凜華ちゃんと慶悟くんが喧嘩し……」

「わあー！！ わあーっ！！ 言ったらアカーンっ！！！！」

鳴の言葉を遮って慌てふためく凜華に奏はキョトンとした。他の子供たちも顔を見合わせ、首を傾げる。

「慶悟と喧嘩して顔合わせられないんでござるよ」

「ヒョコモン！？ 何を言っとなねんっ」

真っ赤になつて怒っている凜華の姿に大輔と京はニヤニヤと不気味な笑み浮かべる。

「痴話喧嘩？」

「なっ／＼／ そんなんとちゃうっ！！」

あたふたとしている凜華に大輔と京は冷やかしくとも思えるからかいをしている。

「喧嘩の理由は？」

「そ、それは……その……」

完全にパニックになっている凜華を哀れに思い、タケルが話を逸らす。だが、凜華は口籠り、黙ってしまった。その様子にヒカリと

京は顔を見合わせ、肩をくすめた。

「……………タケリユ、何か来てるよ」

タケルの頭の上でパタモンが天を仰いだ。空に浮かぶ無数の影。その影はだんだんと近付いてきている。

「ありや……………エアドラモンだぎゃ！」

「黒い歯車に操られています」

アルマジモンとホークモンの言葉に身構えるデジモンたち。子供たちもD-3を取り出し、進化の体勢を整える。後ろで構えていたアルマジモンとワームモン、ラブラモンは草むらが揺れる音で振り返った。パートナーたちのすぐ後ろで怪しく輝く2つの光を見た。

「危ない！！！」

「きゃっ！！！」

振り返ろうとした鳴の目の前に3体のデジモンが飛び込む。ラブラモンに体当たりされた鳴は尻餅をついてしまった。そして目の前の光景に身を固めた。

「ラブラモン……………」

「ワームモン！？！」

「アルマジモン……………」

パートナーの声掛けにデジモンたちは返事をしなかった。ぶつかってきた時の姿のまま身動き1つしないラブラモン。アルマジモンとワームモンも動かない。その身体はずっしりと重く、そして冷たくなっていた。石になっているパートナーに縋り付く鳴。泣き出しそうな声で名前を呼び続けるが、ラブラモンは何の反応も示さない。賢と伊織もパートナーに駆け寄り、呼びかけるが同じだった。

その様子をただ呆然と見ていたタケルは草むらから姿を現したデジモンに我に返る。

「あれはコカトリモン……っ」

翼を広げ、咆哮を轟かせるコカトリモンにタケルは鳴の腕を引き上げ、重くなったラブラモンを抱え上げた。

「マズイっ いったん退こう。鳴ちゃん、走れる？」

「ラブラモン……ラブラモンが……っ」

「しっかりして！ ラブラモンたちは大丈夫。大切なパートナーを助けたいと思うなら、今は走って……！」

タケルの叱咤に我に返った鳴はしっかりとした瞳で頷いた。他の子供たちもタケルの後を追うように走り出す。だが、その行く手をエアドラモンたちが塞ぐ。

「……パタモン、活路開ける？」

「任せて！」

「ブイモンも頼むぜっ」

「おう!!」

「パタモン アーマー進化——天駆ける希望——ペガスモン」

「ブイモン進化——エクスブイモン」

ペガスモンとエクスブイモンがエアドラモンに向かっていているうちに子供たちは森の中へ走っていった。茂みの影に隠れ、空を見上げるとエアドラモンの群れと戦うパートナーたちの姿が見える。タケルはラブラモンはを地面に置いた。

「なんか……待ち伏せされてた感じ……」

「そうだね……これからどうするんだ？」

「コカトリモンを正氣に戻さないとラブラモンたちを元に戻せない」

「ですが、むやみに近付いてもあの技の餌食になってしまいます。それにあのエアドラモンたちが邪魔してうまく近付けません」

「……分かれよう」

腕を組んで考え込んでいたタケルが呟く。

「ボクと大輔くんがエアドラモンとコカトリモンを食い止める。その間にヒカリちゃんと法月くんは一乗寺くんたちと一緒に石になったデジモンたちと安全なところまで逃げて。それから京さんはこのことを天音くんたちに知らせてきてもらえませんか？」

タケルの言葉に子供たちは頷き、大輔とタケルは顔を見合わせた。

「ヒカリちゃん、気を付けろよ。エクスブイモン！」

「よろしくお願いします、京さん。ペガスモンっ」

大輔とタケルがパートナーに乗り、戦いの最中に飛び出していく。エアドラモンとコカトリモンを引き連れ、遠くへ去っていく。ヒカリと奏は賢たちを連れ、森の中へと走り出した。京はD-3を取り出す。

「ホークモン進化——アキュラモン」

辺りが静かになったのを見計らって飛び出した。だが、すぐに止まってしまった。

「うつそ〜っ!!」

空には5体のエアドラモンが待ち構えていた。京とアキュラモンは迫り来る風の中を駆け抜けた。

深い森の中、走るたびに泥土が跳ね飛ぶ。腕の中ではずっしりと重く、冷たくなっているパートナーが身動き一つみせない。賢は

悔しそうにワームモンを見て、後ろを振り返った。

「はぁはぁ……みんな大丈夫？　少し休もう」

後ろで息を切らす最年少2人組みを見て、足を止めた。2人は抱えていたパートナーを地面に降ろし、息を整えた。

「は、はい……ですが、タケルさんと大輔さんは大丈夫でしょうか？」

「今は、信じるしかありません。ボクたちがいても足手まといですから」

石化しているパートナーに目を向け、3人は悔しそうに目を伏せた。その様子を見て凜華も奥歯を噛み締めた。

「うちらも進化できたら……」

「凜華……すまんでござる……」

「落ち込んでいるヒマはないぞ、ヒョコモン。今、子供たちを守るのはワタシたちだけなんだから」

「そうだぞ。落ち込むな」

俯くヒョコモンをテイルモンとピコデビモンが叱咤する。その声にヒョコモンは顔を上げ、頷いた。

「ともかく、今は京さんが慶悟さんたちを呼んで来てくれるのを待とう」

「そうだね。大輔たちが囹になってくれている間に安全なところまで避難しよう」

そう言つて再びパートナーを抱え直した賢は翼の羽ばたきを聞いた。見上げると太陽を覆い隠す3つの影がそこにはあった。

「あれは……エアドラモン!？」

「もう追いついて来たのかっ」

3体のエアドラモンは子供たちに向かって来る。

「ヒョコモン!!」

「承知でござるっ からたけわり!!」

凜華はヒョコモンをエアドラモンに向かって投げ飛ばす。ヒョコモンはその勢いでエアドラモンに向かい刀を振り下ろした。エアドラモンは鬱陶しそうにヒョコモンを振り払おうとするが、ヒョコモンはエアドラモンの身体を逃げ回っている。

「ヒカリちゃん! 今のうちに進化やつ」

「ええっ テイルモン!」

「テイルモン アーマー進化——微笑の光り——ネフェルティモン」

ヒョコモンがエアドラモンの風で吹き飛ばされると同時にネフェ

ルティモンがエアドラモンにぶつかっていった。下では凜華がヒヨコモンをキャッチしている。

「ナイルジュエリー!!」

ネフェルティモンの前足から現れた赤い結晶がエアドラモンを襲う。だが、エアドラモンたちは平気そうな顔をして翼を広げた。

「スピニングニードル!!」

「ロゼッタストーン!!」

激しく羽ばたく翼から疾風と共に真空刃が現れ、ネフェルティモンを襲った。ネフェルティモンは碑石で防ぐが、呆気なく壊れてしまふ。真空刃で傷付くネフェルティモンを見て、賢は顔を顰めた。

「くそっ　ワームモンたちが無事だったら……」

「大丈夫や!　すぐに慶悟や薫さんたちが来るよ、絶対」

「凜華!　拙者もネフェルティモンの手助けをするでござる。ピコデビモン、ここは任せるでござる」

「おう!」

そう言って飛び出していったヒヨコモンは近くの樹に登り、天辺からエアドラモンに飛び乗った。

「からたけわり!　からたけわり!!」

ヒヨコモンはエアドラモンの身体の上を走り回り、ちよつかいを出している。エアドラモンは振り払おうとするが、素早く逃げ回るヒヨコモンにコケにされていた。しまいには調子に乗ったヒヨコモンがエアドラモンの目の前で舌を出したり、お尻を振ったりして挑発している。それに怒り狂ったエアドラモンはヒヨコモンに鋭い牙を向けた。ヒヨコモンはエアドラモンの身体から離れ、別のエアドラモンの背中に飛び乗った。だが、怒りの納まらないエアドラモンはそのままヒヨコモンに向かっていく。ヒヨコモンは向かって来るエアドラモンに舌を出して、飛び降りた。勢い良く突っ込んできていたエアドラモンは止まることが出来ず、ヒヨコモンの乗っていたエアドラモンにぶつかっていった。激しくぶつかり合ったエアドラモンたちは飛べなくなり、地面に叩きつけられた。ヒヨコモンはネフェルティモンの背中の上でその様子を見ていた。

「ヒヨコモン、さっすがやあー!!」

パートナーの活躍に凜華は両手を挙げて喜んでいる。ネフェルティモンから飛び降りたヒヨコモンは凜華の腕の中に納まった。ネフェルティモンは残る1体のエアドラモンに向かっていく。

「スピニングニードル!!」

迫り来る真空刃を避け、ネフェルティモンはエアドラモンに近付いた。

「カースオブクイーン!!」

額の飾りから放たれた赤い光線がエアドラモンの歯車を貫いた。正気を戻したエアドラモンたちは空の彼方へと飛び去っていった。

「ふう……ひとまず何とかなったなあ」

「ありがとう。凜華ちゃん、ヒヨコモン。おかげで助かったわ」

「えへへ、そんなことあらへん……」

凜華の言葉を遮るように爆発音が響いた。振り返ると爆煙が上っている。

「あつちは……タケルさんたちのいる方です！」

「様子を見に行くから、みんなはここにいて！ ネフェルティモン
！！」

ヒカリを乗せてネフェルティモンは爆発がした方へと飛び去っていった。賢たちはパートナーを地面に置く。鳴は石化したラブラモンの首に腕を回した。

「ラブラモン……」

一向に戻る気配のないパートナーに賢も伊織も俯いてしまった。その様子になんと声を掛けていいのか分からず、凜華も黙っている。その時、後ろの草むらが音を立てた。恐る恐る振り返ると赤く輝く眼とぶつかった。2つの赤光がゆっくりと近付いてくる。

「で、出たあゝっ コカトリモンやあ！！」

「避けてっ！！」

「ペトラファイアーっ」

奏の声に凜華はヒョコモンを抱きかかえ、横に転がる。凜華が立っていた場所が見る見るうちに石に変わっていった。それを見て凜華は息を呑む。僅かな恐怖を感じつつも今戦えるのは進化の出来ないヒョコモンとピコデビモンしかないかない。

「みんなはここに居てなっ 奏くん、ピコデビモンはみんなを頼むな！」

そう言い残すと凜華とヒョコモンは賢たちから離れた。充分に距離を取って、コカトリモンと向き合う。

「おーい！ その二ワトリっ こっちや、こっちー！」

声に振り向いたコカトリモンは様子を窺っている。その姿に凜華は言葉を続けた。

「太って飛べへんなんてダッサいでえー！ 悔しかったらここまで飛んできてみんかいー！」

「デブっ デーブー！！ ダッサい、クッサい、カッコ悪いっでござるー！！」

「ヒョコモン、言い過ぎやあらへん？」

「へ？」

顔を見合わせる凜華とヒョコモンの耳に凄まじい轟音が届く。見ると、翼を広げたコカトリモンが凄い形相で向かってきた。

「来た来た来たあー！！ 行くで、ヒヨコモン」

凜華はヒヨコモンと共にコカトリモンを連れ、森の中へと走っていった。後ろで鳴の呼び止める悲鳴がしたが、聞こえないフリをした。

湿った森の中を走りながら凜華は後ろを振り返った。

「……なんや、身体の割には意外と速いんやけど」

「コカトリモンは飛べない代わりに脚力が発達しているんでござる」

コカトリモンがどんどん距離を詰めてきている。凜華は樹の陰を上手く利用しながら距離を保とうとした。

「ウチかてソフト部や。ニワトリなんかに負けてたまるかいつ！！」

凜華はさらにスピードを上げ、コカトリモンの引き離しにかかった。必死に付いて来るヒヨコモンはふとした思いが過った。

「凜華…… やっぱり部活を辞めたくないのではござらんか？」

「…………… 喋つとる余裕あるんやったら、もうちよいスピード上げるで」

更に速くなつた凜華をヒヨコモンも慌てて追いかけた。後ろで余裕なく走っているヒヨコモンを見止めてから凜華は先程の言葉を思い出し寂しそうに目を細めた。

『……………約束……………忘れたのかよっつ』

昨日の慶悟の哀しそうな顔が脳裏を過る。その表情が去年の夏と同じだと、ふと思ひ出した。

（忘れてへんよ……………慶悟）

ホイッスル音が響いた。隣のベンチから歓声が沸く。座っているベンチがガタンツと音を立て揺れた。見ると泥まみれのユニフォームを着た少年が落胆したように俯き、座っている。他にもすすり泣く声や嗚咽が聞こえた。視線を前に戻すとグラウンドの中央で握手し合う少年少女の姿が見える。一方は歡喜に満ちた晴れ晴れとした表情。もう一方は悔しさにまみれた泣き顔。

（ああ……………終わったんや……………）

じりじりと焼けるような暑さの中、凜華は思った。次々と帰る準備をしているチームメイトを尻目に凜華はグラウンドに足を向けた。その中央では慶悟が空を見ながら立ち尽くしている。

『……………悪い……………負けちゃった』

凜華が足を止めると慶悟は言った。野球帽を目深に被り直し表情を隠す。その姿に凜華は目の奥に熱が竦った。

『オレの……………せいだな。……………守りきれなかったっ』

悔しそくに震える声に凜華は涙を堪えきれなくなった。最後のゲームは慶悟のアウトで幕を閉じた。慶悟の悔しそうな、哀しそうな後ろ姿に大声を上げて泣いてしまった。凜華の頭に慶悟は自分の野球帽を乗せる。その上から手を置かれる。本当は泣きたいのは慶悟の方だろう。だが、凜華は涙と止めることができず、結局慶悟は泣き止むまで頭を撫でていた。

泣き止んだ凜華は瞳を真っ赤にしながら、言ったのだ。

『来年はウチがみんなを地方大会に……………いや、全国に連れてつたる……………！』

『……………頼んだな』

『勿論や！　せやから絶対に応援に来てな！！　約束っ！！』

その時の慶悟の優しくも悲しい笑みに凜華は切なくなった。

(……約束………守りたかったなあ)

自ら豪語したくせに自分から約束を反故にしたのだ。だが、慶悟の言葉に重なるように家族の顔が思い出される。弟妹たちの顔が、母親の声が、父親の姿が、言葉が、思い出される。

「……凜華っ」

「え……っ」

ヒョコモンの焦った声に我に返った凜華は泥に足を取られ、躓いてしまった。慌てて立ち上がろうと振り向くが、すぐ後ろにコカトリモンが迫ってきた。迫り来る恐怖に動かなくなった身体をヒョコモンが飛び退かす。辛うじて避けた凜華とヒョコモンだったが、目の前にコカトリモンの獰猛な眼があった。

「ペトラ……」

「徹甲刃てつこうじん!!」

凜華に迫っていたコカトリモンは降り掛かる槍に後退する。そして凜華の前に鎧を纏った竜が降り立った。

「ちっ 見た目の割りに素早いな」

「け、慶悟!？」

竜の背中から飛び降りた慶悟は凜華の前に着地する。

「ギンリュウモン、頼む！」

「任せろっ」

コカトリモンに向かっていくギンリュウモンを見送ってから慶悟は凜華に手を差し伸べた。

「……大丈夫か？」

「あ、うん……」

凜華は一瞬躊躇うが慶悟の手を借り、立ち上がった。慶悟はそんな凜華の様子を見て眉を顰めた。

「一人で無茶し過ぎだ」

「うつゝ、ごめん……」

それだけ言うと慶悟はギンリュウモンとコカトリモンの戦いに目を向けた。凜華は気まずそうに目を泳がしている。

「……………昨日は、悪かったよ」

ふと慶悟が言った。凜華は驚いて顔を上げるが、慶悟はまっすぐと前を見て凜華と顔を合わせようとはしない。

「慶悟？」

「昨日、帰ってから親父に聞いた。親父さんからオレの親父に言ってたんだな、辞めさせてくれて」

それを聞いて凜華は言葉に詰まる。何も言えないでいる凜華に慶悟はため息を吐いた。

「お前が納得してんなら何も言わねえよ。けど、納得してないのに辞めるってなら許さない。……お前、物分り良すぎ。たまにはワガママになったって良いんじゃないの？ 全部背負って潰れちゃったら終わりだぞ。もう少しワガママ言って、駄々こねてみるよ。それでもダメだって言うなら、オレが言いに行つてやる。……親の責任押し付けんなって。凜華だってまだ子供なんだって」

慶悟の言葉に凜華は目を瞑った。目の裏が熱くなるのを必死で抑え、慶悟を見上げる。

「うちのお父ちゃん怖いで？」

「……上等。けど、まずは自分から言えよな」

ようやく振り返った慶悟の瞳はひどく優しくかった。それを見て凜華も「……うん」と微笑んだ。

「凜華っ 慶悟！ あれ！！」

傍らで2人のやりとりを見ていたヒヨコモンが突然声を上げた。2人が見上げると複数のエアドラモンが向かってきていた。それを見て慶悟は舌打ちをする。

「天音たちは何やってんだ……っ」

「せや、天音くんたちどうしたん？ 一緒に来たんやろ？」

「京と会ってからお前らを追いかけてたら、ヒカリと会ってな。天音とヒカリでタケルたちの援護に、オレと薫、京でお前らのところに向かったんだよ。そしたらお前が1人でコカトリモンの相手してるって言うじゃねえか。慌てて駆け付けたんだぞ」

その声に怒気が含まれており、凜華は反省する。慶悟は迫り来るエアドラモンを睨みつけた。

「くそっ この数を1人じゃ……」

「1人やあらへん。ウチらも戦うで。なあ、ヒヨコモン」

「勿論でござる。共に戦うでござるっ」

凜華とヒヨコモンがエアドラモンを見据えると凜華のD-3が輝きを放ち始めた。

「ヒヨコモン進化——プライモン」

光に包まれたヒヨコモンが鳥人へと姿を変える。笠の下から迫り来るエアドラモンを睨んだ。

「プライモン……？ ヒヨコモンが進化したん？」

呆然としている凜華をプライモンは一瞥した。そしてすぐに空へと目を向け、左右の刀に手を掛けた。翼を大きく広げたかと思うと、プライモンの姿が消える。一瞬のうちに先頭のエアドラモンの前へと現れた。

「速い……っ」

確実に黒い歯車に一撃を食らわせ、エアドラモンたちを解放していく。寸秒の間にエアドラモンの群れはいなくなっていた。

「……ギンリュウモン！」

ブライモンの声にギンリュウモンは後退した。そして一瞬のうちにコカトリモンの目の前にブライモンの姿があった。

「ツバメ二枚返しっ」

2本の刀を構えたブライモンは次の瞬間にはコカトリモンと背中合わせになっていた。崩れ落ちたコカトリモンの黒い歯車は粉々に斬り刻まれていた。

「やったあ！！ ブライモン格好ええよぉっ」

刀を収めたブライモンに凜華が抱き「はう！ カッコええっ」と大はしゃぎで喜んでいる。それを見て慶悟は顔を顰めた。

「慶悟……パートナーデジモン相手に妬くなよ」

「……うるせえ」

凶星だった慶悟は冷やかすパートナーに蹴りを加える。だが、堅い鎧に逆に慶悟の足が痺れた。悶えている慶悟を呆れたように見ているギンリュウモンと首を傾げる凜華とブライモン。そこに聞き覚えのある声が飛んできた。

「慶悟く！！ 凜華くっ！！」

声の方に振り返り、天を仰ぐとファンビーマンに乗る天音の姿があった。その後ろからはエクสบイモンやステイングモンたちの姿もある。森の方からはシーサモンとアンキロモンも向かってきていた。

「良かった、無事だったんだね……って、そのデジモンは？」

「えへへ、なんとヒョコモンが進化したねん！ ブライモン言うんやっ」

「ホント！？ おめでとう。やったわね。残るは薰くんと奏くんかあ」

感心したように腕を組んで言う京。そんな京を尻目に鳴は凜華に駆け寄った。

「大丈夫ですか？ 心配したんですよっ」

「大丈夫だよ。ごめんな、心配かけて」

「無事だったならいいんです。それよりもラブラモンたちを助けてくれてありがとうございます」

隣ではシーサモンも頭を下げている。賢や伊織も口々に礼を言っていた。その様子を見ていたタケルは不意にペガスモンを呼ぶ。駆け出したペガスモンに短い悲鳴が響く。

「どこに行く気だ？」

見ると意識を取り戻したコカトリモンはそそくさと逃げようとしていた。それをペガスモンが制する。

「な、なんだっ？」

「聞きたいことがあるんだけど……。この辺りで黒い歯車が出てきたりしているところはない？」

「……………それは知らんが、デジモンが姿を消すエリアなら知っている」

逃げ腰のコカトリモンを挟めてタケルが問う。コカトリモンは諦めたように言葉を紡いだ。

「ここよりも6つ西に行ったエリアでデジモンたちが姿を消しているらしい。オレもあのエリアに行つて黒い歯車に捕まったんだ」

「デジモンが姿を消す……行つてみる価値はありそうだな！」

大輔の言葉に子供たちは頷いた。

「ウチらも力付けてきたんや。絶対負けへんで！ な、慶悟っ」

「おう！ 当然だろ」

「やっと仲直りしたみたいだね」

意気込む2人に天音が呆れたように言う。他の子供たちも肩をくすめる。その様子をタケルはボーっと見ていた。

（それにしても……今回は確実に待ち伏せされていたとしか思えない。いったいどうやって分かったんだ。ボクたちがこのエリアに来ること。……畏でなければいいけど……）

意気込んでいる仲間たちを尻目にタケルは1人、不安を拭えないのだった。

薄暗い部屋に灯るディスプレイの光に目が疲れてくる。青年は両目を押さえ、息を吐いた。すると、1つの画面に着信が表れる。見るとメールが届いているようだ。それを開いて、文面に目を通す。2回読み直して口元が自然に綻んだ。

「……どうした、レイ？」

不気味に笑うレイにレオルモンが首を傾げる。だが、何も言わないレイにレオルモンはパソコンの画面を見た。

《From タケル

title 歯車工場発見

黒い歯車が作られていると思われるエリアを発見しました。そのエリアでは突然デジモンたちが姿を消すそうです。歯車に操られたデジモンからの情報なので信憑性は高いと思います。

明日、準備が整い次第向かいます。場所はファイルに添付しておきます」

レオルモンは読んでからレイの顔を見上げた。嬉しそうにしているはきつと気のせいではないだろう。だが、その表情が一瞬のうちに凍った。再び画面に目を向けると、先程の下に違う文面が書かれている。その内容にレオルモンはレイと顔を見合わせ、目を瞠った。

「……どういうことだ？」

「分かん。だが、調べてみる価値はありそうだな」

戸惑うレオルモンは違い楽しそうにしているレイに一抹の不安を覚えるのだった。

第七話 舞え！ 情熱の剣士フライモン（後書き）

《備考》

某人気漫画のギャグを拝借。分かる人は分かるかな？
ちなみに私は決して世代ではありませんのでご了承を。

第八話 齒車工場を破壊せよ 『闇使役』現る

タケルから黒い齒車工場探しの提案を受け、動き出す子供たち。その中で凜華と慶悟は些細なことで喧嘩をしてしまう。お互いに素直になれず、すれ違う2人。そんな時、齒車工場を探していた子供たちを操られたデジモンたちが待ち伏せる。凜華は1人、デジモンたちに立ち向かうが、危機に陥ってしまう。そのピンチを慶悟に助けられ、そして彼の心情を知った凜華の素直な想いにD-3が進化の輝きを放ち、ヒヨコモンはブライモンへと姿を変えた。

【第八話 齒車工場を破壊せよ 『闇使役^{シン}』現る】

簡素な部屋に灯るディスプレイの光に光子郎は目を向けていた。時計を見るともうすぐ7時になるうとしている。そろそろ学校へ行かなくては遅刻してしまうだろう。一息吐くとパソコンの停止にかかる。

「光子郎、電話よ。高石くんって方から」

「あ、はい」

ノックと共に入ってきた母親から電話を受け取り、受話器を耳に当てる。

「ただいま代わりました」

《おはようございます、光子郎さん。すみません、こんな朝早くに》

「いいえ、構いません。ボクもちょうどキミと話したいと思っています
たところなんです」

光子郎は話しながら閉じかけたファイルを再び開く。そこに綴られている文面に目を向ける。

「テントモンたちに連絡して昨日言っていたエリアを調べてもらいました。ただ、エリア内には入れなかったようです。もともとデジモンたちの間で迷いの森と呼ばれている場所で、ジュレイモンの住処になっているとかで……。森中に幻覚を見せる霧に満ちているそうですよ。それに加え、最近が入った者は戻ってこれない、という噂が立っているそうで近状を知るデジモンはほとんどいませんでした」

《そうですか……エリアを探索するだけでも大変そうですね》

「それに関してはテントモンたちにお願いしてあります。周りのエリアのデジモンたちも困っているようで仲間を集めてエリアに入ると言っていました。タケルくんたちが行くまでに何とかすると言っていましたよ」

《テントモンたちだけで大丈夫ですか？ なんだったらボクたちも……》

心配そうなタケルの声に光子郎は思わず頬を緩めた。

「大丈夫ですよ。昨日、太一さんたちにも頼んでアグモンたちを進

化させていますので心配はいりません。タケルくんは学校が終わり次第、皆さんと工場の停止をお願いします。……ボクも一緒にいれば良かったのですが生憎、用事があって……」

《大丈夫です。必ず工場は破壊します。任せてください》

「……………よろしくお願いします」

《はい。あと、昨日お願いしたことは……》

「ああ、タケルくんから預かったDターミナルですが、特にハッキングされた様子はありませんでした。他の皆さんのも調べてみないと分かりませんが、キミたちの連絡から情報が漏れたとは考え難いと思いますよ」

机の上に置いてある2つのDターミナルを見ながら光子郎は言った。昨日、訪ねてきたタケルから預かったDターミナルはパソコンに繋がっている。電話越しでタケルの沈んだ声が聞こえる。

《そうですか……》

「Dターミナルは京さんに渡しておきます。どこでどのように情報が漏れたのか分かりませんが、くれぐれも気を付けて」

《はい、分かりました。じゃあ、失礼します》

通話が切れて無機質な音が耳に届く。光子郎は1つ深いため息をした。

「……………破壊します、か」

あえて『破壊』という言葉を使わなかったのだが、タケルからは自然とその言葉が出た。それはタケルの心情をはっきり表しているように思える。

「……………何事もなければいいのですが……………」

光子郎は窓の外に広がる青空に眩しそうに目を細めた。

森の入り口でテントモンは落ち着きなく、動き回っていた。そこに見覚えのある少年少女たちが駆け寄ってくる。

「おい！ テントモンっ」

「大輔はん、皆はん。待つとりましたで」

12人の子供たちとデジモンが揃っている。ある者は決心に満ちた面持ちで、ある者は不安を拭えない表情が見える。

「森の方は？」

「グレイモンたちがジュレイモンたちを抑えとります。幻覚の霧は消えてますんで、今のうちに。大体の場所はワテが調べといたんで付いて来てくんはなれ」

子供たちは頷き合い、テントモンの後を追った。森の中は静かで、不気味な雰囲気漂っている。

「……なんか嫌な感じ」

思わず呟いた天音にみんな賛同していた。今にも何かが飛び出して、襲い掛かってきそうな妙な緊張感がある。それ以降はみんな声を発することなく黙々と進んでいた。

しばらく進んでいくと正面に空が見えてきた。木々が晴れ、崖の上に来たことが分かる。テントモンはそこで止まり、崖の下を指した。

「あそこでっせ」

体勢を低くしながら見ると、森の一角に拓けた場所がある。その中央にツタの巻いた施設のような建物があった。窓らしい窓はなく、通気口が連なっている。入り口も正面に1つしかないように見えた。

「あそこが……っ」

「隠れてっ」

身構える大輔に賢が慌てた様子で言い放つ。子供たちは身体を低くして建物に目を向けると通気口の1つが開き、何かが出てきた。それは宙に向かい、散り散りに飛び去っていった。

「今のは黒い歯車ですね。やっぱりここで作られていたんだ……」

「へっ こんなとこさっさとぶっ壊しちまおうぜ!」

確信を持った伊織の言葉に大輔が意気込んだ。他の子供たちも頷き、黒い歯車の工場を見据えた。

「ワテは何かあったときの為に外で待機しますわ。皆はん、気を付けなはれ」

「分かった。……んじゃ、行こうぜっ」

大輔を先頭に子供たちは崖沿いを下っていく。その間に2回、黒い歯車が飛んでいくのを見た。そのたびにタケルは険しい表情を見せる。他の子供たちも不安は隠せなかった。

崖から20分ほどで建物の前に辿り着いた。周りに生き物の気配は感じられない。

「……随分と無用心ね。見張りのデジモンくらい居ると思ったんだけど」

「ホンマ、気合空回りしてもうた」

「そもそもが誰も近付かない場所だから見張りはいらないんじゃないのか？」

「3人共、気を抜かないで下さい」

拍子抜けといった風の京と凜華に慶悟が言った。そんな京たちを鳴が諫める。

「そうですよ。すでに外で騒ぎを起こしてるんだし、気付いてないとは思えません」

「そうだな。昨日のこともあるし、睨ってことも考えられる」

「けど、行かなきゃなんにもならない」

慎重な意見を述べる奏と薫に対しタケルが単調に言い放つ。その様子に伊織とヒカリは目を見開いた。

「タケルくん……どうかしたの？」

「……何が？」

「こういう時、一番慎重なのはタケルさんじゃないですか」

「……………ごめん、そうだね」

伊織に言われ、タケルはハツとバツの悪そうな顔をした。そのまま建物の方に顔を向ける。また、黒い歯車が飛び立った。

「けど、いつまでもここに居るわけにもいかねえだろ？ 行くぜ、ブイモンー！」

「おうっ」

「あ、おい！ 大輔！！」

大輔とブイモンは賢の制止も聞かず、建物へと突っ込んでいった。その後ろ姿に薫は青筋を立てる。

「あの馬鹿……っ」

「行っちゃったからにはしょうがねえよ。オレらも行こうぜ」

「さすが突撃隊長ね」

呆れた様子の慶悟も大輔の後を追う。他の子供たちも深々とため息を吐きながら後を追った。大輔が入り口に手を掛け、押すとギイ……と重たい音を立てながら扉が開いた。建物の中は暗い廊下が続いている。辺りに気を配りながら、子供たちは中に入っていく。最後尾の鳴が足を踏み入れると扉が大きな音を立て、勢い良く閉まった。

「うそ！？ ちょっと何も見えないわようっ」

「……っっ」

「きゃ……っ」

「み、みんな落ち着いて……っ」

パニックに陥る京に連れられ、他の子供たちも冷静さを失う。

「絶光衝！！！！」

一瞬、眩い光が放たれたかと思うと2つの淡い光が宿った。そして2回手を打つ音が聞こえた。

「はいはい。落ち着こうな」

そう言ったのは光を肩に乗せる薫だった。光に目を向けるとクダモンの顔がある。その両耳のピアスが光を灯していた。

「いつの間にそんな使い方を……」

「あらゆる場面を想定してシュミレーションしておかないとな」

感心したように言う伊織に薫は得意気だ。落ち着いて冷静さを取り戻した子供たちは、そこで異変に気付いた。

「ねえ、ヒカリちゃんと天音くんは？」

奏に言われ、2人の仲間の姿がないことに気付く。パートナーの2匹の姿もない。辺りを見渡しても見当たらない。慶悟は入ってきた扉に駆け寄り、手を掛ける。

「ダメだ！ 開かないっ」

「そんな……っ」

「……やっぱり罠かつ」

悲痛の面持ちの仲間を尻目にタケルは腰を低くし、床に手を滑らす。

「薫さん、すみません。明かりもらえますか？」

「どうした？」

しゃがみ込むタケルを覗き込む薫。他の子供たちも近付いてきた。大輔がタケルの前に出ようとすると、制された。

「待つて、大輔くん。それ以上は来ないで」

「な、何だよ」

「ここ。音が違う」

そう言うつとタケルは床を叩く。みんなが立っている床は重い鈍い音がする。だが、タケルの目の前の床は軽い音がした。

「この辺だよ、ヒカリちゃんと天音くんがいたのって」

「落とし穴か。でも開く気配がないね」

「じゃあ、ヒカリちゃんたちここに落ちたのか！？ だったら助けねえと。ブイモン！！」

「ブイモンヘッド！ …… っ痛〜！！」

床に向かって頭突きを食らわせるブイモンだったが、逆に頭を痛めた。その後もいろいろ試したが、全てダメだった。

「そうだ！ Dターミナルでヒカリちゃんと連絡取れるかもっ」

京が名案といった風にDターミナルを取り出し、メールを打ち始める。しばらくすると返信が届いた。

《From ヒカリちゃん

Title 無事です

ご心配を掛けてすみません。アタシも天音くんも無事です。ケガもないので心配しないでください。

どうやら地下に落ちてしまったみたいです。落ちてきた天井も閉まってしまって上に戻るのは難しそうなので、先に進んでみます。だから京さんたちもアタシたちのことは気にせず、先に進んで下さい。また後で合流しましょう》

届いた文面にみんなほっと胸を撫で下ろした。

「無事で良かった」

「やっぱり下に居るんだね」

「……仕方がない。先に進もうぜ」

薫に言われ、みんな先に進むことになった。だが、どことなく空気が重い。仲間がいなくなったことと閉じ込められたことで子供たちの間で不安や苛立ちが渦巻き、険悪な雰囲気が始まった。嫌な空気の中、ラブラモンが両耳を上げた。

「どうしたの、ラブラモン？」

「なにかあ……近付いてくるよお……」

ラブラモンの言葉に子供たちは一同に振り返った。確かに少しずつ何かが音を立てながら近付いてくる。その正体に子供たちは顔色を変え、息を呑んだ。

「なんて古典的な……」

「呑気なこと言ってる場合じゃねえって！！ 逃げろっ」

岩で出来た巨大球が音を立てながら迫ってきている。纏れそうになる足を必死に堪え、走っていくが岩の転がる速さに追いつかれそうになる。そして子供たちの目の前にY字路が現れる。迫り来る岩に子供たちはそれぞれに分かれ道に飛び込んだ。岩は道の分かれ目にぶつかり、壁を破壊して止まった。だが、そのせいで来た道は完全に瓦礫に埋もれてしまっている。

「た、助かった」

「おい、そっち大丈夫か？」

慶悟が安堵でへばり付いていると壁の向こう側から薫の声が聞こえた。壁の隙間から漏れる僅かな光を頼りに周りを見渡すと姿があるのは京、伊織、鳴の3人とそれぞれのパートナーだけだ。3人共、息を切らしているが、ケガはしている様子はない。

「おう！ こっちには鳴と京と伊織がいるぜ。みんな無事だ。そっちは？」

「他のみんなはこっちに居る。ケガもねえよ」

薫の声は快活としており、みんな無事なのが分かる。

「どうします？　これを退かすのは結構大変そうですよ」

おそらく薫に尋ねているのだろう。タケルの小さめの声が聞こえてきた。薫は少し考えてから、大きな声を降り掛けた。

「慶悟！！　ヒカリや天音も心配だし、このまま分かれて進まねえか？」

「って言ってるけど、良いか？」

慶悟が京たちに尋ねると3人共、頷いた。

「分かった。気をつけるよ！」

「ああ！　そっちもなっ」

壁の向こうで光が遠ざかっていくのが分かる。暗くなったが辛うじて目が利くようになってきた為、慶悟らも先に進むことにした。

「もうっつ　真っ暗で何も見えないし、最悪っつ」

「京さん、ばやかないで下さい。皆さん同じなんですから」

「でもっつ」

「煩せえよ……」

愚痴る京をホークモンが宥めている。伊織も鳴も物静かな方なの

で、京が異様に煩く感じてしまう。京自身も感じたのか、黙ってしまった。ホークモンに睨まれているを感じながらも慶悟も黙って歩く。伊織と鳴も気まずそうに後を付いてきている。ふと、京は足裏に違和感を覚えた。

「へ……きゃっ！！」

「おい、ちょ……！？ どわぁーっ」

「慶悟っ！？」

「京さん……っ」

京の足が沈んだかと思うと床が開いた。驚いた京は近くに居た慶悟の腕を掴む。慶悟は腕を引っ張られ、京と共に床の下へと吸い込まれていった。リュウダモンとホークモンはパートナーを追って穴へと飛び降りる。後ろを歩いていた伊織と鳴は慌てて駆け付けるが、床が上がり、完全に閉じてしまった。

「京さん！ 慶悟さん！！」

「ダメです！ 開きませんっ」

鳴は床を押し下げるがピクリとも動かない。伊織も床を叩きながら2人に呼び掛けるも何の返答もなかった。伊織と鳴は困惑した表情で顔を見合わせた。

不意に後ろを振り返る。だが、見えるのは先に続く闇ばかりだ。首を傾げる薫に奏が声を掛けた。

「どうかしましたか？」

「いや……何か慶悟の叫び声が聞こえたような……」

「ホンマ？　ウチには聞こえなかったけど」

「気のせいじゃねえの？」

薫は少し考えてから「……そうだよな！」と何事もなかったかのように足を進めた。クダモンの光を頼りに進む6人の子供たちとパートナーデジモンたち。だが、デジモンの姿も気配すらなかった。不意に先頭を歩いていた薫の足が止まる。

「どうしたんですか？」

「……行き止まりだ」

「ええ！？　ずっと一本道だったじゃねえかつ」

「そうだよ。他に道なんて……」

大輔と奏は進む先のない壁を触って確かめるが、動くような気配はない。ブイモンとピコデビモンも壁を蹴ったり、体当たりをしたりしているが、ビクともしなかった。

「伊織くんたちの方で何か見つけてないか、連絡してみますね」

「そうだな、もしかしたら天音たち見つけてるかもしれないし。あと、鳴無事が確かめてくれ」

メールを打つタケルは薫の真剣な言葉に苦笑した。思わず兄・ヤマトや太一を思い出してしまう。賢と凜華は他に道はないか、後ろの方で壁に手を当て確かめている。

「あゝあ、ヒカリちゃん無事かなあゝ」

「大輔ってそればっかだな！」

大輔とブイモンが疲れたように壁にもたれ掛かる。奏は両手で壁を押すが、ビクともしない。イラついたピコデビモンが壁を思いつきり蹴りつけた。すると動かなかったはずの壁があっさりと回転した。

「え……？」

「嘘……っ　うわぁ!!」

縦に回転した壁に巻き込まれるように大輔と奏がパートナーと共に壁の向こう側へと消えていった。突然の出来事に他の4人は呆然と動く壁を見つめていた。いち早く我に返った薫が壁に駆け寄るが一步遅く、壁は閉じてしまっている。拳をぶつけるがビクともしない。

「おい！　大輔！！　奏！！」

呼び掛けるが、返答はない。慌てて駆け寄るタケルの後を追う賢と凜華も駆け寄り、その足はすぐに止まった。轟音と共に砂煙が舞い上がる。タケルが驚いて振り向くとさっきまであった賢と凜華の姿がなく、コンクリートの壁が立ち塞がっていた。

「一乗寺くん!? 凜華ちゃん!?」

声を張り上げるタケルだが、2人の声は聞こえなかった。タケルは薫と目を合わせるが、薫も焦ったような顔つきになっている。パタモンやクダモンも不安そうに顔を見合わせた。

暗く狭い道を壁に触れながら進んでいく。道といっても舗装されているわけではなく、地面を掘って作られたトンネルのようなものだ。触れる壁も岩と土で出来ているため、手はすぐに真っ黒になっていた。土も水分を含み湿っぽく、地面で水溜りが作られている。

「……天音くん、大丈夫? ちゃんと付いて来てる?」

「……………うん……………」

ヒカリの声に心なしか元氣のない声で返事をする天音。地下に落ちてから天音は極端に口数が減っていた。ヒカリが声を掛けても一言二言話すとすぐに黙ってしまう。そんな天音の様子にティルモン

は顔を顰めた。

「天音……本当に大丈夫か？」

「うん……大丈夫……うひゃっ!？」

「天音くん!？」

突然の天音の叫び声にヒカリは足を止め、振り返った。天音はしやがみ込んで首筋を両手で押さえている。駆け寄ったヒカリは天音が僅かに震えているのが分かった。

「天音くん、大丈夫？」

「う、ごめん……水が……」

「水？」

そう言われてテイルモンが見上げるとちょうど天音の頭上で岩の先から雫が滴ろうとしていた。天音が首を押さえているところを見ると、おそらく落ちてきた雫が首に当たって驚いて声を上げたのだろう。事の真相を理解し、些か呆れ返った。

「……なんてベタな」

「天音? もしかして怖いのか?」

ファンビーマンにからかわれ言葉を詰まらせる天音。どうやら凶星のようだ。デジモンたちが呆れていると、天音の搾り出すような声が届いた。

「……………閉暗所恐怖症なんだ」

「え…………？」

「暗くて狭い所…………ダメなんだよ…………」

ようやく聞き取れるくらいの声で言う天音にヒカリはテイルモンたちに厳しい視線を向けた。テイルモンもファンビーモンもバツの悪そうな顔をしている。

「ごめんねえ、天音。ボク知らなくて…………」

「うつん。言わなかったボクも悪いし」

擦り寄るファンビーモンを天音は優しく撫でる。だが、その手は小刻みに震えていた。テイルモンは近くに來てようやく天音の顔色が悪いことに気が付く。

「何か…………原因でもあるのか？」

テイルモンの問いに天音は口を噤む。一瞬、伏せた顔がひどく悲しそうだった。

「……………ボクね、小さい時に誘拐されたことあるんだ」

「誘拐！？」

「うん…………家って父親が弁護士で母親も政治家秘書してるんだよね。だから多方面から恨みも買って…………。誘拐された時も父さんが暴力

団関係の事件取り扱って、その巻き添え。……冬でね、ずっと独りで何時間も車のトランクの中に閉じ込められて。縛られて口も塞がれて、逃げることも助けも呼ぶことも出来ずに……暗くて、寒くて、怖くって……。お陰でこんな体質。ホント、情けなくて嫌になる」

「天音くん……」

自嘲的に言う天音を見てヒカリは悲しくなった。幼い時の記憶がいつまでも傷となって残っている。きつと治ることのない深い傷なのだ。黙ってしまったヒカリに天音は「喋りすぎたかな」と後悔した。

「ごめん、余計な時間取らせちゃって。もう大丈夫だから先に……」

そう言いながら立ち上がった天音の手をヒカリが取る。キョトンとしている天音にヒカリは満面の笑みを見せる。

「これなら怖くないんじゃない？」

「へ……？ ……いや……それは……」

「明かりになりそうなもの見つけるまで。アタシ、はぐれちゃいそうだから。良いでしょ？」

一応、聞いては来るが有無を言わさぬ笑顔に天音は断れなかった。

「分……かった……」

「ありがと♪ あ、テイルモンも手握ろっ!」

ヒカリは空いているもう片方の手をテイルモンと繋ぐ。それを見
ていたファンビーモンが天音の肩に乗っかる。

「じゃあ、ボクはここね！」

「はいはい」

諦め気味の天音は空いている方の手を壁に伝わせ、進んでいく。
ヒカリもそれに付いて来た。

「……ヒカリちゃん。このこと大輔ちゃんとタケルくん、後は太一さ
んにも内緒にしててね」

「恐怖症のこと？ 大丈夫よ、誰にも言わないわ」

「そうじゃなくて……」

手を握ったなど知られたら唯じゃ済まなさそうな3人……主にヒ
カリ主義の大輔と重度のシスコンである太一の2人に知られたら後
が怖い。いや、タケルも笑顔で詰め寄りそうなので、もしかしたら
1番怖いかもしれない。考えただけでも背筋が凍る。

「テイルモン、ファンビーモン……絶っっ対に言わないでね」

「分かってる」

「なんで？」

「何でもっっ！！」

天音の言いたいことを正確に理解するテイルモンと分かっている
いファンビーモンとヒカリ。これはもうばれた時の事を考えた方が
良いかもしれない。必死に言い訳を考える天音の手は仄かに温か
った。

「もぉーっ！！ 最悪っ！！！！」

闇に続く洞窟に京の壮大な声が響き渡った。泥に塗れた靴で地面
を踏み付ける。その衝撃で泥が飛び跳ね、更に靴を汚した。だが、
それも目立たないほど、洋服も泥だらけになっている。京のぼやき
を後ろで聞いていた慶悟は頭の中で何かが切れた。

「そりゃ、こつちの台詞だ！ 人のこと巻き込んだ拳句に下敷きに
しやがって！！ おかげで腰打ったんだぞっ！！」

そう叫ぶ慶悟は京よりも泥まみれになっており、腰に手を当てて
いた。それをリュウダモンが支えている。

「しょうがないじゃない！ ビックリして思わず掴んじゃったんだ
から」

「1人で落ちてろっ」

「酷い！ 普通、女の子にそういうこと言う！？」

「お前はちったあ、悪かったかと思えないのか！？」

険悪な2人はお互いにそっぽを向きながら暗い道を進んでいた。
ホークモンとリュウダモンは困り果てて顔を見合わせる。

「2人共、いい加減にしろよ」

「そうですよ。今は皆さんと合流するのが先です。喧嘩なんかしている場合じゃないでしょう」

パートナーに叱咤され2人共気まずそうにしているが、結局黙って歩いている。

「……………鳴たち……………無事だといいが……………」

しばらくして慶悟の小さな声が聞こえて、京は振り返った。慶悟は心配そうな、不安そうな表情をしている。上に残った最年少コンビが気になるようだ。

「大丈夫に決まってるじゃない。伊織も鳴ちゃんもしっかりしてるもの」

「そんなの分かってるっつーの。けど……………鳴に何かあったら薫に顔向けできねえ」

渋い顔をしている慶悟に京は意外そうな顔を向けた。

「意外と友情に篤いタイプ？」

「……お前、人のことなんだと思ってんだよ」

「粗雑、乱暴、不良」

「てめえ……」

額に青筋を立てる慶悟だが、1つ息をついて怒りを鎮める。その様子に京は首を傾げた。

「……確かにそう思われても仕方がない、か」

「何よ、急に」

「別に。ただ“自分の悪いところを認められてこそ成長できる”だから、な」

「なんだ、それ？」

リュウダモンも首を傾げている。慶悟は少し表情を明るくして言った。

「恩師の言葉だよ。自分の弱さと向き合え。自分の弱さを受け入れる。そうやって人は大人になっていくんだ、ってな」

「良い言葉ですね。確かに自分の悪いところや弱さを受け入れるのは難しいですから」

「あ、もしかして慶悟が先生になりたいのも、その先生の影響か？」

「おう！ オレも先生みたいに本気で子供と向き合える教師になりたいんだ」

嬉々として言う慶悟に京はニヤニヤ笑っている。その様子に慶悟は嫌そうに顔を顰めた。

「何だよ？」

「ん？ 別に。ただ、意外としっかりしてるんだなあって思っただけ。少し見直したかも」

「そーかよ」

2人のやりとりを見てホークモンとリュウダモンは安堵の様子で顔を見合わせた。言葉自体は先程と大して変わっていないが、さっきのようなギスギスとした不穏な空気は消え去っていた。

薄暗い廊下に点々と淡い灯火が並んでいる。それに誘^{いよほ}われるかのように明かりに沿って進んでいた。伊織は振り返り、後ろに付いて来ている鳴の顔色を窺った。

「鳴さん、大丈夫ですか？ 少し休みましょう」

「いいえ、ワタシなら大丈夫です。それよりも皆さんが心配です。」

早く進んで合流しましょう」

平気だと言い切る鳴だが、その顔色は些が悪い。伊織も何度か休息を勧めるが全て断られた。困った様子の伊織にデジモンたちが助け船を出す。

「伊織。オレもう疲れただぎゃ」

「ワタシも疲れちゃったよお、鳴い」

「アルマジモンたちもこう言ってますし、少し休みましょう」

「そう、ですね。……すみません、焦っていたようで」

申し訳なさそうに言う鳴に伊織は首を振った。廊下が続いているだけなので休めそうな場所もなく、2人はその場に腰を降ろした。デジモンたちもパートナーを挟むように身を寄せる。

「不気味ですね、この明かり。先程も突然付きましたし……」

慶悟たちとはぐれた後、先に進んでいた2人が居る廊下の壁が明かりを灯した。青白い照明に鳴の不安そうな声が響いた。

「慶悟くんたちも無事だと良いのですが……」

「あの2人なら大丈夫だぎゃ」

「そうですね。どちらかというとタケルさんたちの方が気になります。行き止まりだったというメールが来てからは連絡が取れなくなってしまう……」

タケルから《こっちは行き止まり。そっちは何かあった？》というメールが来てから何度メールを送ろうとしてもエラーで戻ってきってしまう。タケルからのメールもそれっきりで、どのような状況なのか分からない。

「お兄ちゃん……」

不安そうな鳴の声に伊織はハツとした。

「大丈夫ですよ！ あちらにはタケルさんや大輔さんたちも居るんです。絶対に無事ですよ。気をしっかり持ってください」

「そう……ですよね。……ありがとう」

そう微笑む鳴に伊織は思わず、目を逸らした。顔が熱くなっているのが分かる。

「あの……鳴さんは何で敬語で話すんですか？」

「それは……伊織さんもですよ……？」

慌てて話を逸らした伊織だが、鳴に揚げ足を取られてしまう。

「ボクはお父さんやお爺様が警察官で、剣道を習っているもので。礼儀はしっかりと教わってきましたから」

「素敵なお父様方ですね」

「はい。……もうお父さんは亡くなられています」

「……すみません。余計なこと言いました」

俯いた鳴に伊織は慌てて顔を上げた。

「そんな、謝らないでください」

「……………大切な人がいなくなるのって……………辛いですよね……………」

そう呟く鳴の横顔は悲しみに満ちていた。その様子に伊織は眉を顰めた。

「鳴さん……………」

伊織が名を呼ぶと鳴は顔を上げた。

「それ、止めませんか？」

「はい？」

「名前です」

鳴の言っていることが分からず、キョトンとしている伊織。アルマジモンとラブラモンも首を傾げている。

「だから名前です。同い年なんですから、『さん』っていうのは止めましょう。本当は敬語も止めた方が良いのかもしれませんが、ワタシも癖になっているので。だから名前くらいは普通に呼びませんか？」

「普通につて……？」

「呼び捨てか、『ちゃん』付けで良いですよ。ワタシも伊織くんつて呼ばせてもらつていいですか？」

「え、えええー！？ で、ですが……」

「ダメ……ですか？」

しゅんとなっている鳴に伊織は慌てふためいた。

「あ、いや……っ ダメつてことはありません！！ その……鳴、ちゃん」

「ありがとう！ 伊織くんっ」

照れ臭そうにしている伊織と嬉しそうな鳴。そんな2人をアルマジモンとラブラモンはほのぼのしながら見守っていた。

薄っすらと緑色に発光する床を気味悪く思いながら足を進める。壁の上の方にも同じ素材なのか、光の帯が続いていた。

「なんか……気味悪いいなあ」

「そうだね。何か別の世界に来たみたい」

「デジタルワールドだからな。間違いなく別世界だろ」

「ああ、そっか！」

「お前ら……少し黙ってるよ」

奏とピコデビモンのポケ満載な会話に大輔は頭を抱えている。さつきからこの調子で頭痛が治まらない。ブイモンも苦笑いしている。

「あはは、ごめん。何か喋ってないと落ち着かなくて……。やっぱり、大輔くんたちはさすがだなあ。こんな状況でも冷静なんだから1人だったら絶対パニックになってるよ。正直、大輔くんと一緒に安心した」

「そ、そうか？」

「うん。ボクらまだ進化も出来ないから……。大輔くんが一緒に心強いよ」

「そうだろう、そうだろう！ オレと一緒になんだ、泥舟に乗ったつもりでいてくれー！」

「それを言うなら大船、な。泥だったら沈むから」

大輔はいい気になって鼻高らかになっている。ブイモンの突っ込みですら気に留めていないようだ。

「あ、そうだ。大輔くん、1つ聞きたいことあるんだけど……」

「ん？　なんだ？？」

「タケルくんってさ、どんな人？」

「タケルっつ？」

唐突に出てきた名前に大輔は怪訝そうにしている。それに気が付いた奏は困ったように眉を下げた。

「うっん……ボクさ、タケルくんに避けられてるような気がするんだよね」

「そうかあ？」

奏に言われ、タケルの様子を思い出す大輔。学校では席も近いことから奏とは良く一緒にいる。だが、そもそも学校内ではタケルと一緒にいることも少ないので何とも言い難い。デジタルワールドでは仲間も多くなったので、それぞれ気の合う仲間と組むことが多かった。だが、大輔自身のあまりタケルと組む方ではない為、タケルが奏を避けているのか言われると、やはり首を傾げてしまう。

「気のせいじゃねえの？」

「うん……それなら良いんだけど……ただ、タケルくんってちょっと分かんなくって」

「……タケル、ねえ……。そういや、オレも知ってることって少なえかもなあ」

タケルも自分の事を話す方ではないので知っている事も少ない気がする。だが、他人が軽々しく言っているいい家庭環境ではないため、やはり話せることもないだろう。

「……そう……」

「大丈夫だって！ アイツちょっとムカつく時あるけど、基本的に良い奴だからよ！ 避けてるなんてことないと思うぜっ」

奏が残念そうに言うので、大輔は背中を叩いて励ました。

「……………そうだね」

それから大輔は自分の話を始める。それを笑顔で聞いている奏の瞳が一瞬、冷たさを帯びたのにピコデビモンだけが気が付いていた。

部屋中に金属音が響き渡った。

「痛ったあゝいつ！！！！」

「そりゃ、痛いよ」

鉄で出来た扉を蹴り飛ばした凜華は足を擦ってうずくまっている。

その姿に賢を始め、パートナーたちも呆れて苦笑いしている。

「せやかて、このままここに居^おるわけにいかんやろ？」

「だからってデジモンたちですら壊せなかった扉をキミが壊せるわけないだろう」

「だって、だってええ〜っ　ウチらはゴミとちゃうツちゅーねん！
！」

凜華の声が部屋……ではなく、廃棄場に木霊した。それに至っては賢も同意見のようで頷いている。

大輔たちが壁の向こうに消えたかと思うと、突然タケルとの間に壁が落ちてきた。そして床が斜めに下がったかと思うと、ここまで滑り落ちてきたのだった。ゴミの上に落ちたため、怪我はなかったが、酷い臭いに鼻が曲がりそうだった。

「信じられへん……っ　こんなゴミ溜めに落ちるやなんて……」

「凜華って潔癖症なんだね」

ワームモンが意外そうに言うと凜華は目を剥き、詰め寄った。

「当たり前や！！　ゴミは主婦の宿敵やでっ」

「主婦……？」

目の据わる凜華に怯えたワームモンが賢に抱きつく。賢も引き気味に詰め寄る凜華から距離を取った。

「凜華は家事を一手に担っている由良家の主婦なんでござる!」

「そうなの? 母親とかは……」

「ん、お母ちゃん身体弱くって、昔っから入院繰り返してるんですよ。一番上のウチが弟らの世話しとったから、家事とかも得意になっつもうて」

「そうだったんだ。お母さん、病氣重いのか?」

賢が聞くと凜華は困ったような笑みを見せた。

「うん……心臓が弱いんですよ。だから家に居^おってもあんま動き続けたり出来ひんから、結局ウチが家事やつとるし」

「大変なんだね」

「そうなんよ! 弟妹たちもヤンチャ盛りやからなあ」

「兄弟多いのか?」

「6人兄弟や!!」

盛大に言う凜華に賢は呆然とした。そもそも心臓の弱い女性が6人もの子供を産めるのか、疑問である。

「……多いね」

「せやろ。あ、賢くんは兄弟おるん?」

「……………兄さんが1人いたけど……………亡くなったよ」

「あ、ごめん……………」

バツの悪そうな顔をする凜華に賢は首を振って笑った。

「気にしないで。……………凜華さんは偉いね。大変でもいつでも笑ってる」

「だって、辛い顔しとってたって辛くなるだけやん。笑っとつたらみんなも笑ってくれるや。そしたらウチも元気になれる！」

満面の笑顔で言う凜華に賢もつられて笑った。ワームモンとヒヨコモンも顔を見合わせて笑い合う。

「さあ、早くここから脱出して他のみんなを探しにいこう！」

「せやね！　こんな臭くついいところ長くおつたら臭い移ってしまう」

賢と凜華は廃棄場から出るために散策を再開した。

「……………弱りましたねえ」

「弱ったなあ……………」

「弱っちゃったねえ」

「…………… 本当は弱ったなんて思っていないだろう？ お前たち」

壁に寄り掛かりながら暢気な声を出す2人と1匹にクダモンは呆れたように言った。ため息を吐くクダモンは辺りを見渡す。四方を壁に囲まれており、唯一出入り口になりそうな通気口もクダモンがギリギリ入れないくらいの大きさである為、実質ないに等しい。閉じ込められ、かなりのピンチにも関わらず、座っている薫に至っては欠伸までしている始末だ。立ったまま寄り掛かっているタケルの頭上ではパタモンもつられて欠伸をしている。

「弱ったって思ってるぜ。まあ、どうにもなんないのも事実だし」

「そうですね。大輔くんたちが消えた壁も、一乗寺くんたちと分けられた壁も、他の壁も、床も、天井も、壊さなかった。Dターミナルもエラーで誰とも連絡取れない。ここも全部調べて何の仕掛けも見付けられなかった。打つ手がないよ」

「の〜んびり、考えよ」

薫とパタモンがマイペースなのは分かっていたが、今回に限ってタケルも妙にマイペースを貫いている。クダモンは頭を抱えていた。

「クダモン、それ疲れない？ なんだったら今は光らないよ」

タケルがクダモンのピアスを指して言った。使い方が違うとはいえ、技を連続で使っているので全く疲れないといったら嘘になる。だが、技を解いたら何も見えなくなるだろう。万が一、何かあった

ら対処に遅れる可能性もある。

「大丈夫だ」

「そう？ あんまり無理しないでね」

笑顔で言うタケルにクダモンは調子が狂う。薫に目を向けると、腕を組んで俯いていた。クダモンは完全に寝る体勢であるパートナ―の頭を尻尾で思いつきり引っ叩いた。

「寝るなっ！！」

「痛つてえな！！ 叩くことないだろ！？」

「いくらなんでも緊張感なさ過ぎだっ」

クダモンに掴み掛かりながら薫は文句を言うが、クダモンの方が正しいことを言っている。タケルは苦笑しながら、その様子を眺めていた。

「なあ、タケルの家も離婚してるって本当か？」

「え……」

突然、話を振られたタケルは思わず言葉を呑んだ。その様子にクダモンが睨む。

「薫、無神経だぞ」

「あ、違っただクダモン。……『も』ってことは……」

「ああ、家も離婚家庭だ。まあ、家の場合は母親に問題があったから、お前のところみたいに兄妹で別れることなかったけどな」

「あれ、兄弟いるって言ったことありましたっけ？」

「いや、天音から聞いた」

それを聞いてタケルは納得した。離婚の話もおそらく天音から聞いたのだろっ。

「母親に問題あったってどういうこと？」

「こら、パタモン！」

「まあ、いろいろあるんだよ」

無神経な質問にタケルはパタモンを叱る。だが、薫は気にする感じもなく、かといって話すわけでもなく上手く話を避けた。タケルも深くは追求せず、話を終わらせた。妙に静かな空気が流れる。その雰囲気には薫は腰を上げる。壁に身を寄せ、2人は背中合わせに辺りを見渡す。

「……薫」

「ああ、ようやくお出ましか」

クダモンは薫の言葉に目を瞠った。まるでこうなる事を予測していたようだ。見るとタケルもパタモンも特に驚いた様子もなく、おそらく薫同様に予測していた事態なのだろう。妙に落ち着きを払っ

ていたのは、そのせいだ。

「クダモン！！」

「ああ、絶光衝つ！！」

淡い光を放っていたピアスが強い輝きを放つ。光に満ち、影が消えていく。影が消える直前、その中から飛び出す者があった。

「……気付いていたか。さすがだな、選ばれし子供たち」

「見事にバラバラにさせられたからな。あれは近くに居ねえとできなねえよ」

影から出てきた青白いオオカミが喉を鳴らして笑った。

「あれはサングルウモン。成熟期だ」

「ちょっと狭いけど、いける？ パタモン」

「任せてっ！ パタモン進化——エンジェモン」

ロットを振りかざすエンジェモンだが、サングルウモンは素早く避ける。

「そう慌てるな」

サングルウモンがそう言うのと突如、施設中に聞いたことのない声が響き渡った。

《まんまと引つ掛かったな、選ばれし子供たちよ！ アタイの名はウィッチモン。この齒車工場を仕切っている者だよ！ デスモン様の命により、お前たちには消えてもらおう！ 我ら……『闇使役^{ジン}』の手にかかり、死ねえっ！！》

ウィッチモンの声が切れるとサングルウモンも体勢を低く構えた。

「そういう訳だ。……我が名は『闇使役^{ジン}』サングルウモン。楽しませてくれよ、選ばれし子供たち」

飛び込んでくるサングルウモンにエンジェモンもロットを持ち替え、立ち向かっていった。

狭い洞窟の中、2匹のネコが拳と拳を繰り出した。

「ネコパンチ！！」

「ネコクロー！！」

テイルモンは拳を下げ、後退する。その目前にいる茶色と白色のネコがニヤリと笑った。

「どうしたんだい！ そんなんじゃ、この『闇使役^{ジン}』ミケモン様の足元のも及ばないよっ」

蹴りやパンチなどを繰り出すミケモンにテイルモンは防ぐだけで精一杯だった。それをファンビーモンは悔しそうに見ている。

「天音っつ　ボクも進化させてよっ！」

「こんな狭いところで進化したら、天井崩れるからっ」

「せめて、この洞窟を抜けないと……テイルモン！」

「分かってる！！」

狭すぎる洞窟で身体の大きなワプスモンは戦えない。悔しそうにしているファンビーモンを尻目にテイルモンは子供たちを先に行かせようとすると、ミケモンが邪魔をしてくる。テイルモンは渾身の力を振るい、ミケモンに飛び込んでいった。

湿った土を踏み荒らしながら2人と2匹は走っていた。飛び跳ねる泥も気にならないほど、全速力で。

「待てーっ！！　D - 3 返しなさい！！！！」

京は前を走る赤いオオカミに向かい叫ぶが、止まる様子は見えない。慶悟はそれを見て舌打ちをする。

「何が『闇^{シン}使役』のファングモンだっ 単なるコソ泥じゃねえか…
…っ」

ウィッチモンの声に気を取られていた京と慶悟は走り寄って来たファングモンに気が付かず、D-3を奪われてしまった。急いで追いつけていないのだから、なかなか追いつけない。

「あの色は目立って助かるけどな。見失わなくて」

遠目でも分かる赤い身体にリュウダモンが言う。闇の中でも赤い影が良く見える。

「ですが、急がないと本当にマズイですよ」

「分かっているわよ!!」

「急ぐぞっ」

2人は盗まれたD-3とファングモンを追って闇の中を駆け抜けた。

D-3を握り締め、奥歯を噛み締める。目の前で繰り広げられる戦いから目を逸らしたくなる。

「貴方たちは齒車に操られているんじゃないんですか！？ 何のために戦うんですっ」

伊織の悲痛な叫びの不気味なボディーツを身にまとったデジモンは戦いの手を止めようとはしなかった。

「……ポキュパモン……『闇使役^{ジン}』………敵……倒す」

無機質な言葉に鳴は耳を塞ぎたくなった。考えると、終わりのない戦いは始めてだった。今までは黒い齒車を取り除けば良かった。だが、今回はどうやったら終わるのかが分からない。ポキュパモンは引く様子はない。だが、鳴たちも引くわけにはいかない。堂々巡りだ。

「スラップアンドリップ」

「^{せっかんとう}石敢当っ」

鋭い爪を防ぐようにシーサモンがウォールを張る。その隙にデイングモンが攻撃に転じる。

「ゴールドラッシュュー!!」

ポキュパモンに向かって放たれたドリルは命中し、爆撃を引き起こす。だが、爆煙が切り裂かれ無傷のポキュパモンが姿を現す。息を呑みながらも、どこかで安堵してしまう2人。辛い戦いをただ見守ることしか出来なかった。

ゴミ山の上で真つ赤な火の玉が揺らいでいる。その中央で青い狐が九本の尾を広げた。すると火の玉が飛び込んでくる。

「焰玉ほむろたま!!」

赤い球を避けるように飛び上がるステイングモンとブライモン。だが、火の玉はまるで意思を持っているかのように2匹を追いつけ、逃げきれないと悟ったステイングモンとブライモンは火の玉を迎え撃った。

「スパイキングフィニッシュ!!」

「ツバメ二枚返しっ」

スパイクと2本の刀で焰を打ち払う。落ちてくる火の粉が身動きみじろもしない狐を照らす。

「ヨウコモン言ったっけ？　なんや、不気味やなあ」

「『閻使役ジン』……一体、何者なんだ？」

賢と凜華は僅かに動いたヨウコモンに身を引き締めた。ステイングモンとブライモンは頷き合い、ヨウコモンへと立ち向かった。

持ち上げられた身体が壁へと吹き飛ばされ、発光していた壁が崩れ落ちる。エクスブイモンは打ち付けた身体を起こし、目の前のドラゴンを睨みつけた。サイボーグで身を固めたドラゴンはナイフを握り再び構えを取った。

「…………弱い」

「なんだと…………っ」

ぼそりと聞こえた呟きにエクスブイモンは食い掛かる。だが、ドラゴンは臆することなく続けた。

「弱い、と言ったのだ。デスモン様は選ばれし子供は厄介だ、今の内に片付けると命じられた。……………だが、これしきの力で我ら『闇使役^{シン}』に歯向かうなど……………愚かしい。デスモン様が何に危惧され、命令を出したのか理解し難い」

「なんだと…………っっ」

「落ち着いて、大輔くん」

「『闇使役^{シン}』って何なんだよっ!？」

睨み付けるピコデビモンを鼻で嗤うドラゴンは構えを解いた。

「古^{いにしえ}よりデジタルワールドに君臨する魔王に仕える集団だ。我が名は『闇^{シン}使役』シールズドラモン！ 選ばれし子供たち、デスモン様の命により貴様らを倒すっ」

シールズドラモンはナイフを構え、エクスブイモンの迫った。

通気口が開き、黒い歯車が飛び去っていく。テントモンは木の陰に隠れてその様子を見守っていた。

「大輔はんたち大丈夫やるか……」

「おい！ テントモンっ」

テントモンが振り返るとガルルモンが駆け寄ってきた。

「大輔たちは？」

「まだ中でっせ。そっちは大丈夫かいな？」

「やっぱりジュレイモンたちも操られていた。黒い歯車を取り除いて正気には戻したけど……。今、グレイモンたちが隣のエリアに誘導している」

そう言うところガルルモンも施設へと目を向けた。時折、戦っているような衝撃音がするも、中の様子も窺えない建物に子供たちの身を案じる。

「ん……あれは……？」

ガルルモンが目を上に向けると金色の風が崖を駆け下りるのが見えた。それは建物の前で立ち止まる。

「サンダーオブキングー！」

電撃が扉をあつさりと打ち破り、中へと吸い込まれていった。テントモンとガルルモンはその様子を見て顔を見合わせた。

「今のは……ライアモンやありまへんか？」

「誰か乗ってなかったか……？」

胸騒ぎを抑えながら2匹は建物に消えた金の影を見送った。

第八話 齒車工場を破壊せよ 『闇使役』現る（後書き）

《備考》

今回は一話完結せず。次回に続きます。

『闇使役^{ジン}』は造語です。「ジン」はアラブの言葉で妖精、妖怪、魔人など人ならぬ者を指す言葉から取ってきました。

第九話 黒い歯車の秘密

黒い歯車の工場施設を発見した子供たち。デジモンたちの力を借りて乗り込むが、罠に嵌りばらばらに引き離されてしまう。そこに『闇使役^{ジン}』と名乗るデジモンたちが現れる。大輔と奏はシールズドラモン、京と慶悟はフアングモン、伊織と鳴はボキュパモン、ヒカリと天音はミケモン、タケルと薫はサングルウモン、賢と凜華はヨウコモンを相手に壮絶な戦いを始めるのだった。

【第九話 黒い歯車の秘密】

薄暗い部屋の中。モニターの無機質な光と機械音で満ちていた。長く伸びる爪がコントロールパネルの上で踊っている。モニターの中で黒い歯車が外の飛び出したのを見届けた。そして次に6つのモニターに目を向けた。その中では12人の子供とそのパートナーデジモンの戦う姿がある。優勢な同志に赤い帽子の下で灰の瞳が怪しく笑った。

「うふふ、もがき苦しむが良い……選ばれし子供たちっ」

ウィッチモンは手を組んで高みを見物を決め込んでいた。

淡い光が照らす中、エンジェモンはロットを構えた。その身体は傷付き、苦しそうに肩で息をしてる。背後から迫る殺気に振り向くが影が鋭利な爪で翼を切り裂いていく。

「く……っ」

「エンジェモンっっ」

タケルの悲痛な叫びが響く。辛うじて持ち堪えたエンジェモンは影を追い振り返るが、すでに姿はなかった。奥歯を噛み締めるエンジェモンはどこから出て来るか分からない敵を待ち構えた。

「くそっ サングルウモンの奴……攻撃するだけしてすぐに影の中に逃げちまう。エンジェモンばかり傷付いて、これじゃあ消耗戦だ。どうすれば……っ」

薫が苦渋に満ちた顔で呟く。その間にもサングルウモンは影から出ては攻撃し、また影に戻るを繰り返している。エンジェモンは膝を付き、立っていられなくなってきた。影の中からサングルウモンの声が響いてくる。

「この程度か、選ばれし子供のパートナーというのは……」

「くそっ……隠れていないで出て来い！」

エンジェモンの憤りの声もサングルウモンは無視し、影の中に身を潜める。エンジェモンは力を振り絞り、立ち上がるとロットを持ち構える。その姿にタケルは歯を強く食いしばっている。

「どうすれば……っ」

焦りの色が見え始める薫を尻目に肩の上にいたクダモンは耳を立てた。

「薫、壁の向こうから音が聞こえる」

「壁？」

横目で後ろを見る。後ろは大輔と奏が消えていった壁だ。薫は壁に蹠くろふしを当てた。

「……！！……タケルっ」

小声で呼ばれたタケルも目だけで顔を見た。薫は顎で足元を示す。壁に当たる薫の蹠くろふしを見て、タケルは目を見開いた。薫とタケルは顔を見合わせ、頷いた。

「クダモンっ」

「絶光衝けつこうしゅう！！」

薫の肩からクダモンが飛び降り、辺りが光に満ちる。それと同時にタケルが駆け出す。

「エンジェモン！！ 退化してっ」

エンジェモンはパートナーに言われるがまま、成長期に戻った。パタモンを抱き上げるとタケルは薫の元へ駆け戻った。

「急げっ！！」

「くっ、何のつもりだ！？」

隠れる場所のなくなったサングルウモンは眩い光に怯んでいた。光が徐々に消え、再び闇が戻った時、子供たちの姿はなくなっていた。サングルウモンはしばらく壁を見つめていたが、何事もなかったかのように壁に背を向けて立ち去った。

薄緑に発光する床を駆け抜ける。タケルと薫は走りながら振り返る。サングルウモンは追って来ない。

「来ねえみたいだな」

「……ですね」

足を止めてた2人は肩で息をしていた。タケルは腕の中でぐったりしているパタモンを抱きしめる。

「大丈夫？ パタモン」

「うん……ごめんね、タケリユ……」

弱弱しく返事をするパタモンにタケルはゆっくり首を振った。薫は廊下を一回り見て、顔を顰める。

「大輔たちがどこかにいるはずだが……」

「僕とも言い切れないぞ。あんなタイミングで突然、開くなんて……」

「お前が言っただろ……」

危惧するクダモンに薫が呆れた視線を送る。バツの悪そうなクダモンは黙ってしまう。

「だけど、本当にどうして突然通れるように……」

首を傾げているタケルは電子音を耳にして言葉を切った。Dターミナルを取り出すと、メールが届いていた。タケルは薫に目を向けると顎で見るように促される。タケルはDターミナルを開くと見覚えのないアドレスが示されていた。訝しがりながらもメールを開く。

「……！？ 薫さん、これっ」

「これは……！？」

Dターミナルを見た2人は顔を見合わせるのだった。

赤い風が駆け抜ける。それを2人の子供と2匹のデジモンが追っていた。

「待てえ！！ ファンゲモン、D-3返せえーっ！！」

長い口に赤とオレンジのD-3を銜^{くわ}えたファンゲモンは横目で後ろを見た。ファンゲモンを追う京と慶悟。

「くっそっっ リュウダモン！ 攻撃届くか？」

「無理だつて！！ 距離があり過ぎるっ」

ファンゲモンは洞窟の横穴を使いながら逃げている。京と慶悟は見失わないように追い掛けるので精一杯だった。

「やってみなきゃ分かんないわよ！ ホークモンっ！！」

「分かりました！ フェザースラッシュー！！」

ホークモンが頭部の羽飾りを飛ばすが、ファンゲモンは脇道に逸れ、当たることなく戻ってくる。

「やっぱり無理か……」

「当たり前だっ……！」

ファングモンを追って、京たちも脇道に入る。だが、ファングモンはすぐに次の脇道に入ってしまう。京たちも見失わないように後を追うが、次々と脇道に入っていくファングモンとの距離がどんどん離れてしまう。

「マズイぞ、慶悟。このままじゃ見失っちまうっ」

「んなこと言われなくても分かってるけどよ……っ」

慶悟は横目で後ろから付いてくる京を見た。京は先程よりもスピードが落ち、疲労の色が見えている。慶悟自身も不慣れな足場に疲れが出てきていた。

再びファングモンが脇道に逸れる。慶悟が脇道に入って時、ファングモンは次の脇道に入ろうとしていた。

（見失う……っ）

焦りを見せた慶悟だったが、ファングモンが脇道に入ることはなかった。突如、轟音が響いたかと思うとファングモンが入ろうとしていた脇道の入り口が塞がっていった。コンクリートの壁が洞窟の天井から落ちていく。

「な、何なんだ……？」

呆然としている慶悟だが、ファングモンも何が起きたのか理解していない様子で、呆然と立ち尽くしていた。

「チャンス！ ホークモン！！」

「フェザースラッシュュ！！」

ホークモンの羽飾りがブーメランのようにフアングモンに向かう。フアングモンは我に返り、後退して攻撃を避けた。そのまま別の脇道へ向かうフアングモンだが、その脇道も壁に阻まれていく。

「ウィッチモンの奴……何していやがるっ」

フアングモンは苛立ちを隠し切れずに言い放つ。開いている脇道に逃げるフアングモンを追う京と慶悟。だが、行く先々で脇道は塞がれており、まるでどこかに誘い込まれているようにも思えた。

「誘い込まれてるのはオレたちか……それとも……」

一抹の不安を抱く慶悟だったが、それもすぐに杞憂に終わった。フアングモンが立ち止まる。ようやくフアングモンに追いついた京と慶悟は先に居た人物に思わず目を見開いた。

「ヒカリちゃん！！ 天音くん！！」

「そいつ捕まえてくれっ！！」

喜びの声を上げる京に対し、覇気迫る慶悟の声にヒカリと天音は振り返った。迫り来るフアングモンにいち早く反応したのはフアンビーモンだった。

「ギアステインガー！！」

連射される針にファンゲモンは後退し、避ける。だが、京たちがすぐ後ろまで来ていた。

「居合刃^{いあいじん}！！」

「フェザースラッシュ！！！」

ファンゲモンの懷に飛び込んだリュウダモンは口から鉄の刃を放つ。ギリギリで避けるファンゲモンだったが、ホークモンの羽飾りが首元に命中した。

「うぐっ」

衝撃でD-3を放したファンゲモン。放り出されたD-3を京と慶悟がキャッチする。

「ビンゴー！！」

「随分コケにしてくれたじゃねえか！」

D-3を取り戻した京と慶悟はようやく対等に戦えるようになり、強気になる。D-3を奪われたファンゲモンは焦りの色を見せ始めた。ヒカリと天音の後ろから影が1つファンゲモンの前に降り立った。

「どういふつもりだい、ファンゲモン！！ アンタがこっちに来たらコイツらを引き裂いた意味がないじゃないか！！」

食って掛かってきたミケモンにファンゲモンも鋭い目を向ける。

「んなもん、ウィッチモンに言いやがれ！！ 道を塞がれたんだ！！」

「く……っ さすがにこの人数を相手にするのは無理か…… 仕方がない」

ミケモンはフアングモンの背中に乗る。フアングモンはヒカリと天音に向かって駆け出す。身構える2人だったが、フアングモンは2人の頭上を飛び越えていった。京と慶悟は慌ててヒカリたちの元に駆け寄る。フアングモンとミケモンはそのまま駆け抜けていった。

「逃げた……のか？」

「みたいだね」

慶悟は安堵のため息を漏らす。京はヒカリに抱きついている。

「ヒカリちゃん！ 無事でよかったよぉっ」

「み、京さん……」

「うわぁ、ウザ……」

慶悟がボソッと呟くと京が睨んでくる。知らぬフリをしている慶悟に天音が声を掛けた。

「そういえばさっき慶悟たちが追っかけてたデジモン、変なこと言ってたけど……」

「ああ、道が塞がれたって話か？ オレらにも分かんねえけど、な

んかここまで誘導された感じなんだよなあ」

慶悟は首を傾げながら「何だっただらうなあ……」と呟いている。それを聞いていた天音は腕を組んで考え込んでいる。ヒカリは京から離れ、不安そうな顔をした。

「他のみんなは？」

「分からないの。アタシたちも途中でみんなとはぐれちゃって」

「それでD - 3を盗られたと……」

天音の冷やかな声に京も慶悟もぐうの音も出ない。呆れたようなため息に2人はますます身を縮めた。

「まあ、ボクたちも今回は助かったよ。こんな所じゃ、ワスプモンは戦えないし……。それよりも早くこんな所から抜けて、他のみんなと合流しよう。ミケモンがボクたちを引き離したって言うてた。たぶん他のみんなも戦ってるよ」

「そうね。でも、みんな一体どこに……」

ヒカリが心配そうに言うと、2つの電子音が響いた。ヒカリと京は顔を見合わせ、同時にDターミナルを取り出した。

「タケルくんからメールだわ」

「アタシのどこにも」

「いつの間にメール機能復活したんだろっ……？」

メールを確認するヒカリと慶悟を尻目に天音は納得いかないように首を傾げている。慶悟はメールの内容が気になるのか、2人の間をつろつろしている。

「タケル、何だつて？」

「これは……地図？」

「みたいね。えっと……《D-3をDターミナルに繋げてみて》だつて」

訳が分らず顔を見合わせる4人だが、言われた通りにしてみることにした。ヒカリがDターミナルにD-3を接続する。すると画面の地図上に6個の印が表れた。細い道にある4つの点と広まった場所にある2つの点だ。

「何だろう、これ……」

「貸して」

ヒカリからDターミナルを預かった天音は何やら操作している。しばらく続けると、何かに気が付いたように顔を上げた。

「これ、ここの施設の図面だよ。たぶんこの印はD-3の反応……つまり他のみんなの居場所だ」

「本当か!？」

「うん。これ、もう1つ地図がある。たぶん先に見たのは地下の、

こっちは1階のものだね。こっちにも印が6つある。地下にいるのはボクら4人とあと2人はいるみたいだね。ここに行くには……脇道を使うしかないかな」

「でも、脇道って塞がってるんじゃない……」

「いや、全部塞がってるわけねえよ。言っただろ、誘導されたってここに来るように道が塞がれたんだ」

慶悟の言葉を聞いて怪訝そうに顔を顰める天音。ヒカリも疑問そうに眉を顰める。

「畏ってことないよね？」

「タケルからのメールだろ？」

出来過ぎているような気もするが、このまま突っ立っているわけにもいかなかった。天音はDターミナルをヒカリに返し、仲間が居るであろう道の先を見据えた。

「行ってみるしかないってことか……」

「よし！ そうと決まれば、善は急げよっ」

「お前はもう少し落ち着けねえのかよ……」

呆れながらも京の後を慶悟が付いていき、ヒカリが追う。3人の後ろ姿を天音はじっと見つめていた。

「どうかしたの、天音？」

「なんで簡単に信用できるのになって、思っただけ」

冷たく言い放つ天音にファンビーマンは困惑した表情になる。

「タケルは仲間だよ？」

「分かってるよ。そうじゃなくて、間違いなくタケルくんからのメールだって言い切れないだろ？ アドレスだって他人のものを使うなんて今は意外と簡単だし。都合よく地図が手に入るなんてオカシイよ。タケルくんからのメールだとしても、どうやって手に入れたのか……」

疑問と不安を隠しきれない天音だが、どんどん先に行ってしまう3人に諦めを付け、パートナーと共に後を追った。

「じゃえんりゅう
邪炎龍」

灼熱の龍が牙を向ける。迫る来る焰の龍にステイングモンをブライモンが飛び退けた。だが、後を追う焰の龍にステイングモンは右腕のスパイクを伸ばす。

「スパイキングフィニッシュー!!」

焰の龍を切り裂いたステイングモンの陰からブライモンがヨウコモンに接近した。

「ツバメ二枚返し!!」

ブテンモンは2本の刀をクロスさせる。ヨウコモンは後ろに下がり、火の玉を出現させる。

「焰玉ほむろたまっ」

向かって来る火の玉にブライモンは翼を広げ、飛び上がる。それを追うように火の玉も高く飛び上がった。ブライモンは待ち構え、2本の刀で火の玉を切り裂いた。降り注ぐ火の粉に賢と凜華はヨウコモンを睨んだ。

「はうっっ　　なんや強いんやけど、アイツ」

消耗戦を繰り返すパートナーに苦虫を噛み潰す凜華。策が浮かばず、賢も顔を顰めている。

「せめてここから抜け出さないと……」

賢は辺りを見渡すもあるのは開かない扉と山に積まれたゴミだけだ。上にはゴミを捨てる廃棄口があるが、こちらも閉まっている。

「どこかに抜けられるところはないのか……っ」

焦りを見せる賢は妙な音を耳にする。機械が動くような音がするかと思うと、ゴミの山が動きだした。

「……！」

「なんだ！？」

ヨウコモンはゴミ山から飛び降りた。賢と凜華から少し離れた所に着地したヨウコモンはゴミ山に目を向けている。賢と凜華も何が起こったのか分からず、呆然としている。

「何が起こつとるんや……？」

「焼却炉が稼働したようだ」

上から見ていたブライモンが冷静な口調で言う。

「何を暢気に言ってるねん！！　こんなところ居^おったら、ウチらも危ないやんっ！！」

焦る凜華を横目で見ていたヨウコモンは尻尾を広げた。それを見たステイングモンとブライモンはパートナーを守るように間に割り込んだ。

「邪炎龍^{じゃえんりゅう}！！」

9本の尻尾から焰が集まり、巨大な龍が作り出される。構える賢と凜華だったが、龍は2人の図上を越え、壁へとぶつかっていった。数十メートル上にある壁が壊され、その先に道が続いていた。見上げた賢と凜華は目を見開く。

「あんなところに廊下が……」

「えらい簡単に壊れるんやなあ」

呆然と見上げる賢と凜華を尻目にヨウコモンは壁を駆け上る。現れた道まで登りきったヨウコモンは振り返り、賢たちを見下している。じつと見ていたヨウコモンだったが、踵を返して走り去った。

「なんや……見逃してくれるってこと……？」

「そう、なのかな」

「詮索は後でにしよう。まずはここから避難だ」

ステイングモンに促され、2人はヨウコモンが作った脱出口に飛び立った。上から廃棄場を見渡すと奥に焼却炉の入り口があった。どうやら床がコンベアになっているようで、ゴミがその入り口に吸い込まれていつている。焼却炉の入り口からうっすらと炎が見え隠れしている。

「危機一髪やな」

「本当に……」

安堵で思わず床にへばっている凜華。すると背後から声が響いた。

「あ、いたいた！ 賢くん！！ 凜華ちゃんっ！！」

2人が振り向くと京が走って来るのが見えた。その後ろにはヒカリ、慶悟、天音も一緒だ。

「京さん！ みんな！！」

「無事だったんですね」

「それはこっちの台詞だっ」

慶悟が心底安心したような表情を見せた。2人が首を傾げると天音が説明をしてくれた。

「さつき青い狐のデジモンとすれ違ったんだ。だからもしかして2人が危ないんじゃないかって思って……」

「そうやったん？ けど大丈夫やで。この通りピンピンしとる！
な、賢くん」

「うん。ちょっとヒヤヒヤしたけど、大丈夫。だけど良くここが分かったね」

「タケルくんがこの地図を送ってくれたの。たぶん一乗寺くんのDターミナルにもメールが来てると思うんだけど……」

ヒカリに言われ、賢は慌ててDターミナルを確認した。すると確かにタケルからのメールが届いている。

「気付かなかった……」

「まあ、無事で何よりだよ。これで地下にいるメンバーは揃ったわけだ」

「あとは上にいるタケルくんたちと合流すればいいだけね」

ヒカリはDターミナルを開き、1階の地図を見やる。6つの点は2つずつ3組に分かれている。その内の1組がもう1組に近付いていた。

鋭利な刃先が目の前を掠っていく。エクスブイモンは後退し、迫り来るナイフを避けた。だが、シールズドラモンは手を止めることなく、次々と斬撃を繰り出す。エクスブイモンもナイフを避け、払いながらかわしながら攻撃の隙を探すが、素早い斬撃に防戦一方だった。

「どうした。この程度か？」

「くそ……っ このままじゃ……！」

攻撃を繰り返せないエクスブイモンを見て、奏は顔を青褪めている。

「強い……っ このままじゃ負ける」

「いいや！ 絶対負けねえ。諦めたら本当に終わりだっ エクスブイモン……！」

「ああ！ 絶対に、負けないっ……！！！」

右から迫ってきたナイフにエクスブイモンは避けなかった。エクスブイモンの身体を切り裂こうとしていたナイフは寸前のところで止まっていた。

「何……!？」

「捕まえたぜ」

シールズドラモンに右手を掴んだエクスブイモンは口角を上げた。

「エクスレイザー!!」

「ぐわあっ!!」

ほぼゼロ距離で攻撃を食らったシールズドラモンはその衝撃で後ろへと吹っ飛ばされた。壁に叩きつけられたシールズドラモンは地に伏せる。肩で息をするエクスブイモンだが、その顔は勝利に満ちていた。大輔の諦めない心に、パートナーが応えた。信じる力、諦めない心は、選ばれし子供とそのパートナーデジモンが持つ無限の力となる。

「……………危険かな」

「ん？ 何か言ったか、奏」

パートナー同様に勝利を確信している大輔は奏がD-3を握り締めているのに気付かなかった。ピコデビモンがそつと前に出る。一瞬、赤紫に光が奏の手の中に満ちた。

「大輔！ 奏！」

背後から聞こえた声に奏はD-3を仕舞った。D-3はすでに光を失っている。

「薫さん！ タケルくん！ 無事だったんですね！？」

振り返った先に走ってくる薫とタケルの姿があった。2人共、安心したような顔をしている。

「それはこっちの台詞だって。無事か？」

「へっ 問題ねえよ。こっちももう終わったところだ」

「終わった……だと……？」

大輔の言葉にシールズドラモンが反応する。身体を持ち上げるシールズドラモンにエクسブイモンが構えた。

「ふざけるなよ、小僧。敵が生きている限り、戦いに終わりなどない！！ 負けとは死だ！！ それ以外ない！！！！」

「じゃあ、何で戦うの？」

シールズドラモンの無上の叫びにタケルの静かな問いは妙に冷めたようにも聞こえた。虚を突かれたようなシールズドラモンにタケルは感情の見えない目を向ける。

「……………妙なことを聞くのだな」

「質問に答えて。どうしてデスモンに味方するの？」

シールズドラモンはじつとタケルを見つめていたが、不意に嘲笑する。

「……生きているからだ」

「どういう意味だ……？」

大輔が怪訝そうに聞くが、シールズドラモンは答えることなく、背を向けた。

「興醒めだ。オレはもう行く」

シールズドラモンはタケルを一瞥したが、何も言わず走り去っていった。その後ろ姿を見つめているタケルに薰は目を細めた。

「……なんであんなこと聞いたんだ？」

「……さあ」

はぐらかすタケルに薰と奏は納得いかないような顔をしている。だが、タケルは気付かないフリをして大輔の後を追った。大輔はエクスバイモンに駆け寄っている。エクスバイモンは安堵と共に進化を解いた。

「大丈夫か？」

「おう！ 全然大丈夫だぜっ」

「良かった。ごめんね、もう少し早く駆け付けられると良かったんだけど……」

申し訳なさそうにしているタケルにブイモンは首を振った。

「大丈夫だぜ。オレよりもパタモン大丈夫なのか？ 結構やられてるじゃん」

「大丈夫だよ。見た目ほど酷くないから」

そう言うパタモンだが、タケルの腕で動かした耳は力なく下がる。

「つか、なんでもっと早く来れなかったんだよ？」

「お前らがいなくなったら、壁が動かなくなってたんだよ。凜華と賢とも引き離されて、閉じ込められたんだ」

後ろから小言のように薫が言う。奏はバツの悪そうな顔で笑っている。

「この様子だとメールも見えてないな？」

「メール？」

薫に言われ、大輔はDターミナルを確認した。確かにタケルからのメールが届いていた。

「一応、今から行くって送ったんだけど……」

「悪い、見てる余裕なかった」

「この添付してある地図は？」

横から顔を出す奏にタケルは驚いて半歩下がった。

「この施設の地図だよ。なんかタケルのDターミナルに送られてきたんだ」

「誰から？」

「それが……分からないんだ。知らないアドレスからで……。メールにも『デジヴァイスを接続しろ』としか書いてなかったんだよね」

サングルウモンから逃れた後にタケルの元に届いた1通のメール。そこには地図と素っ気ないメッセージだけで誰からのものなのか分からなかった。畏も疑ったが、手掛かりがない状況で藁にも縋りたい思いだったのも事実だった。結局、タケルの鶴の一声で薫もメールを信じることにした。その際、タケルが返信をしているが、連絡はない。

「ふん。ま、早くみんなと合流できるし良いんじゃない？」

気楽に言う大輔に薫は肩をすくめた。タケルも苦笑いしている。奏のみ怪訝そうな顔をしていたが、特に何も言わなかった。

「じゃ、他の奴らと合流しようぜ」

「そうだな。タケル、近くにいるか？」

「うん。ここを曲がった先に2人。後はみんな地下みたい……あ、

下の6人は合流できたみたいだよ」

「そうか……じゃ、オレたちは残りの2人と合流するか」

Dターミナルを見ながらタケルが言った。覗き込む薫に他の2人も頷く。

「急ごうぜ、あの『闇使役^{ジン}』って奴らに襲われてるかしんねえしな」

走り出す大輔をタケルと奏が追う。薫は3人の後姿を見て訝しげに眉を顰めた。

「どうした、薫」

「いや……なんでもねえ」

首を傾げるクダモンに薫は首を振る。そして、そのまま3人の後を追った。

「待ってるよ、ヒカリちゃん!! 今、助けにいくからなあ!!」

「や、ヒカリたちは地下だろう。穴に落ちたんだから」

「分かんねえだろ!! ヒカリちゃんはオレが助けーる!!」

「大輔くん、格好良いなあ」

意気込んでいるパートナーを宥めるブイモンだが、大輔は聞く耳を持っていない。その上、奏がさらに煽り立てている。奏の腕にい

るピコデビモンは頭を抱えている。それを見ていたタケルとパタモンは苦笑いしていた。

「なあ、タケル」

声を潜めて呼ぶ薫にタケルは足を遅くする。前の2人は気付いていないようだ。

「なんですか？」

「お前、さっきさ……」

「薫さん」

言葉を遮られた薫はタケルの満面の笑みを見て言葉を呑んだ。肩の上ではクダモンが怯えて身体を縮めている。

「その話、後でにしましょう？」

「あ、ああ……」

「あ、大輔くん。そこ左ね！」

話を打ち切って、大輔に道を示すタケル。それに倣って大輔は左に曲がった。その先に2つの人影があった。

「……鳴っ！！」

「お兄ちゃん！？」

いち早く妹の姿を見つけた薫は大輔たちを追い越して、鳴に抱き付いた。

「鳴……っ 良かった……っっ」

「お兄ちゃん……」

縋り付くように妹を抱き締める薫に鳴も兄の背に腕を回している。その姿を横目に大輔たちも駆け寄る。鳴の側にいた伊織も安堵の表情を見せる。

「タケルさん、みなさん。ご無事だったんですね。急に連絡が取れなくなっって心配していたんです」

「ごめんね、大丈夫だよ。伊織くんたちも無事で良かった」

「全然無事です……と言えれば良かったんですが……」

そう言いながら伊織は視線を前方に戻す。ディグモンとシーサモンが起き上がるところだった。その奥ではポキュパモンが鋭い爪を構えている。

「パタモン、いける？」

「うん！」

「ブイモン、お前も頼むぜ！」

「任せろっ」

D-3を構える2人の前に飛び出したブイモンとパタモン。だが、進化することはなかった。ポキュパモンの背後から青い狐が近付いてきたのだ。

「……ヨウコモン………ここいる……なぜ………？」

ポキュパモンが首を傾げていると、ヨウコモンは顎で後ろを指す。そして、そのまま走り去っていく。ポキュパモンはヨウコモンと子供たちを見比べ、子供たちに背を向けた。

「おい！ どこに行くつもりだ！？」

「用………終わり………帰る」

のそのそと立ち去るポキュパモンを子供たちはポカンと見送った。

「何だったんだ………？」

「けど、戦わなくて済むなら何でも良いですよ」

腑に落ちない様子の大輔を尻目に伊織は安堵の表情を見せる。鳴もほっとしたように息を吐いた。

「だけど用ってなんだろう？」

「分かんねえけど、ろくでもねえことに決まってる」

「そうだな。早く下の奴らと合流しようぜ」

「待って」

合流を目指そうとしていた大輔たちを呼び止めたのはタケルだった。タケルはDターミナルを開き、何やら確認している。

「中枢部に行こう」

「中枢部？」

眉を顰める薫にタケルは頷いた。そして1人1人の顔を見渡す。

「ボクたちの目的は黒い歯車を作るこの工場の破壊。理由は分からないけど、『闇使役^{ジン}』って名乗ってるデジモンたちはどこかに行つたみたいだし、今の内に行つた方がよいよ」

「それは……みなさんと合流してからの方が良いのでは？」

「うん。本当ならそうした方がよいんだと思う。だけど、さっきの奴らが戻ってこないとも限らない。それに今こうやっている間にも黒い歯車は作られているんだよ。早く止めないと」

「だけど、中枢部に誰もいないとは限らないんじゃない……」

「いや。タケルの言う通りだ。きっと慶悟たちも中枢部に向かうはずだ。そこで合流した方が都合がいいだろ」

タケルの意見に薫が同意する。他の子供たちは納得しきれない様子だったが、薫の言葉で渋々了承した。

薄暗い部屋に乱暴な打撃音が響いた。コントロールパネルに打ち付けられた拳は強く握り過ぎて震えていた。ウィッチモンは砂嵐しか映し出されていない画面を睨みつけた。

「くそ……っ　なんだっていうんだい、これは!!」

監視映像は消え、管理コンピュータが勝手に起動し、書き換えられていく。ウィッチモンはパネルを打ち始めるが、コンピュータは言うこと聞かない。完全に乗っ取られていた。

「ちっ……このままじゃ……っ」

ウィッチモンは傍らに置いてあった箒を掴み、それに座った。浮かぶ箒に乗って薄暗い部屋を出ていった。

掌サイズのノートパソコンに似た端末を閉じる。壁からコードを抜き取り、端末の中へと仕舞った。傍らで伏せていた金の獅子がむくりと立ち上がった。

「終わったか？　レイ」

「ああ。あとはアイツらに任せるさ」

レイはライアモンに跨りながら面倒臭げに欠伸をした。ライアモンは呆れたように肩をくすめて走り出した。

「タケルたち……大丈夫かな……？」

「……………ま、大丈夫じゃねえの？　ほとんど合流できたみてえだし」

そう言いながらレイは端末を開て見る。6つの点が2組に分かれている。どうやら地下にいた6人は上に上がって来れたようだ。レイは端末を操作し、ある画面を見て止まった。思わず口角が上がった。地図と共に送ったメールの後、タケルから返信がきた。

《レイさんですね？》

たった1行、そう書かれていた。レイはメールを返さなかったがタケルは確信を持っていたようで、複雑な道を迷わず仲間の元に辿り着いている。他の子供たちも迷わずに合流しているようで、地図を送ったのだろうと想像が付く。それ以前に仲間の元に辿り着けるように道を塞いでいたので、メールに関係なく合流は出来ただろう。

「けど、焼却炉はやりすぎじゃねえか？　選ばれし子供が巻き込まれたらどうするつもりだったんだ？」

「どうもしない。その時は、その時だ」

無責任なレイの言葉にライアモンは思わず顔を顰めた。だが、特に反論もしない。

「……………ここまで来たなら最後まで付き合えば良いのに……………」

「嫌だね、面倒臭い」

「じゃあ、何で来たんだよ……………」

「……………」

言動が矛盾しているレイにライアモンは突っ込むが、返事がない。重い沈黙にライアモンも黙ることにする。レイとライアモンは暗闇の施設を駆け抜けた。

無機質な機械音が木霊する。溢れ出す熱気と瘴気が立ち込める。タンクの中から異様な気配が漏れている。

唐突に開いた扉から箒に乗ったウィッチモンが飛び込んできた。ウィッチモンはそのままタンクに備え付けられたコントロールパネルに触れた。溢れていた瘴気が少しずつなくなっていく。完全に瘴気が消えるとウィッチモンは勝ち誇ったように嗤った。

「見つけたぜ！ テメエがウィッチモンだな！？」

開いた扉から大輔の声が飛んだ。ウィッチモンが振り向くと6人の選ばれし子供と6体の成長期デジモンが立ち塞がっていた。

「選ばれし子供たちか……っ」

「おうよ！ これ以上好き勝手やらせねえぜ！ 大人しく観念しやがれー！」

「ふ、ふふふ……あはははー！」

甲高く笑い出すウィッチモンに大輔は顔を顰める。他の子供たちも怪訝そうにウィッチモンを睨んだ。

「何が可笑的い」

「遅い……遅いんだよ、選ばれし子供たち！！ もうこんな所に用はない。壊すなり好きになっ」

「どっという意味だー！」

子供たちを無視してウィッチモンはタンクの扉を開いた。その中から取り出されたものに子供たちは眉を顰める。

「黒い……歯車？」

ウィッチモンの手に納まっていたのは黒い歯車だった。だが、それは今まで見てきたものよりも小さい。腑に落ちない顔をしている子供たちの中、パタモンが殺気立つ。

「タケリユ、あれはダメだよ」

「パタモン……？」

「強い……強過ぎる闇の力を感じる……っ」

目を見開く子供たちをデジモンたちを横目にウィッチモンは口角を上げた。

「さすが、神聖の力を宿すデジモンだね。そうさ！　これはただの黒い歯車じゃない。この辺りに溢れ出すダークエリアの瘴気を凝縮させたものだよ！」

「ダークエリアだと……？」

「知らないのかい？　この地の奥深くに封印されているもう1つの世界だよ。アタイたちはそこから来たんだ。この世界に復讐を果たす為にね……！」

そう言つとウィッチモンは高く飛び上がった。そして片腕を大きく振りかざす。

「バルルーナゲイル……！」

巻き起こる風で大輔たちはD・3を構えた。

「あんまり広くないから大型なのは止めとけよ！」

「分かってるって」

薫からの注意に大輔、タケル、伊織はDターミナルを取り出す。

「ブイモン アーマー進化——轟く友情——ライドラモン」

「パタモン アーマー進化——天駆ける希望——ペガスモン」

「アルマジモン アーマー進化——鋼の叡智——ディグモン」

「ラブラモン進化——シーサモン」

子供たちを守るように立ち塞がるデジモンたちに鋭利な風が襲い掛かる。シーサモンが一步前に歩み出す。

「せっかんどつ石敢当——！」

出現したウォールに風が弾き返された。風が止むと同時に3体のアーマーデジモンが飛び出した。

「ブルーサンダー——！」

「ゴールドラッシュ——！」

「ニードルレイン——！」

ライドラモンたちの攻撃はギリギリのところでかわされる。ウィッチモンは余裕の顔で両手を広げた。

「アクエリープレッシャー——！」

現れた水の水圧にライドモンたちは逃れる。だが、ウィッチモンは攻撃の手を止めなかった。超高水圧を受けるタンクはあっという間に破壊された。その中から大量の黒い歯車が現れた。

「あんたらの相手なんかしている場合じゃないんだよ。アタイはこれをデスモン様に届けなきゃならないからね」

「……この歯車とお前が持っている歯車は違うのか？」

「全然違うよ！ この歯車たちはただの器さ。闇の力を集めるためのねー！」

そう言い残すとウィッチモンは水圧で天井に穴を開け、どこかに飛び去ってしまった。追おうとする子供たちだったが、飛び交う歯車が邪魔をしてウィッチモンを見失ってしまう。

「この歯車をどうにかしないと……っ」

「けど、この量は多すぎますー！」

デジモンたちが歯車の破壊に苦戦している間にウィッチモンが出て行った穴からも黒い歯車が飛び出していつていた。

「いけません！ このままでは歯車が……っ」

鳴の叫びを遮るように開かれた穴から雷が走ったのが見えた。それは黒い歯車を破壊していく。

「なんだ……？」

「気にするのは後だ。せめてここの歯車だけでも破壊しよう!」

空を見上げる大輔に言い放つタケル。その2人を見た薫は顔色を変えた。

「タケルっ 大輔! 危ない!!」

薫の声に振り返った2人の目の前に黒い歯車が迫っていた。

「……カースオブクイーン!!」

2人の襲い掛かるうとしていた歯車は赤い閃光に破壊される。その先に見た姿に大輔とタケルは安堵の表情を見せた。

「「ヒカリちゃん!!」」

「2人共、大丈夫?」

ネフェルティモンに跨ったヒカリに2人は頷く。ヒカリの後ろには賢や慶悟らの姿もあった。

「遅れてすまない!」

「謝んのは後だ! ひとまずここを切り抜けようぜっ」

「はい! 提案!!」

そう言いながら天音が手を上げる。

「その穴から脱出して建物ごと破壊しよう。その方がここを使い

なく出来るし、手っ取り早いよ」

「天音くんって時々、物騒なこと思い付くわよね」

「けど賛成！ 抜けるぜ」

慶悟が先導して次々と建物から脱出していく。薫はシーサモンに、奏はライドラモンに乗って建物から出た。タケルは脱出した際、金の風を見たが、気に留めずに施設に目を向ける。

「穴の中を狙え！」

「ライティングブレード！！」

「徹甲刃^{てっこうじん}！！」

「ゴールドラッシュ！！」

「ブラストレーザー！！」

「ターボステインガー！！」

「ロゼッタストーン！！」

「ティーダ・イヤ」

「シルバーブレイズ」

接近戦を得意とするステイングモンとブライモン以外の攻撃が施設の中に吸い込まれていく。それは強大なエネルギーとなり、爆発

を起こした。デジモンたちは爆発に巻き込まれる前に施設から離れた。

辺りが静まり、子供たちは施設跡に来ていた。見上げる先には建物の影はなく、瓦礫の山となっていた。

「何か、寂然としないね」

天音が腑に落ちない顔で言った。突如、現れた『闇使役^{ジン}』を名乗るデジモンたち、ウィッチモンが持っていた闇の力を凝縮した黒い歯車、そしてダークエリアと『復讐』の意味。工場は破壊したが、ウィッチモンは「ここに用はない」と言っていた。不安と謎が募る。

「ま、工場は破壊したんだし、あと2箇所もこの調子で壊していけばいいじゃねえか？ 『闇使役^{ジン}』の奴らもブツ飛ばす!!」

「そうだな。今グチグチ考えてたつてしょうがねえ」

大輔の励ましの言葉に慶悟が同意する。他の子供たちもその言葉に頷いた。

「誰が相手だろうと、この世界はオレたちが守る！ 奴らの好きにはさせねえ!!」

子供たちは決意を新たに、ウィッチモンが飛び去った空を見上げていた。

崩れゆく工場を見下ろしながらレイは深々とため息を吐いた。

「どうやら成功したみたいだな」

「だが、大量の黒い歯車が放出された」

「それは地道に壊していけばいいだろう？ とりあえず、これ以上増えることはない」

「まだ2箇所残ってる」

「お前な〜っ」

捻くれた物言いをするレイにライアモンは呆れ顔になる。

「ま、とりあえずは良しとするか。帰るぞ、ライアモン」

「……ああ！」

崖の上から選ばれし子供たちの決意に満ちた顔を見たレイはそのまま走り去っていった。

第十話 強くなりたい！ レッパモン努力の進化

黒い歯車工場を破壊すべく、乗り込んだ子供たちだったが、罠にはまりバラバラに引き離されてしまう。さらに『闇使役^{ジン}』と名乗るデスモンの部下の襲撃に遭う。『闇使役^{ジン}』の攻撃に危機に陥る子供たちだったが、暗躍していたレイの助けにより危機を脱する。そして工場を管理するウィッチモンを追い詰めるが、あと一步のところで逃げられてしまう。黒い歯車の謎を残しながらも、歯車工場の破壊には成功したのだった。

【第十話 強くなりたい！ レッパモン努力の進化】

無限に広がる草原に風が渡る。吹き抜ける風になびく黒混じりの茶髪を鬱陶しそうに掻き上げた。紺の瞳で前を見据える。

草原で向かい合うエクスブイモンとギンリュウモン。風が止むと同時に2体のデジモンは走り出す。

「エックスレイザー！！」

「棒陣破^{ぼうじんは}！！」

エクスブイモンの胸から放たれたX型の光線がギンリュウモンに襲い掛かる。光線を受け流し、ギンリュウモンはエクスブイモンの懐へ飛び込んだ。

「じゅうじゅう 徹甲刃！！」

ギンリュウモンが放った鉄の槍をエクスブイモンは腕で払い除け、空へと跳び上がる。落下の力を使い、ギンリュウモンへと腕を振り下ろした。それを後退し避けるギンリュウモンだったが、エクスブイモンは一気に距離を縮めた。ギンリュウモンにエクスブイモンの拳が迫る。

「そこまで！！」

薫の声が響いた直後、エクスブイモンは腕を止めた。ギンリュウモンの顔の数センチ前で拳が止まっている。

「エクスブイモンの勝ちだな」

そう告げる薫の言葉でエクスブイモンは腕を下ろした。ギンリュウモンもほっとしたように身体の力を抜く。離れて観ていた子供たちも緊張した身体を解ほくした。2体の成熟期は退化し、パートナーの元へ駆け寄った。

「お疲れ、リュウダモン。残念だったな」

「うっっ やっぱり負けた」

労う慶悟にリュウダモンは悔しそうにしている。それを見た対戦相手は勝ち誇ったように笑った。

「当たり前じゃねえか。戦いはオレたちの方が慣れてるんだから。なあ、ブイモン」

「そうだ！ オレに勝とうなんて10年早いぜ！」

胸を張って言い切る2人に他の子供たちは呆れたように笑っている。

本日、熱を出した妹の世話をしなくてはならないと言って帰った凜華を除く、11人の選ばれし子供たちとパートナーデジモンは黒い歯車工場探しを中断していた。そしてやってきたのはただっ広い草原。ここでデジモンたちのレベルアップ、つまり鍛練をしていたのである。

言い出しつぺは薫だった。先日の歯車工場破壊の際、デスモンの部下と思われる『闇使役^{ジン}』を相手にかなりやられてしまった。それも同じ成熟期でほとんどが2対1にも関わらず、負けに等しい戦いを強いられたのだ。これでは究極体のデスモンには敵わない、このことで鍛練が提案されたのだった。最初の内は仲間同士で戦わせることへの躊躇と歯車工場探しを優先したいという意見が多かったが、新人メンバーに実績を積みせることと戦って分かる弱点があるだろうと言う薫の意見に従った。

エクスブイモン対ギンリュウモンで5戦目。ほとんどのデジモンは1回しか戦ってないのだが、みんな心身ともに疲れていた。その要因は薫だった。

「はいはい、自慢は良いけどお前も直すところあるぞ」

大威張りをしている大輔とブイモンを軽く叩いた薫は手に持っていたメモを広げる。

「まずはリュウダモン。さっきも言ったけど、お前は確かにまだ戦い慣れしてない。いちいち相手の行動を確認してから次の行動に出ている。それだと行動が遅くなるし、相手に先読みされる。目視も良いけど、気配やある程度の予測は必要だぜ？」

「おー……」

「まあ、予測は慣れないと難しいだろうから、こればかりは実践を積み重ねないとしょうがないけどな。あとはもう少し戦い方を考えた方がいいな。さっきアンキロモンと戦った時と同じパターンだったぞ。あれじゃ、負けるの当たり前だ」

「うう……」

容赦ない言われように落ち込むリュウダモン。唯一の2戦目の為、落ち込みようは一番酷い。それを慶悟が慰めている。大輔とブイモンは苦笑しながら見ていた。そう薫はかなりのスパルタだったのだ。先に戦いを見せていたデジモンたちも薫に散々言われ各々に落ち込んでいる。

「笑ってんなよ、そこ。お前らも直すところあるって言うてんだろ？」

「んだよ、完璧だったじゃねえか。なあ、ブイモン？」

腑に落ちない顔をしている大輔にブイモンは困ったように笑っている。それを見た薫はメモに目を移す。

「まず必殺技であるエクスレイザーを放つ時、体重を後ろに乗せるように。前に出たい気持ちは分かるが、あれは踏ん張んないといけない技だろう。あと、跳んだ時の隙が目立つ。戦い慣れしてないギ

ンリュウモン相手だったから勝てたようなもんだ。エンジエモンやステイングモンが相手だったら負けてたぞ、確実に。つー訳で一番の注意点、調子に乗り過ぎ」

「な、何だとっ！！　そういう偉そうなことは進化して戦えるようになってから言いやがれ！！」

薫の厳しい言い方に大輔は思わず怒鳴り散らした。大輔の言葉に周りが凍る。みんな薫をそつと見遣った。黙ってメモを見ていた薫は顔を上げて大輔を見た。

「分かった。……クダモン」

「……仕方がないな」

低くなった声のトーンで薫の機嫌が悪くなったのは一目瞭然だった。パートナーの肩で寛いでいたクダモンは呆れたように地面に降りる。そして先程まで戦いを繰り広げていた地に立った。

「大輔、ブイモンを進化させろよ」

「何だと……？」

「クダモンと戦え。目に物見せてやるよ」

そう言い放つ薫の声に色がなく、怒りや哀しみすら感じられない。淡々とした言い方は余計に恐怖心を煽る。地雷を踏んだらしい大輔は仲間に助けを求め、視線を向けるが誰一人として目を合わせてはくれない。巻き込んでしまったパートナーを一瞥すると肩をすくめている。

「成長期なんて相手に出来るかよ……」

「逃げんのか？」

「……………いいじゃねえかつ 相手になつてやるよ！！ ブイモン！！」

挑発に乗った大輔はパートナーを進化させる。エクスブイモンは再び戦地に足を向けるが、数十倍も小さな相手にやりずらそうな顔をしている。

「言つとくが、成長期だからって舐めんなよ。怪我するぞ」

「そんなこと言われてもなあ…………」

困ったようにパートナーを見るエクスブイモンだったが、完全に頭に血が上っている大輔は聞く耳を持ちそうにない。短気なパートナーに思わずため息が出る。

「……………来ないのなら、こちらから行くぞ」

やる気のないエクスブイモンに痺れを切らしたのはクダモンだった。地面を蹴ったクダモンは薬莢に身体を巻きつけ、回転する。

「だんがんせんぷう弾丸旋風！！」

高速で回転するクダモンはエクスブイモンに向かっていく。その素早い動きにエクスブイモンは怯んだ。クダモンは足元をすり抜けると回転を止め、地面を思いっきり蹴り飛び上がった。一歩遅れて

振り向いたエクスブイモンの目の前にクダモンの姿がある。

「絶光衝ぜつこうしゅうつ」

「く……っ」

ピアスから放たれる光に目が眩む。エクスブイモンから視界を奪うと地面に降り立った流れで身体を回転させる。

「弾丸旋風だんがんせんぷう!!」

「うつわ……!?!」

再び背後を取ったクダモンはエクスブイモンの膝裏に向かって体当たりをする。バランスを崩したエクスブイモンは前に倒れ込む。起き上がるうとしたエクスブイモンの目前にクダモンの鋭い爪が迫った。

「そこまでっ」

タケルの声でクダモンの動きが止まった。エクスブイモンの右目数センチ手前にクダモンの爪がある。あと少しで右目が抉られたかと思うと、エクスブイモンは冷や汗を流した。

「……薫さん」

「……………別に本当に怪我させようなんて思ってたねえよ」

咎めるようなタケルの声に薫は素っ気なく答えた。クダモンも前足を降ろし、エクスブイモンに背を向けた。呆然としていた大輔は

我に返り、終わりにしようとしている薫に食って掛かる。

「ま、待てよ！ まだ終わりだなんて言っただけでねえぞっ」

「見苦しいぞ、大輔。今のはどう見たってキミたちの負けだ」

「…………… 今のはちょっと油断しただけで…………… 次はぜってえ負けねえ！！！」

「見た目やレベルの違いで負けるはずがないって慢心し、油断したのはキミだよ。本当の戦いなら油断したから次…………… なんて言えないと思うけど？」

賢と天音に咎められ、大輔はぐうの音も出ない。

「ですが、お兄ちゃんもやり過ぎです。あくまでも鍛練であって、こんな喧嘩みたいな戦いはどうかと思う」

妹に叱られた薫も気まずそうに黙っている。黙りこくる2人を見遣って慶悟は呆れたようにため息を吐く。

「どっちもどっちじゃねえ？」

「そうですね。薫さんをバカにした言い方をした大輔さんも悪いですし、喧嘩を吹っ掛けた薫さんも悪いです」

「そうね。喧嘩両成敗って言うし、握手でもして仲直りしたら？」

伊織と京の指摘にお互いに目を向けるが、合ったと思うとすぐに逸らしてしまう。それを見たヒカリが大輔の腕を引っ張り、薫に近

付く。そして薫の手も取り、2人の手を合わせる。

「仲直り。ね？」

2人の顔を交互に見るヒカリに、先に折れたのは薫だった。

「……悪かったよ。確かに大人気なかった。すまん」

「いや……オレもごめん」

改めて右手を差し出す薫。大輔は躊躇いがちにその手を取った。その様子を見て他の子供たちは安堵したように顔を見合わせた。

「……そろそろ帰ろうか？ もう陽が暮れるし」

タケルの言葉に初めて陽が暮れ始めていることに気が付いた。

「そうだな。明日は工場探しに行かねえとか」

「だけど薫さんの指摘は最もだったと思います。実践でも気を付けた方がいいこともありまし。こういう指摘をしてくれる人がいるのは有難いですよ」

賢の言葉に薫はうつすらと笑って肩をすくめた。

「さてと、帰るかな。じゃ、明日な」

薫は振り向くこともせず、帰路に向かった。それを慌てて慶悟たちが追う。4人の後姿を見送ってから大輔たちも帰路に着いた。

デジタルワールドから戻ってくると辺りは橙色に染まっていた。
お台場組の6人は小学校を出て帰路に着く。

「周りにし過ぎか……」

ポツリと呟くタケル。それはエンジェモンがスティングモンと対戦した時、薫に指摘されたことだった。

「そんなつもりないんだけどなあ」

頭の上で愚痴るパタモンにタケルは苦笑する。

「けどタケルくんは良い方じゃない。アタシたちなんてでしゃばり過ぎて言われたのよ？」

京が文句を言う。正確には「前に出過ぎ」と言われたのだが、京にはそのように捉えたようだ。

「薫さんの言っていたことは最もだと思いますよ。アクイラモンの攻撃はいったん下がった方が良い技が多いですから、最初から前に出ると攻撃が遅れるというのは道理です」

伊織に指摘され、口を噤む京。その姿にヒカリが苦笑した。

「だけど、悪いところをちゃんと指摘してもらえるのは良いことだと思うな」

「気付けないと直すことも出来ないもんね。薰さんはデジモンたちを良く見てるよ」

ヒカリに同意してタケルも薰を褒めると、大輔は面白くなさそうにしている。

「けど、進化できないのも事実だぜ」

「大輔くん、また怒られるよ?」

タケルに言われ先程の薰のキレた姿を思い出し、大輔は身震いさせる。

「それは勘弁……」

大輔の呟きに一同が同意する。心中は皆一緒。彼を怒らせてはいけない。

三日月輝く晴天の夜。三軒茶屋にある老舗和菓子店 清月堂。その2階にある一室で暗い部屋に電気スタンドの明かりが満ちている。その明るさと微かな物音にクダモンは目を覚ました。ベッド

で丸くなつて眠っていたクダモンは固まった身体を伸ばす。カーテンは閉められているが、恐らくまだ夜中だろう。時計を見るとやはり夜中で11時半を回っている。クダモンはそのまま目を音の方へと向ける。勉強机の電気スタンドが点き、逆光になっているパートナーの姿があつた。

「……薫？」

「あ、悪い。起こしたか？」

「いや……」

再び寝ても良かったが、妙に目が覚めてしまったのと薫が何をしているのか気になつてクダモンはベッドから降り、机の上によじ登る。見ると机の上にはノートと色ペン、走り書きのメモ紙が乱雑に置かれている。薫の手には黒のボールペン。何やら書いている途中のようだ。

「何してるんだ？」

「今日のまとめ」

そう言つて散らかっているメモ紙を見ると今日の鍛錬中に書いていたデジモンたちの戦う際の癖や傾向、生じる隙や間合いの取り方など事細かく書かれている。それをノートにデジモン別にまとめ、自分なりの対策まで書いてある。クダモンが興味深そうに見ていると薫はノート見せてくれた。ページを捲つてさらに驚く。そこには太一たち先輩のパートナーデジモンや以前の敵のデータまで書かれていた。

「こんなのいつの間に……」

「前にタケルやヒカリに聞いた話と光子郎さんに頼んでデータ送ってもらったんだよ」

平然と言う薫だが、いつも行動を共にするクダモンが知らないということは、今回のように寝静まった後にやっていたのだろう。クダモンは机に並ぶ教科書の隣を見た。勉強用のノートの以外に他の用途で使われているノートがある。薫と出逢つてすぐに見せてもらったことがある。

4年前に渋谷でエンジェモンの姿を見て以来、デジモンに憧れを抱いていた薫は自力でその存在に辿り着いたらしい。お台場霧事件やネット事件などを始め、大輔たちが活躍したデジモンの現実世界への出現の事件なども調べていた。その執念深さと探究心の強さには舌を巻くところがあった。

一通り見てノートを薫に返す。薫は欠伸を噛み締めながらそれを受け取った。

「……そろそろ休んだらどうだ？ 明日も学校だろう」

「ああ。これだけやったら寝るよ。クダモン、先に寝てていいぜ」

そう言つと薫は再びノートにペンを走らせる。クダモンはその様子を見つと見ていた。

「……………クダモン」

「なんだ」

「寝てて良いんだぞ？」

「ああ」

返事はするが動く気配はない。薫が終わるまで寝る気はないようだ。意外と頑固なパートナーにそれ以上言うのを止めて、ペンを動かす。お互いに黙っているが息苦しさはなく、心地好い沈黙が包む。

「……………悪いな、クダモン」

不意に薫が言葉を紡ぐ。手元を見ていたクダモンはパートナーを見上げた。

「何がだ？」

「オレよりも悔しいのはお前だろう、と思ってさ」

そこで薫が言わんとしている事を理解する。

「大輔の言ったことは気にするな。進化が出来ないのは、まだ時ではないからだ。お前の責任ではない」

「……………ああ……………」

顔を伏せている薫にクダモンは目を細めた。

「薫………… お前は己に驕らず、努力を忘れない。時にはそれを煩わしく思う者いるかもしれない。だが、ワタシは努力を怠らないお前を凄いと思うし、尊敬もする。……………ワタシはお前のパートナーであることを誇りに思う」

「クダモン……」

「だからいつまでもグダグダするな。お前らしくもない」

「……そう、だな」

僅かに潤んでいる瞳に気付かないフリをしてクダモンは尻尾でノートを閉じた。

「もういい加減寝ろ。明日に響くぞ」

「ああ、そうするよ」

薫はノートの上にメモ紙とペンをまとめて置いた。電気スタンドを消すと、クダモンを抱き上げベッドに潜り込む。

「おやすみ、薫」

「ああ、おやすみ」

1度寝入ったからか、クダモンはすぐに眠りに落ちた。その夢現の中、僅かに聞こえたパートナーの声が残った。

「ありがとう、クダモン。……ごめん、な」

翌日。

学校を終わらせてデジタルワールドへやってきた12人の選ばれし子供たち。本日、来たのは雪の積もる山林のエリア。歯車工場を探しながら話題は昨日の鍛錬の話へ。

「ええなあゝ。ウチも参加したかったあ」

昨日は先に帰った凜華が羨ましそうに愚痴る。妹の体調も良かったとのことで今日は参加していた。

「薫さん、今度ヒヨコモンの戦い方も見てな？ ヒヨコモンも戦いに慣れてへんからな」

「お願いでござる！」

「おお。また機会があったらな」

雪道に足跡を残しながら進むと道が3つに分かれていた。

「どうする？」

「別れていきましょう」

尋ねる賢に京とヒカリは凜華と鳴の腕を取って、真ん中の道へ進んでいく。

「女の子だけじゃ危険じゃありませんか？」

「そうそう。凜華と鳴はまだ戦いに不慣れだし」

「そつだよ、一緒にいこうぜ！ ヒカリちゃんっ」

賢、慶悟、大輔の言葉に女子3人は振り返り、満面の笑みを見せる。

「大丈夫よ、ねえ？」

「ええ。問題ないわ」

「ちゅーか、慶悟らより京さんたちの方が頼るになるし」

京、ヒカリ、凜華の言葉に撃沈男子が3人。女子4人はそのまま分かれ道を進んでいく。残された男子8人も仕方がないと、それぞれ別れて進む。右の道に大輔、賢、奏、慶悟。左の道にタケル、伊織、天音、薫。

分かれ道に入っていった子供たちの背後に怪しい影が左へと過ぎった。

雪道を歩く女子4人。話題は定番なものになっていった。

「なあなあ、京さんと賢くんって付き合っとるん？」

「えー!? ち、違う違う!! 付き合ってなんかないわよ」

唐突な凜華の質問に京は焦ったように言う。挙動不審になる京にヒカリは思わず笑った。

「凜華ちゃん、そういう話好きねえ」

「え〜！　だって気になるやん」

「そういう凜華ちゃんは慶悟くんと何か進展ありました？」

無表情で鋭い質問を飛ばす鳴に凜華の笑顔が引きつった。

「な、何言つとるんや鳴ちゃん！　別にウチは慶悟のこと何とも思つてへんよ！？」

「そうですか」

淡々とした口調の鳴に凜華は必死に言い聞かせている。京とヒカリは生暖かい目で凜華を見る。

「そう言う鳴ちゃんは好きな人おらんの？」

聞く耳の持たない鳴に凜華は話を逸らす。キョトンとした顔の鳴に京とヒカリも興味津々の様子だ。

「いますよ」

「へ………？」

鳴の爆弾発言に今度は凜華がキョトンとなる。これは薫には聞か

せられない内容だ。知ったら間違いなくウザい。

「えゝ！？ 誰々？ 学校の子？？」

「……………伊織くん」

「「「えゝ……………！？」「」」

100パーセント、間違いなく、絶対に薫のは聞かせられない話である。

「はあ……………」

「ふう」

「はあゝゝ、ヒカリちゃん」

「……………えつと……………」

ため息を吐く男子3人に奏はどう反応していいのか分からず、それぞれを目を向ける。デジモンたちも呆れたようにパートナーを見ていた。

「うつせ……………」

「こら、ピコデビモン！」

思わず本音を零したピコデビモンを捕まえる奏。暴言に気付いていない3人に安堵のため息を吐く。

「あんな拒否んなくても……」

「鬱陶しがられてるのかな……」

「女の子の方が頼りになるって……」

「……はあ……」

「うん……やっぱり、ちょっとウザいかも」

聞かれないように奏は小言を言う。それを聞いていたデジモンたちは大きく頷いていた。

不意に振り返る。視線の先にあるのは踏み荒らされた雪道と雪を被った木々の茂みだけだ。歩みを止めたパートナーにクダモンは首を傾げた。

「どうした？」

「いや……………何でもない」

視線を戻した薫は少し先で待っているタケルたちに気付き、慌てて追い掛けた。追い付くと仲間も歩みを再開する。伊織が様子の違う薫を心配そうに見上げた。

「どうかしましたか？」

「ん……………ちょっと……………」

「大方、鳴が気になるんじゃないの？」

「お前、オレのこと何だと思ってるんだ？」

「『シスコン』」

天音の嫌味にファンビーマンとクダモンが同意する。ぐうの音も出ない薫は肩を落とす。その様子にタケルと伊織は苦笑していた。

「タケリユー！！ 大変だよーっ！！」

「早く来るだぎゃ、伊織！」

先に進んでいたパタモンとアルマジモンの切羽詰った声が届いた。急いで追い付いた子供たちは目の前に広がる光景に息を呑んだ。雪で作られた家が並ぶ街がある。だが、その街は見るも無残な姿になっていた。家は崩れ、大地は抉られ、街に精気は感じられない。

「酷い……………」

「まだ残ってるデジモンがいるかもしれない、行ってみよう。天音くんと薫さんはここで待ってて下さい」

そう言うのとタケルと伊織は街へと降りていった。不安そうに見送る天音を尻目に薫は森の方へ目線を向ける。

「どうした、薫？」

「なんか、視線感じるような……」

「本当？」

薫の言葉で天音も森の方を見た。すると森の奥の方で動く影が横切った。

「……！ 薫、タケルくんたち呼んできて。ボクが追い掛ける」

薫の返事も聞かない内に天音はファンビーマンを連れ、森の中に入ってしまった。薫はその後ろ姿を無言で見送った。動く気配のない薫をクダモンは訝しそうに見る。

「行かないのか？」

「……視線を感じたとは言ったが、殺気とは言ってない」

「……」

呆然としているクダモンを尻目に薫は反対側の山林に目を向ける。そのまま薫は茂みの中に足を進めた。天音を追いかけるわけでも、

タケルたちを呼びに行くわけでもないようだ。クダモンはパートナーの奇行に戸惑う。

「どこに行く気だ、薫。1人では危険だ、戻れ！」

怒鳴るクダモンだが、薫は無視しどんどん先へと進んでいく。

「薫っ！！」

クダモンの声と同時に薫は歩みを止めた。拓けた山林の麓が目の前に広がる。空虚を睨む薫は顔を上げると声を張り上げた。

「出て来い！！ もうオレ1人だぞっ！！」

静かな空間に薫の音が響く。しばらくすると森の中から影が現れる。髑髏の顔に漆黒の外套。巨大な鎌が怪しく光る。

「あれは……メタルファントモン！？」

突如、姿を現した完全体にクダモンは薫の肩から飛び降り、構えを取る。だが、それはパートナーに阻止された。

「待て、クダモン。手を出すな」

そう言われ、クダモンは初めてメタルファントモンの腕の中に気が付いた。小さい真っ白なデジモンが抱えられている。ユキミボタモンだ。気を失っているのか、ぐったりとしている。

「薫、どうということだ？」

「コイツ、ずっとオレたちを付けていたんだよ。で、あの子の身を
考えて言い出せなかったってわけ」

どうやら、このエリアに来た時からメタルファントモンは子供た
ちを見張っていたようだ。そして薫だけがそれに気が付いていた。
だが、ユキミボタモンを人質にされ、言うことが出来なかった。

「卑劣な……っ」

「同感だな。弱い奴を盾に身を守ろうなんて、最低な奴がすること
だ。絶対に許さねえ！」

薫とクダモンの怒りの声にメタルファントモンがゆっくり動き出
す。それよりも早くクダモンが駆け出した。

「ぜっしゅしょう絶光衝！！」

イヤリングから発せられる光に一瞬メタルファントモンの動きが
止まる。その隙に薫はメタルファントモンへ向かっていった。そし
てその腕からユキミボタモンを奪い取る。

「クダモン！！」

「ああ！ だんがんせんふう弾丸旋風！！」

回転しながらメタルファントモンに向かっていくクダモン。しか
し簡単に払い除けられてしまう。

「この子を助けられれば充分だ。退くぞ、クダモン」

薫はクダモンが肩に戻ると山林へ向かって走り出した。その後ろ姿をじっと見ていたメタルファントモンは僅かに嗤っていた。

タケルと伊織は薫、天音と別れたところまで戻ってきていた。だが、辺りを見渡すも2人の姿は見当たらない。

「どこに行ってしまったんでしょうか」

「2人共、勝手にいなくなるような人じゃないんだけど……」

「おい！」

困ったように顔を見合わせていると、大輔やヒカリたちが駆け寄ってくる姿があった。果てた街を見つけた際、メールを送っていたので様子を見に来たようだ。タケルたちの側まで来ると大輔たちにも荒らされた街が目に入った。

「あれか？」

「うん。街の中にはデジモンはいなかったよ。だた、襲われて間もない感じだったから、もしかしたらこの辺りにいるかもしれない」

「……お兄ちゃんたちは？」

姿の見えない兄と従兄弟に鳴は不安そうな顔を見せる。

「ボクたちも探してるところなんだ。ここで待っててもらってたんだけど……」

そこまで言うときタケルは言葉を切った。奥の茂みが揺れた。緊張の高まった子供たちはD-3を構える。だが、その手はすぐに下ろした。

「あゝ！ いたゝつ」

ひょこつと茂みから頭を出した天音に子供たちは安堵を漏らす。茂みから出てきた天音に連れられ、デジモンの群れも顔を出す。ユキダルモンやモジャモン、ユキミボタモンなど氷雪エリアにいるデジモンたちばかりだ。

「天音、コイツらは？」

「うん、その街に住むデジモンたちだよ。この先にある洞窟に隠れてみたい。それで逸れたユキミボタモンを探してここまで戻ってきたら、ボクたちがいたから様子を窺ってただって。それより薫は？ タケルくんたちを呼んでくるよう頼んだんだけど……」

不貞腐れながら言う天音にタケルは顔色を変えた。

「薫さん、一緒じゃないの？」

「え……、来てないの？」

ようやく状況を飲み込んだ天音も血の引いた顔になる。鳴に

至つては顔面蒼白になっている。タケルは1匹のユキダルモンに近付いた。

「ねえ、キミたちの街を襲ったのはいったい誰？」

「……メタルフロントモンっていう、完全体のサイボーグデジモンだよ。死神みたいな凶暴な性格のデジモンなんだ」

「完全体……」

進化の出来ないクダモンに完全体を相手にできるとは考え難い。もし、メタルフロントモンと遭遇していたら薫たちの身が危ない。それを考えてか、今にも泣き出しそうな鳴。この隣で慶悟がD-3を取り出している。

「……ダメだ、感知しない」

D-3の画面に映る『Error』の文字に慶悟は拳を強く握り締めた。

「とにかく探そう。そんなに遠くには行っていないはずだよ」

賢の言葉に子供たちは三々五々に別れて、山林の中に入っていた。

道から外れた山林の中、木の陰に隠れていた薫はそつと辺りを見渡した。静まり返った山林は逆に不気味で異様な雰囲気を感じ出している。だが、生物の気配はなく、安堵のため息を吐いた。

「大丈夫か、薫？」

肩の上から顔を覗くクダモンは酷く心配そうな表情をしている。その目線は自然と下にいく。薫もそれに合わせて自分の足に目を向ける。左脚の脛^{ふくろひざ}の部分の衣類が破け、一筋の血線が通っている。他にも身体中、痣や切り傷などを負っていた。目線を上にやると先程までいた山道が見える。

「こんなもん、ほつときゃ治るって」

「だが……」

反論しようとしたクダモンだったが、薫はそれを制する。小さく笑う薫にクダモンは口を噤んだ。

「とりあえず、みんなと合流しなきゃな」

そう言いながら薫は腕の中にいるユキミボタモンの頭を撫でた。傷1つないユキミボタモンは心配そうに薫を見上げている。

「お前も絶対に仲間のもと送ってやるから心配するなよ」

震える小さな身体をそつと抱き締める薫の姿にクダモンは違和感を覚えた。いつもの私の強く背伸びをしたパートナーの姿はなく、年相応の弱く小さな背中があった。

「薫……お前……」

「しっ 静かに！」

クダモンが言葉を紡ごうとすると薫がそれを遮る。薫の見る先に目を向けると漆黒の外套が見えた。それはなんの迷いもなく近付いてくる。

「バレているようだな」

「みてえだな。クダモン……お前、この子連れて天音たち呼んで来い。その間。オレが……」

その後の言葉を薫は言うことが出来なかった。後頭部を襲った鈍い衝撃に薫は言葉を忘れ、悶えている。クダモンが薬莢を持った尻尾で思いつきり殴ったのだ。

「何し……っ」

「ふざけたこと言ってみろ、今度は本気で許さないぞ」

クダモンは怒りや悔いが入り混じった複雑な表情をしていた。薫はパートナーの覇気に押され、言葉を呑んだ。

「ワタシはパートナーを守るためにいるのであって、守られるためにお前と共にいるわけではない。……頼ってくれ……… 必要としてくれ、薫」

薫が息を呑んだのが分かった。大きく見開いた目にクダモンの真

剣な表情が映った。

「……………ごめん……………オレ……………お、れ……………」

動揺と戸惑いに満ちた薫の瞳にクダモンの方が困惑する。だが、その理由を問う時間はなかった。

「……………！ 薫！！」

「ソウルプレデター」

エネルギーを纏った大鎌が薫の背にあった大木を両断する。クダモンが身体ごとぶつかって辛うじてそれを避けた。

「逃げる、薫！」

「クダモンっっ」

薫を守ろうと小さな体でメタルファントモンに立ち向かっていくクダモン。何度弾き飛ばされようとも、何度切り裂かれようとも、クダモンは立ち上がる。パートナーを守るため、自分がいくら傷付いても戦うことを止めなかった。

「もういい！！ クダモン、戻れっ！！」

いくら薫が叫んでもクダモンは聞く耳を持たなかった。

「早く行け！！」

「バカ言っな！！ お前を置いていけるわけないだろうっっ」

「大丈夫だ。……信じる」

クダモンの決意に満ちたような言葉に薫は首を振った。信じていないわけではない。それでもクダモンがしているのは捨て身の戦い方だった。

メタルフロントモンに向かって体当たりをしていくクダモンだが、いとも簡単に弾き返されてしまう。メタルフロントモンは鎌を両手で持ち直し、前に突き出した。

「グレイブスクリーム」

鎌から発せられる奇怪音に薫は耳を塞ぐ。だが、音は直接頭の中に響いてくる。立っているのも辛く、力が入らなくなった脚が崩れ落ちる。そして音が消えたと同時に薫は息を呑んだ。光景がスローに見える。目の前には薫同様、力なく伏せるパートナーの姿があった。そしてそんなパートナーに向かって死神の鎌が振り下ろされようとしていた。

「クダモンーっ！……！！」

薫の叫びと呼応するようにD・3が青紫の輝きを放った。

「これは……っ」

「クダモン進化——レツパモン」

聖なる輝きに怯んだメタルフロントモンの動きが止まった。一瞬の隙で振り下ろされた鎌は当たることはなかった。薫の前に降り立ったレツパモンはパートナーを凝視する。

「レッパモン……？ 進化……したのか？」

「そのようだな」

あくまで冷静なレッパモンに思わず笑みが零れる。鋭利な尾を持った鎌鼬にも似たパートナーは踵を返した。見るとメタルファントモンが鎌を構え直している。

「…………… 我が友を傷付けた報い、しかと受けてもらうぞ」

レッパモンは走り出すとメタルファントモンに目掛け、刃の尻尾を振りかざした。

「真空力マイタチ！！」

風の刃がメタルファントモンに襲い掛かる。だが、素早い動きで風を避けると鎌にエネルギーを集中させていた。

「ソウルプレデター」

巨大な鎌がレッパモンに降り掛かる。それを避けるとレッパモンはメタルファントモンの懷へ飛び込む。

「じゅうがらんげき
獣牙乱撃っ」

メタルファントモンの身体に鋭い爪の斬撃が何発も入り込む。メタルファントモンは持っていた鎌に力を込めた。

「グレイブスクリーム」

響き渡る奇怪音にレッパモンは後退し、距離を取る。そして近くの樹へと登った。茂る葉と積もる雪にレッパモンの姿は隠される。木々を飛び回り、メタルファントモンを翻弄する。

「くろくろれつへん 駆駆裂空斬！！」

木の上から前転しながらメタルファントモンに強烈な一撃を食らわせた。すると外套の裏に隠されていた黒い歯車が粉々に砕け散った。メタルファントモンは正気に戻ったのか、驚いたのか、そのままだどこかに飛び去ってしまった。

「……終わった、のか？」

呆然と座り込んでいる薫にレッパモンが近付いた。

「大丈夫か、薫」

「あ、ああ！　ありがとう、レッパモン」

礼を言う薫にレッパモンは1度頷いただけだった。

「さあ、みんなのところに帰ろう。きっと心配している」

「そうだな………なあ、レッパモン」

薫はレッパモンに跨りながら、その首筋を撫でた。

「なんだ？」

「……………オレのパートナーでいてくれて、ありがとう」

「……………ああ」

パートナーの最大の賛辞にレッパモンは素直に嬉しく思った。

雪道を駆け抜けていると、翼の音と聞き慣れた声が飛んできた。

「薫さん！？」

見上げるとペガスモンに乗ったタケルが酷く驚いた顔をしていた。

「いったいどこに行ってたんですか！？ みんな心配してたんですよ？ っていうか、そのデジモン、もしかしてクダモンが進化を？ と、いつよりどうしたんですか、その怪我！？ 一体何が……っ」

「だあー！！ ならないっぺんに聞くなっ」

「聞きますよ！！ 本当に心配してたんですよ！？」

いったん足を止めたレッパモンにつられ、ペガスモンも地面に降りる。ご立腹のタケルを見て、薫は顔を綻ばした。

「何笑ってるんですか？」

「いや、別に」

「そうやって誤魔化す！」

「分かってるって。みんなと合流したらちゃんと話すから」

本当なら今すぐ説明をしてほしいのか、不服そうなタケルだった
が渋々了承して仲間たちにメールを送っている。

「批難は覚悟してくださいね。みんな心配通り越して怒ってるよ
うなので」

「マジ……？」

「マジです」

Dターミナルを閉じるタケルの手元は些か乱暴だ。よっぽど心配
を掛けたらしい。

「なあ、タケル」

「……なんですか？」

不機嫌な口調に苦笑いしか出来ない。

「今度の日曜って暇か？」

「……暇っていったら暇だし、暇じゃないっていったら暇じゃないですよ」

「どっちだよ」

「なんですか、唐突に」

胡散臭げに言うタケルに、言うタイミングを間違えたかなあ、と後悔する。だが、早めに確認したいことがあった。

「ちよつと2人で会えないか？ 出来れば現実世界の方が良いんだが……」

「……？ 別に構いませんが……どうしたんですか、急に」

「それは今度、な」

薫はそれだけ言うとレッパモンに乗ったまま駆け出した。見るとちよつと鳴と伊織が駆け寄ってきたところだった。鳴は心配すぎて泣き出してしまうている。妹を宥める薫の姿を尻目にタケルはペガスモンと顔を見合わせていた。

第十話 強くなりたい！ レッパモン努力の進化（後書き）

《反省&予告》

雑。

いい加減、小説のUPと書かれている小説が追われてしまいました。
反省中。

次からは少し本編休息。 閑話を少々UPしようと考えています。

閑話：Hero Interview ～Keigo Version～（前書）

本編から外れた話です。

作者が新・選ばれし子供たちにインタビューしております

閑話：Hero Interview ～Keigo Version～

——『初めまして、作者です。ヒーローインタビュー第一弾。すっかりやられ役が定着したこの方々です』

慶悟

「誰がやられ役だ!!」

リュウダモン

「お前だろ……」

——『まずは自己紹介からお願いします』

慶悟

「えっと、オレは英^{はなぶさ}慶悟^{けいご}。今年、中学生になったばかりだ。ちなみに誕生日が4月26日だからもう13歳になったぜ。牡羊座で血液型はB型。身長は……まあ平均よりはちょっと高いかな。体重も結構筋肉質な方だから重いと思う。髪は茶黒のベリーショートだな。瞳は赤茶」

リュウダモン

「オレはリュウダモン！ 獣型のデジモンでワクチン種だ。得意技は敵の攻撃を鎧兜で受けて反撃する<兜返し>。必殺技は敵の懐に飛び込み鉄の刃を口から放つく居合刃<だ!>」^{いあいじん}

——『英家の家族構成を教えてください』

慶悟

「4人家族だな。広告代理店で働いてる親父にスーパーでパートし

てる母親、あとは高校生の兄貴がいるぜ」

リュウダモン

「チヨー爽やかで出来の良い兄貴な」

慶悟

「どうせ出来の悪い弟だよ」

——『趣味・特技は何ですか？』

慶悟

「趣味はソフトボールだな。親父が小学校でソフト部の監督してるんだよ。兄貴と一緒に入ってたし。そのまま中学でもソフト部に入ってたんだ」

——『野球部ではないんですね』

慶悟

「親父がソフト部だったらしいから」

——『では特技は？』

慶悟

「うーん……特技ってほどのことではないけど暗算はすぐできるぜ」

——『意外な特技ですね。では次に好きな食べ物・嫌いな食べ物を教えてください』

慶悟

「凜華の作る玉子焼き！ あれ絶品なんだぜっ」

リュウダモン

「凜華の作るのは何でも好きなくせに……」

慶悟

「ほつとけ!」

リュウダモン

「オレはバナナが好きだなあ。貝類はあんまり好きじゃない」

慶悟

「オレはバナナ嫌い……」

——『では、休日は何をして過ごしていますか?』

慶悟

「だいたいソフトの練習かなあ。休みの日は毎朝1時間は走り込みしてるぜ。本当は毎日やりたいんだけど、さすがに学校がある時はできねえからなあ。疲れるし」

リュウダモン

「最近はおれも一緒にやってんだぜ!」

慶悟

「あとはダチと遊びに行くくらいかな。ゲーセンとかカラオケとかあ、あと凜華ん家にもよく行くぜ。弟妹らとも仲良いし」

——『そうですか。次はデジモンについて。デジモンとの出逢いはいつですか?』

慶悟

「はつきりと関わったのは2000年だな。1999年のお台場霧事件は噂にしか聞いたことなかったから。ネット事件を見て兄貴と一緒にメールを送った」

——『では京と同じですね。パートナー・リュウダモンとの出逢いはいつですか?』

慶悟

「え……? これ言っているの?」

リュウダモン

「良いんじゃない?」

慶悟

「リュウダモンのデジタマを見つけたのは今年に入ってからだな。光が丘誘拐事件が収まって2ヶ月くらい経った頃だったと思っただけ。家に帰ったらさ、パソコンの電源が入ってて、そこからデジタマとD-3が出てきたんだ。あれはビックリしたよなあ」

リュウダモン

「オレが生まれた時は雪が降る寒い日だったな……」

慶悟

「そうそう! ちょうど兄貴も一緒ですっげえ驚いてたよな」

——『なるほど。他の選ばれし子供たちとの出逢いはいつですか?』

慶悟

「他のってタケルたちじゃないよな?」

——『当たり前です。三軒茶屋の子供たちです』

慶悟

「だよな。そうだな……凜華とは小学2年の時に会ったぜ。アイツ、いつの日からかソフトの練習を校庭の片隅で見てるようになったぜ、オレが声を掛けたんだ。それから部活仲間だったよ。薫とは一応、小学校からの同級生だったけど、付き合いはデジモンたちが切欠だったから中学に入る直前の春休みだ。凜華を通じて天音と知り合って、朝比奈兄妹と知り合ってたって感じだな」

リュウダモン

「薫とは同級生だったんだろ？」

慶悟

「一緒のクラスになったことなかったから。中学は同じクラスだぜ」

——『普段の私服は？』

慶悟

「基本、制服が多いぞ。中学生だし。海老色のブレザー」

——『休日とかの服装は？』

慶悟

「あー……楽な格好？」

リュウダモン

「お前、ファッションセンスないもんな。ジャージでいることが多いし」

慶悟

「家の中ではだろ。そとに出る時は着替えてるっつーの。だいたい赤系か黒系のＴシャツにジーンズでいることが多いかな」

——『冒険時の服装を教えてください』

慶悟

「これ、普通は本編内で盛り込むんじゃ……」

——『教えてください』

慶悟

「はいはい。上は黒無地の七分袖のインナーで赤系の半袖のロツカージャケットを羽織ってる。ズボンは黒茶っぽい七分袖のチノパンだ。頭には赤とオレンジのバンダナを着けてるな。あと黒革のグローブと腰にベルトポーチ着けてるぜ。D-3はそんな中。靴は赤のスニーカーだな」

——『ごちゃごちゃして面倒臭い服装ですね』

慶悟

「オメエが言うな！」

——『続きましてキャラ設定裏話。実はもっとツンケンしていた？』

慶悟

「らしいな。初期設定ではもっとオレ様気質だったんだ。イメージでは大輔や太一さんの主人公キャラを少しツンデレにした感じだったらしい。それが、なぜか薫の方がオレ様っぽくなって、オレがや

られキャラに……」

リュウダモン

「でも主人公って結構やられキャラじゃねえ？」

慶悟

「そんなことねえだろ」

——『当初はお台場に住んでいる設定で京の同級生だったそうですね』

慶悟

「ああ。本当はオレだけ初期のデジヴァイスを持ってて、それがD-3に変わったって設定だったんだけど、いつの間にか三軒茶屋に住んでたな。始めっからD-3だったし。リュウダモンと会ったのも2000年の設定だったけど、だいぶ後になったしな」

——『なるほど。では、最後にパートナーについて話してください』

慶悟

「リュウダモンは真っ直ぐで正義感溢れる奴だよ。ちょっと生意気言う時もあるけど、オレのこと考えて言ってくれてることだし。似た者同士なところあるから喧嘩になる時もあるけど、いつも側で励ましてくれる。すっげえいい奴だ」

リュウダモン

「喧嘩っ早くて誤解されやすいところあるけど、本当はすごく仲間想いで誰よりも正義を貫く心を持っている。口が悪いのがたまに瑕だけど、慶悟は誰かを思いやれる凄いい奴だよ」

——『はい、ありがとうございます。下記にプロフィールをまとめてあります』

慶悟

「……………つか、これって完全な時間稼ぎじゃ……………ぐはっ!」

リュウダモン

「あゝあ、余計なこと言うから……………」

——『ありがとうございます!』

英 慶悟（はなぶさ けいこ）

プロフィール

性別：男

年齢：12歳（中学1年生）

血液型：B型

誕生日：4月16日

星座：牡羊座

誕生花：ヤマブキソウ

（花言葉：清々しい明るさ）

趣味：ソフトボール

特技：暗算

食べ物

好き…玉子焼き（凜華製）

嫌い…バナナ

一人称：「オレ」

紋章：『?・?』

家族：父（暁^{あき}）、母（麻希子^{まきこ}）、兄（翔悟^{しょうご}）

容姿

顔：中の上。ヤンチャなカッコいい系。

髪：茶黒。サイドは短く刈り込み、トップと後頭部にかけて長さを残すベリーショート。

瞳：赤茶。

身長：京より大きく、太一より小さい。薰よりちょっと大きい。

体重：平均より重い。

格好：制服：海老色のブレザー。乳灰色のブラウス。海老色のネクタイ。

海老色と黒のチェックのズボン。

私服：赤系や黒系のTシャツ。黒系のデニムジーンズ。

冒険服：黒無地の7分袖のインナー。赤系の半袖のロッカージャケット。

黒茶っぽい7分袖のチノパン。赤系のスニーカー。

蒼の靴下。

頭に赤とオレンジのバンダナ。黒革のグローブ。黒のベルトポーチ。

性格

曲がったことが大嫌いな熱血漢。正義感が強く、嘘がつけない性格。頑固で意地っ張り。若干、血の気が多く、喧嘩っ早いところがあるが、基本的に友人想い。単純な性格の為か、いじられ役になっていることが多い。頭は良い。仲間が傷付くのを極端に嫌う。

備考

三軒茶屋に住む。河田中学校の1年生。ソフトボール部に所属。

ポジションはレフト。ゝ1話ゝ

D-3はオレンジ色。オリジナル同様ゲートが開ける。ゝ1話ゝ

薫とは同級生。凜華は小学校時代のソフトボール部の後輩。ゝ1話ゝ

あまり戦いには意欲的ではないらしい。友人が傷付くのが怖い(?)。ゝ3話ゝ

中学1年の1学期中間試験は学年3位。ゝ5話ゝ

夢は学校の先生。恩師がいるらしい。ゝ5、8話ゝ

パートナー

デジモン：リュウダモン

レベル：成長期

一人称：「オレ」

食べ物

好き：バナナ

嫌い：貝類

性格：パートナー同様、熱血漢で曲がったことは大嫌い。直球型のツッコミ役。

進化系：?? ↓ キョキョモン ↓ リュウダモン ↓ ギンリュウモン ↓ ?
? ↓ ??

小説に出てきた設定のみ載せているので、パートナーデジモンも出てきた進化系のみ掲載します。

新たに明かされた設定はその都度、足していくつもりです。

第1弾。慶悟&リュウダモン。

やっぱり、やられキャラでした♪

初期はツンデレキャラだったんですよ。今の姿からは想像できませんが……。

閑話：Hero Interview ～Amane Version～

——『こんにちは、作者です。ヒーローインタビュー第2弾。鋭い突っ込みで一刀両断。この方々です』

天音

「何、その紹介」

ファンビーマン

「間違つてはないけどね」

——『まずは自己紹介から』

天音

「はい。ボクの名前は東雲^{しののめ} 天音^{あまね}です。11歳で小学6年生になります。10月13日生まれの天秤座です。血液型はA型です。身長は平均的だと思いますよ。大輔くんよりは小さいですけど。体重は少し痩せてる方かな。あんまり食べる方ではないので。髪は黒のセムレイヤーですね。瞳の色は青混じりの黒です」

ファンビーマン

「はい！ ボクはファンビーマン！！ 昆虫型デジモンでウィルス種。必殺技はギザギザのある小さな針を連射して放つくギアステインガー>！ 得意技は頭部の触角を赤くして味方に連絡し、大勢の仲間を呼ぶく88コール>！！」

——『東雲家の家族構成を教えてください』

天音

「家族ですか……。父と母とボクの3人家族です。父は国際弁護士で自分の法律事務所の所長もしています。母は政治家の秘書をやっています。あと、家族ではありませんが、ボクの世話は通いの家政婦さんがやってくれます。家事とかも。あとは父さんの秘書の人も時々、面倒見てくれます」

——『お坊ちゃん？』

ファンビーモン

「ボンボン♪」

天音

「ちよつと……っ」

——『では、趣味・特技は？』

天音

「趣味は絵を描くことですね。小さい時から両親が忙しくて1人でいる多かったから、自然と1人で遊ぶのに絵を描くって感じになってました。特技は……そうですね……時事問題とか、社会的問題に対する論文書くことかな……」

ファンビーモン

「寂しい趣味だよね」

天音

「……うるさい」

——『好きな食べ物・嫌いな食べ物は何ですか？』

ファンビーマン

「ブドウ！ スイカ！ イチゴ！ ミカン〜！」

天音

「果物全般ね。ボクは魚介類が好きですね。特にウニは美味しいですよ。嫌いなのは牛肉です。クセが合ってちょっと……」

ファンビーマン

「ボクはピーマン嫌い〜」

——『休日の過ごし方を教えてください』

天音

「塾です。あとは絵を描きに出掛けますね。風景画を描くのが好きなもんで。もちろん人物画も描きますよ。友達と遊びに行くところとはあんまりないですね」

ファンビーマン

「天音、あんまり友達いないもんね」

天音

「うるさいってば」

——『次はデジモンについて。デジモンと出逢ったのはいつですか？』

天音

「ボクはすごく最近です。2002年にあったネット事件で目の当たりにしました。それまでは正直、デジモンの存在を信じていませんでした。情けない話です」

――『パートナーと出逢ったのは？』

天音

「6年生になる直前です。2002年のネット事件のすぐ後でした。委員会で学校に行った時、パソコン室で1人でいる時に」

――『他の子供たちと出逢ったのはいつ頃ですか？』

天音

「慶悟たちですよ。薫と鳴は従兄弟なので小さい時から知ってます。凜華は……初めてって言うなら小2ですね。凜華がボクのクラスに転入してきた頃です。親しくなったのはデジモンが切欠ですね。たまたま委員会があつて春休みにプロロモンを学校に連れてつてたら、部活で来てた凜華に見付かつて……そうしたら自分もパートナーがいるんだって話になったんです。慶悟とは凜華経由で知り合いました。ちなみにタケルくんとは小1からの付き合いです」

――『普段の私服はどんなのですか？』

天音

「あんまり派手なのは着ないですね。ＴシャツよりもＹシャツでいることが多いし。ズボンには黒とか紺のスラックス系が多いですね」

――『冒険時の服装を教えてください』

天音

「上は白のＹシャツで紺のベストですね。黒っぽい緑のネクタイもしてます。ズボンは黒のスラックスです。靴は黒の革靴を履いてます。後は大きめの黒のシオルダーバックを持ってます。中には絵を

描く道具が入ってます。D・3もカバンの中ですよ」

——『では、続きましてキャラ設定裏話。もっとギスギスしたキャラだった？』

天音

「ちょっと悪い言い方してませんか？ 警戒心が強かったって言うてもらえませんか？ 元々は大輔くんたちにはもっと冷めた態度取る予定だったんです。三軒茶屋組と幼馴染みのタケルくんには普通だけど、まだ知り合って日の浅い大輔くんたちとは打ち解けず、って感じで」

ファンビーマン

「だけど、毒舌キャラは最初っからだったよね」

天音

「……キミもね」

——『最後にパートナーについて』

天音

「ファンビーマンは甘えん坊でちょっと怖がりなところがあるけど、いざとなったら凄く頼もしいです。いつもボクの後ろに隠れてるけど、ボクを守ろうと一生懸命になってくれて、いつも助けになってくれます」

ファンビーマン

「天音は真面目ですごく几帳面なんだよ。ちょっと潔癖で毒舌だけど、自分に誇り持って自分の意見をはっきり言える子なんだ。プライド高くて見栄っ張りに見えるけど、本当は一生懸命なんだ。」

ボク、天音だ〜い好き!」

——『はい、ありがとうございました。下記にプロフィールまとめてあります』

天音

「……ねえねえ。これ、いつまで続けるの?」

——『慶悟くんからレイくんまで7人やりますが……』

天音

「週1は止めてね。見てる人、飽きるよ」

——『………善処します………』

東雲 天音(しのめ あまね)
プロフィール

性別:男

年齢:11歳(小学6年生)

血液型:A型

誕生日:10月13日

星座:天秤座

誕生花:アカンサス

(花言葉:芸術)

趣味:絵を描く

特技:時事問題

食べ物

好き…魚介類

嫌い…牛肉

一人称…「ボク」

紋章…『?』

家族…父（勝春^{かつはる}）、母（旭^{あさひ}）

容姿

顔…上の下。真面目な可愛い系。

髪…漆黒。前髪以外はセイムレイヤー。

瞳…蒼黒。

身長…ヒカリより大きく、大輔より小さい。奏よりちょっと大きい。
体重…平均より痩せてる。

格好…私服…薄い色のYシャツ。黒や紺のスラックス系。

冒険服…白のYシャツ。紺のベスト。黒っぽい緑のネクタイ。
黒のスラックス。黒の革靴。

大きめの黒のショルダーバック（中は絵を描く道具など）。

性格

穏やかで真面目。理論派で慎重な性格。結構、腹黒で毒舌家。少し見栄っ張りなところがあり、プライドが高い。とても几帳面で潔癖症などところがある。少し生意気。

備考

三軒茶屋に住む。河田小学校の6年生。ハ1話

D-3は紺色。オリジナル同様ゲートが開ける。ハ1話

凜華とは同級生。タケルの幼馴染み。ハ1話

塾に通ってる。ハ5話

携帯電話を所持している。ハ5話

父親と確執あり(?)。〔5話〕

閉暗所恐怖症。幼い頃に誘拐された経験あり。〔8話〕

パートナー

デジモン：ファンビーマン

レベル：成長期

一人称：「ボク」

食べ物

好き：果物全般

嫌い：ピーマン

性格：警戒心が強く、パートナー同様に毒舌家。照れ屋で甘えん坊。怖がりだが、根はしっかり者。

進化系：?? ↓プロロモン ↓ファンビーマン ↓ワスプモン ↓?? ↓??

小説に出てきた設定のみ載せているので、パートナーデジモンも出てきた進化系のみ掲載します。

新たに明かされた設定はその都度、足していくつもりです。

第2弾。天音&ファンビーモン。

彼らは初めから毒舌でした♪

初期設定に比べるとだいぶ丸くなったなあ……。

——『どうも、作者です。ヒーローインタビュー第3弾。最強コンビのこの方々です』

薫

「何が？」

クダモン

「ワタシもなのか……？」

——『では始めに自己紹介をお願いします』

薫

「リョーカイ。オレは朝比奈あさひな 薫かおる。中1の12歳だ。11月25日生まれ。射手座でO型。身長は……京よりは高いな。慶悟よりは少し低い。ま、すぐに追い付くと思うけどな。体重は平均的だと思う。髪はこげ茶マッシュウルフで瞳は紺色だ」

クダモン

「ワタシはクダモン。聖獣型デジモンでワクチン種だ。必殺技は弾だん丸旋風がんせんふう。身体を回転しつつ薬莢ごとぶつける技になる。得意技は絶ぜつ光衝こうしょう。ピアスから発する大きな輝きで目を眩ます技だ」

——『朝比奈家の家族構成を教えてください』

薫

「和菓子職人の親父と3つ下の妹の鳴の3人家族だ。母親は離婚していない。今は……まあ、普通に暮らしてんだろうな」

——『和菓子屋さん?』

薫

「ああ。三軒茶屋で『清月堂』っていう老舗和菓子店を営んでる」

クダモン

「美味いぞ」

——『ぜひ、今度お土産で持ってきてください。……さて、続きまして趣味・特技を教えてください』

薫

「趣味は読書だな。特に歴史ものとか、自伝とか好きだな。考古学関係の本も良く読むぞ。特技は……人間観察?」

クダモン

「どちらかというと趣味な気はするが……。どちらにせよ悪趣味だな」

薫

「洞察視力が良いんだ。別に変な意味じゃねえし。まあ、他人の行動って観てて面白いけど」

クダモン

「それが悪趣味なんだ」

——『好きな食べ物・嫌いな食べ物は何ですか?』

薫

「やっぱり和菓子屋やってるからかな、ゆべしとか好きだな。まあ、和菓子全般は好きだけど。嫌いなのはわさびかな……。つーんくる感じが嫌……」

クダモン

「ワタシも薫の影響か、和菓子は好きだな。特にわらびもちが好きだ。嫌いな食べ物はないけど」

——『では休日は何をしていますか？』

薫

「休みの日か……。何してるっけ？」

クダモン

「放浪」

薫

「ああ、確かに。特に当てもなくブラブラしてるかもな。外で本読んだり、珍しい店見つけたり。この前はぶらっと名古屋まで行って味噌カツ食って帰ってきた」

クダモン

「家でおとなしくしてられないのか？」

薫

「無理」

——『なんか納得できますね。次にデジモンについて。本編でも語ってましたが、デジモンとの出逢いを教えてください』

薫

「1999年のお台場霧事件が切欠だ。鳴をお台場の爺さんの家に送ってつた帰りに渋谷でエンジEMONを見たんだ。あの時はすっげえ感動したぜ〜！世界観が変わったっていうかさ〜！！」

クダモン

「次、行ってくれ」

——『了解です。では、パートナー・クダモンと出逢ったのはいつですか？』

薫

「おいおい！まだ話が途中……っ」

クダモン

「ワタシと薫が出逢ったのは晩冬だ。ラブラモンの同じ時期だな。話では薫と鳴が家でパソコンをいじっているとワタシとラブラモンのデジタマとD-3が現れたそうだ」

——『成る程。クダモンとラブラモンも兄妹のようなものかもしれないね』

クダモン

「そうだな。生まれた時期も近いからほとんど一緒だ」

薫

「……もついいよ」

クダモン

「拗ねるなよ、薫。その話はまた後でじっくり聞いてやる」

——『機嫌直して下さい。次に他の子供たちとの出逢いを教えてください』

薫

「鳴は妹、天音は従兄弟だから別にいいよな。慶悟は一応、小学校から同級生ではあるけどクラス一緒になったことないから話したことはなかったな。顔知ってる程度だったよ。話すようになったのは小学最後の春休みからだな。天音からクラスメイトもデジモン連れるよって聞いて、凜華と知り合ったんだ。で、凜華の紹介で慶悟とも話すようになったよ」

クダモン

「薫と慶悟じゃタイプが違うからな」

——『普段の服装を教えてください』

薫

「学校は制服だぜ？ 海老色のブレザーに乳灰色のブラウスだろ。海老色のネクタイ、海老色と黒のチェックのズボンって感じたな。私服って言われると暗色系のＴシャツとかＹシャツに、蒼系のデニムジーンズ。シルバーアクセも好きで結構着けてるぜ」

——『では冒険時の服装は？』

薫

「ワイン色の長袖Ｖネックに紺のミリタリージャケットの腕を少し捲くってる。黒のカーゴパンツと黒茶の革ブーツ。十字架のシルバーネックレスとシルバークレスレットだろ。黒茶色の革のウエストポーチにＤ－３を入れてるぜ」

——『キャラ設定裏話。初期の設定では居なかった……？』

薫

「ひでえよなあ、居ないとか。成長期のデジモン調べて、“クダモン入れたい！”って理由から途中で入れ込んだんだぜ？」

クダモン

「いいじゃないか、今ここにいるんだから」

——『そうそう。今はオリキャラで2番目に好きですよ？』

薫

「嬉しくねえ……って、1番じゃねえのかよ！」

——『最後にパートナーについて、どうぞ！』

薫

「クダモンは冷静で常にクセの強い仲間たちも上手くまとめてると思う。少し短気ですぐに殴ってくるけどな。でもいつだってオレの側にいてくれて、オレの力になってくれる。最高のパートナーだよ」

クダモン

「薫は我が強くて、口が悪いから付き合い難いと思われることもある。だが、物事を客観的に捉え、どんな時も冷静な判断をすることが出来る。向上心を持ち、怠慢せず、常に努力を忘れない。そんな薫をワタシは尊敬している」

——『はい、ありがとうございました。では、下記にプロフィールをまとめておきました』

薫

「……いい加減、話アップしろよ」

「………頑張ります………」

朝比奈 薫（あさひな かおる）

プロフィール

性別：男

年齢：12歳（中学1年生）

血液型：O型

誕生日：11月25日

星座：射手座

誕生花：セントポリア

（花言葉：小さな愛）

趣味：読書

特技：人間観察

食べ物

好き：ゆべし

嫌い：わさび

一人称：「オレ」

紋章：「??」

家族：父（成治）、妹（鳴）

容姿

顔：上の上。兄貴なカッコいい系。

髪：こげ茶。フェイスラインにマツシュを残したマツシュウルフ。
瞳：紺。

身長：京より大きく、太一より小さい。慶悟よりちょっと小さい。
体重：平均的。

格好：制服：海老色のブレザー。乳灰色のブラウス。海老色のネクタイ。

海老色と黒のチェックのズボン。

私服：暗色系のＴシャツやＹシャツ。蒼系のデニムジーンズ。
シルバーアクセを着ける。

冒険服：ワイン色の長袖Ｖネック。紺のミリタリージャケット
トで腕を少し捲くつてる。

黒のカーゴパンツ。黒茶の革ブーツ。黒茶色の革の
ウエストポーチ。

十字架のシルバーネックレスとシルバーブレスレッ
ト。

性格

サバサバした性格で物事を客観的に捉えることが出来る。しつかり者で頼れる兄貴分。マイペースを貫き、我が強いところがある。抜け目がない。天性の努力家。普段は穏やかだが、怒らせると怖い。超シスコン。

備考

三軒茶屋に住む。河田中学校の１年生。 ㇰ1話

D-3は青紫色。オリジナル同様ゲートが開ける。 ㇰ1話

慶悟とは同級生。鳴は妹、天音は従兄弟。 ㇰ1話

お台場霧事件の際、渋谷でエンジェモンを目撃した。 ㇰ1話

小学6年の頃『河小のドン』と呼ばれていた。 ㇰ3話

シスコン。 ㇰ4話

兄妹の中で何かある様子。 ㇰ4話

離婚して鳴と共に父親と暮らしている。 ㍈8話㍈

アドバイスは的確だが、スパルタ。 ㍈10話㍈

デジモンについて過去のデータをノートにまとめている。 ㍈10話㍈

パートナー

デジモン：クダモン

レベル：成長期

一人称：「ワタシ」

食べ物

好き…わらびもち

嫌い…なめこ

性格：冷静で真面目な性格。常に皆より一步下がっている。まとめ役となることが多い。薫の肩が定位置。薬莢は尻尾で持つてる。

進化系：?? ↓キャロモン ↓クダモン ↓レッパモン ↓?? ↓?? ↓??

小説に出てきた設定のみ載せているので、パートナーデジモンも出てきた進化系のみ掲載します。

新たに明かされた設定はその都度、足していくつもりです。

第3弾。薫&クダモン。

いなかったんだよね、この人たち(笑)
一番ひどい初期設定。

閑話：Hero Interview ～ Mei Version ～

——『はい、作者です。ヒーローインタビュー第4弾。根暗な毒吐き娘、この方々です』

鳴

「……………ヒーローじゃないんですが……………」

ラブラモン

「そこはタイトルだから突っ込まないで、だつてえ」

——『初めに自己紹介をお願いします』

鳴

「はい。……………朝比奈^{あさひな} 鳴^{めい}と言います。小学4年生で9歳です。1月8日生まれの山羊座でA型です。身長は伊織くんより低いです。体重は……………普通だと思っんですけど、お兄ちゃんには軽過ぎ^{こんぺきいろ}だつて言われます。髪は金茶色のウェーブロングで、瞳は紺碧^{こんぺきいろ}色をしています」

ラブラモン

「ワタシは、ラブラモンです。獣型のワクチン種なお。必殺技は、強烈な吠え声で超振動を起こす、レトリバーク！ 得意技は、弱ったデジモンのデータを修復し最適化する、キュアーリキュール！」

——『朝比奈家の家族構成を教えてください』

鳴

「……………これ、言わなきゃダメですか？」

ラブラモン

「薫とお、同じだもんねえ」

——『まあ、一応』

鳴

「父と兄の3人家族です」

——『……………え？ 終わり？』

鳴

「はい」

——『えっと……………では、趣味・特技を教えてください』

鳴

「趣味はお菓子作りです。父が和菓子職人なので和菓子が得意です。洋菓子も作りますが……。特技は占いです。占って差し上げましょうか？」

——『いいえ、結構です。何か怖いので』

ラブラモン

「鳴のおゝ場合はゝ占いていうよりゝ、黒魔術だよねえ」

——『（どんな占い?!）……………続きまして、好きな食べ物・嫌いな食べ物は何ですか?』

鳴

「好きな食べ物は苺大福です。父の苺大福が美味しいです。嫌いな食べ物はセロリです」

ラブラモン

「ワタシもセロリ嫌いっ 水羊羹が大好きっ!」

——『休日は何をして過ごしていますか?』

鳴

「父に習ってお菓子作りをしています。父は和菓子職人ではありませんが、洋菓子も作りますのでいろいろ教わってます」

ラブラモン

「鳴の作ったお菓子、美味しいよっ!」

——『次にデジモンについて。デジモンと出逢ったのはいつの頃ですか?』

鳴

「1999年のお台場霧事件の時です。あの時はたまたまお台場にある祖父の家に居りました。バケモン……でしたっけ? 祖父と共に彼らに捕まっていたんです」

——『では、大輔と同じですね。実は顔見知りとか……?』

鳴

「いえ、全く」

——『あ、そうですか。それではパートナー・ラブラモンとの出逢

いはいつですか?」

鳴

「2月……頃だったと思います。お兄ちゃんとパソコンをいじっている時にラブラモンとクダモンのデジタマとD-3が現れたんです」

——『他の子供たちと出逢いは?』

鳴

「お兄ちゃんと天音くんは身内なので物心ついた時からです。次に天音くんの紹介で凜華ちゃんと、凜華ちゃんの紹介で慶悟くんと知り合いました」

——『普段の服装を教えてください』

鳴

「白系のチュニックとピンク系の膝丈プリーツスカートですね。あとは白のワンピースですね」

ラブラモン

「ワタシにも可愛いリボンいっぱいくれるのぉ」

——『良いですね。では、冒険時の服装を教えてください』

鳴

「ピンクのシフォンワンピースの上に白のポンチョを着けています。黒のレギンスとソックスを穿いて、薄茶のボア付きブーツを履いています。頭には赤いリボンのバレッタを付けて、あとは薄茶のシヨルダーポーチを持っています。D-3はポーチの中です」

——『続きましてキャラ設定裏話。初期は喋れない設定だった？』

鳴

「そうらしいですね。今も喋ることは得意ではありませんが、最初
は筆談だったようです。ですが、それだと面倒だということで口下
手になったそうです」

ラブラモン

「完全な作者の都合だねえ」

——『………申し訳ありません。……最後にパートナーについて
お願いします』

鳴

「ラブラモンはのんびり屋で甘えん坊なところがありますが、とて
も素直な良い子です。天然さんなのでちょっと空気を読まない言動
がありますが、いつでもワタシを笑わせてくれます。いつもラブラ
モンに元気を貰っています」

ラブラモン

「鳴は、大人しい子でえ、ちょっと表情が硬いからあ、冷たい子っ
て思われることあるけど、全然そんなことないよお！ 人見知り
などこあるけどお、本当は素直で優しい子だよ。我慢強いから、
もうちょっと甘えてほしいなあ」

——『ありがとうございます。まとめたプロフィールは下記にあ
ります』

鳴

「………次の話の構想、できていませんね？」

——『そ、そんなことは……っ』

鳴

「では早く次話をアップしてください」

——『……すみません……（泣）』

朝比奈 鳴（あさひな めい）

プロフィール

性別：女

年齢：9歳（小学4年生）

血液型：A型

誕生日：1月8日

星座：山羊座

誕生花：アザレア

（花言葉：愛されることを知った喜び）

趣味：お菓子作り

特技：占い

食べ物

好き：苺大福

嫌い：セロリ

一人称：「ワタシ」

紋章：『？？』

家族：父（成治）、兄（薫）

容姿

顔：中の上。おとなしい可愛い系。

髪：金茶。緩いウェーブロング。

瞳：紺碧。

身長：伊織より小さい。

体重：軽過ぎ。

格好：私服：白系のチュニック。ピンク系の膝丈プリーツスカート。

冒険服：ピンクのシフォンワンピース。白のポンチョ。

黒のレギンス。薄茶のボア付きブーティ―。黒のソックス。

薄茶のショルダーポーチ。赤いリボンのバレッタ。

性格

クールで大人しい性格。若干、根暗で感情が表に出にくい。その為、冷徹にみられがち。根は素直で心優しい引つ込み思案。辛抱強く、何事も嫌とはいえない。幸薄い少女。

備考

三軒茶屋に住む。河田小学校の4年生。 ㇰ1話

D-3は白色。オリジナル同様ゲートが開ける。 ㇰ1話

薫は兄、天音は従兄弟。 ㇰ1話

お台場霧事件の際、お台場の祖父宅にいてヴァンデモンに捕らえられていた。 ㇰ1話

最近、薫に冷たいらしい。兄妹の中で何かある様子。 ㇰ4話

結局、お兄ちゃんっ子。 ㇰ4話

離婚して薫と共に父親と暮らしている。 ㇰ8話

敬語がクセになつてる。 ㇰ8話

伊織が好き（！？）。 ㇰ10話

パートナー

デジモン：ラブラモン

レベル：成長期

一人称：『ワタシ』

食べ物

好き…水羊羹

嫌い…セロリ

性格：のんびり屋でマイペースな性格。天然で大ボケをかます。ややKY。

進化系：?? ↓シャオモン ↓ラブラモン ↓シーサモン ↓?? ↓??

小説に出てきた設定のみ載せているので、パートナーデジモンも出てきた進化系のみ掲載します。

新たに明かされた設定はその都度、足していくつもりです。

第4弾。鳴&ラブラモン。

筆談やりたかったなあ……。
けど、面倒臭そう。

——『えー……作者です。ヒーローインタビュー第5弾。浪花の元気娘。この方々です』

凜華

「どうも！　ウチは……」

ヒヨコモン

「わあー！！　自己紹介はまだでござるっ」

——『……はい、では改めまして、自己紹介をお願いします』

凜華

「もうええの？　ウチは由良^{ゆら}　凜華^{りんか}！　小学6年生の11歳や！
7月16日生まれの蟹座なんや。血液型はO型やで。身長はヒカリちゃんとか、奏くんと同じくらいや。体重は平均的やね。髪は薄茶のボブ！　前髪はちょんまげにしとる。瞳も茶色やね」

ヒヨコモン

「拙者はヒヨコモンと申すでござる。ヒナ鳥型デジモンのワクチン種でござる！　必殺技は刀を気合と共に振り下ろすからたけわり！
！　……でござる」

——『由良家の家族構成を教えてください』

凜華

「ウチは家族多いでえ。建設関係の仕事で現場監督しとる父ちゃん

と、病気で入院しとる母ちゃん。あとは弟が3人と妹が2人おるんですよ」

——『兄弟多いですね』

凜華

「そっなんよ。ヤンチャ盛りやから大変なんやで」

ヒヨコモン

「拙者もオモチャにされるでござる……」

——『次に趣味・特技を教えてください』

凜華

「趣味……家事？」

ヒヨコモン

「ソフトじゃないんでござるか……!？」

凜華

「うゝん……家事……やな」

——『では特技は?』

凜華

「値切りや!」

ヒヨコモン

「……もう突っ込まないでござる……」

——『同感。と、いうことで次いきます。好きな食べ物・嫌いな食べ物をお教えください』

凜華

「米」

ヒヨコモン

「どこのグルメ芸人でござる！？……拙者はトウモロコシを好むでござる。固ゆで卵は食べれないでござるな」

凜華

「ある意味共食いやもんね。ウチは食べれんものはないで。食えるもんは何でも食う！」

——『休日はどうに過ごしていますか？』

凜華

「だいたい家事しとるな。溜まった洗濯ものを片付けて、家の中掃除して、弟妹らのご飯作って……って感じやね。あとは母ちゃんとこにお見舞いに行ったり、弟妹ら連れて遊びに行ったりやね」

ヒヨコモン

「時々、慶悟が遊びに来るでござるよ」

凜華

「そうそう！ 弟らが慶悟に懐いって、一緒に遊んでくれるから助かるで」

——『仲良いですね。続きましてデジモンについて。デジモンとの出逢いはいつですか？』

凜華

「せやね……2002年やったかな。光が丘の誘拐事件の前後でデジモンが現れたやろ？ あの時や」

——『では、パートナーとの出逢いは？』

凜華

「うんとな……いつやつけ？」

ヒヨコモン

「年明けでござる」

凜華

「そーそー！ 父ちゃんの実家に行ったときにパソコンいじっとしたらデジタマとD-3が現れたんよ！」

——『他の子供たちとの出逢いは？』

凜華

「天音くんと慶悟は小2になった頃や。ウチ、2年になる時に大阪から転校してきたんや。その頃はまだ天音くんとはただのクラスメイトって感じやったけどな。タケルくんと逢ったのもこの頃やね。慶悟は2年生の5月くらいやな。ウチがソフトの練習みとつたら、慶悟が声を掛けてくれたねん。それでウチもソフトやるようになったんよ。薫さんと鳴ちゃんは天音くんの紹介で知り合ったんや」

——『普段の服装を教えてください』

凜華

「動きやすい服装が多いな。明るい色好きやから、明色系のＴシャツにデニムのハーフパンツかなあ」

——『冒険時の服装は？』

凜華

「黄色カットソーに緑のキャミソール着とるよ。ズボンは水色のデニムハーフパンツの下に赤・黒・緑のボーダーのレギンス穿いとって、青のスニーカーに緑のボーダー靴下や。腰に青と緑のチエック柄シャツを巻いとるよ。赤のボディバッグを背負って、前髪はボン付きのヘアゴムで留めとるんや。D-3はバッグのバンドにくっ付けとるよ」

——『キャラ設定裏話。初恋はタケルだった……！？』

凜華

「これは閑話の設定やね。ウチと慶悟とタケルくんが“嫉妬ネタ”書きたかったちゅーので、そういう設定があつたらしいで」

ヒヨコモン

「結局、ボツになったでござるがな……」

——『……では最後にパートナーについてお願いします』

凜華

「ヒヨコモンはひょうきんで、他人んことからかうのが好きな悪戯者やけど、根は真面目な良い子なんよ。仲間を気遣う優しさもあるし、気さくな奴なんや。家でも弟妹らの面倒見てくれて、結構世話好きでいっつも助すかつとる」

ヒヨコモン

「凜華はいつも笑顔で元気いっぱいのごさる。少し突っ走り過ぎるところがあるんでござるが、負けず嫌いで打たれ強い子なんでござる。いつも弟たちの面倒をみているから、面倒見もとっても良いんでござるよ」

——『ありがとうございます。下記にプロフィールあります』

ヒヨコモン

「……早く話をまとめるでござるよ?」

凜華

「しゃーないやん。才能ないんやから、気長に待とうや」

——『うう……っ（泣） 何気にひどい……』

由良 凜華（ゆら りんか）

プロフィール

性別：女

年齢：11歳

血液型：O型

誕生日：7月16日

星座：蟹座

誕生花：ジンジャー

（豊かな心）

趣味：家事

特技：値切り

食べ物

好き…米

嫌い…特になし

一人称：「ウチ」

紋章：『?』

家族：父（孝義）、母（麗奈）、弟（卓哉）、弟（晴信）、妹（静夜）、弟（真琴）、妹（愛実）

容姿

顔：中の上。元気な可愛い系。

髪：薄茶。セミショートのボブカット。前髪を1つにまとめてる。

瞳：茶。

身長：ヒカリと同じくらい。

体重：平均的。

格好：私服…明色系のTシャツ。デニムのハーフパンツ。

冒険服…黄色カットソー。緑のキャミソール。水色のデニム

ハーフパンツ。

赤・黒・緑のボーダーのレギンス。青のスニーカー。

腰に青と緑のチェック柄シャツを巻く。

赤のボディバッグ。ボンボン付きのヘアゴム。

性格

ひょうきんで常に笑顔な元気娘。お喋り好きで一度喋り出したら止まらない。大阪弁で話す。負けず嫌いで打たれ強い。悪戯好きで好奇心旺盛。猪突猛进型。

備考

三軒茶屋に住む。河田小学校の6年生。ハ1話

D-3は黄緑色。オリジナル同様ゲートが開ける。ハ1話

天音とは同級生。タケルとは元クラスメイト。慶悟は部活の先輩。

ハ1話}

ソフト部に所属。ハ5話}

弟妹が多い。父親は単身赴任中。母親は入院中。ハ7話}

部活でレギュラー落ちしたらしい。部活引退を考えている。ハ7話}

ソフトをやるようになった切欠は慶悟ハ7話}

慶悟と「ソフトで全国に行く」と約束しているハ7話}

由良家の家事を一手に担っている。ハ8話}

パートナー

デジモン：ヒヨコモン

レベル：成長期

一人称：「拙者」

食べ物

好き：トウモロコシ

嫌い：固ゆで卵

性格：軽ノリのひょうきん者。他人をからかうのが好き。仲間を気遣う気さくな性格。

語尾は「〜でござる」。

進化系：??? ↓ チッチモン ↓ ヒヨコモン ↓ ブライモン ↓ ??? ↓ ???

小説に出てきた設定のみ載せているので、パートナーデジモンも出てきた進化系のみ掲載します。

新たに明かされた設定はその都度、足していくつもりです。

第5弾。凜華&ヒヨコモン。

本当は恋愛に超鈍感だったのですが……。自分の気持ちには気付いていそう。

閑話：Hero Interview 〔Kanade Version〕

——『挨拶がなくなりました、作者です。ヒーローインタビュー第6弾。謎が謎を呼ぶ、この方々です』

奏

「挨拶ひどいなあ……」

ピコデビモン

「突っ込むとこ違うだろ」

——『では最初に自己紹介をお願いします』

奏

「はい。ボクの名前は法月ほうつき 奏かなでといいます。小学6年生で11歳です。6月18日生まれの双子座で、血液型はAB型です。身長はヒカリちゃんとか凜華ちゃんとかと同じくらいですね。体重は軽い方だと思います。髪は黒のミディアムレイヤで瞳は紅です」

ピコデビモン

「オレはピコデビモン！ 小悪魔型デジモンのウィルス種だ。必殺技はピコダーツ！ 大きな注射器を投げつけ、相手から血を抜き取ってしまう技だぜ！」

——『法月家の家族構成を教えてください』

奏

「ノーコメントで」

——『……………え？』

奏

「ノーコメント」

——『いや、あの……』

ピコデビモン

「はいはい、次いくぞー！ えっと、趣味・特技は？」

——『それ、ワタシの仕事っ』

奏

「趣味はネットサーフィンです。いろんな人のブログとか見るって面白いですよ。特技は裁縫ですかね。何か作るってよりも、ほつれを直したりするのが得意ですね」

ピコデビモン

「意外と器用なんだよな」

——『好きな食べ物・嫌いな食べ物を教えてください』

奏

「好きな食べ物はブドウです。特に巨峰が好きですね。嫌いな食べ物
物はニラです」

ピコデビモン

「オレはトマトジュースが好きで、トマトが嫌いだ！」

奏

「…………おかしくない？」

ピコデビモン

「おかしくないー!!」

——『休日の過ごし方を教えてください』

奏

「だいたいネットサーフィンしてますよ。いろんな人のみると、あつという間に時間が過ぎるんです。あとは読書ですね。図書館と好きで結構行きます」

ピコデビモン

「オレはもつと外に出たいけどなあ」

奏

「外、嫌い」

——『デジモンについて質問です。デジモンとの出逢いはいつ頃ですか?』

奏

「デジモンを知ったのは2000年のネット事件の際です。パソコンでみていました」

——『次にパートナーとの出逢いを教えてください』

奏

「2002年の晩秋です」

——『あれ、結構早いですね?』

奏

「ええ」

ピコデビモン

「2000年にデジモンと関わってんだから変じゃねえだろ。次だ、次!」

——『えっと、他の子供たちとの出逢いは?』

奏

「転校してきた時とゲンナイさん宅だと思いますよ? っていうか、本編での通りですけど」

——『ですよ。では、普段の服装を教えてください』

奏

「普段は淡い色のトレーナーに暗色系のハーフパンツって格好が多いですね。あんまり派手なのは好きじゃないので……」

——『冒険時の服装は?』

奏

「赤紫のトレーナーに黒のファー付きパーカーを羽織ってます。白のサルエルハーフパンツと黒のスニーカーに赤の靴下です。腰には深緑のウエストポーチを着けています。D-3とかはその中です」

——『キャラ設定裏話。………ないです』

ピコデビモン

「おい！　ないって……」

奏

「じゃあ聞かないですよ」

——『一応、形式的に……。奏くんは初期からこんな感じでした。では最後にパートナーについてどうぞ』

奏

「ピコデビモンはちょっと口悪いけど、素直な子だよ。素直すぎで悪口になることもあるけど。悪戯好きで意地っ張りだけど、優しいところもあるんだよ。あれで結構、甘えん坊で寂しがり屋なんだ」

ピコデビモン

「奏は気弱で優柔不断な性格だけど、優しい奴だぜ。誰とでも上手く付き合えるけど、人によっては八方美人にみられることもあるかもな。自己保身が強いけど、やっぱり毒吐くこともあるでどな」

——『ありがとうございます。下記にプロフィールまとめてあります』

ピコデビモン

「……ホント、どうしよもねえ作者だよな」

奏

「本当にね……」

——『……聞こえてるよ、そこ……』

法月 奏（ほうづき かなで）

プロフィール

性別：男

年齢：11歳

血液型：AB型

誕生日：6月18日

星座：双子座

誕生花：スイセンノウ

（いつも愛して）

趣味：ネットサーフィン

特技：裁縫

食べ物

好き：ブドウ

嫌い：ニラ

一人称：「ボク」

紋章：『??』

家族：??

容姿

顔：中の上。大人しい可愛い系。

髪：漆黑。ミディアムレイヤ。前髪を長めに残している。

瞳：紅。

身長：ヒカリと同じくらい。

体重：軽い。

格好：私服…淡い色のトレーナー。暗色系のハーフパンツ。

冒険服：赤紫のトレーナー。黒のファー付きパーカー。

靴下。

白のサルエルハーフパンツ。黒のスニーカー。赤の

深緑のウエストカバン。

性格

気弱で悲観的な性格。誰にでも良い顔をする八方美人。自分の意をはっきり述べない為、鬱陶しがられることも。人の後ろにすぐ隠れるなど、いささか自己保身が強い。やんわり毒づく。持ち上げ上手。

備考

お台場に住む。お台場小学校の6年生。転校生。〔1話〕

D-3は赤紫色。オリジナル同様ゲートが開ける。〔2話〕

時折、冷たい瞳をする。〔2、8話〕

タケルに避けられている(?)〔8話〕

パートナー

デジモン：ピコデビモン

レベル：成長期

一人称：「オレ」

食べ物

好き：トマトジュース

嫌い：トマト

性格：悪戯好きで甘えん坊。ワガママで意地っ張り。結構、口が悪い。

進化系：??? ↓パグモン ↓ピコデビモン ↓??? ↓??? ↓??? ↓???

小説に出てきた設定のみ載せているので、パートナーデジモンも出てきた進化系のみ掲載します。

新たに明かされた設定はその都度、足していくつもりです。

第6弾。奏&ピコデビモン。

唯一、初期から変わらぬ設定。
でも、まだ謎だらけ。

閑話：Hero Interview ～Ray Version～

——『作者です。ヒーローインタビュー第7段。最後はマイペースな俺様気質なこの方々です』

レイ

「……」

レオルモン

「なんだかな……」

——『初めに自己紹介をどうぞ』

レイ

「……………帰って良い？」

レオルモン

「ダメだって！　ちゃんとやれ」

レイ

「面倒臭せえな……。レイだ。身長は……。165くらい。体重は……55くらい？　髪は黒のレイヤーベースのショートミディアム。瞳は深い藍」

レオルモン

「オレはレオルモン。聖獣型デジモンのワクチン種だ。必殺技は鋭い爪で敵を切り裂くレオクロー。得意技はキバで敵の急所を狙うクリティカルバイト」

――『続きまして、家族構成を教えてください』

レイ

「……」

――『えっと……家族構成を……』

レイ

「……次」

――『（えー、アンタもかい）……では、趣味・特技はなんですか？』

レイ

「昼寝。ハッキング」

レオルモン

「面倒臭がるな。趣味が昼寝で特技がハッキングだ」

――『好きな食べ物・嫌いな食べ物を教えてください』

レイ

「煎茶。あとマカロニ」

レオルモン

「あれ美味いよな。オレも好きだぜ」

――『あの、それ次の話の内容だから言わないで……』

レオルモン

「知らん。あ、あと魚介類も好きだな。きのこ類は嫌いだ。菌類は食いもんじゃねえ」

レイ

「薬草嫌い」

レオルモン

「それ、食いもんじゃねえし」

——『……。もういいです。次に休日の過ごし方を教えてください』

レオルモン

「休日もなにも、学校とやらに行ってるわけじゃねえから……」

——『普段、何をしていますかで結構です』

レイ

「……寝る」

レオルモン

「寝るな！ レイはだいたい遺跡にいるな。寝てるか、コンピュータいじってるか、だな。オレはデジタルワールド中を走り回って情報収集してるぜ」

——『デジモンとの出逢いは？』

レイ

「……………さあ……………？ 忘れた」

レオルモン
「適当だな」

——『ではパートナーとの出逢いは？』

レイ

「……………ZZZ……」

レオルモン

「寝るなー!!」

——『あの、質問に……』

レオルモン

「知るか!!　つか、起きろよ!　レイ……!!」

レイ

「……んだよ、面倒臭せえ」

——『……………。(なんかやる気なくすなあ)……………えっと、私服も冒険時も同じなので、服装を教えてください』

レイ

「見た通り」

レオルモン

「分かるねえよ。ちゃんと答えろ」

レイ

「……。黒のノースリーブに黒のマントコート。黒のサルエルパンツと黒のブーツ。黒のウエストバッグと黒のアームウォーマー。赤と黒のストール」

——『真つ黒ですね』

レオルモン

「オメエの好みだろ」

——『左様でございます。次にキャラ設定裏話。最初は無表情キラだった？』

レオルモン

「今も表情豊かなほうじゃねえぞ？」

——『今よりももっと、という意味です。呆れ顔、微笑む、などもなかったんです。完全な鉄仮面』

レオルモン

「結局、自分で説明してるし」

——『だって全然答えてくれないんだもんー！！』

レイ

「……………ZZZ……………」

——『だから寝るなー！！！！　もういいです！　最後にパートナーについてどうぞっ』

レオルモン

「やけくそになってるし……」

——『いいから答える!!』

レオルモン

「お……。レイは物静かだが、口が悪いな。口下手っていいの？ あれで照れ隠しだったりするんだが、根は優しい奴だよ。素直じゃねえけど。あと博識でオレも舌を巻くことがあるな。無表情で時々、何考えてるのか分かんねえけど、悪い奴じゃねえよ。あと天然だし」

レイ

「……口悪い、高飛車、警戒心強い、好戦的、素直じゃない、短気」

レオルモン

「おい、悪口じゃねえか……っっ」

レイ

「……でも、唯一の理解者」

レオルモン

「……っ／／／　なんか……今のズルイ……」

——『仲がよろしいことで……。ではお2人共、ありがとっござい
ました。下記にプロフィールまとめてあります』

レイ

「……今週、あと誰？」

——『これで終わりです』

レオルモン

「先週まとめてアップしろよ!」

——『す、すみません……! 次から本編再開しまーすっ』

レイ

プロフィール

性別：男

年齢：16歳(?)

誕生日：?月?日

星座：??

誕生花：??

(――)

趣味：昼寝

特技：ハッキング

食べ物

好き：煎茶・マカロン

嫌い：薬草

一人称：「オレ」

紋章：『??』

家族：??

容姿

顔：上の上。クールなカッコいい系。

髪：漆黒。レイヤーベースでスライド&チョップカットを加えたシ

ヨートミディアム。

瞳：藍。

身長：165cmくらい。

体重：55kgくらい。

格好：黒のノースリーブ。黒のマントコート。黒のサルエルパンツ。

黒のウエストバッグ。黒のブーツ。

黒のアームウォーマー。赤と黒のストール。

性格

口下手で物静か。謎めいた雰囲気をもっている。博識で様々な助言をするが、口が悪い。根は優しいが、照れ屋で素直じゃない。感情がやや乏しい。いささか天然なところがある。

備考

デジタルワールドにある遺跡で暮らす（6話）

はぐれデジモンを保護している（6話）

黒い歯車などの調査をしている（6話）

掌サイズのノートパソコンに似た端末を所持（9話）

パートナー

デジモン：レオルモン

レベル：成長期

一人称：「オレ」

食べ物

好き：魚介類・マカロン

嫌い：きのこ類

性格：口悪く、高飛車。警戒心が強く、好戦的。根は優しいが素直じゃない。

進化系：??? ↓ ??? ↓ レオルモン ↓ ライアモン ↓ ??? ↓ ???

小説に出てきた設定のみ載せているので、パートナーデジモンも出てきた進化系のみ掲載します。

新たに明かされた設定はその都度、足していくつもりです。

閑話：Hero Interview } Ray Version } (後書き)

第7段。レイ&レオルモン

元・鉄仮面青年。

一番好きです、この2人。

第十一話 動き出す者たち

次々と仲間のパートナーデジモンが進化していく中、いまだに進化の出来ない薰とクダモン。鍛錬やデジモンについてのデータをまとめ、足手まといにならないよう必死な薰を心配するクダモン。あ日、デジタルワールドを訪れた子供たちは襲われた街を発見する。その中で薰は1人で黒い歯車に操られたデジモンに向かっていく。その姿に孤独を感じたクダモンは想いを薰にぶつける。焦りゆえの間違いに目を覚ました薰とクダモンの想いが1つになった時、クダモンはレッパモンへの進化を遂げた。

【第十一話 動き出す者たち】

階段を降りると甘ったるい香りが漂ってくる。階段の縁に腰を降りし、靴を履いていると背後から声が届いた。

「……お兄ちゃん、出掛けるの?」

振り返るとエプロン姿の鳴が階段を降りてくる。足元にはシャオモンが眠たそうな目を向けていた。日曜の朝だというのに早起きな妹に薰は目を細めた。

「ああ。鳴は菓子作り?」

「うん。今日はフルーツタルト」

「オレたちの分、残しといてな」

そう言つと薫は立ち上がり、爪先を整える。それを見て、鳴は小さくため息を吐いた。横目で見る窓は雫を打ち、音を立てている。

「……………雨の日くらい家でのんびりすればいいのに」

「……………それは、無理じゃないか？」

薫の腕の中でキャラモンが呆れた口調で言う。薫はただただ苦笑するしかなかった。休日になると朝早くから出掛け、日が暮れる頃に帰ってくるのがいつものことだった。たとえ雨の日でも、雪の日でも、それは変わらなかった。

「じゃ、夕飯までには帰るから」

「……………いつてらっしゃい」

呆れたのか、鳴はそれ以上は何も言わなかった。シャオモンを連れて2階に戻る妹の姿に薫は申し訳なさそうな顔をしている。鳴の姿が見えなくなると、薫は店先に出た。物音がした為、振り向くと奥から中年の男性が出てきた。手に持った盆に饅頭が山積みになっている。

「……………親父……………」

目を見開く薫に父・朝比奈^{あさひな} 成治^{せいじ}は目線だけ向けて、すぐに手元に戻した。黙って商品を並べる父の背を怪訝そうに見つめる。

「店に出るの遅くねえ？」

「……………最近はこんなものだ」

そう言つと成治はすぐに厨房に戻り、別の盆を持ってきて並べている。時計を見るともうすぐ8時20分。薫が知る限り8時前にはほとんどの商品が並んでいたように思えた。薫は「ああ、そう……」と生返事をする。居心地の悪さを感じながら、薫は成治の様子を窺つた。

「あのさ。今日、お台場のダチン家に行くから手土産持っていきたいんだけど、適当に見繕つてもいい？」

薫の問いに成治は答えず、仕事を進めている。

「あの、親父？」

「……………好きにしろ」

特に興味もなさそうに言つと成治は厨房に入り、出て来なかった。薫は少しだけ呆けていたが、諦めたように店の紙袋を1枚取つて、店頭に並ぶ和菓子を紙袋に詰めた。チラッと厨房に目をやるが、オーブンの側にいる父親は薫に気付いていないようだった。開きかけた口を閉じ、玄関の方に回った。

扉を開けると家々の合い間に暗い空が見えた。地面に落ちる雫の音に思わずため息が出る。それと同時に身体に張り巡らされていた緊張がほぐれた。薫は空を見上げて鬱陶しそうにコウモリ傘を開いた。

「相変わらず、分からない父親だな」

「ん〜？」

右腕に紙袋をぶら下げた薫はキャロモンを頭の上に移した。キャロモンは惘然として言う。

「息子が出掛けると行っているのに、いつてらっしゃいの一言もないなど」

「いつものことだよ。いちいち気にしてたらキリねえって」

納得のしていないキャロモンだったが、親子の関係に口を挟めるほど、彼ら家族を詳しく知っているわけではない。キャロモンもシヤオモンも父親に隠れて暮らしている。薫が納得しているならあれこれ文句を言える立場ではなかった。

「……………難しいな、人間は」

結局、『家族』という概念のないデジモンには理解し難いことだった。唸っているキャロモンを尻目に、真っ黒な傘は人混みへと消えていった。

カーテンを閉め切った薄暗い部屋の中。気持ち良さそうないびき声が響いている。大輔とチビモンは布団を払い除けながら、動き回

って眠っている。

その部屋の扉が音を立て、一筋の光が入り込む。その光を遮る人影はベッドの脇に立ち、大輔とチビモンを見下ろした。そして手に持っていたモノを激しくぶつけ合う。

「大輔ーっ！！ いい加減におきなさい！！！！」

「どわあっ！！！！」

「な、なんだあ？！ 敵か！？」

金属がカンカンとぶつかる音と甲高い声に大輔とチビモンは飛び起きた。状況が掴めない大輔たちは開かれたカーテンに目を向けるとカーテンを止めている姉・ジユンの姿があった。脇の机の上にはフライパンとオタマが乗っかっている。

「なんだよ、姉ちゃん。もうちょっと寝かせてくれよ」

「何言ってるのよ。アンタ今日は一乗寺くんの家に行くって言うたじゃない。時間、大丈夫なわけ？」

布団をかぶり直して、頭から潜っていた大輔は動きを止めた。そして布団を跳ね除け、時計に目を向ける。

「は、8時半……っ！？ なんでもっと早く起こしてくれなかったんだよ！！」

「何回も起こしにきたわよ。起きなかったのはアンタでしょ。ねえ、プワモン？」

バタバタと準備をしている弟を尻目にジュンは呆れたように己のパートナーに同意を求める。机の上に飛び乗ったヒナ鳥デジモンは言葉の意味が通じなかったらしく、首を傾げている。着替えを済んだ大輔はゴーグルを着け、D-3とDターミナルを仕舞い、いまだにベッドで寝惚けているチビモンを驚掴みにし、部屋を出る。

「ちょっと、大輔！ ご飯くらい食べていきなさいよ。アタシがシユウさんの為に」 作ったお弁当の残り」

「んなもん、いるかー！！」

猛アプローチの末、最近付き合い始めたらしい姉と先輩の兄。顔を合わせれば惚気話しかないジュンにいい加減耳にタコだ。大輔は姉を無視し、急いで玄関を出た。そのまま青地の傘を差しながら、走り出した。

玄関先に座り、靴を履いていた天音は背後から近付いてくる足音にウンザリした顔をした。それを見たのは脇に置いてある鞆の中にいたプロロモンくらいだろう。

「天音坊ちゃん！」

「……なんですか、松坂さん」

振り返り満面の笑みを向けると、松坂と呼ばれた中年の女性が心配そうに眉を下げていた。

「やっぱり、タクシー呼びましょうか？ 雨も酷いですし、万が一に何かあつたら……」

「大丈夫ですよ。これくらい何ともないです」

「でも……」

心配性の家政婦に天音は内心ウンザリして、立ち上がる。不毛な押し問答をしている時間はない。携帯電話を見ると8時35分を示している。

「歩いて行きたい気分なんです。じゃあ、もう行かないと。……いつてきます」

「……はい………いつてらっしゃいませ………」

玄関を出る天音の後ろから小さい声が響くが、それを無視して扉を閉めた。盛大なため息を吐く天音を見て、プロロモンは鞆から顔を出す。

「相変わらず心配性だね、マツザカさん」

「昔からいる人だからね。誘拐された時も凄かったし。子供が出来なかったっていったから、息子みたいに思ってくれてるんだと思うよ。それに比べ、あの2人は……」

冷徹なくらい冷静だった両親の顔を思い出し、天音は口を噤む。

両親と違い、半狂乱だった家政婦はいまだに天音が1人で出掛ける時は渋い顔をする。出掛ける寸前まであの調子だ。

「もう非力な子供じゃないんだけどね。それに、いざとなったらキミがいるし……」って松坂さんは知らないのか」

「はは！ 何かあったら、ボクが天音を守ってあげる！」

「あはは、ありがとう。頼りにしてるよ」

天音は青と白のストライプの傘を開く。家政婦の趣味の良さが分かる庭先を過ぎて、敷地を出る。プロロモンは雨に当たらないように再び鞆の中に引っ込んだ。天音は閑静な住宅街を駅に向かって歩き出した。

チーン、と鈴りんの音が響く。伊織は仏壇の前に座り、手を合わせていた。隣ではウパモンも手（エラ？）を合わせている。音が聞こえなくなると伊織は手を下ろした。

「……では、行ってきます。……お父さん」

伊織はそう告げると立ち上がり、部屋の隅に置いてあった剣道具を担いだ。そして足元にいたウパモンを抱き上げる。そのまま振り返ることなく部屋を出た。リビングの時計が8時50分を回ってお

り、急ぎ足で玄関に向かう。玄関先では祖父・主税が待っていた。

「じゃ、行くかの」

「はい」

玄関を出ると酷い雨模様が目に入る。そこではたと思い至った。右腕には剣道具を持ち、左腕にはウパモンを抱えている。どうやって傘を差せばいいだろうか。どうしたものかと、考えているとカーキ色の傘が目の前に広がった。そして肩に祖父の手が回される。

「行こうか？」

「……はい！」

1つの傘の下、祖父と孫が並んで雨の道を歩いていった。

掃除機の音が止まる。窓の外を見ると先程よりも雨の勢いが増している。凜華は思わず眉を顰めた。時計を見ると9時5分。そろそろ買い物に出掛けたいな、と心中ため息を吐いた。

「凜華ー！！」

「ほわぁ！？ どうしたんや、チッチモン?!」

ぼーっとしていた凜華の腰に激突してきたチッチモンは涙目で頭の上によじ登る。するとバタバタと元気な足音が近付いてくる。

「チッチモン！！」

顔を出したのは2人幼子。そっくりな顔をした男女は凜華の足元まで駆け寄ってきた。

「マコ、マナ。チッチモンを苛めたらアカンで？」

「イジメてないもん」

「遊んであげてただけだもん」

子供特有の自分本位に苦労するパートナーに同情するしかない。

凜華の弟・由良^{ゆら} 真琴と妹・由良^{ゆら} 愛実^{まなみ}の双子の兄妹はチッチモンが豪^{えら}くお気に入りだった。その度に泣かされているチッチモンが双子に怯えるようになるのは、そう時間は掛からなかった。ヤンチャ盛りなら歳児は凜華の手に余ることが多かった。

「ねえ、リンちゃん。ピクニックは？」

「行かないの？」

「この雨やしなあ……」

先週末から約束していたピクニックだったが、梅雨独自の天気は断念せざるおえなかった。だが、ヤンチャ盛りの双子は家の中では飽きてしまっている。何が何でも遊びに行きたい双子が地団太を踏

む姿を見て、凜華は困り果てていた。

「リンちゃん。洗濯物たたみ終わったよ」

ヒョコツと顔を出した真面目そうな少年は床で転げ回っている双子の姿を捉え、呆れたような目を向けた。

「マコ、マナ。まだワガママ言ってるの？ 今日雨降って外には遊びに行けないよ」

「ハルくん」

「おおきにな、ハル」

小学4年の弟・由良^{ゆら} 晴信^{はるのぶ}は姉に微笑んでから、再び部屋を出た。それとすれ違うように別の少年が入ってくる。少年は凜華の姿を見ると、近付いてきた。

「どうかしたん？ タク？」

「今、親父から電話あって、今月も帰って来れんようになった言うてたで」

呆れた口調の凜華と年子の弟・由良^{ゆい} 卓哉^{たくや}は肩をすくめた。単身赴任中の父親は3ヶ月、家に戻ってきていない。

「はう、またかいな」

「ホンマ、無責任な父親やなあ」

「……………普段の生活費、お母さんの入院費、私たちの学費……お金が掛かるから仕方がないと思う」

「シズ！」

呆れて文句を言っている姉兄の背後から静かな声が聞こえた。振り向くと小学2年生の妹・由良 静夜ゆいら しずよが立っていた。静夜の腕の中には、いつの間にか凜華の頭上から落っこちて双子のオモチャになっていたチッチモンが抱かれている。

「……………はい」

「おおきにな、シズ。大丈夫やったか、チッチモン？」

「……………大丈夫でござる……………」

静夜から受け取ったパートナーは完全に伸びている。凜華は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん!!」

コンビニ『アイマート』に顔を出した京は商品の陳列をしている兄・万太郎とレジ打ちをしている姉・百恵を見つけると、手を振って駆け寄った。腕も中にあるポロモンも小さな羽をばたつかせてい

る。

「どうしたの、京？」

「お母さんがどつちかご飯食べちゃいなさいって。その間、アタシが店番しておくから」

「分かった。お兄ちゃん、先にご飯食べて来ていいよ」

「おー」

万太郎はちょうど陳列を終わらせ、空になったトレイを店の奥に片付けた。そして自分が着けていたエプロンを京に渡した。店を出る兄を見送ってから、京は姉の隣のレジに座った。時刻は9時15分。混雑のピークは過ぎたようで、店内には2人ほどの客しかいなかった。百恵の足元には最近現れたパートナーのユラモンが甘えたそうに擦り寄っている。百恵はレジの隣にユラモンを上げ、身体を撫でてやっていた。その様子に京は思わず、笑みが零れる。ポロモンも嬉しそうに眺めていた。

「そつえば、アンタ。一乗寺くんとはどうなの？」

「へ……？ どうって？？」

唐突な姉の質問に京はキョトンとした顔をする。それを見た百恵も同じ顔をしている。

「付き合ってるんでしょ？」

「……………えええー！！！！な、なんでそうなるの？！付き

合ってないわよ!？」

「じゃあ、片思いか……一乗寺くんって格好良いから狙ってる娘多いわよ、きっと。がんばんアタックしなくちゃ!」

「いや、あのね……だから……っ／＼」

真つ赤な顔であたふたしている京にポロモンは「平和でちゅね……」と呟いた。

足元に絡まる泥を無視して、慶悟は走り続けた。頭からすっぽりと合羽を被り、降り注ぐ雨を防いでいる。だが、濡れた合羽が身体にまとわり付き、気持ち悪さも感じられた。見上げる空は暗く、重い。激しさを増す雨に足を速める。

「あ、いたいた!」

不意に前方から聞こえた声に足を緩める。透明のビニール傘を持った、自分と同じ髪と瞳の色をしている青年を目に留め、慶悟は完全に足を止めた。青年の腕の中ではキョキョモンが手を振っている。

「こんな所にいたのか? あんまり遅いから心配していたんだぞ、慶悟」

「……翔悟」

爽やかな笑顔を見せる青年・英^{はなぶさしゅうご} 翔悟は3つ下の弟を傘の下に入れる。キヨキヨモンは翔悟の腕から慶悟の腕に飛び移る。慶悟は頭のフードを取って濡れきった髪を掻き揚げた。

「……………今、何時？」

「うんとね、9時半ちよつと過ぎた頃かな」

腕時計で時間を確認する兄の言葉に慶悟はため息を吐いた。家を出たのは7時過ぎ。いつもなら1時間程で戻るのだが、今日は時間が経つのに気付いていなかった。

「慶悟っっ」

「キヨキヨモンが心配していたんだよ。いつまで経っても帰ってこないって」

擦り寄ってくるキヨキヨモンに顔を寄せる慶悟。その姿があまりに小さく見えて翔悟は一抹の不安を抱く。

「帰ろう、慶悟」

「……………ああ」

小さい傘に並んで2つの影が雨を遮った。

賢は不意に顔を上げた。目の前にある時計は9時40分前を差している。深々とため息を吐いて、たった今終わった宿題を鞆の中に仕舞う。窓際で外を眺めていたミノモンは声を上げる。

「来たよ、賢ちゃん」

「やつとか……」

半ば呆れ気味の賢はミノモンを抱き上げて部屋を出た。するとちよとど玄関からチャイムが鳴った。出ようとする母親に断りを入れて、賢は玄関に向かった。扉を開けると肩で息をする待ち人が立っていた。

「……遅いぞ、大輔」

「わ、悪い……」

傘は持っているようだが、その役割を果たさなかったようにびしょ濡れの友人に賢はタオルを手渡す。一通り水分を拭き取った大輔とチビモンは礼を言って、招かれた先へと進む。賢は母親に挨拶をする友人を部屋に通した。

「寝坊だろ？」

「いやあ……あはは……ごめん」

こういつ時に言い訳をしないところは清々しくて好ましい性格だが、約束はちゃんと守ってほしいものである。自宅に来ると言った時間は9時。40分の遅刻である。

「ま、この雨じゃどこにも出掛けられないだろうし。急ぐ理由もないから今日のところは許してあげるよ」

「サンキュー！ やっぱ賢はいい奴だなあ〜っ」

「……調子良いんだから」

ポジティブ思考なのは良いのだが、反省の色が見えないのは気のせいじゃないだろう。賢はただただ、ため息を吐くしかなかった。

オレンジ色に染まったオーブンを待ち遠しそうに眺めるシャオモン。その脇で鳴は洗い物をしている。

「鳴〜、まだ〜？」

「まだ。焼きあがっても1回冷ますからすぐには食べられないよ？」

「ええ〜!!」

今すぐ食べたい様子のシャオモンは頬を膨らませ抗議をしている

が、やがて諦めて足元で不貞寝を始めた。拗ねているパートナーの姿に思わず苦笑いが浮かぶ。

「……………鳴」

「お、お父さん！？ お店は？」

「……………予約のお客様が来た」

音もなく近付いていた父親に出そうになった悲鳴を堪え、振り向いた。仏頂面で言う成治の言葉に鳴は時計を確認する。9時50分を過ぎた時計に鳴は納得した。確か10時頃に予約が入っていたはずだ。微かに怪訝そうな顔になった父親に鳴は内心焦った。

「……………今、誰かいたのか？ 話し声が聞こえたような……………」

「うつん！！ ただの独り言だから気にしないで」

「……………そうか」

成治は無愛想な返事をして鳴の頭を撫でる。その大きく、温かい、優しい手に鳴は頬を綻ばす。

「あのね、今日はフルーツタルト作ってみたの。本当は季節の果物で作ってたんだけど、今日はなかったから桃の缶詰になっちゃったんだけど……………後で味見してくれる？」

「ああ、勿論だ。……………鳴は菓子作りが上手いから楽しみだな」

菓子職人の父親に褒めてもらえるのは、鳴にとってとても嬉しい

ことだ。成治の優しい瞳が鳴は大好きだった。

「あ、ごめんなさい。お仕事だったよね。お仕事頑張ってたね」

僅かに微笑んで店に戻る父の背を見送る。

「……よしっ」

腕を捲くり直して、意気込む鳴。とりあえず、オープンの前でタルト生地が焼き上がるのを待った。

パソコンの画面に綴られる文字を追いながら更に文字を綴っていく。ノートやメモ帳を広げながら、ヒカリは眉間に皺を寄せながらパソコンに向かい合っていた。その様子を横でテイルモンが不思議そうに眺めている。

「大丈夫か、ヒカリ？」

「うん……なんとか……」

画面にはピンクを基調とした可愛らしい模様で飾られている。ヒカリは最近、パートナーデジモンを与えられた人に対する心構えを記録し、周りに伝えていっていた。だが、より多くの人に伝えようと友人の勧めでブログを立ち上げようとしていた。ブログなら世界

中の人にも見てもらえるし、早く情報を提供することができる。パソコンが得意な京や光子郎に聞きながら何とか形にすることが出来た。

「意外と難しいわね……京さんや光子郎さんは簡単にやってて、凄いわぁ」

「だが、ワタシはヒカリも凄いと思う。こうやって人の為に頑張っているんだから」

「そんなことないわ。アタシはただ、もっと多くの人にデジモンたちのことを知ってほしいの」

そういつとヒカリはもう一頑張りとキーボードに手を掛ける。すると扉を叩く音が響いた。

「ヒカリ」。今ちよつと良い？」

「どうしたの？」

顔を出したのは母・裕子だった。その顔は困ったように眉が下がっている。

「あのね、太一がお弁当忘れてったみたいなのよ。悪いんだけど、届けてもらえないかしら？」

太一は今日、間近に迫ったサッカーの試合の為の練習に行っている。中学校最後となる試合に意気込んでいたのを覚えている。きつとお昼になる頃にはへとへとになっているだろう。時計は10時を回ったところだった。今から行けばお昼前には帰ってこれるだろう。

「……………しょうがないなあ」

ヒカリはデータを保存して、パソコンの電源を落とした。部屋を出たヒカリとテイルモンは裕子から弁当を受け取って、出掛けていった。

図書館の一角。本棚の陰で奏はページをめくった。背の低い本棚に身体を寄り掛け、窓から溢れる陽の光を頼りに文字を目で追った。傍らでは丸くなって眠っているパグモンは時折、寝言を呟いていた。奏はパートナーの愛くるしい姿に思わず目を細める。

奏は再び本に目を戻す。だが、切れてしまった集中力はそう簡単には戻らなかった。人の声、紙が擦れる音、地面に打ち付ける雫の音、風で囁く葉の音……。奏はため息を吐いて本を閉じた。パグモンの隣に本を置いて、賑やかな声がする方へ目を向ける。本を読むのに飽きてしまったのか、4〜5才の子供が数人、追いかけてっこをして遊んでいる。

「あ……………」

一番小さな女の子が石に躓^{つまず}いて派手に転んでしまった。膝をすり剥いたのか、大きな声で泣き出した。奏は本棚から腰を浮かせ、途中で動きを止めた。本棚の陰から少女よりも1〜2才程上であろう少年が少女に駆け寄ってきた。恐らく兄妹なのだろう。少年が少女

を宥め、あやしている。大泣きしていた少女は兄が来たことに安心したのか、しゃくり上げる程度に納まっている。兄妹は手を繋いでどこかへ去っていった。

奏はじつと兄妹の残像を見つめていた。泣きじゃくる少女が脳裏で記憶と被る。

「……………奏」

名を呼ばれてハツとなる。振り返るといつから起きていたのか、バグモンと目が合った。責めるような瞳に奏は視線を逸らす。

「何でもないよ。……そろそろ帰ろうか」

時計はまだ10時10分を過ぎたばかりだ。雨は止む様子はない。仕方がないので、のんびりと歩きながら帰ることにした。

机の上でDターミナルを広げて、メールを打ち込む。一度打っては消して、また別の文を打っていく。それを数回繰り返し、結局妥当な文面を打ち直す。その最中、玄関からベルの音が聞こえてきた。薫たちが10時頃に来ると言っていたのを思い出し、時計を見るとすでに15分過ぎていた。

「薫たちかなあ？ 出てるよ、タケリユ」

「うん、すぐ行く」

パタモンが待ちきれないように部屋を出て行く。タケルは打った文面を確認して、送信した。そしてDターミナルを置いて、パタモンの後を追った。開かれた扉の陰に薫とキャロモンの姿を見つける。

「いらつしゃい、薫さん、キャロモン。どうぞ、入ってください」

「おつ邪魔しまゝす」

玄関先に濡れたこうもり傘を置いた。薫たちをリビングに通したタケルは台所で麦茶を準備する。薫はパタモンに促され、テーブルの上に紙袋を置いて椅子に座った。キャロモンもテーブルの上に飛び移る。

「麦茶でも良かったですか？」

「ああ、悪いな。これ、土産。家で作ってるものだけど」

「わあっ！！ 美味しそうだよ、タケリュ」

いち早く紙袋を漁っているパタモンは中身を引っ張り出して一つ一つ確認している。タケルも物珍しそうに見た。

「ご自宅、和菓子屋さんだったんですか？」

「ああ。『清月堂』っていう和菓子屋」

「あ、知ってます！ あそこの栗餡饅頭、美味しいですよね」

「サンキュ。他にもいろいろあるからゆっくり食おうぜ」

「すみません。でも、なんか得しちゃったなあ」

三軒茶屋に住んでいたタケルも何度か行ったことがある店だ。懐かしく、頬が綻ぶ。薫は紙袋の中からわらびもちを取り出し、袋を開けてキャラモンに渡していた。珍しく顔色を変えるキャラモンに「わらびもち、好きなのかな」と思った。タケルも栗餡饅頭を貰い、パタモンに渡す。美味しそうに饅頭を頬張るパートナーに笑みが零れる。薫はそんなタケルの様子をじっと見つめていた。

「……………なあ、デビモンってどうやって倒したんだ？」

「え…………？」

突然の言葉にタケルは表情を硬くする。核心的な質問に口籠った。薫はどことなく探るような目をしている。

「大輔たちに聞いても詳しくは知らないっていうし、光子郎さんに聞いたもエンジェモンが倒したって言うだけで詳しくは教えてくれない。黒い歯車のこともあるのに、それを使ってた奴の話をしないなんて不自然だろう？」

そう言われてしまえば、返す言葉もない。たとえ今回の件にデビモンが関係していなかったとしても、同じ黒い歯車を使っていた敵の話をしないのはオカシイだろう。薫たちには新しい選ばれし子供として知る権利があり、タケルたちには伝える義務がある。それをしないのはみんなタケルに気を遣っているからだ。そしてタケルが話さないの思い出したくない過去を話したくないという、自分勝手なワガママだ。だが、タケルにはあの時の出来事を平常心を持つ

て話せる自信がなかった。

タケルが言葉を探すように俯いていると、薫の深いため息が聞こえた。

「……話したくないなら別に構わないけどな」

薫の言葉にタケルは目を見開き、顔を上げた。すると薫は申し訳なさそうな顔をしている。

「悪い。話したくないこともあるだろうとは思ってたんだけど、どうしても気になってさ。お前に聞いて聞けなかったら、もう首突っ込むの止めようとおもって。だから話したくないなら話さなくていい……悪いな、何か嫌なこと思い出させたみたいで」

「いえ……すみません………もう少しだけ、待ってて下さい。近い内に話しますから……絶対に」

話そうという気持ちは確かにあった。だが、まだ、もう少しだけ、時間が欲しかった。薫は今ほそれで充分だといった風に頷いた。

「じゃ、この話は終わりな。まあ、元々こんな話したくて来たんじゃないんだけど………お前、奏のことどう思う？」

相変わらず単刀直入な言い方をする薫にタケルは困ったように眉を顰めた。

「この前……確かに歯車工場でD-3が光ってた」

先日の黒い歯車の工場での戦い。引き離された仲間の元に駆け付けた時のことだった。『闇使役^{ジン}』のシールズドラモンと戦う大輔と

エクスブイモンの後ろで奏が握っていたD-3が輝きを放ったのを見た。

「あれは……進化の光りだったよな？」

「確かに、ボクにも進化の光りに見えました」

「だが、オレたちが近付いたらD-3を隠した。オレらには知られたくないのか……？　そもそも最近の敵の行動は変だろう。どう見たって俺たちの行動が筒抜けになつてるとしか思えない」

「先日のメタルファントモンも今考えれば、進化ができない我々を意図的に狙ったと思つても良いかもしれないぞ？」

待ち伏せをしていたコカトリモン、罾を仕掛けてきたウィッチモン、薫を誘い出したメタルファントモン。どれも子供たちの行動を分かった上で仕掛けてきたものと思えなかった。

「……………薫さんは……法月くんを疑つてるんですか？」

「さあな。けど、何か隠しているのは確かだろう」

薫のどつちつかずの答えにタケルは自分のパートナーに目を向けた。みたらし団子を頼張るパタモンは一見、話を聞いていなかったようにも思える。だが、恐らくしっかり聞いていただろう。それでも表情1つ変えないパートナーにタケルは開きかけた口を閉じた。

「……………止めません、この話。仲間内で疑つてたつてしょうがないです」

「ま、確かにな。問題はこれからだし」

「これから、か……」

呟いたタケルは急に黙ってしまふ。首を傾げる薫に、タケルは顔を上げた。

「……………薫さん、これからの戦いはきつと……………薫さんたちが想像しているよりも酷なものになります。見たくないものを見ることになると思います。それでも……………戦う覚悟はありますか？」

いつになく真剣なタケルの瞳に薫は言葉を詰まらせた。最も長く戦いに参加してきたタケルの言葉だからこそ、実感が籠っている。結局、薫がタケルの問いに答えることはなかった。

傘を持って扉を開くと空は茜色に染まっていた。雲も途切れ途切れになっている。

「おー……………雨止んだな」

「あ、ホントだ。今日は1日雨だと思ってました」

薫が空を見上げながら言うと、タケルも外に出て顔を上げた。薫は隣まで出てきたタケルに視線を戻す。

「悪かったな、昼飯までご馳走になっちまって」

「いいえ、大したもの出せなくてすみません」

結局、今後の事や昔の話を聞いていたら夕方になってしまった。時計を見ると16時を回っており、さすがに長居し過ぎたと申し訳なく思う。タケルは特に気にした様子はないが。下まで見送るというタケルの申し出を断り、薫はキャロモンと共にマンションを出る。駅の方へと歩き出した時、見知った顔を見つけ足を止めた。

「よお、伊織じゃねえか」

「薫さん！ こんにちは。どうしたんですか？ こんな所で」

竹刀と剣道着の袋とウパモンを抱えた伊織が小走りで近付いてくる。その後ろから老父が歩み寄ってきた。

「あ、ボクの祖父です。お爺様、こちらは朝比奈薫さんです」

「はじめまして」

「おお、伊織の祖父の火田主税じゃ。いつも孫が世話になってる。……伊織、ワシは先に戻つとるぞ」

そう言つと主税は薫が出てきたマンションに入つていった。

「ああ、そつか。タケルと同じマンションだっけ？」

「はい。あと京さんも一緒ですよ。薫さんはタケルさんの所に行つ

ていたんですね」

「ああ」

勘の良い伊織に否定も出来ず、またする必要もない為、薫は頷いた。

「……何か、ありましたか？」

「いや、ちょっと昔の話を聞きにな。やっぱり、通している奴に聞くのが一番だからな」

微妙な言い方をする薫にキャラモンは胡散臭そうな目を向ける。薫はそのまま伊織と別れ、駅の方へと歩いていった。

「……なんで本当の事を言わなかったんだ？」

「嘘は言っていないだろう？」

全ては語らないが、嘘も言っていない。キャラモンは押し問答になると分かったのでそれ以上は何も言わなかった。

買い物が済んだ袋を持って慌てて、スーパーを出る。頭にしがみ付いているキョキョモンが振り落とされそうになったが、落ちなか

ったので気にしない。前方に見える後ろ姿に思わず頬を綻ばせた。

「凜華！」

「……ありや、慶悟や」

両手いっぱい買い物袋をぶら下げた凜華は振り返って意外そうに慶悟を見た。チッチモンは凜華の頭にしがみ付いている。

「買い物に来てたんだ？」

「当然やる！！ この時間は夕方のタイムセールの日なんかつ！
！ これを見過ごすわけにはいかん！！！！」

「そ、そうか……」

4時から始まるタイムセールに来ていたらしい。今は20分ほど過ぎたので人はまだらになっていた。タイムセールを熱く語る凜華に慶悟はやや引き気味だ。

「そや、慶悟はどうしたん？ 買い物はいつも小母さんしとるやろ？」

「買い忘れ」

片手で持ち上げて見せる小さな袋に凜華は納得した。そそっかしい母親に頼まれ、嫌々来たのだが、ちよつと得した気分だ。

「そつやね、慶悟が自分から買い物に来るなんてありえへんからなあー！」

「……どういう意味だ？」

顔を引きつらせる慶悟に凜華は素知らぬ顔をしている。文句の1つも言おうかと思っただ、その前に違う声が届いた。

「慶悟に凜華？」

「天音くん！」

振り返ると大きめのショルダーバッグと閉じた傘を持った天音が立っていた。バッグの口からはプロロモンが顔を出している。

「デート？」

「ち、違う！！」

からかうように言う天音に慶悟と凜華は顔を真っ赤にさせ、ハモった。予想通りの反応に天音は呆れたように肩を竦める。

「……冗談だよ」

あたふたしている2人を見て、からかう気が失せた天音はつまらなさそうに呟いた。2人が文句を言っているのをスルーして空を見上げる。夕焼けが少しずつ夕闇に変わっていく。

「……………これから、どうなるのかな……………」

「ん？ 何か言ったか？」

「なんでもないよ。……じゃ、ボクこつちだから。また明日ね」

天音はそのまま住宅街の方へと去っていった。首を傾げて見送っていた慶悟だったが、凜華に促され再び足を進めた。天音の呟きを思い出して、慶悟は眉を顰めた。

「これから、か……」

隣で小学校のソフト部仲間の話をしている凜華の声が遠くで聞こえる。慶悟は気付かれないようにため息を吐いた。

夕暮れ。人混みの中に見覚えのある後ろ姿を見つける。一応、声は掛けたが気付かなかったのか、そのまま行ってしまう。「人違いかな」とも思ったが、ヒカリは思い切ってもう一度声を掛けてみることにした。

「奏くん!!」

「……っ?! ひ、ヒカリちゃんか……吃驚したあ」

肩を叩くと奏は身体をビクつかせ、振り向いた。奏は耳からイヤフォンを外してヒカリを見て、微笑んだ。音楽を聴いていたようでヒカリの声に気が付かなかったようだ。

「ごめんね、驚かせて。姿が見えたから、つい……」

「ううん。ボクの方こそ気付かなくてゴメンね」

「パグモンは一緒じゃないんだ？」

奏はショルダーバッグを持っているだけでパグモンの姿はなかった。バッグもパグモンが入る大きさではない。

「うん。眠いって言ってたから置いてきた。ヒカリちゃんもテイルモン連れてないね」

「ええ。ちょっと出掛けるだから家にいてもらったの。奏君はお買い物？」

「ボクは予約してた本を取りにね」

バッグをパンパンと叩くと硬い音が鳴る。重量感のある音に1冊ではないと分かった。

「読書家なんだね」

「ただの暇つぶしだよ。あんまり外とか行きたくないから、こうやってまとめ買いしてるの。ヒカリちゃんも買い物？」

「ううん、図書館に。今、ブログ作ってるんだけど分からないところあって、本を借りに。デジモンのことをもっと多くの人に知ってもらいたくて」

ヒカリは少し照れ臭そうに言った。

「そっか、凄いな。ヒカリちゃんとタケルくんは4年前からの選ばれし子供なんだよね」

「うん。アタシは途中からだっただけだね」

「そっ……なんだ。……じゃ、知らないか……」

「え？ 何か言った？」

首を傾げるヒカリに満面の笑みを見せる奏。

「うっん、なんでもない。じゃあ、また明日ね」

そう言つと奏は道を曲がり、去っていった。ヒカリは首を傾げながら奏の後ろ姿を見送った。ふと時計を見ると17時の10分前。ヒカリは慌てて帰路に着いた。

店の自動ドアが開く。それと同時に客が入ってきた。

「いらっしゃいませ〜！ って、タケルくん珍しいわね、こんな時間」

見知った金髪の少年を見留めて、京は商品の整理をしていた手を

止めた。現在18時20分。もともとタケルがコンビニに来ることも珍しいが、夕方に姿を見るのも稀だった。

「こんにちは、京さん」

キヨロキヨロと商品棚を見ながら近付いてくるタケルに京は営業スマイルを向ける。

「何かお探ですか？」

「何かお勧めはありますか？」

「そうきたか……」

質問を質問で返された。今度は苦笑し、京は辺りを見渡す。

「ご飯？ それともお菓子類？」

「お菓子とかデザートの方が良いかな。知り合いに持って行きたくて」

「そうね……」

デザート類が置いてある棚に目を向ける京をタケルは後ろから見ていた。

「タルトとか、シュークリームとかもあるけど……あ、これは？」

「……なんですか、これ？」

「えー！？ タケルくん知らないの？ 結構、人気なのよ」

タケルは京が持った菓子をまじまじと見た。

「じゃあ、頂きます」

「まいどあり」

それから菓子類を買い込んだタケルはコンビニを出た。

表の店先から出てくる客とすれ違う。店の前を通った時に父親と目が合ったが特に気にせず、薫は裏手に回った。

「ただいまー」

「かおるうーっ」

「どわあっ！！」

玄関を開けた薫はいきなりシャオモンのアタックを腹に食らった。床にへばって悶えているパートナーを哀れんだ目で見えるキャロモン。そしてそのままシャオモンを見た。

「なんだ、いきなり」

喋れないでいる薫の代わりに問うとシャオモンがふくれっ面で言った。

「薫、遅いよ。何時だと思ってるの。」

「今は…… 6時半頃だな」

キャラモンが時計を見ると18時半を過ぎた頃だった。シャオモンは「そおだよ。」と文句を言う。

「フルーツタルトおー!!」

「……待てを食らったか」

完成したフルーツタルトを食べたいとねだったシャオモンだったが、パートナーより「お兄ちゃんたちが帰ってきてから」とお預けを食らったのだった。

「……暢気なことやってんじゃねえっ」

納得するキャラモンに復活しつつある薫が突っ込む。シャオモンはいまだ床に伏せる薫を「早く、早く。」と急かしている。そこに足跡が近付いてきた。

「……何やってるの、お兄ちゃん？」

「遊んで喜んでるように見えるか？」

情けない兄の姿を数秒見つめて鳴はシャオモンとキャラモンを抱

き上げる。

「もう少しでご飯だからタルトはその後で食べようね」

「はぁーい……」

「見事に無視かよ」

シャオモンとキャロモンを連れて奥に行く鳴。その後ろ姿を薫は寂しそうに見つめた。リビングに入る直前、鳴は兄に振り返る。

「何やってるの？ もうご飯だよ。タルト、お兄ちゃんも食べるでしょ？」

「……貰うよ」

薫は身体を起こし、鳴の隣まで歩いた。キャロモンを受け取った薫はそのまま自分の肩に乗せた。

「今日はどこまで行ってきたの？」

「まあ、ちょっとそこまで。鳴は？ 今日はうまくいったのか？」

「もちろん！ お父さんにも合格もらったよ」

「ギリギリだけどねえ」

鳴の腕の中でシャオモンがからかった。鳴は顔を赤くさせる。

「で、でも合格は合格だもんっ ね、お兄ちゃん！」

「え？ ああ、そうだな」

「……聞いてなかったでしょ。もういいもん」

拗ねながら鳴はキッチンに向かった。薫は椅子に座り、その様子を見てから窓の外に目をやった。陽が沈み、夕闇が訪れる。

「お邪魔しましたー！！」

大輔が玄関先で大きな声で言う。廊下の先から「また来てね」という女性の声が返ってきた。賢はミノモンを腕に収め、大輔と共に玄関を出た。

「いやあ、美味かったなあ。賢の母ちゃんの飯」

「そりゃ、どうも」

19時を過ぎ、賢の母親から夕飯に誘われた大輔は言葉に甘え、御馳走になっていた。2人はエレベータに乗り、1階に降りる。外はすでに真っ暗になったおり、街明かりが目立っていた。

「明日は来れんのか？」

大輔が賢に振り返って聞いた。賢は休み前にテストがあった3日程デジタルワールドに来なかった。

「ああ。明日は行くさ。……『閻使役^{ジン}』の動向も気になるしね」

「そつか。じゃ、また明日！」

「気を付けて帰れよ」

手を振る賢とミノモンと別れた大輔は駅に向かった歩き出した。

「ホント、美味しかったなあ〜！ 賢のママさんのご飯」

頭の上でお腹を膨らませたチビモンが満足そうに呟いた。

「だな！ っと、早くしねえと怒られちまうな」

賢宅を出たのは19時半過ぎだったので、大輔は早足で駅に向かった。空を見上げると十六夜の月が闇に浮かんでいた。

十六夜の月が薄い雲に隠される。霧っぽい遺跡にか細い音が奏られる。その音に引き寄せられるように森から人影が現れる。その人影を見留めたレイは葉を口元から離れた。

「あれ、もう終わりですか？」

残念そうに言うタケルに胡散臭そうな目を向ける。

「何か用か、こんな時間に」

レイが言うことも最もであった。もうすぐ1日が終わろうとしている。明日も学校がある小学生が出歩く時間ではない。

「用ってほどのことでもないんですけど……」

「ねえねえ！ コテモンたちは？ お土産持ってきたんだ！」

パートナーの言葉を遮ってパタモンは空気の読まない発言をする。慣れたタケルと違い、免疫のないレイは思わずポカンとしている。確かにタケルの手には何やら入った袋を持っている。

「……すみません」

「いや……コテモンたちなら中だ」

そう言うパタモンはレイの許可も取らずに中に入っていく。呆気にとられて見送るレイにタケルは苦笑するしかなかった。

パタモンの後を追ってレイとタケルも中に入っていく。中ではすでに再会の挨拶を済ませたパタモンとコテモンたちが仲良くお喋りしていた。大方、持ってきたお土産について話しているのだろう。得意げなパタモンと期待に胸膨らますコテモンたちの顔があった。ちなみに持ってきたのはアイマートで買った菓子などだ。騒いでいるコテモンたちの隣ではレイ同様ポカンとしているレオルモンの姿もある。

「あ、タケリユ。遅いよ」

ようやく来たパートナーに小言を言いながら寄って来るパタモン。その後にコテモンが付いて来た。

「タケル……………久し……………ぶり」

「久しぶり、コテモン。約束通りお土産持って来たよ」

急かすパタモンに袋を渡し、持っていてもらう。パタモンは地面に降ろすとすぐに中を漁り出した。これでは誰の為のお土産か分からない。呆れてため息を吐く。レイはコンピュータの前に座り、パソコンを起動させている。レオルモンは呆れたようにレイの側にやってきた。

「何なんだ……………一体……………？」

「こんばんは、レオルモン。怪我治ったみたいで良かったよ」

「あ、ああ……………」

パートナー同様にマイペースなタケルにレオルモンはいまだに茫然としている。レイはもう慣れたのか、それとも諦めたのか、コンピュータの操作を始めている。

「で、何の用だったんだ？」

「大した用ではないですよ。ただ、お礼言っていないなと思って」

「何の」

「歯車工場で助けてくれたお礼です」

にこやかに言うタケルを横目で一瞥するが、すぐにパソコンの画面に視線を戻した。

「何の話だ」

「見掛けましたよ、ライアモンとレイさん」

工場から脱出した際に見た金色の影。見間違いではないはずだ。

「けど、地図送った時点で分かってたよな？」

「……レオルモン」

「良いじゃねえか。バレてんだから」

咎める声にレオルモンは開き直って言う。やはり助けてくれたのは2人のようだ。

「なあ、どうして分かったんだ？ 分かるようなメールじゃなかったよな」

「ん……何となく、かな。メールの素っ気なさから、もしかしてそうかなあって。それに……メールしておいたから」

歯車工場が見付かった際、タケルはレイにメールを送っていた。工場の場所ともう1つ追伸を付け加えて。

《追伸

ボクたちの行動が敵に知られている可能性があります。罾を仕掛けてくるかもしれません。万が一のことを考えてレイさんたちにも応援をお願いできませんか？》

そんなメールを送っていたタケルだが、実際にレイが来る確信はなかったはずだ。しかしタケルはすぐに言い当てた。レオルモンはその事実に関目瞬かせた。そして言い当てられたレイは黙りこくっている。レオルモンはそんなレイの姿を可笑しそうに見た。

「レイとレオルモンも食べなよっ」

「……………乗るな」

パタモンが菓子を持ってレイの頭に突っ込む。レイは呆れたように言うが退かそうとはしなかった。

「美味しいよ、マカロン〜！」

パタモンはレイの言葉を気にすることなく、持っていたマカロンの袋をレイとレオルモンの手元に落としていく。レオルモンの手元には黄緑のマカロン、レイの前にはピンクのマカロン。2人とも奇抜な色に胡散臭そうな顔をしている。

「なんだ……………これ」

「マカロンっていうお菓子だよ」

そう言いながらタケルはレオルモンのマカロンの袋を開ける。興

味深げにまじまじとマカロンを見ていたレオルモンは恐る恐るマカロンを口にして、動きを止めた。

「……美味しい」

「でしょ？」

目を輝かせて食べるレオルモンの姿がなんとも微笑ましい。思わず笑って見ていると、レイもマカロンを口に入れていた。ピンクのマカロンを食べるレイはどこか違和感がある。なんとなくシユールだ。黙々と食べるレイは顔色一つ変えず、感想もないため、どうだったのか分からない。

「とりあえず、ありがとうございました」

「……他にもあるんだろう」

「え……？」

「用事」

マカロンを食べ終えたレイは残った袋を放り投げる。タケルはそれを拾いながら首を傾げた。

「なんで分かったんですか？」

「じゃなきゃ、こんな時間に来ねえだろ」

呆れた口調のレイにタケルはすんなりと納得した。

「それで？」

「あ、はい。レイさんは『闇使役』と呼ばれる集団をご存知ですか？」

「ジン？」

タケルは工場内で起きた事柄をレイに話した。デスモンの部下『闇使役』の話と黒い菌車の話、待ち伏せされた事を説明する。レイはパソコンの画面を見つめながらタケルの話に耳を傾けた。

「『闇使役』……ねえ……」

「デスモンの部下だろ？ 知らねえなあ」

「そっか……」

レオルモンの言葉に肩を落とすタケル。期待をしていたわけではないが、手掛かりがないとなると今後の方針が定まらない。困ったようにため息を吐いていると何やら考えていたレイは椅子の背もたれに体重を掛けた。

「『闇使役』……どこかで見たな……」

「本当か、レイ！？ どこで見たんだ！！」

急かすレオルモンにのんびりと腕を組むレイ。しばらく考え込んでいるとレイは唐突に顔を上げた。

「思い出したか！？」

「……………眠い」

「おいっ！！」

「うつせえな…………どうせ遺跡のどっかだろ。後で調べるっつーの」

そう言くとレイは椅子から降り、藁の上に身体を沈める。古びた毛布を頭から被り、動かなくなる。レオルモンもタケルも思わずポカンと見守ってしまった。我に返ったレオルモンは身体を震わせる。

「レ〜イ〜っつー！！ お前、いい加減にしろー！！！！！」

「れ、レオルモン…………、落ち着いて。急ぎじゃないし、ボクらもそろそろ帰るから…………」

前足の爪を研ぎ始めたレオルモンを見てタケルは慌てて、そう告げた。だが、怒りが収まらないレオルモンは爪研ぎを止めようとはしなかった。レイはもう寝ているのか、身動き1つしない。

「じ、じゃあ…………『闇使役^{ジン}』のこと調べてもらっても良いかな？」

「おう。後で叩き起こして調べさせる」

「そこまですなくても良いよ。それじゃ、また来るね。それから、この間は本当にありがとう」

タケルはそれだけ言っているとパタモンを連れ、遺跡を後にした。遺跡の出入り口まで見送ったレオルモンは広間に戻って寝床に目をやる。本気で寝入っているらしいレイにため息しか出ない。だが、レオル

モンは起こそうとはせず、タケルが持ってきた袋に目を向けた。中には菓子類が大量に入っている。その3分の1はすでになくなっている。レオルモンはその奥に違うものを見つけた。

「アイツ……」

レオルモンは思わず目を細めた。中には真新しい包帯と絆創膏、未使用の塗り薬と消毒液が入っていた。レオルモンはそれらを取り、別に置いておく。

「ふわぁ……」

襲い掛かる睡魔に欠伸が漏れる。すでにコテモンたちも藁の中に身体を沈め、寝息を立てていた。レオルモンもレイの傍らに行き、身体を丸める。睡魔はあっさりと意識を搔っ攫い、深い眠りが訪れた。

漆黒に沈む屋敷の一室。闇に包まれた部屋はコンピュータの光で溢れていた。パネルを叩く音が絶えず、鳴っている。

「くそ！ このままでは……っ」

パネルに拳を叩き付けたウィッチモンは画面を睨んだ。そこに映し出されているのは選ばれし子供たちの姿だった。

「こうなったら……っ」

ウィッチモンはコントローラーパネルの横に置いてある小さな歯車を見つめた。

第十一話 動き出す者たち（後書き）

《備考&反省》

備考？

大輔の姉・ジュンはプワモン、京の姉・百恵はユラモンがパートナーになってます。ちなみに京の姉・千鶴はプニモン、丈の兄・シユウにはチャップモンがパートナーとしています（出るかどうか微妙だが、一応設定）。京の兄・万太郎、丈の兄・シンにはまだパートナーはいません。

オリキャラの兄弟、慶悟の兄・翔悟、凜華の弟妹ズにもパートナーはいません。

備考？

東京の電車の時間（いつ来るのか、どれくらいで着くのか）が分からないので適当です。そんなに早く（遅く）ないだろうと思うところがあるかと思いますが、ご了承ください（調べても分からなかった）。

備考？

京がお勧めした菓子はマカロンです。

反省

1ヶ月かかってこれかあ……（泣）

完全自己満足の話です。客観的に読んだら謎だらけで訳分かんないと思いますが、たぶん呼んでいくうちに分かると思います。たぶん……。

第十二話 戦う意味 闘う覚悟

日曜日。それぞれに休暇を楽しんでいた子供たち。だが、変わらない日常の中でも戦いの陰が見え隠れしていた。デジモンと共にある者の宿命が少しずつ背後に迫ってきている。

【第十二話 戦う意味 闘う覚悟】

荒れ狂う嵐に海は唸り、風に森がざわめき合う。空を奔る稲妻に岩の巨塔が照らし出される。

天高く聳^{そび}える巨塔の最上部から数個の歯車が飛び出す。それらは小島から離れ、猛スピードで翔けて行く。途中、海からも歯車が飛び出し、それらは大陸へと消えていった。

その様子を見ていた3体のイルカが海から顔を覗かせた。イルカたちは顔を見合わせると、その内の1体が大きく跳ね上がった。そして歯車を追って大陸へと飛び跳ねていった。

その連絡が入ったのは6月も終盤に差し掛かった頃だった――…。

授業が終わり、コンピュータ室で京が来るのを待っていた大輔、タケル、伊織、ヒカリ、奏の5人。しばらく経ってやって来た京は太一、ヤマト、空、光子郎を伴ってきた。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

片手を上げて「よう！」と返事する太一にヒカリは目を見開いていた。タケルも兄の登場にキョトンとしている。

「突然すみません。実はテントモンたちから歯車工場と思われる場所を発見したと連絡があったんです」

「本当ですか!？」

光子郎は頷くといつもゲートを開くパソコンの前に座った。そして持ってきたノートパソコンを起動させている。もともと起動していた目の前のパソコンの操作も始める。

突然の先輩たちの訪問に1人出遅れた奏がキョトンとした様子で遠巻きに眺めている。それに気が付いた空が奏に歩み寄った。

「法月奏くんよね？ 初めまして、武之内空です。太一と同じ4年前の選ばれし子供の1人よ」

「オレはタケルの兄で石田ヤマトだ。オレも太一たちと同じ4年前

の選ばれし子供だ」

空とヤマトの丁寧な挨拶に奏は慌てて頭を下げた。

「は、初めまして。法月奏です。こっちがパートナーのパグモン」

「よろしくな！」

奏たちが挨拶を済ませると、パソコンの画面にアグモンたちの姿が映り出された。

『太ーっ！ 久しぶりっっ』

『そっらっ！』

画面いっぱいのアグモンとピヨモンの顔が映り、その後ろでガブモン、テントモン、ゴマモンが困ったように苦笑している。その後ろでは賢とワームモンも同じく困ったように笑っていた。

「あれ？ どうして一乗寺くんがアグモンたちと一緒にいるの？」

「電話回線が繋げるのが限られていましたから申し訳ないのですが、一乗寺くんにはアグモンたちと合流してもらいました」

首を傾げるヒカリに、そう答えながらも光子郎はノートパソコンの操作を続けている。そしてノートパソコンの画面に天音たちの姿が現れた。

『あ、繋がった』

『ほわあ！ ホンマや。おゝい！ 映つとるゝ？』

『ちょ……っ 押すな、凜華！』

『アンタもだよ、慶悟』

天音の両脇で慶悟と凜華が痴話喧嘩を始めている。迷惑そうな天音と呆れ顔の朝比奈兄妹の姿もあった。光子郎は画面同士が映るように2つのパソコンを斜めに置き直した。

「準備、終わりましたよ」

2つの画面でそれぞれ騒いでいる仲間たちを無視して光子郎が告げる。同時にノートパソコンの中で凜華と騒いでいる慶悟の鳩尾みぞおちに天音の右肘が入った。

『う・る・さ・い。……………すみません、話の続きお願いします』

『な、なんでオレだけ……っ』

呻く慶悟を無視して天音が話を促す。最早、清々もはやしいくらいの天音の対応に他の子供たちは空笑いするしかなかった。

「では、話の続きをしましょうか。……先程も言った通り、黒い歯車の工場おほと思しき場所が発見されました。ゴマモン、続きをお願いします」

光子郎に促されたゴマモンは頷いて、真面目な表情で話し始めた。

『最初に工場を見つけたのは海に住むルカモンたちなんだ。最近、

海の一角で渦と竜巻が酷くて近付けなくなっている場所があるらしくて、歯車工場を話をしたら様子を見てきてくれたんだ。そうしたら、渦の合い間から黒い歯車が出て来るのを見たらしい。ただ、渦が酷くて工場自体は見つけられなかったらしくて……。オイラも言ってみただけ、やっぱり近付くことは出来なかったんだけど……」

『だから思^{おほ}しき場所、と言っただけですね？』

歯切れの悪いゴマモンに鳴が告げる。ゴマモンは申し訳なさそうに頷いた。

『悪い……もつとはつきりと分かれば良かったんだけど……』

「そんなことないよ、ゴマモン。知らせてくれてありがとう」

気落ちしているゴマモンにタケルはそう慰めた。ゴマモンも少しだけ元氣を取り戻し、頷いた。

「ですが、海に住むデジモンたちでも近付けないのなら、工場に近付くのは難しそうですね」

『そうなんだよ。海は渦が酷いし、空からも竜巻がなあ……』

伊織の指摘に再び肩を落とすゴマモン。それを聞いていた天音は腕を組んで考え込む。

『……最近つてことは前までは竜巻も渦もなかったってことだよな？
だとすると『闇^{ジン}使役』の仕業だと考えても良さそうかも』

「ええ。ボクたちを近付けさせないためだと思います」

「……………竜巻に、渦……………。だとすると恐らくウィッチモンだな」

「なんでそう思うの？」

天音たちよりも下がった位置で話を聞いていた薫が声を響かせた。振り向いた天音は怪訝そうな声を発する。

「ウィッチモンの持つ技で《バルルーナゲイル》は風、《アクエリ―プレッシャー》は水を操る能力だったはずだ」

「……………よく敵の技なんか覚えていたな」

「……………一度、見聞きしたもんは忘れない性質たちなんで」

そっぽを向きながら嫌味っぽく言う薫に太一は「生意気な奴……………」と若干、青筋を立てた。だが、大人の寛大さ（？）を見せ、食い掛かるようなことはなかった。

「もしウィッチモンが工場内にいるんだとしたら、潜入するのは無理なんじゃないですか？」

賢が心配そうに問う。有力ながらも手が出せない状態に知らせを持ってきたゴマモンはますます落ち込んでしまった。子供たちの間にも打つ手のない状況に重い空気が漂う。

不意に盛大な舌打ちが聞こえた。そして天音たちの後ろで控えていた薫がD-3を宙に投げ、目の前でキャッチする。

「光子郎さん、場所を教えてください。時間の無駄だ。こんな所でグ

ズグズ考えてる暇があつたら、とつと行つてみりゃあいい」

イラついたように言い捨てる薫に光子郎は眉を顰めた。

「それは危険です。先日の『闇使役^{ジン}』との戦いで相手の实力は分かっているはずですよ？　もう少し状況を把握して……」

『その状況が分かんねえんじゃねえか。それに前回は待ち伏せされている。なんで情報が漏れたか知らねえが、変に時間置いて、また待ち伏せされたんじゃあ堪んねえしな』

薫の言うことも一理ある。押し黙った光子郎の背後で大輔が意を決したように顔を上げた。

「オレも……薫の意見に賛成ッス。こうしてたつて何も変わんねえ。行くことで何か分かるかもしれないじゃないッスか」

まっすぐな大輔の瞳に太一は諦めたようにため息を吐いた。ヤマトと空に目を配らせると、2人も小さく頷く。

「……光子郎、向こうにもゲートの位置送ってやれ。賢、アグモンたちと一緒に先に向かつてってくれないか？　ゴマモン、悪いがホエーモンを呼んで来てくれ」

光子郎は頷くとノートパソコンに手を掛け、天音たちにゲートの位置を送る。賢とゴマモンも頷くと通信を切った。

「……光子郎も言ったように詳しい状況が分からない。ヤバくなつたらすぐに引き返すからな？」

「はい！」

大輔が返事をする、子供たちはゲートを潜くぐった。

子供たちは大海原を進んでいた。大輔たちが着いた時にはゴマモンがホエーモンに話を付けてくれていたので、すぐに出発することができた。ホエーモンの上では各々に過ごしている。作戦の調整をする者、緊張を解ほくすように談話に花を咲かせる者、戦いに備えウオーミングアップする者……。中には特に何もせず、ぼーっと海を眺めている物もいる。薫はその1人だった。

「……………薫さん」

仲間から外れ、ホエーモンの尾びれ付近で遠ざかって見えなくなった大陸を眺めていた薫は名を呼ばれ、顔を反らせた。逆光でも見える金の髪で、それがタケルだと分かった。

「どうした？」

「それはこっちの台詞ですよ」

タケルは薫の隣に腰を降ろす。腕ではパタモンが大きな目をキョロキョロさせていた。胡坐を掻いた足の上で丸くなっていたクダモンも身体を起こしている。

「何の話だ？」

「……余計なこと聞きましたか？」

質問を質問で返されると非常に面倒臭いものである。薫はそのまま身体を転げさせ、背中を着いた。

「別に……。ただ、お前はその“覚悟”ってのは出来てんのかよ？」

「出来てますよ」

即答が返ってきて「不毛なことを聞いたな」と薫は内心で舌打ちをした。先日、タケル宅での問いの答えを薫はまだ見つけれなかった。 “闘う覚悟”とは一体なんなのだろうか……。自分たちは一体なんの為に戦っているのだろう。その意味すらも見失っているような気がした。

「すみません。本当に余計なこと言っただけで……」

「いや……。オレたちにも決断する時が迫ってんだと思うよ。このまま戦いを続けるか、否か」

「そうですね……。だけど、それは大輔くんたちにも言えますよ。薫さんたちよりは戦い慣れはしてるけど、デジモンを倒すことはほとんどなかったですから」

もう、歯車を壊すだけ……という戦いは無意味なものになってきている。戦いを終わらせるためには根源を討つしかない。そのためには『闇使役^{ジン}』との死闘は避けられないだろう。その時が来たとき、

敵に立ち向かえる者がどれほどいるか、分からない。
薫は混乱しそんな頭を振りかぶり、立ち上がった。

「やっぱり、そんな時になんなきゃ分かんねえよ。お前みたいに前以って覚悟なんて出来ない」

「そうですね……。普通はそうだと思います」

まるで自分は普通ではないかと言いたいかのような言い方に薫はイラッとした。そのままタケルに背を向け、ホエーモンの背中を登っていった。タケルは振り返ることなく、海を見つめていた。

「タケリユ……。大丈夫？」

「……うん……。ゴメンね、パタモン」

心配そうに様子を窺うパタモンに額を当てる。甘えるように擦り寄るパートナーにタケルはそっと目を閉じた。

黒い巨体きょたいが小波を立てながら、大海原を進んでいく。その上で16人の子供たちと17匹のデジモンが水平線を睨み付けていた。

「……もうすぐだぜ」

ゴマモンがそう呟く。轟々渦巻く海と視界を奪う曇天が見えてきた。何人も拒まんばかりの光景に、子供たちは息を呑んだ。なんびと

「確かに……これじゃあ近付くのは難しそうだな」

太一はそう呟くと天を仰いだ。重い雲から降り注ぐ雫を遮る。嵐の酷い付近より少し離れたところでホエーモンは停止した。

「……とりあえず、この辺りを見て回りましょう。帰りのことを考えてホエーモンにはここで待機してもらいます。飛行が出来ない太一さん、ヤマトさん、奏くん、薫くん、鳴さんもここで待っていて下さい。空さん、ヒカリさんも念のため残っていてもらいます。万が一、敵が現れた時、ホエーモンの上での戦いは難しいので。伊織くんと京さんはボクと一緒に歯車を見たという場所に来てもらいます。ゴマモン、案内お願いしますね。他の皆さんは2人くらいに分かれてこの辺りを見回してもらいます。1時間後、またここに集まって下さい。くれぐれも1人で勝手な行動はしないように。良いですね？」

光子郎の指示で子供たちはそれぞれデジモンを進化させ、嵐の吹き荒れる方へと飛んでいった。ホエーモンの上で7人の子供たちは仲間の後ろ姿を見送った。

ホエーモンの上で太一はデジヴァイスに目を向けた。光子郎たち

が探索に出てから1時間半は経過している。その間、仲間たちからの連絡はなかった。雨脚は見られず、不自然に滞っている曇天を遮るようにネフェルティモンに乗った妹が通り過ぎる。その隣ではバードラモンと空が辺りを観察していた。

ヒカリが何かに気が付いたように小さく声を上げた。目線を前方に戻すとワスプモンとブライモンが戻ってくるのが見えた。

「お疲れ！……どうだった？」

「一回りしてみましたど、やっぱり抜けられそうな場所はないですね」

「ホンマ。あっちでもこっちでもグルグル、グルグル。いい加減、目え回るわ」

直径50キロメートル程の範囲で海は渦巻き、空では竜巻が吹き荒れていた。まるで何かを守るようにも見える。凜華はブライモンに抱き付きながら不貞腐れていた。

「仕方ねえよ。こうなるのは分かっていたんだ。地道に行こうぜ」

「ふぁーい……」

「……光子郎さんたちからは何か連絡は？」

首を振る太一に天音は落胆の色を見せた。凜華は辺りをキョロキョロと見渡している。

「……慶悟らも戻つとらんの？」

「ああ。連絡もないな」

「ふん……」

「……フラれたの気にしてるんだ？」

意地悪い笑顔を見せる天音に凜華は顔を真っ赤にさせた。探索に出る際に凜華は慶悟を誘ったのだが、何か思う節があったのか、慶悟はタケルを連れて行ってしまったのだ。見かねた天音と一緒に向かったが、凜華は少し落ち込んでいた。

「な、何言つとるんや！　ウチは別にそんな……っ／＼／」

「だけど、慶悟さんが凜華ちゃんの誘い断るのも珍しいよね？」

奏が満面の笑みで言う。無害な笑顔が逆に有害に見えるのは太一の気のせいではないだろう。見慣れない仲間のやりとり思わず顔が引きつる。あたふたしている凜華を尻目に鳴は遠くに見える影を捉えた。

「大輔さんたち戻ってきましたよ」

エクスブイモンとステイングモンがホエーモンに近付いてくる。戻ってきた後輩の姿に太一は目を瞠った。

「どうしたの、大輔くん！？　ずぶ濡れじゃないっ」

ヒカリの言う通り、大輔は全身ずぶ濡れになっていた。雨に打たれている為、他の子供たちも濡れてはいるが、大輔は海に落ちたのかと思うほど水浸しになっていた。若干、へこんでいる大輔に賢は

呆れたように説明を入れた。

「上から近付けないかと思って行ってみたんだ。雲の上からなら真上まで行けたんだけど、近付いた途端、水の竜巻が襲ってきてやっぱり近付けなかった。……ボクは、危険だから止めるって言つたのに大輔は不用意に近付くから……」

「うう……っ　だつてよ……」

賢の忠告を無視して突撃隊長の如く向かっていったが、水の竜巻に返り討ちにあつたようだ。光景が目に見えぬ。太一は壮大なため息を吐いた。

「だから、勝手な真似はするなつて言われたらどう？」

「け、けどっ　上からも行けないつてことは分かつたんスよ？」

「……マイナスな収穫ですが」

「つていうか、予想付くでしょ、普通」

鳴と天音の言葉を追い打ち大輔は素でへこんでいる。ヒカリと凜華が慰めるが、余計に落ち込んでいる。

「……容赦ないな、あの子たち」

「ほ、本当にね……」

ヤマトと空も慣れていない為、対応に困って苦笑している。その時、ちょうどカブテリモンとアクイラモンが飛んでくるのが見えた。

海からはサブマリモンとゴマモンが顔を覗かしている。

「……光子郎！ 何か収穫はあったのか？」

「……残念ながら、めばしい収穫はありませんでした。ただ、3回ほど黒い歯車が出てくるのを見たのでこの先に工場があるのは確かだと思います。間隔は一緒に定期的に放たれているようです。……それよりもタケルちゃんと慶悟くんは？」

「まだ戻ってきてないぞ」

ヤマトの言葉に光子郎は眉を顰^{ひそ}めた。京と伊織も怪訝そうに顔を見合わせた。

「1度も戻ってきていないんですか？」

「アタシたちが戻る1時間くらい前に先戻るって言って別れたんですけど……」

「なんだって？ 1度も戻ってきてないぞっ」

子供たちが顔色を変える。何かあったのかと不安を募らせる中、ホエーモンの背で胡坐を掻き、身動きせず嵐の中心を睨んでいた薫がボソリと呟いた。

「………たぶん中だなあ、あの2人」

「何言ってるんだよ。こんな嵐中、行ける訳ねえだろ！？」

「が、行けるんだなあ………これが」

慌てる様子もなく言い切る薫に大輔は食い掛かりそうになる。だが、太一に止められて、それは適わなかった。

「なんでそう言い切れるんだ？」

「こんだけ何もせず、見てたら分かりますよ、普通。……あの竜巻、一見不規則に動いて周りからの侵入を防いでいるように見える」

「そうなんだろう、実際」

太一が言うと薫は面倒臭そうに肩を竦めた。

「恐らく。けど……あれ、定期的に動いてますよ。大体、20分毎くらいに。光子郎さん、黒い歯車が出てきたのもそれぐらいの間隔なんじゃないですか？」

「え、ええ。そうです」

驚いたような光子郎の言葉に太一はもう一度、嵐に目を向ける。だが、入っていく隙があるようには見えなかった。

「慶悟は動体視力と記憶力良いから、2回りくらいで気が付いたんじゃないかね………つと、やらかしたかな、アイツら……」

そう言う薫の視線に沿うと、先程まで荒れ狂っていた海が徐々に落ち着きを取り戻していた。風も治まり、波も穏やかになる。曇天の合い間から陽の光も差し込み、先程までの嵐が嘘のようだ。

「……どうなってんだ？」

呆然と海を眺めていた子供たちの目に2つの影が見えた。ギンリ
ユウモンとペガスモンがホエーモンの上に降り立つ。

「よお、お疲れさん。やりやがったなあ、慶悟、タケル」

薫がニヤニヤとひやかすように言つと、慶悟は特に気にせず肩を
竦め、タケルは困つたように身を縮めている。

「お前らなあゝっ あれほど勝手な行動は控えろつて言つたよなゝ
？」

「そうだぞ。うまくいったから良いよなものの、何かあつたらどう
するつもりだつたんだ？」

「……せめて、一声掛けてくれればボクたちでもサポート出来たん
ですよ？」

「……………すみません」

先輩3人の叱責に気まずそうに謝るタケル。それを庇うように慶
悟が前に出た。

「すみませんでした。言い出したのはオレです。タケルには無理言
つて付いて来てもらっただけなんで、叱らないでやって下さい」

深々と頭を下げる慶悟。後ろではタケルも倣つて頭を下げている。
その姿に太一たちも何も言えなくなる。お互いに困っている様子に
空は頭を下げる2人の背中に手を置いた。

「2人共、頭上げて。無事だったんだから、もう良いわよ。でも、次からはちゃんとアタシたちにも声を掛けてね。みんな心配してたんだから。ね？」

顔を上げた慶悟はもう1度「……すみませんでした」と小さく頭を下げた。タケルも顔は上げたが、まだ俯いている。

「……まあ、無事だったんだから良いけどな。次からはちゃんと言えよ」

「うん……ゴメンね、兄さん」

結局、タケルと空に甘いヤマトが真っ先に折れる。そうになると、太一も光子郎ももう何も言えなくなる。

「けど、何で言っていかなかったのかは教えるよ」

「あー……、それはオレのせいっすね」

納得していない様子の太一に慶悟が気まずそうに目を逸らす。訝しそうにしている子供たちの様子にタケルも気まずそうにしていた。

「もともと観察するだけのつもりだったんだけど、抜けれそうなの
コ見付けちまって……」

「急に飛び出していくから、慌てて追いかけたんだ」

言い難そうにしているタケルに代わってペガスモンが答える。ギンリュウモンも申し訳なさそうに顔を伏せた。

「……完璧に慶悟が悪いんじゃない」

「何タケルくんに迷惑掛けとるんや、アホ慶悟」

「慶悟くん、ダメダメです」

「気を付けないと怪我だけじゃ済まなくなりますよ?」

「……………お前ら、それくらいで止めてやれ」

天音らにメタメタに言われた慶悟は隅の方でイジけている。旧・選ばれし子供たちは同情的に慶悟を見る。

「と、とりあえず……………これで工場に近付けます。皆さん、急いで向かいましょう」

光子郎に促され、ホエーモンは先程まで荒れていた海を進んだ。

霧深い中、うつすらと見える巨大な影が徐々に形を明らかにしていった。岩の壁でできた巨塔が天を突き刺している。その威圧感に思わず息を呑んだ。

砂浜に上陸した子供たちは巨塔を見上げる。辺りが森に囲まれ、その中心に聳え立つ塔は不気味に存在してる。小さな砂浜の隅に島内に設置されている黒い歯車が剥き出しになっていた。その歯車は

すでに粉々に碎かれ、機能を失っている。

「……あれで竜巻と渦を作っていたようです。一応、破壊しておきました。もしかするとまだ残っているかもしれません」

齒車に目を向けていた薫にタケルが説明を加える。納得した薫は再び巨塔に視線を戻した。

「このどこかにウィッチモンが居るんだよね……。捜すの大変そう」

「齒車は海の中からも現れました。恐らく、地下もあると思います」

唯一、海中探索をしていた伊織が言う。それを聞いた凜華が嫌そうに顔を顰めた。

「うへえ……。メツチャ広いやん」

「それに、きつとボクたちが上陸したのにも気付いているはずだ。これだけ派手にやかしたんだから」

賢の言葉にタケルは申し訳なさそうに眉を下げた。慶悟は素知らぬ顔で辺りを見渡している。その時、何かに反応したデジモンたちが一斉に前に出た。

「太一！ 何かいるよっ」

森の中から金属が擦れる音が近付いてくる。霞んでいた影がはっきりと姿を現す。数十体の戦士が大剣を構えている。

「ありや、ナイトモンでんがな！」

「こつちにはアノマロカリモンよ！」

ヒカリが海の方を見て叫んだ。海面から顔を覗かせている数十体のアノマロカリモンが鋭利な触手を向けている。

「……挟まれたな」

「ナイトモンに、アノマロカリモン……。両方とも完全体かあ」

太一はヤマトに目を配らせた。頷く親友を確認してから、空、光子郎にも目を向ける。2人も頷いたのを見てから太一は大輔たちに目を向けた。

「ここはオレたちに任せて、先に行け」

「皆さんは1度ウィッチモンと戦っています。攻撃なども分かっていますので、ボクたちよりは有利に戦えるはずです」

「歯車に操られてるだけみたいだしな。すぐに終わらせて追い掛けるさ」

「みんな、お願いね」

それぞれにグレイモン、ガルルモン、バードラモン、カブテリモンに進化したパートナーたちと共に太一たちはナイトモンとアノマロカリモンに向かっていった。太一たちが作った隙を衝いて、大輔たちは巨塔へと駆けていった。

グルグルと延々と続く螺旋階段を見上げ、大輔はため息を吐いた。

「いつまで続くんだよ、この階段」

「結構、走ってきたのに全然着く気配ないね」

真後ろで奏も見えない天井を見上げる。ライドラモンに乗って螺旋階段を駆け上る大輔は後ろを振り返った。奏はピコデビモンをしっかりと抱き寄せ、振り落とされないようにライドラモンの背に掴まっている。その後ろでは朝比奈兄妹がそれぞれのパートナーに乗って駆け上がっていた。殿では伊織がディグモンの背にしがみ付いている。塔の中央で賢がスティングモンの上から辺りを注意深く見回りながら大輔たちに合わせて上へ向かった。

「……ヒカリちゃんたち、大丈夫かな……」

塔に辿り着いた子供たちは上下に続く螺旋階段に絶句した。万が一、上部にウィッチモンらがいた場合を考えて、階段を無視して翔け上げられるメンバーで下部に向かうこととなった。そして飛行能力を持たない子供たちと、話し合いで大輔と賢も上部に向かうことになったのだ。

「大丈夫だろ。タケルたちもいるんだし……」

「……それが一番気に食わない」

ライドラモンの言葉に大輔は憮然と答える。それを聞いていた奏も苦笑するしかなかった。

「……………ねえ、大輔くん」

「ん、なんだ？」

不意に奏が大輔を呼んだ。その小さな声は大輔にしか聞こえていないようだ。

「もし……上にウィッチモンがいたら……どうするの？」

質問の意図が掴めず、大輔は顔を顰めた。だが、奏は真剣な顔で大輔を見つめている。

「どうするって……倒すに決まったんだろ？」

「……………“殺す”の？」

そう言われ、大輔は顔色を変えた。思考が追い付いてこず、言葉が出てこない。

「……………それは……………」

大輔は“倒す”を“殺す”に直結することが出来なかった。『闇使役』を“倒さなければ”デジタルワールドに平和は訪れないだろう。『闇使役』はデジタルワールドに“復讐”すると言っていたのだから。では、『闇使役』のデジモンたちを“殺す”のだろうか。

「……………殺せるわけ……………ねえだろ……………」

たとえば、デジタルワールドを陥れようとしているデジモンたちでも1つの“生命”だ。それを奪うなんて大輔には出来なかった。奏は苦々しそうに言う大輔に眉を下げた。そして口籠りながらも言葉を並べる。

「でも…………『闇使役』はきつとボクたちを殺すつもりで来るよ。それで…………戦えるの？」

「…………それはっ」

「……………ゴメンね。悩ませるつもりじゃなかったんだ。けど、みんな……………そういう話を避けているように見えて…………。どうするつもりな

んだろって思ったから……………」

奏はそれだけ言うと黙ってしまった。大輔も何も言えないでいた。階段を駆け上がるデジモンたちの足音が妙に鮮明に聞こえる。

「大輔！ 出口だっ！」

賢の叫び声に心臓が1回大きく波打った。俯いていた視線を上げると目の前に出口の光が差し込んだ。

出口から飛び出したライドラモンの上で大輔は苦虫を噛み潰した。雨雲がすぐ真上にある塔の円形な最上部。その中央に真っ赤な衣装と帽子、漆黒の外套を纏った魔人が佇んでいた。ゆっくり持ち上がった顔が不敵な笑みを零す。

「良く来たね、選ばれし子供たち」

「……ウィッチモン……っっ」

戦いの覚悟を決められないまま、大輔は目の前の敵を睨み付けた。

僅かに響く波音がひどく穏やかで諍いを忘れ、世界の平和を錯覚する。同時に嵐の予感も^{もたら}し、心が波打った。崖の頂に立ち、レイは水平線の先を睨み付けていた。希望の子供から連絡があつて2時間。ホエーモンに乗って行ったならば、もう工場があると^{もく}目される場所に到着し、何らかのアクションは起こしているだろう。

「れ、レイ〜！ よ、呼んで……来た、よ……」

背後の森林からコテモンが駆け出てくる。息を切らせているコテモンは途切れ途切れに告げると、同時に茂みから蒼い稲妻が空高くへと飛び出してきた。レイは旋回してくるそれを目に留めるとコテ

モンに視線を戻す。

「後は頼む」

それだけ告げるとレイは崖底へ飛び出した。蒼の巨鳥は落下する人影を拾い上げる。

「危ねえだろ……っ」

巨鳥の上でレイの着地を避けたレオルモンは青筋を立てながら文句を言っている。レイは耳にたこのように聞いている様子もなく、小型の端末を広げる。画面に映る目印を確認し、巨鳥の首筋を撫でた。

「行くぞ、サンダーバーモン」

蒼い稲妻は轟く咆哮を残し、海の果てへと飛び去っていく。その影が見えなくなるまでコテモンは見送り続けた。

第十二話 戦う意味 闘う覚悟（後書き）

《備考》

ウィッチモンは『風と水の魔術をマスターした』デジモンらしいので、嵐を起こすくらいなら出来るかなあ、という予想です。黒い歯車を媒介に嵐を起こしていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5497v/>

デジモンアドベンチャー03 ~Holy war~

2011年11月18日05時20分発行